財団法人 八尾市文化財調査研究会報告98

Ⅰ　跡　部　遺　跡　（第40次調査）
Ⅱ　池島・福万寺遺跡（第６次調査）
Ⅲ　老　原　遺　跡　（第12次調査）
Ⅳ　恩　智　遺　跡　（第18次調査）
Ⅴ　亀　井　遺　跡　（第３次調査）
Ⅵ　中　田　遺　跡　（第51次調査）
Ⅶ　東弓削遺跡　（第10次調査）
Ⅷ　山　賀　遺　跡　（第12次調査）

２００７年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告98

Ⅰ　跡　部　遺　跡　（第40次調査）
Ⅱ　池島・福万寺遺跡（第６次調査）
Ⅲ　老　原　遺　跡　（第12次調査）
Ⅳ　恩　智　遺　跡　（第18次調査）
Ⅴ　亀　井　遺　跡　（第３次調査）
Ⅵ　中　田　遺　跡　（第51次調査）
Ⅶ　東弓削遺跡　（第10次調査）
Ⅷ　山　賀　遺　跡　（第12次調査）

２００７年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府東部に位置する八尾市は、河内平野のほぼ中央部にあり、東に大阪府と奈良県の境を画する生駒山地、南に羽曳野丘陵、西に上町台地の景観をみる地域であります。この豊かな自然環境のもとで、本市には八尾南遺跡や恩智遺跡をはじめとする旧石器時代以降の先人達が残した貴重な文化遺産が数多く残されています。これらのかけがえのない文化財を開発による破壊から守り、後世に永く伝承させることが現在に生きる我々の大きな責務と認識しております。

そこで私共では、こうした消滅の危機にさらされている埋蔵文化財を、一つでも多く後世に伝えるため、事業者のご理解とご協力をいただきつつ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に努めている次第であります。

このたび、平成2・10・17・18年度に実施しました跡部遺跡(第40次)、池島・福万寺遺跡(第6次)、老原遺跡(第12次)、恩智遺跡(第18次)、亀井遺跡(第3次)、中田遺跡(第51次)、東弓削遺跡(第10次)、山賀遺跡(第12次)の8件の公共下水道事業に伴う発掘調査の整理が完了しましたので、これらをまとめて報告書として刊行することに致しました。本書が地域史解明はもとより、埋蔵文化財の保護及び啓発・普及の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して、ご協力いただきました関係諸機関の皆様方に心より御礼申し上げるとともに、今後、尚一層のご理解とご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

平成19年3月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　岩　﨑　健　二

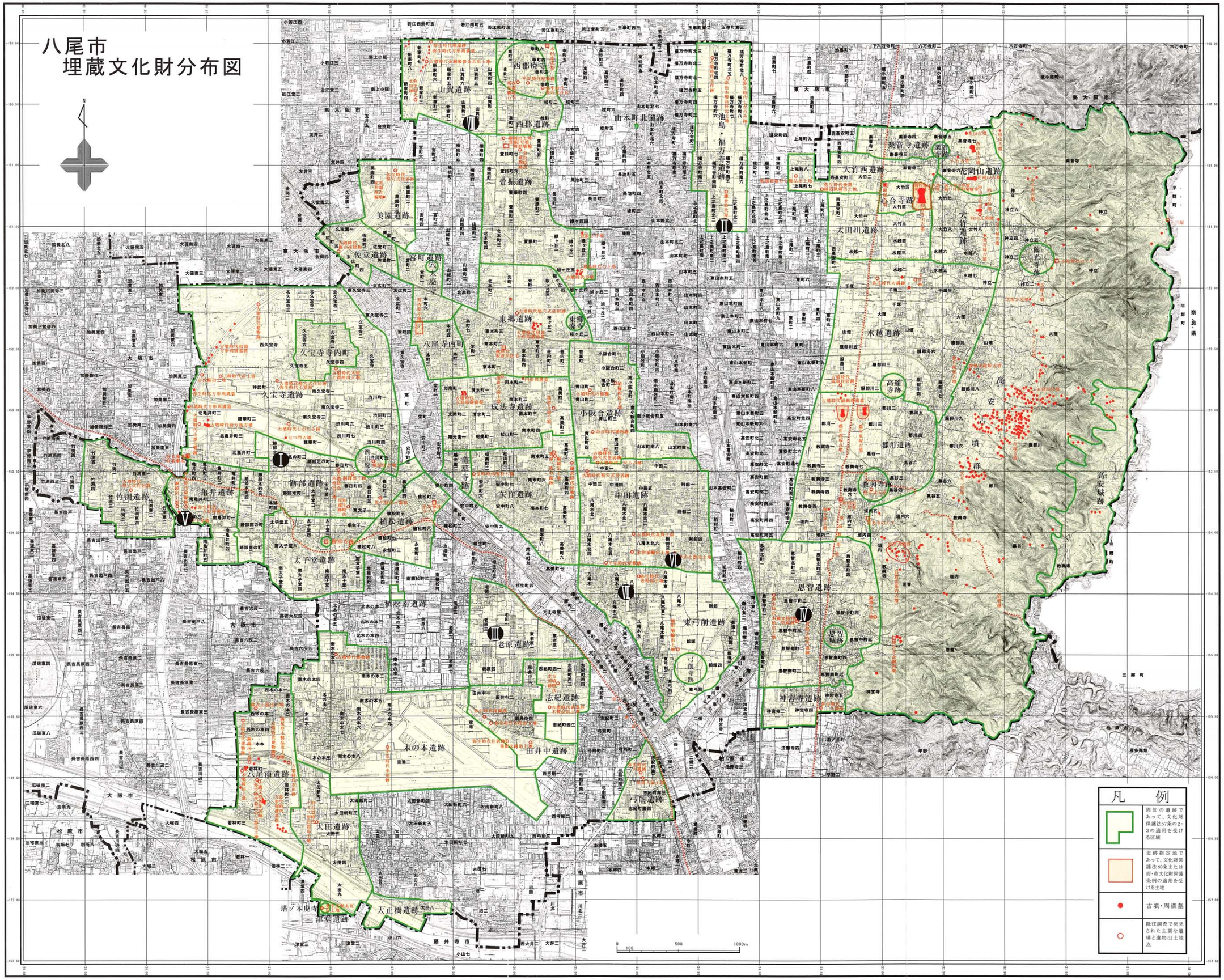
序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成２・10・17・18年度に実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告を収録したものである。
1．内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成18年12月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1．本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ・Ⅳ・Ⅶ原田昌則、Ⅱ菊井佳弥、Ⅲ坪田真一、Ⅴ成海佳子・河村恵理、Ⅵ高萩千秋、Ⅷ島田裕弘で、全体の構成・編集は原田が行った。
1．本書掲載の地図は，大阪府八尾市役所発行の2,500分の１(平成８年７月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』(平成18年度版)をもとに作成した。
1．本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
1．本書で用いた方位は磁北及び座標北(国土座標第Ⅵ系)〔日本測地系〕を示している。
1．遺構は下記の略号で示した。
井戸―ＳＥ　土坑―ＳＫ　溝―ＳＤ　小穴―ＳＰ　落ち込み―ＳＯ　土器集積－ＳＷ
自然河川―ＮＲ
1．遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
縄文土器・須恵器―黒、弥生土器・土師器―白、瓦・土製品・木製品・石製品―斜線
1．土色については『新版　標準土色帖』1996　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1．各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　跡部遺跡　第40次調査(ＡＴ2005－40)…… 1
Ⅱ　池島・福万寺遺跡　第６次調査(ＦＫ2006－６)…… 5
Ⅲ　老原遺跡　第12次調査(ＯＨ2006－12)…… 15
Ⅳ　恩智遺跡　第18次調査(ＯＪ2005－18)…… 21
Ⅴ　亀井遺跡　第３次調査(ＫＭ90－３)…… 57
Ⅵ　中田遺跡　第51次調査(ＮＴ2005－51)…… 93
Ⅶ　東弓削遺跡　第10次調査(ＨＹ98－10)…… 97
Ⅷ　山賀遺跡　第12次調査(ＹＭＧ2005－12)…… 111
報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図



Ⅰ　跡部遺跡第40次調査（AT2005－40）

例　　言

1．本書は、大阪府跡部北の町２・３丁目地内で実施した公共下水道工事(16－47工区)に伴う発掘調査の報告書である。

1．書で報告する跡部遺跡第40次調査(ＡＴ2005－40)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．地調査は平成17年８月１日～平成18年２月23日(実働６日間)にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積約24㎡を測る。

1．現地調査においては、市森千恵子・岩本順子・垣内洋平・北原清子・曹　龍・徳谷尚子・實樹婦美子・村井厚三が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成18年12月に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、図面トレース－山内千恵子が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに …… 1

2．調査概要 …… 2

　1)調査方法と経過 …… 2

　2)基本層序 …… 2

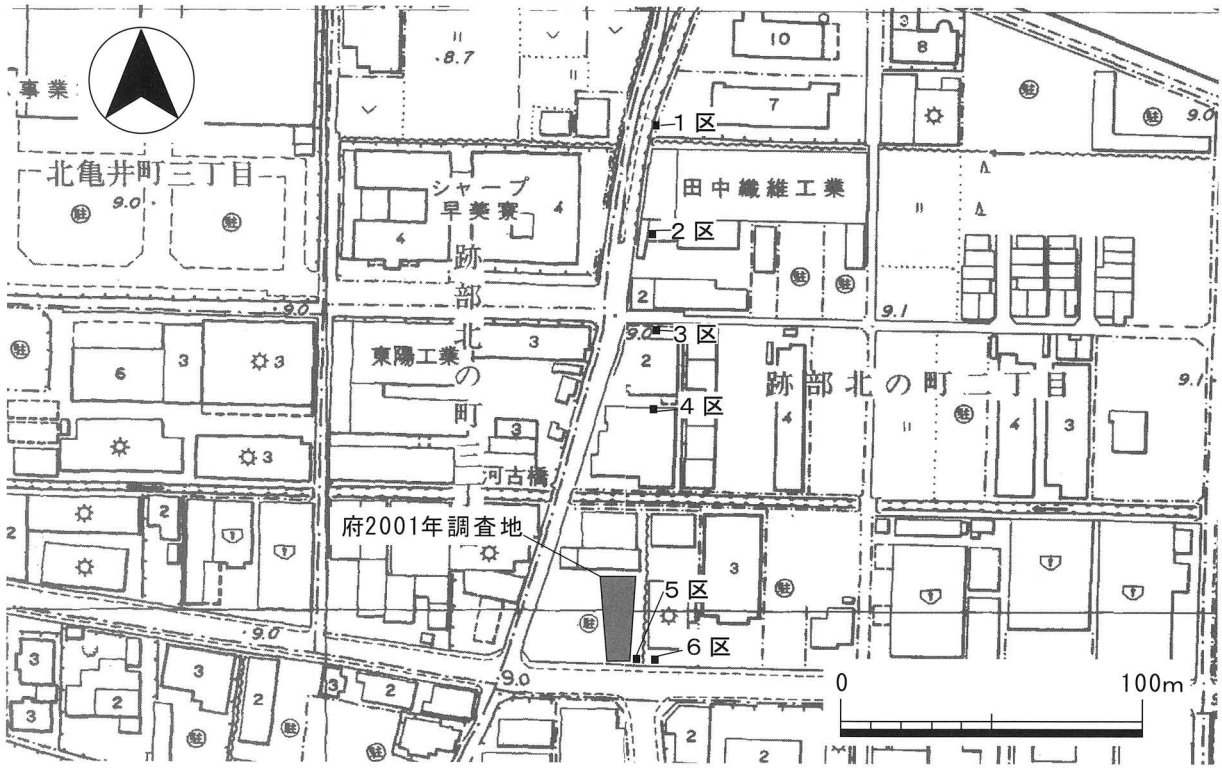
3．まとめ …… 4

Ⅰ　跡部遺跡第40次調査（ＡＴ2005－40）

１．はじめに

跡部遺跡は、八尾市の西部に位置する跡部本町１～４丁目、跡部北の町１～３丁目、跡部南の町１・２丁目、春日町１～４丁目、太子堂１・２丁目、東太子１丁目、安中町３丁目付近の東西1.4km、南北0.5～１kmに展開する弥生時代前期～鎌倉時代の複合遺跡である。地理的には長瀬川左岸の三角州状の微高地に位置し、現地表面の海抜はT.P.＋9.0～9.9mを測る。当遺跡の周辺には、東に植松遺跡、南に太子堂遺跡、西に亀井遺跡、北に久宝寺遺跡が位置している。

跡部遺跡は、昭和53年に八尾市教育委員会が春日町１丁目地内の旧国鉄職員寮建設工事の際に弥生時代前期の土器、鎌倉時代の瓦を検出したことにより遺跡として認知された。昭和56年以降には、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会により数十次におよぶ発掘調査ならびに遺構確認調査が行なわれており、弥生時代前期から鎌倉時代に至る遺構・遺物が検出されている。弥生時代の集落は、遺跡範囲東部の春日町２～４丁目で行なわれた第12次調査（ＡＴ93－12）、第27次調査（ＡＴ97－27）を中心とする一帯で検出されており、弥生時代前期新段階に成立し、弥生時代後期にかけて継続して営まれたことが確認されている。特に、弥生時代中期には、多条の溝で構成される環濠の存在や第５次調査（ＡＴ89－５）出土の「跡部銅鐸」が示すように、銅鐸の保有が可能な構成員を具備した大規模な拠点集落を形成していたことが看取される。続く古墳時代初頭（庄内式期）～古墳時代前期（布留式期）においても遺跡範囲のほぼ全域にわたって居城域を中心とする遺構が検出されており、北側の久宝寺遺跡内で検出されている同時期の生産域を含めて集落範囲が広範囲におよぶことが想定される。



第１図　調査位置図（1/2500）

今回の調査地である八尾市跡部北の町２・３丁目付近一帯は跡部遺跡範囲の北西部に位置している。調査地南西部に隣接する位置で実施された府道久宝寺太田線に伴う発掘調査(小林2002)では、平安時代初頭以降の遺構・遺物が検出されている。一方、北接する久宝寺遺跡内では、平成10年に(財)大阪府文化財センターにより実施された98－１トレンチ(赤木他2001)で、平野部での検出例が稀有な横穴式石室を主体部に持つ、「七ツ門古墳」(６世紀中葉)が検出されている。

今回の発掘調査は、公共下水道工事(16－47工区)に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第40次調査(ＡＴ2005－40)にあたる。

２．調査概要

１)調査方法と経過

今回の調査は、八尾市跡部北の町２・３丁目地内で行われた公共下水道工事(16－47工区)に伴うものである。調査地は２×２ｍの人坑部分の６箇所で、総面積は約24㎡を測る。調査区名は北から１～６区と呼称した。調査に際しては、現地表下1.5～2.0ｍ程度を機械掘削した後、以下0.5ｍについては人力掘削と機械掘削を併用し、遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、遺構・遺物は検出されなかったが、古墳時代中期以降の地層堆積を確認することができた。

２)基本層序

１～６調査区ともに比較的安定した水平堆積が認められた。８層(第０～７層)を摘出して基本層序とした。

第０層：盛土。層厚0.6～1.1ｍ。

第１層：N5/0灰色砂質シルト。層厚10～25㎝以上。作土層。

第２層：10GY7/1明緑灰色～5YR5/2灰褐色砂質シルト。層厚15～40㎝。グライ化が顕著。

第３層：2.5GY8/1灰白色粘土質シルト。層厚10～40㎝。管状の酸化鉄斑が全体に顕著である。

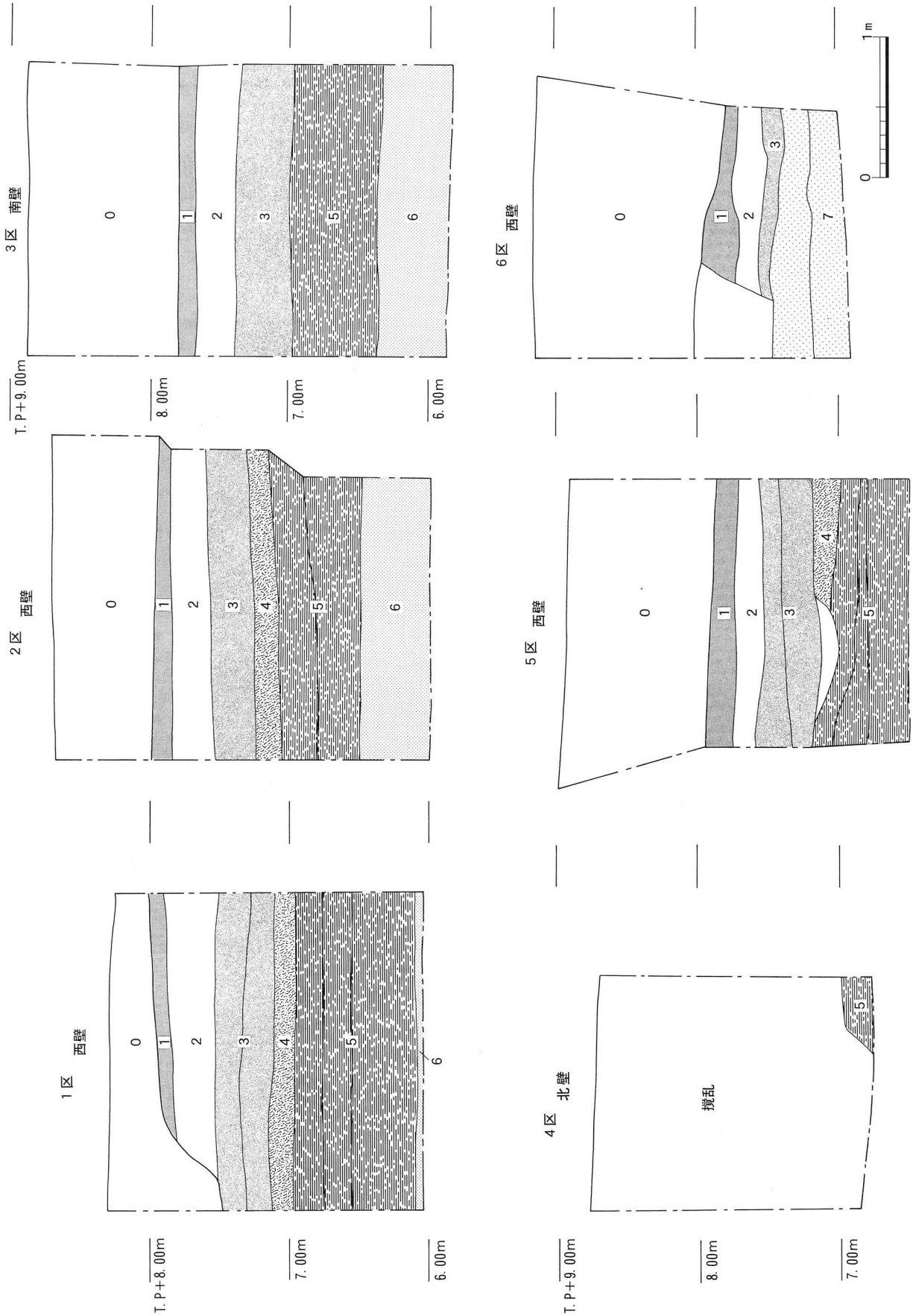
第４層：N5/0灰色粘土。層厚15～20㎝。１・２区で検出。粘性が強く、管状の酸化鉄斑が顕著。

第５層：N6/0～N5/0灰色粘土～シルト質粘土。層厚60～85㎝。上部ではシルト質粘土のラミナおよび植物遺体を含んでおり、下部に行くに従って粘性が強くなる。

第６層：10BG7/1明青灰色中粒砂～粗粒砂。層厚50㎝以上。１～３区で検出。北接する久宝寺遺跡内では、現在の久宝寺駅付近を南北に流下していた河川が検出されており、６層はそれに伴う河成堆積層と推定される。時期的には、古墳時代中期前半頃が推定される。

第７層：5Y8/1～10Y8/1灰白色極細粒砂～細粒砂。層厚50㎝以上。水平ラミナが認められる河成堆積層である。６区のみで確認。西側に隣接する地点で実施された府道久宝寺太田線建設に伴う発掘調査(小林2002)の第７層に対応するもので、平安時代前半から中世までに堆積したものであることが推定される。

参考文献
・赤木克視他　2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第60集』(財)大阪府文化財調査研究センター
・小林義孝　2002「跡部遺跡」『大阪府埋蔵文化財調査報告2001－６』大阪府教育委員会
・原田昌則他　2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線３工区の掘削工事に伴う－」『(財)八尾市文化財調査研究会報告69』(財)八尾市文化財調査研究会
・原田昌則他　2006「Ⅲ　久宝寺遺跡第39次調査(ＫＨ2001－39)・第51次調査(ＫＨ2003－51)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告89』(財)八尾市文化財調査研究会

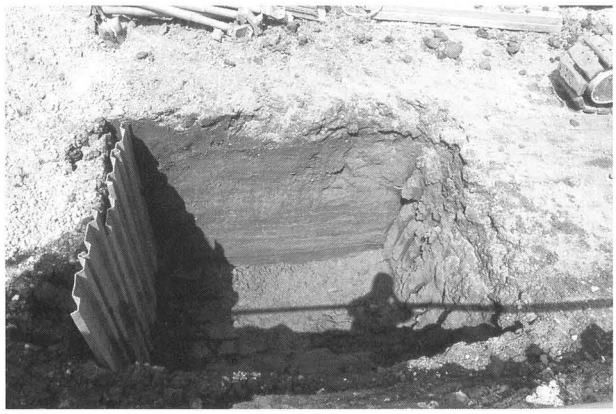


第２図　1～６区断面図（Ｓ＝1/40）

3．まとめ

1～3区では、北接する久宝寺遺跡内で検出された古墳時代中期前半に埋没した河川(久宝寺遺跡第24次のＮＲ31001、第39次のＮＲ201)に伴う河成堆積層を確認した。3区より南部の4～6区および府道久宝寺太田線に伴う発掘調査(小林2002)においては、該当する地層が確認されていないため、3区付近を境として流路が東に振っていたことが推定される。河川が埋没した古墳時代中期前半以降においても、河川周辺での開発は緩慢であったようで、府道に伴う発掘調査で僅かに奈良時代後期から平安時代初頭の遺構・遺物が検出されたことを除けば、居住域としての利用は認められない。

図版一



1区　西壁(東から)

2区　西壁(東から)

3区　南壁(北から)

4区　北壁(南から)

5区　西壁(東から)

6区　西壁(東から)

Ⅱ　池島・福万寺遺跡第６次調査（FK2006－6）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市上之島北３丁目地内で実施した公共下水道工事(17－10工区)に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する池島・福万寺遺跡第６次調査(ＦＫ2006－6)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成18年４月20日～平成18年７月14日(実働５日間)にかけて菊井佳弥を担当者として実施した。面積約44㎡を測る。

1．現地調査においては、青山洋・芝崎和美・鈴木裕治・村井厚三・藤井孝則が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成18年12月に完了した。

1．本書作成に関わる業務には、鈴木裕治・永井律子・田島宜子・市森千恵子・垣内洋平が参加した。

1．本書の執筆・編集は菊井が行った。

本　文　目　次

1．はじめに …… 5

2．調査概要 …… 6

　1)調査方法と経過 …… 6

　2)基本層序 …… 8

　3)検出遺構と出土遺物 …… 10

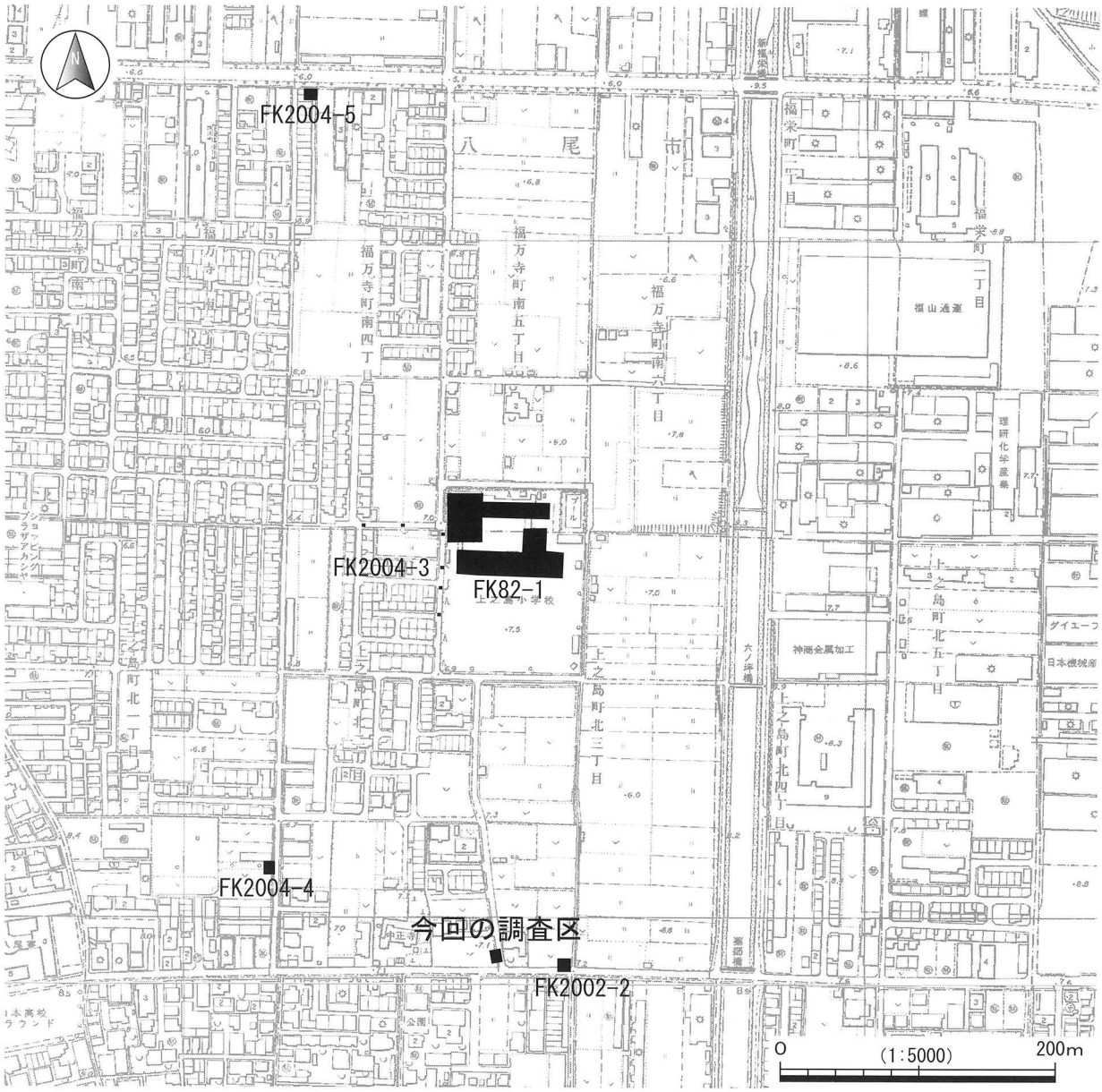
3．まとめ …… 10

Ⅱ　池島・福万寺遺跡第６次調査（ＦＫ2006－6）

１．はじめに

池島・福万寺遺跡は、大阪府八尾市北東部の上之島町、福万寺南町、福万寺町、福万寺北町から東大阪市南東部の池島町にかけての東西1.2㎞、南北1.7㎞に広がる弥生時代前期から近世に至る複合遺跡である。地理的には、旧大和川の分流である玉串川右岸と恩智川沿いに形成された三角州帯自然堤防および後背湿地に立地している。

遺跡北部の池島地区は、河内郡の条里地割が良好に残存する「池島条里遺構」として周知されていた。考古学的な調査は1972年の東大阪市遺跡保護調査会による府立池島高校予定地内の調査を嚆矢とし、1977～80年代に実施された府営水道管埋設工事に伴う調査等で縄文時代～近・現代



第１図　調査地周辺図

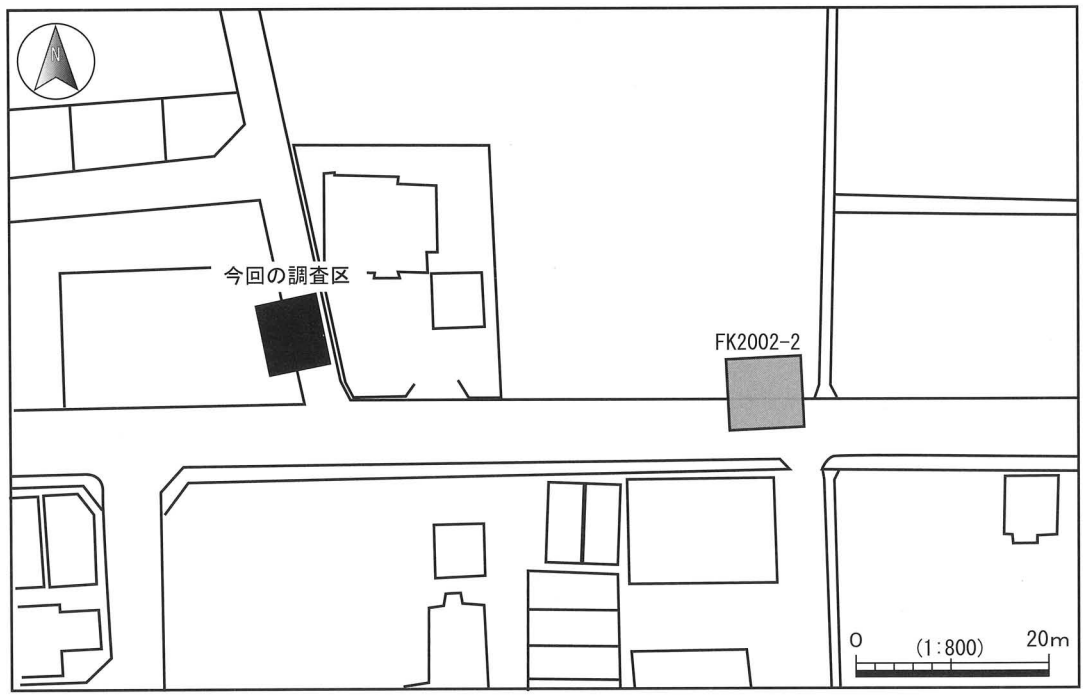
に至る遺構・遺物が検出されている。1984年以降においては、池島・福万寺地区において府の総合的な治水対策の一環として総面積40.2ha、貯溜量165万㎥を測る恩智川治水緑地建設が計画され、それに伴う発掘調査が現在も継続して(財)大阪府文化財センターにより実施されている。それらの調査成果を総合すれば、弥生時代前期～現代までの各時代の耕作遺構面および古墳時代の集落の存在等が明らかにされている。

一方、当調査研究会が実施した発掘調査としては、上之島地区を中心に過去５次にわたる調査が行われている。本調査区から北へ約300ｍに位置する八尾市立上之島小学校建設に伴って実施された第１次調査(ＦＫ82－１)が嚆矢である。第１次調査では、福万寺と上之島との境に位置する東西方向の道路を挟んで展開する鎌倉時代後半～室町時代初頭(13世紀前半～14世紀前半)の屋敷地が検出されている。屋敷跡は、溝で囲繞された区画内に比較的規模の大きい建物を南北軸に配置している他、園地と思われる遺構の存在や硯、中国産磁器、北宋銭、刀、刀子、鏃等の金属製品が出土しており、土豪ならびに武士化した有力名主階層の居住地であったことが推定される。以後の第２～５次調査では、屋敷跡が展開する13世紀後半から室町時代初頭の遺構面を主眼に調査が行われた。第３次調査では、第１次調査で検出された屋敷が廃絶した後に堆積した洪水砂と、その下層の包含層から鎌倉時代末から室町時代初頭の土器を含む包含層が確認され、第１次調査で検出された集落域が西へ広がることを示唆している。第２次・第４次調査では、当該期の層が調査前に掘削されたため、確認されていない。

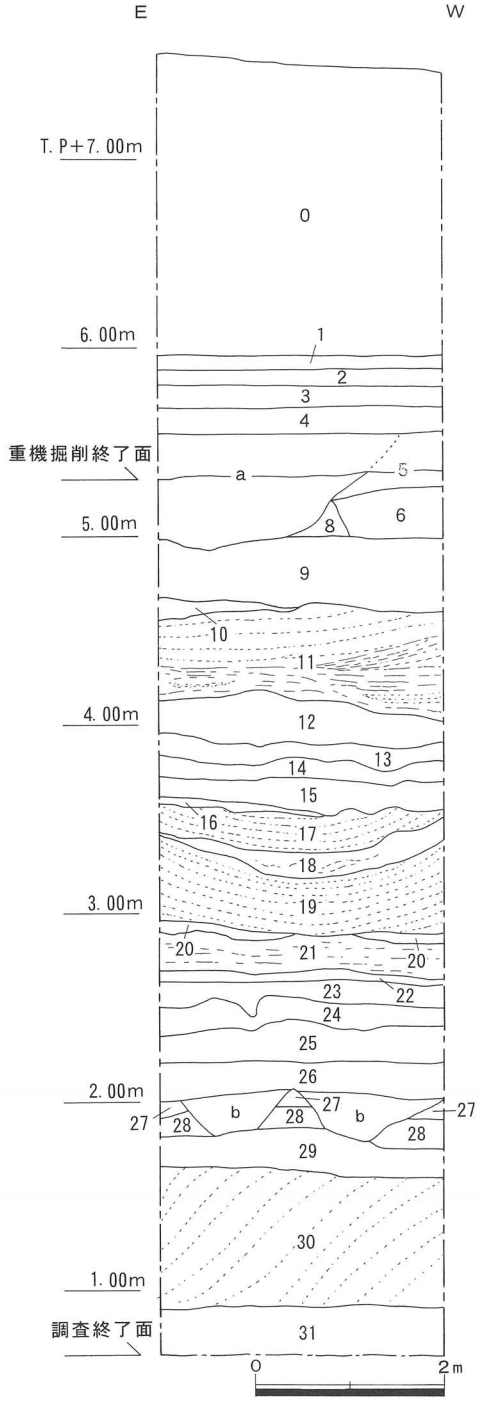
２．調査概要

１)調査方法と経過

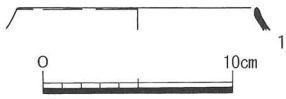
今回の調査は、八尾市上之島町北３丁目地内で行われた公共下水道工事(17－10工区)に伴うもので、当調査研究会が池島・福万寺遺跡内で実施した第６次調査(ＦＫ2006－６)にあたる。調査



第２図　調査位置図(1/800)



第３図　基本層序断面図



第４図　第９層出土遺物

第０層：盛土
第１層：2.5GY2/1黒色　粗粒砂混じりシルト。
第２層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色　粗～極粗粒砂混じりシルト。粗～極粗粒砂多くが混じる。
第３層：5GY8/1～7/1灰白～明オリーブ灰色　中～極粗粒砂。10G4/1暗緑灰色シルト層を挟む。
第４層：2.5GY2/1黒色　中粒砂混じりシルト。
第５層：5GY5/1オリーブ灰色　粘土質シルト～中粒砂・5GY7/1明オリーブ灰色　粗粒砂～細礫・10Y3/1オリーブ黒色　粘土質シルト～細粒砂・5GY4/1暗オリーブ灰色　極粗粒砂～細礫。
第６層：5GY3/1暗オリーブ灰色　シルト混じり粗粒砂～細礫。5GY3/1暗オリーブ灰色　粘質シルトのブロック土が混じる。
第７層：5GY4/1暗オリーブ灰色　細礫混じり中～極粗粒砂。
第８層：10Y3/1暗オリーブ灰色　粘土質シルト。5GY5/1オリーブ灰色中粒砂層を挟む。
第９層：10Y5/1灰色　細粒砂混じりシルト。細粒砂多く混じる。
第10層：10Y4/1灰色　細～中粒砂混じりシルト。
第11層：7.5GY7/1明緑灰色　細～中粒砂。2.5GY8/1灰白色　粗粒砂～細礫。
第12層：10Y4/1灰色　粘土質シルト～シルト。10Y5/1灰色　極細～細粒砂層を挟む。
第13層：10Y4/1灰色　極細粒砂混じり粘土質シルト。
第14層：7.5Y3/1オリーブ黒色　極細～細粒砂混じり粘土質シルト。極細～細粒砂多く混じる。
第15層：10Y3/1オリーブ黒色　極細粒砂混じり粘土質シルト。極細粒砂多く混じる。
第16層：5Y4/1灰色　極細～細粒砂混じり粘土質シルト。
第17層：2.5GY8/1灰白色　中粒砂～細礫。7.5GY7/1明緑灰色粘土質シルト～シルト層を挟む。
第18層：10Y3/1オリーブ黒色　粘土質シルト～シルト。5G7/1～5/1明緑灰～緑灰色　極細～極粗粒砂層を挟む。植物遺体含む。
第19層：2.5GY8/1灰白色　極粗粒砂～中礫。7.5GY7/1明緑灰色シルト～細粒砂層を挟む。
第20層：10Y3/1オリーブ黒色　粘土質シルト
第21層：10Y4/1灰色　粘土質シルト。10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト層、炭化物層を挟む。
第22層：10Y3/1オリーブ黒色　細粒砂混じりシルト。細粒砂少量混じる。
第23層：5Y2/1黒色　シルト混じり粘土質シルト。
第24層：5G4/1暗緑灰色　細粒砂混じりシルト。細粒砂少量、5Y2/1黒色粘土質シルトブロックが混じる。
第25層：5G4/1暗緑灰色　細粒砂混じり粘土質シルト。細粒砂少量混じる。
第26層：5Y2/1黒色　極細粒砂混じり粘土質シルト。
第27層：10Y3/1オリーブ黒色　極細～細粒砂。
第28層：10Y4/1灰色　極細粒砂。
第29層：7.5GY5/1緑灰色　細～中粒砂。
第30層：2.5GY8/1灰白色　中粒砂～細礫。
第31層：2.5GY5/1～4/1オリーブ灰色～暗オリーブ灰色　粘土質シルト～細粒砂。
ａ：7.5Y3/1オリーブ黒色　中粒砂混じり粘土質シルト。
ｂ：10Y3/1オリーブ黒色　細礫混じり極細～細粒砂。

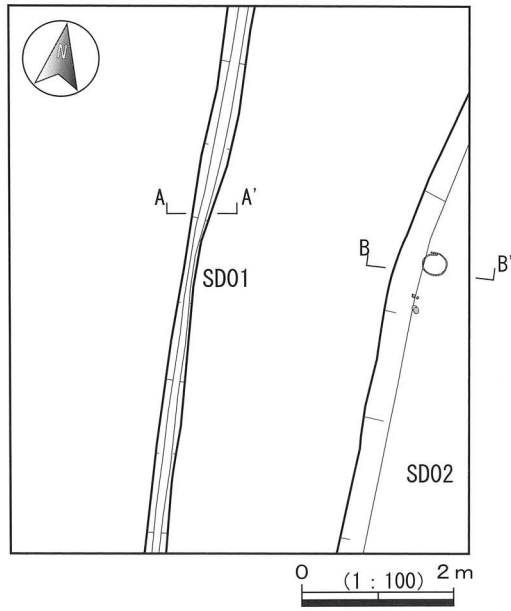
は立坑１箇所(7.2×6.0m)で面積は約44㎡を測る。

調査方法としては、現地表下から2.3m前後までを重機による掘削後、0.3m前後人力掘削を行う予定であったが、平成18年５月17日に業者から連絡を受け現地に赴いた時点で、既に機械掘削が2.2～2.4mに及んでいた。機械掘削終了面(第１面とする。)を面的に調査し、以下、工事により破壊される現地表下約6.8m前後(T.P. ＋0.7m)まで、地層堆積状況の確認調査を行った。

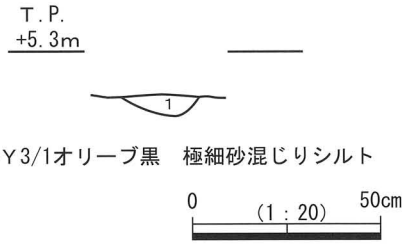
２)基本層序

前述したように、機械掘削が及んでいた現地表下2.2～2.4mより上部の層序(第１～４層)は部分的にしか状況を確認できなかった。現地表下2.3m～6.8m(T.P. ＋5.8m～ T.P. ＋0.7m)までの間で31層を確認した。

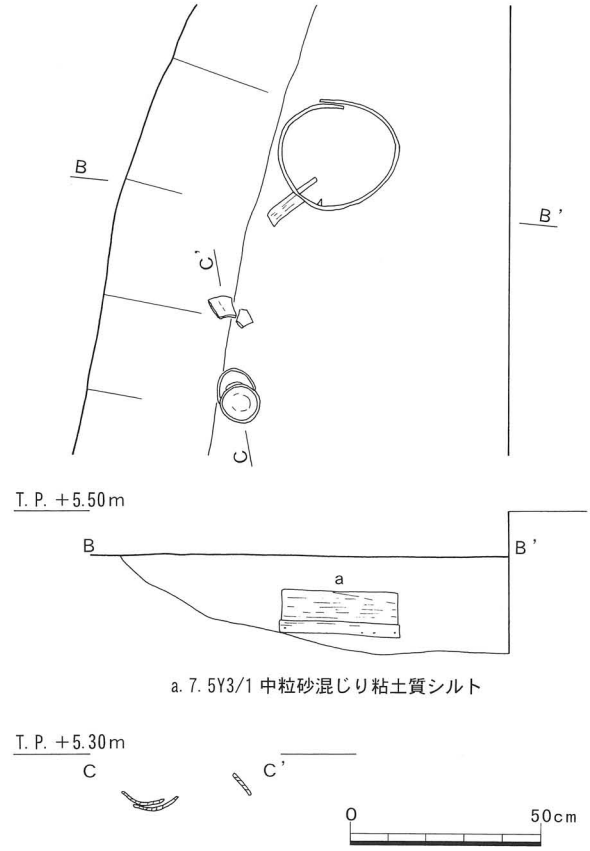
第０層は盛土・客土層、旧耕土、近世作土層が存在していたと考えられるが、未調査部分である。第１～２層までは中世以降の作土層である。第３層は14世紀前半以降に堆積した洪水砂層である。第１次調査の第２層に対応する層である。第４層は14世紀初頭に形成された土壌化層である。部分的に植物遺体を含むシルト層がブロックで混じっていたので、第５層が堆積した後、一次、シルト層が堆積するような湿地状を呈し、その後、そのシルト層と第５層を母材とした第４層が形成されたと考える。第１次調査の第５層に対応する層である。第４層上面で上層からの多数の踏み込みがみられた。第５層は洪水砂層で、第４層の地形基盤となる層である。細片であるため



第５図　第１面平面図

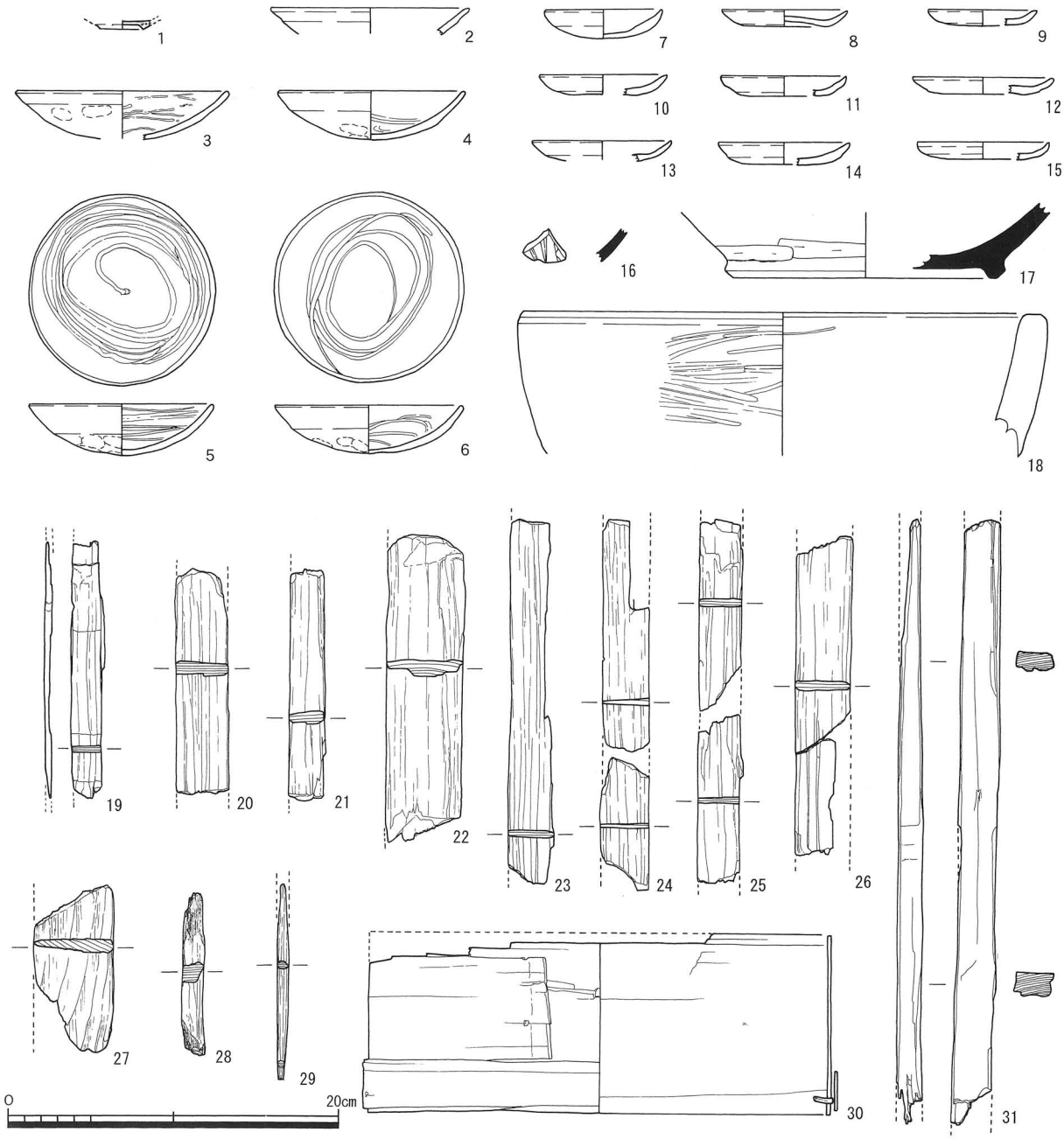


第６図　ＳＤ01断面図



第７図　ＳＤ02遺物出土状況・断面図

図化はしていないが、羽釜、瓦器椀、常滑焼の甕、丸瓦が出土している。第６層上面で、上層からの踏み込みがみられた。第６・７層中からは細片であるため、図化はしていないが、それぞれ瓦器椀が出土している。第８層は水成堆積層である。第９・10層は土壌化層である。第９層上面で、上層からの踏み込みがみられた。第９層中から６世紀後半の須恵器杯身片（第４図）が出土している。第11層は洪水砂層である。第12層は水成堆積層である。第13層は弱い土壌化層である。第14・15層は土壌化層である。第16層は弱い土壌化層である。第17～19層は洪水砂層である。第20・21層は水成堆積層である。第21層は炭化物薄層を複数層挟む。第22・23層は土壌化層であり、それぞれいわゆる第１、第２黒色泥層にあたると考える。第26層はいわゆる第３黒色泥層で、弥生前期の水田作土層と考える。この層の下面で、溝やピット等、複数の遺構を確認できた。第27・



第８図　ＳＤ02内出土遺物（１～30はＳ＝1/4、31はＳ＝1/8）

28層は第26層のブロックが混じっているようにみえたが、第26層からの踏み込み、生物擾乱と考える。第29・30層は洪水砂層であり、東西方向に伸びる微高地を形成する。微高地から北へ低くなった部分に第27・28層が堆積する。第27～30層の堆積によって形成された微地形が、第22～26層までの各遺構面の基盤地形となる。第31層は水成堆積層である。

3）検出遺構と出土遺物

機械掘削終了面(T.P. ＋5.2～5.4m前後)で、南北方向に平行に流れる溝２条を検出した。

ＳＤ01：幅20～35cm、検出面からの深さ５cmを測る。細片のため図化していないが、土師器皿が出土している。埋土や遺物から14世紀初頭に位置付けられる。

ＳＤ02：東肩が調査区外となるため全幅は不明であるが、幅1.8m以上を測る。検出面からの深さは25～30cmを測る。本遺構からは、瓦器椀・土師器皿と陶磁器類・木製品が出土した。底面から３～５cm上で、２枚重なった状態の瓦器椀（５・６）と曲物(30)が口縁を上に置かれたような状態で出土した。曲物は底板が遺存せず、井戸側もしくは水溜の可能性も考えたが、本遺構の西肩が6.0m以上、直線的に伸びることを考慮して、本遺構が溝であり、曲物は溝が機能時に置かれたものと判断した。

１～６は瓦器椀であり、外面はヘラミガキが行われず、口縁部ヨコナデと成形時の指押え痕が残る。内面は見込みから体部にかけて一連の渦巻状のヘラミガキを施す。１を除いて高台もない。尾上編年Ⅳ-３～４期の和泉型瓦器椀である。７～15は土師器皿、16は龍泉窯系青磁碗の破片である。17は常滑焼の高台付きこね鉢、18は瓦質土器火鉢、19～27は板状木製品である。19には小さな抉りが見られる。28は両端が焼けた木片である。29は箸である。30は木釘が一箇所残り、釘結合曲物である。31は建築部材。これらの遺物から本遺構の時期は14世紀初頭に位置付けられる。

３．まとめ

今回の調査では、第１次調査で検出された屋敷と同時期の溝を２条検出した。これらの溝からは、周辺に居住地の存在を示す遺物が出土し、この溝を北へ延長すると、福万寺側屋敷地の東端を区画するＳＤ９、上之島側屋敷地の西端を区画するＳＲ４、ＳＤ19にあたることから、屋敷地を区画する溝の可能性があり、平行するＳＤ01とＳＤ02の間は道路として使われていたと考える。しかし、周辺の調査では屋敷に関連する遺構、遺物は確認されておらず、屋敷が溝のどちら側に展開したのかは不明である。今後の調査に期待したい。

また、今回は平面的な調査が行えなかったため、十分な成果はあげられなかったが、６層の土壌化層(第13～15・22・23・26層)と弥生時代前期と考える遺構を確認した。今後、平面的調査が行われれば、福万寺地区で得られているような成果が上之島地区でも得られるであろう。

参考文献
・東大阪市遺跡保護調査会　1973「池島町の条里遺構－調査概報－」
・東大阪市遺跡保護調査会　1975「池島町の条里遺構－48年度・49年度発掘調査概報－」
・大野　薫　1982「池島遺跡試掘調査概要・Ⅰ」大阪府教育委員会
・米田敏幸他　1990「福万寺遺跡－上之島町北３丁目22－１の調査－」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告24』財団法人八尾市文化財調査研究会
・樋口　薫　2004「福万寺遺跡第２次調査(ＦＫ2002－2)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告78』財団法人八尾市文化財調査研究会

・原田昌則　2006 「池島・福万寺遺跡第３次調査（ＦＫ2004－３）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告86』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　2006 「池島・福万寺遺跡第４次調査（ＦＫ2004－４）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告86』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　2006 「池島・福万寺遺跡第５次調査（ＦＫ2004－５）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告86』財団法人八尾市文化財調査研究会
・尾上　実　1983 「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集　古文化論集』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
・森島康雄　1992 「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会
・中世土器研究会　1995 『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

遺物観察表

図	番号	器種	法量	調整	色調	胎土	残存率	備考
4	1	須恵器杯身	口径：(12.6) 残存高：1.1	内外：回転ロクロナデ	N6/ 灰色	2mm 以下の長石、石英が微量に混じるが精良	口縁部細片	
8	1	瓦器椀	底径：(2.6) 残存高：0.5	外：ナデ　ユビオサエ 内：ヘラミガキ	N5/ 灰色	0.5mm 以下の長石、チャートを含むが精良	底部 1/2	
8	2	瓦器椀	口径：(12.0) 残存高：1.6	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　一連渦状ヘラミガキ	2.5Y8/1灰白色 5YR8/2灰白色	0.5mm 以下の長石、チャートを含むが精良	口縁部 1/16	
8	3	瓦器椀	口径：(12.6) 残存高：2.9	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　一連渦状ヘラミガキ	N5/ 灰色	0.5mm 以下の長石、チャートを含むが精良	1/6	
8	4	瓦器椀	口径：(11.0) 器高：3.0	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　一連渦状ヘラミガキ	N5/ ～7/ 灰白～灰色	0.5mm 以下の長石、チャートを含むが精良	3/4	
8	5	瓦器椀	口径：11.0 器高：3.1	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　一連渦状ヘラミガキ	N4/ 灰色	0.5mm 以下の長石、チャートを含むが精良	完形	
8	6	瓦器椀	口径：11.2 器高：2.9	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　一連渦状ヘラミガキ	N5/ 灰色	0.5mm 以下の長石、チャートを含むが精良	完形	
8	7	土師器皿	口径：(7.0) 器高：1.8	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　ナデ	7.5Y7/1灰白色	0.5mm 以下の長石、石英、角閃石、雲母を含むが精良	1/4	口縁部に煤付着、灯明皿
8	8	土師器皿	口径：(7.6) 器高：1.2	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　ナデ	7.5Y7/1灰白色	0.5mm 以下の長石、石英、角閃石、雲母を含むが精良	1/2	
8	9	土師器皿	口径：(8.4) 残存高：1.2	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　ナデ	7.5Y7/1灰白色	0.5mm 以下の長石、石英、角閃石、雲母を含むが精良	1/8	
8	10	土師器皿	口径：(7.6) 器高：1.0	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　ナデ	7.5Y7/1灰白色	0.5mm 以下の長石、石英、角閃石、雲母を含むが精良	1/8	
8	11	土師器皿	口径：(7.6) 器高：1.3	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　ナデ	7.5Y7/1灰白色	0.5mm 以下の長石、石英、角閃石、雲母を含むが精良	1/8	
8	12	土師器皿	口径：(8.4) 器高：1.4	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　ナデ	7.5Y7/1灰白色	0.5mm 以下の長石、石英、角閃石、雲母を含むが精良	1/8	
8	13	土師器皿	口径：(6.6) 器高：1.2	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　ナデ	7.5Y7/1灰白色	0.5mm 以下の長石、石英、角閃石、雲母を含むが精良	1/8	
8	14	土師器皿	口径：(8.6) 器高：1.0	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　ナデ	2.5Y7/2灰黄色	0.5mm 以下の長石、石英、角閃石、雲母を含むが精良	1/5	
8	15	土師器皿	口径：(8.0) 残存高：1.2	外：ヨコナデ　ユビオサエ 内：ヨコナデ　ナデ	2.5Y7/2灰黄色 10YR7/2にぶい黄橙色	0.5mm 以下の長石、石英、角閃石、雲母を含むが精良	1/16	
8	16	龍泉窯系青磁碗	—	内外：施釉 外：蓮弁文	釉：7.5GY7/1～6/1緑灰色	精良	体部細片	
8	17	常滑焼こね鉢	底径：(16.0) 残存高：4.5	外：回転ロクロナデ　ヘラケズリ 内：回転ロクロナデ	N6/ 灰色	精良	底部 1/5	
8	18	瓦質土器火鉢	口径：(32.0) 残存高：8.6	外：ナデ後ヘラミガキ 内：ナデ	N4/ 灰色	1～2mm 大の長石、石英多く含む。	口縁部 1/12	

＊(　)内は復原数値

図	番号	器種	法量(cm)	備考
8	19	板状木製品	残存長：20.6　残存幅：2.1　厚さ：0.4	側面に抉りが１箇所あり。
8	20	板状木製品	残存長：13.6　残存幅：3.2　厚さ：0.9	
8	21	板状木製品	残存長：14.0　残存幅：2.1　厚さ：0.7	
8	22	板状木製品	残存長：18.6　残存幅：4.7　厚さ：1.0	
8	23	板状木製品	残存長：22.0　残存幅：2.8　厚さ：0.4	
8	24	板状木製品	残存長：22.0　残存幅：2.9　厚さ：0.4	
8	25	板状木製品	残存長：21.8　幅2.5　厚さ：0.5	
8	26	板状木製品	残存長：19.3　幅：3.4　厚さ：0.6	
8	27	板状木製品	残存長：10.1　残存幅：4.9　厚さ：0.8	
8	28	木片	残存長9.7	焼成痕あり。
8	29	箸	残存長11.9　径0.65	
8	30	曲物	口径：28.0　器高：10.9	底板なし。木釘が1箇所遺存する。
8	31	建築部材	残存長：73.0　幅：5.0　厚さ：2.9	

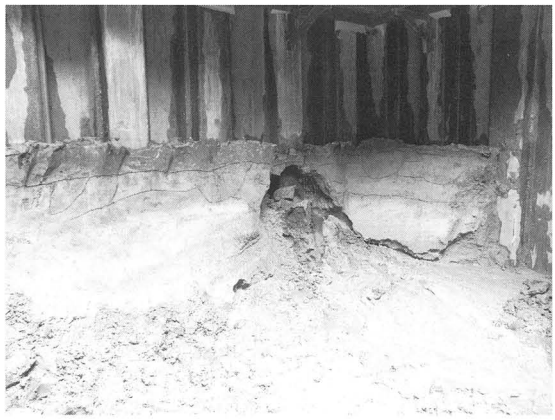
図版一

第１～５層（西から）

ＳＤ02断面（北から）

第５～25層（北から）

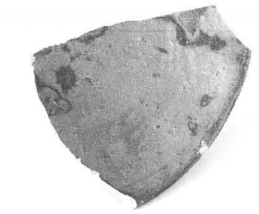
ＳＤ01検出状況（南から）



第26～31層（北西から）

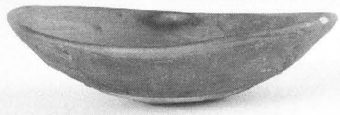
ＳＤ02土器出土状況（北から）

図版二



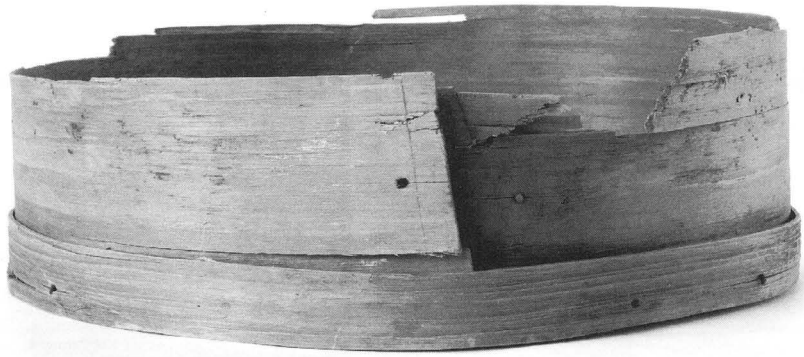
3

4



5

6



30

ＳＤ02出土遺物

Ⅲ　老原遺跡第12次調査（ＯＨ2006－12）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市老原１丁目地内で実施した公共下水道工事(17－38工区)に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する老原遺跡第12次調査(ＯＨ2006－12)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成18年８月23日～８月31日(実働４日)の期間で、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約48.6㎡である。

1．現地調査においては市森千恵子・岩本順子・河南智美・関野佑城・曹　龍・中尾優司・細谷利美・藤中貴子が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後随時実施し、平成18年９月に終了した。

1．本書作成に関わる業務は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに …… 15

2．調査概要 …… 16

　1)調査方法と経過 …… 16

　2)基本層序 …… 17

　3)検出遺構と出土遺物 …… 18

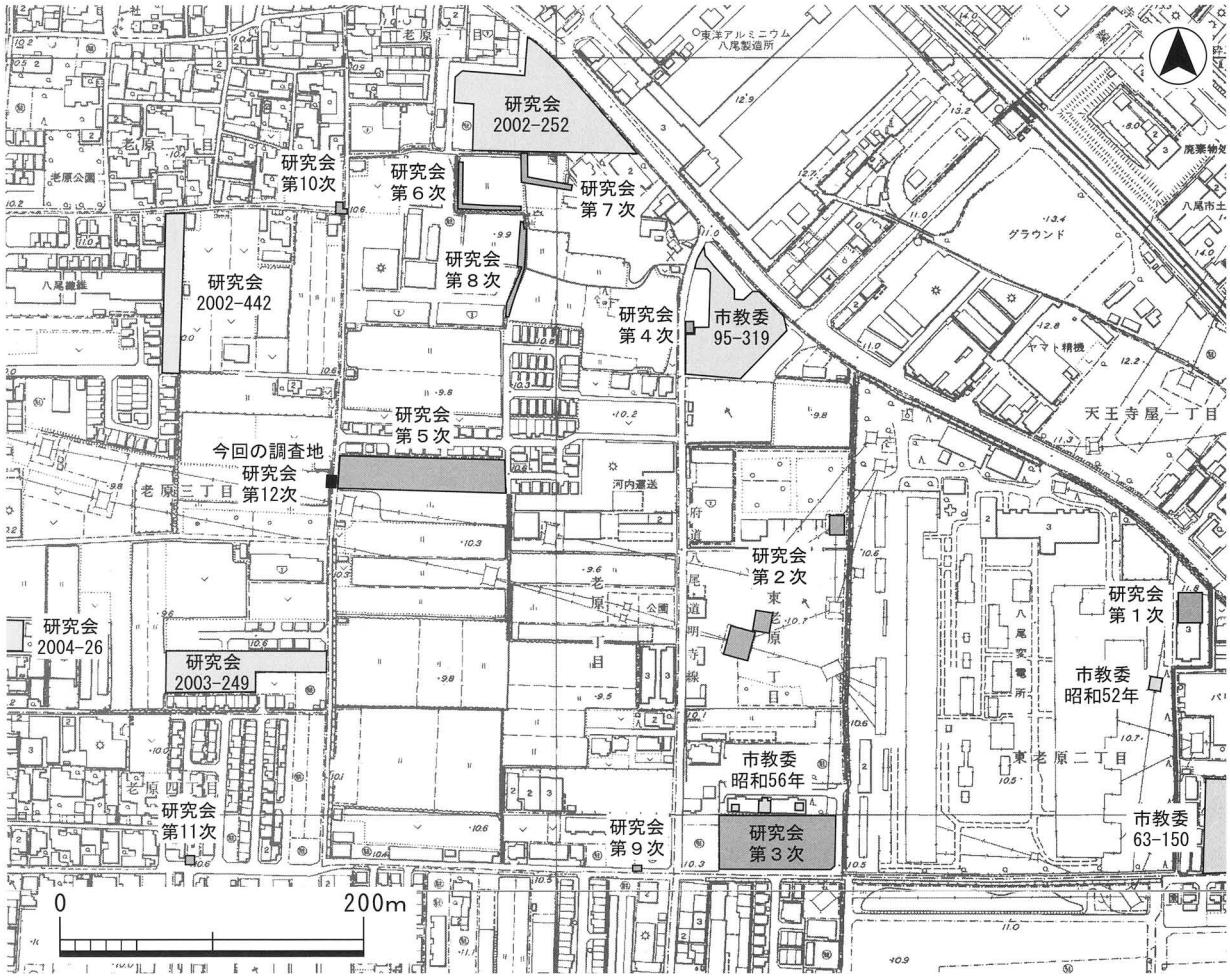
3．まとめ …… 18

Ⅲ　老原遺跡第12次調査（ＯＨ2006－12）

１．はじめに

老原遺跡は八尾市南西部にあたり、現在の行政区画では老原１～４丁目、東老原１・２丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地上に位置している。当遺跡周辺には南に志紀遺跡・田井中遺跡が隣接し、長瀬川を挟んで北東部には矢作遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡が存在する。また当遺跡北側は長瀬川左岸に平行する奈良街道に面している。街道沿いにあたる老原１丁目地内の田中には、一辺約５ｍ・高さ約１ｍを測る方形の高まりが現存しており、「五条宮」と称されている。この付近からは奈良時代後期の細弁蓮華文軒丸瓦が出土していることから、ここを中心として奈良時代の寺院（五条宮寺）の存在が想定されている。しかしこれまでの発掘調査では当該期の遺構・遺物は確認されていない。

当遺跡における最初の発掘調査は市教委昭和52年で、弥生時代後期～鎌倉時代の遺物が出土したものの、遺構の確認には至らなかった。続く市教委昭和56年では古墳時代後期・鎌倉時代前期の遺構が検出され、さらにその後の市教委・研究会による調査によって、当遺跡は古墳時代後期、及び平安時代後期～近世の遺跡として認識されている。地域毎に概観すると、遺跡範囲南部～東



第１図　調査地位置図

表１　老原遺跡調査一覧表

調査名	調査年月	文　　献	
市教委昭和52年	昭和52年	八尾市文化財調査報告４	1979
市教委昭和56年	昭和56年４月～５月	八尾市文化財調査研究会報告２	1983
研究会第１次（ＯＨ84- １）	昭和60年２月～３月	八尾市文化財調査研究会報告７	1985
研究会第２次（ＯＨ85- ２）	昭和60年８月～９月	八尾市文化財調査研究会報告13	1987
市教委63-150	昭和63年８月	八尾市文化財調査報告19	1989
研究会第３次（ＯＨ88- ３）	昭和63年10月～11月	八尾市文化財調査研究会報告25	1989
研究会第４次（ＯＨ88- ４）	平成元年２月～３月	八尾市文化財調査研究会報告25	1989
研究会第５次（ＯＨ93- ５）	平成６年１月	八尾市文化財調査研究会報告59	1998
市教委95-319	平成７年10月	八尾市文化財調査報告36	1997
研究会第６次（ＯＨ95- ６）	平成７年12月	八尾市文化財調査研究会報告81	2004
研究会第７次（ＯＨ96- ７）	平成８年12月	八尾市文化財調査研究会報告81	2004
研究会第８次（ＯＨ97- ８）	平成９年11月	八尾市文化財調査研究会報告81	2004
研究会第９次（ＯＨ97- ９）	平成10年２月	八尾市文化財調査研究会報告66	2000
研究会第10次（ＯＨ2002-10）	平成14年９月～10月	八尾市文化財調査研究会報告75	2003
研究会2002-252	平成14年10月	八尾市文化財調査報告48	2003
研究会2002-442	平成15年２月	八尾市文化財調査報告49	2004
研究会2003-249	平成16年１月	八尾市文化財調査報告50	2005
研究会2004-26	平成16年５月	八尾市文化財調査報告50	2005
研究会第11次（ＯＨ2005-11）	平成17年７月～９月	八尾市文化財調査研究会報告86	2006
研究会第12次（ＯＨ2006-12）	平成18年８月	今回報告	

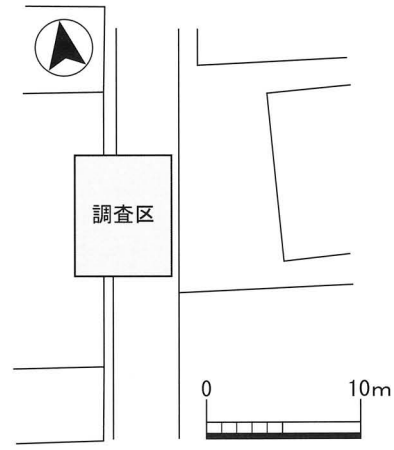
部の市教委昭和56年、研究会第１次では古墳時代後期以降、北部～中心部の研究会第２・４・６～８次調査他では平安時代後期以降の集落域が検出されている。今回の調査地は遺跡範囲の西部にあたり、研究会第５次調査地の西側に隣接している。この調査では平安時代末の居住域が西側で、また東側では生産域が検出されている。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事（17－38工区）に伴う調査で、当調査研究会が老原遺跡内で行った第12次調査（ＯＨ2006－12）にあたる。調査地は平面長方形を呈する立坑部分１箇所で、面積は約48.6㎡を測る。

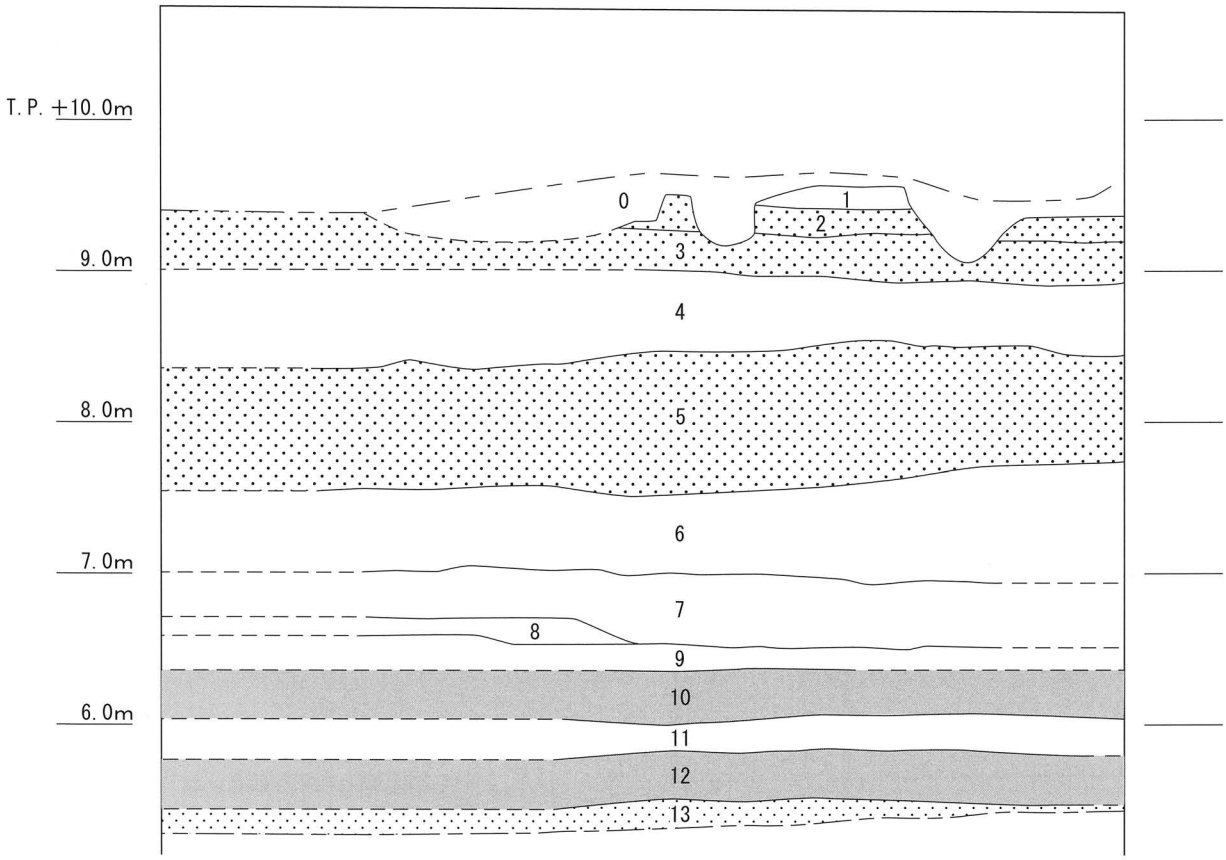
調査着手時にはすでに覆工板工事が完了しており、このため現地表（約 T.P. ＋10.7m）下約1.1mからの調査となった。調査開始面の状況は、ガス・水道等の既設管路や道路側溝による攪乱が顕著に認められ、まずこの部分は重機により掘削した。以下の約0.2mを人力掘削により調査し、さらに以下の工事掘削深度（約 T.P. ＋5.3m）までについては、北壁を残しながらの重機掘削により断面観察を実施した。なお調査では、工事用に立坑北側に設置された仮ＢＭ（T.P. ＋10.735m）を使用した。



第２図　調査区位置図

2）基本層序

北壁断面を基本層序とした。０層は盛土・攪乱である。１層は鉄分を多く含み、ブロック状に砂粒を含む撹拌された土壌化層である。12世紀後半に比定される土師器・瓦器・須恵器・中国製白磁が出土しているが、すべて小片である。上面が第１面。２層以下は砂・粘土の互層状を呈する水成層である。２・３層は一連の流水堆積層である。４層は細かい植物遺体を多く含み、湿地性堆積である。５層は流水堆積層で、水平ラミナが認められる。６～12層は湿地性の堆積である。上部では炭酸鉄が多く見られ、全体に細かい炭化植物遺体を含んでいる。10・12層は一見暗褐色～黒褐色を呈する層相で、土壌化している可能性がある。13層は砂粒優勢な層相であるが、ラミナは見られず流水層の最終的な堆積部分と考えられる。



1. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂ブロック混粘土質シルト　Fe
2. 5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト～細粒砂互層
3. 10Y7/1灰白色極細粒砂～粗粒砂互層
4. 5Y4/1灰色シルト質粘土　植物遺体
5. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～粗粒砂互層　植物遺体
6. 7.5Y5/1灰色シルト質粘土互層　炭酸鉄
7. 10GY5/1緑灰色粘土　炭化植物　炭酸鉄
8. 7.5GY6/1緑灰色細粒砂～中粒砂少混粘土
9. 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土　炭化植物
10. 10Y3/1オリーブ黒色粘土　植物遺体
11. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　下部炭化植物ラミナ
12. 7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～中粒砂混粘土
13. 5GY5/1オリーブ灰色シルト混極細粒砂～中粒砂

第３図　基本層序

3)検出遺構と出土遺物

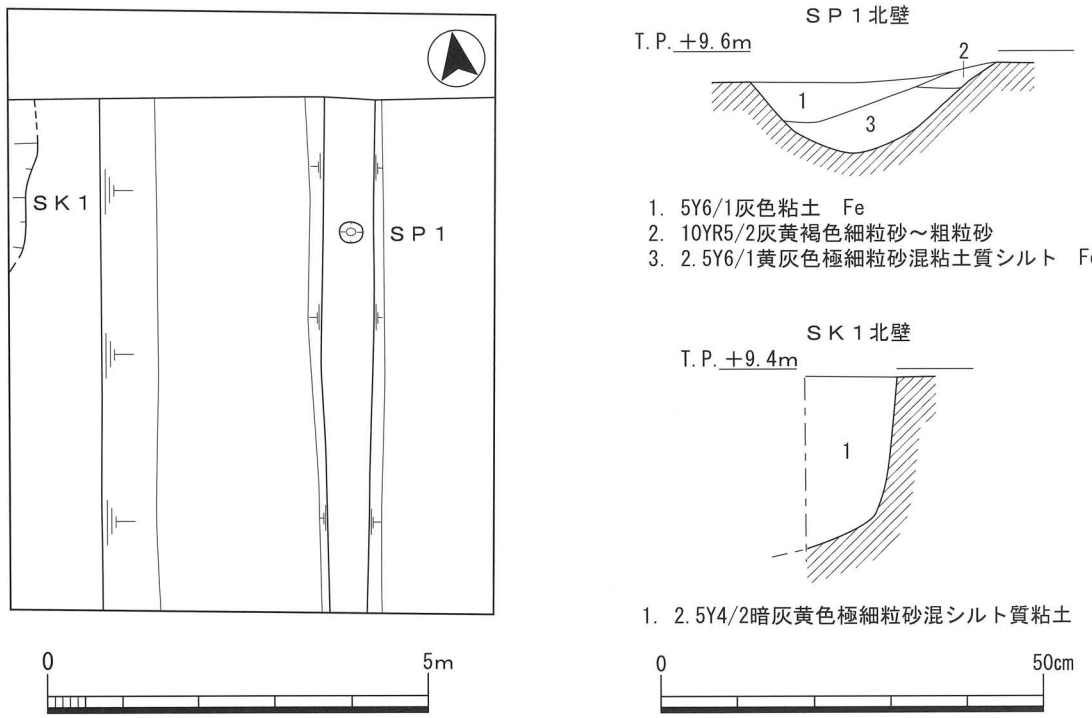
1層上面(約T.P. +9.6m)で土坑1基(ＳＫ１)、ピット1個(ＳＰ１)を検出した。攪乱のため、遺構面の遺存は部分的であった。

ＳＫ１

調査区西部で、南北方向に延びる遺構東肩を長さ約1.6mにわたって検出したもので、西は調査区外に続いており詳細は不明である。深さ22cm以上を測り、埋土は2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂混シルト質粘土の単層である。陶器皿、瓦器椀の破片が出土しており、時期は近世に比定される。

ＳＰ１

平面形はほぼ円形を呈し、規模は東西32cm、南北27cm、深さ12cmを測る。埋土は3層から成る。遺物は出土していないが、1層出土遺物からみて時期は12世紀後半以降に比定される。東側の第5次調査成果からみて12世紀末頃の柱穴の可能性が高い。



第4図　平面図、遺構断面図

3．まとめ

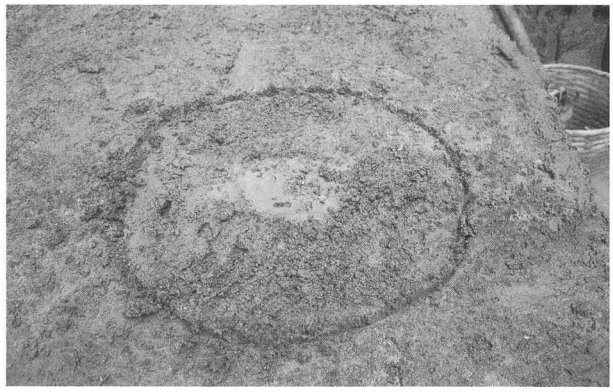
今回の調査では、12世紀後半以降、及び近世の遺構を検出した。東の第5次調査地で検出されている当該期の集落域の広がりが確認できたといえる。下層の平安時代末以前の状況は水成層が厚く堆積しており、生活の痕跡は認められなかった。

調査地（南から）

人力掘削（北から）

第１面（北から）

第１面（東から）



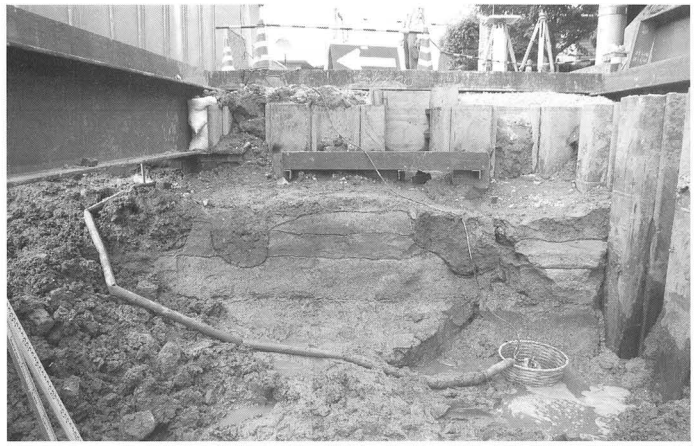
ＳＰ１（南から）

ＳＫ１（南から）

平板実測（南から）

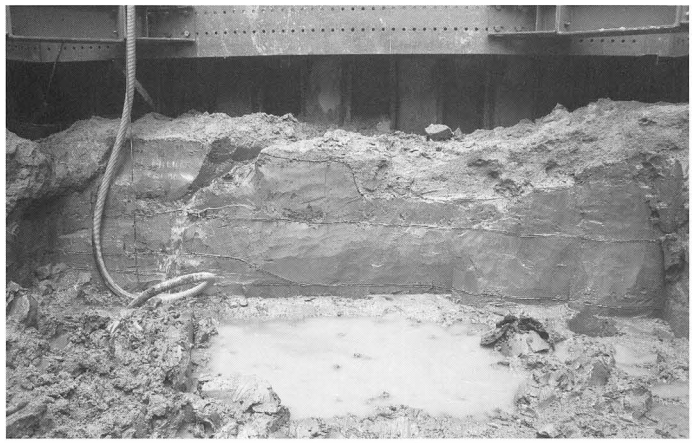
下層重機掘削（北から）

図版二



北壁　0～4層(GL～T.P.+8.6m)

北壁　5層(T.P.+8.6～7.6m)



北壁　6～9層(T.P.+7.6～6.4m)

北壁　10～13層(T.P.+6.4～5.3m)

Ⅳ　恩智遺跡第18次調査（ＯＪ2005－18）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市恩智中町３丁目で実施した公共下水道工事(17－21工区)に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する恩智遺跡第18次調査(ＯＪ2005－18)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成17年９月２日～平成17年12月12日(実働31日間)にかけて原田昌則を担当者として実施した。調査面積約328.65㎡を測る。

1．現地調査においては伊藤静江・飯塚直世・垣内洋平・加藤邦枝・北原清子・国津れいこ・鈴木祐治・曹　龍・中沢聡司・西森忠幸・徳谷尚子・村井厚三・村田知子・若林久美子・山内千惠子が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成18年12月に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測北原・村田、図面トレース－北原が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに …… 21

2．調査概要 …… 22

1)調査方法と経過 …… 22

2)１～15区の調査 …… 22

3)１～15区の基本層序 …… 23

4)１～15区の検出遺構・出土遺物 …… 24

5)16～30区の調査 …… 35

6)16～30区の基本層序 …… 35

7)16～30区の検出遺構・出土遺物 …… 37

8)遺物に伴わない出土遺物 …… 38

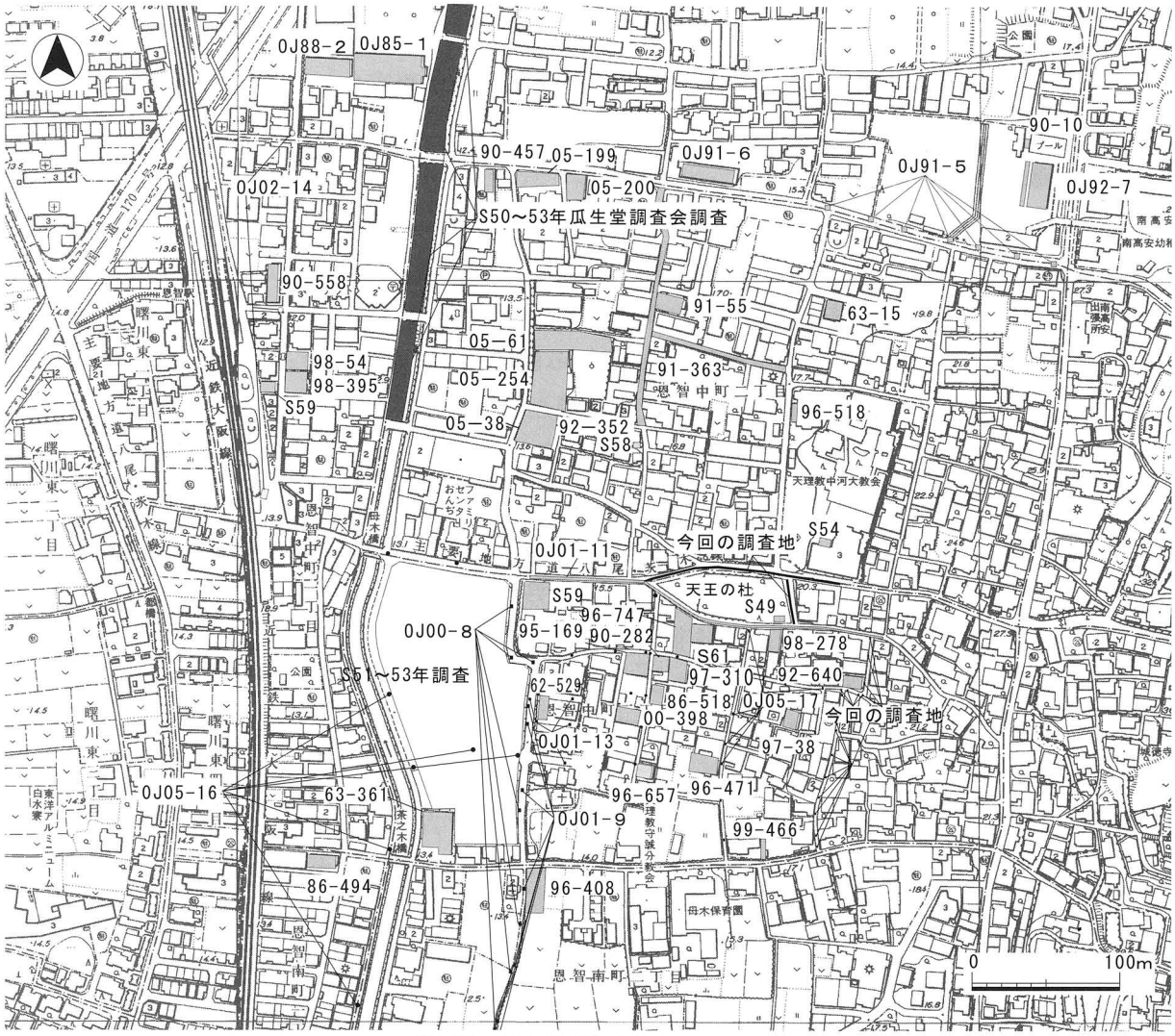
3．まとめ …… 41

Ⅳ　恩智遺跡第18次調査（ＯＪ2005－18）

1. はじめに

恩智遺跡は恩智神社の御旅所である「天王の杜」を中心に広がる旧石器時代から古墳時代後期に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町１～４丁目、恩智中町１～５丁目、恩智南町１～５丁目一帯の生駒山地西麓部から平野部にかけての東西1.2km、南北1.0kmがその範囲とされている。

恩智遺跡は大阪府下でも、古くから遺跡として認識されており、大正６年（1917）７月には「天王の杜」周辺での踏査が梅原末治・島田貞彦両氏（梅原・島田1923）により行われ、同年８月には、鳥居龍蔵氏により「天王の杜」の南西約200m地点の小字茶の木地区で試掘調査（鳥居1917）が実施され、弥生時代各時期の遺物が検出されている。さらに、昭和14年（1939）には、大阪府下における史前遺跡調査事業の一つとして藤岡謙二郎氏他における２箇所の発掘調査（藤岡1941）が実施され、石敷遺構や多数の弥生土器が検出された。昭和16年（1941）に井戸掘削中に出土した人骨・縄文土



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/5000）

器について、昭和23年(1948)に今里幾次氏により『日本考古学１－３』で報告(今里1948)されており、恩智遺跡が縄文時代前期に遡る遺跡であることが認知されている。また昭和49年(1974)に、「天王の杜」南東部で行われた防火用貯水槽設置の掘削工事に伴う調査では、地表下0.7～1.0mで弥生時代中期、2.5～3.0m付近で縄文時代晩期の遺物包含層(山本他1976)が確認されている。一方、昭和50～53年(1975～1978)にかけて、恩智川の改修工事に伴う発掘調査(田代他1980)が瓜生堂遺跡調査会により実施され、縄文時代前期から古墳時代中期の遺構・遺物が検出されている。なかでも、弥生時代中期おいては、集落の北西部を区画する多条の溝や墓域の存在が明らかにされた他、多量の弥生土器、豊富な木器類の出土があった。この調査により、恩智遺跡の推定範囲が西部および北西部に展開していたことが明らかになった。

今回の調査地である「天王の杜」周辺での発掘調査としては、先述したもの以外では、昭和61年(1986)に恩智中町３丁目で八尾市教育委員会により実施された発掘調査(嶋村1987)がある。この調査では、縄文時代晩期中葉(滋賀里Ⅲｂ式)を中心とする在地系の縄文土器の他、中部瀬戸内地方の原下層式、東北地方の大洞Ｂ－Ｃ、Ｃ１式等の活発な地域間の交流を窺わせる土器類の出土があった。平成13年(2001)には、「天王の杜」を周回する南側の道路部分で、当調査研究会による公共下水道工事に伴う第11次調査(森本2003)を実施した結果、縄文時代晩期と弥生時代中期の遺構・遺物が検出されている。このような既往調査の成果から、「天王の杜」の北側および東側を対象とする今回の調査においても、同時期の遺構・遺物の存在が想定された。

2. 調査概要

１)調査方法と経過

今回の調査は、八尾市恩智中町３丁目地内で行われた公共下水道工事(17－21工区)に伴うもので、当調査研究会が恩智遺跡内で実施した第18次調査(ＯＪ2005－18)にあたる。

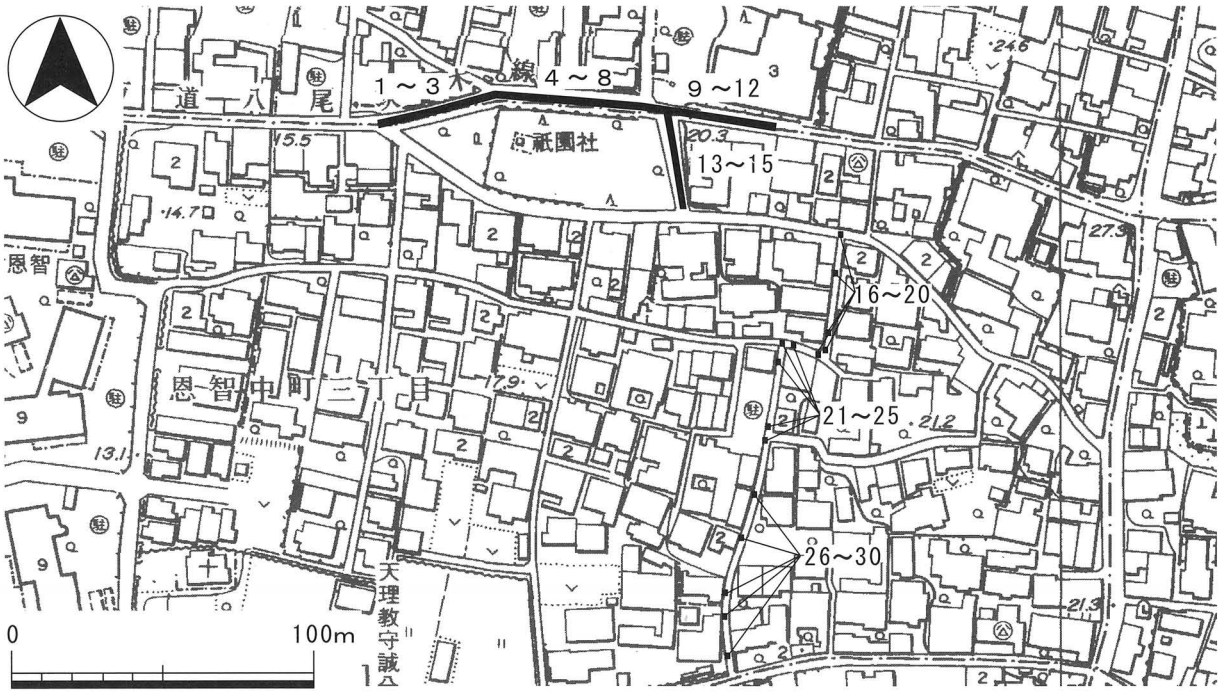
調査対象部分は、幅１ｍ×長さ延べ約160mを測る開削部分(１～15区)と一辺0.75m規模の人孔15箇所(16～30区)のほか、開削部分の一部で立会調査をした。面積は約328.65m^{2}を測る。

調査では、現地表(T.P.＋20.4～16.1m)下0.5m前後までを機械掘削した後、以下0.5～1.0mについては人力・機械掘削を併用して、平面および断面の調査を実施し遺構・遺物の検出に努めた。開削部分の調査(１～15区)においては、交通量の多い公道部分にあたるため、調査を実施した後埋め戻しと道路復旧を行う工程を当日中に行う必然性から、１日の仕事量は８～13.6m程度に限定された。人孔部分については、１日１箇所ないしは２箇所の調査を実施した他、開削部分の立会調査は随時実施した。なお、１～15区については、調査地全域を10m単位で区画する基準(Ｙ０～130m、Ｘ０～40m)を任意に設定した。地区の呼称については、東西方向はアルファベット(西からＡ～Ｍ)、南北方向は算用数字(１～４)で示し、１Ａ～４Ｍ地区とした。

調査の結果、縄文時代晩期、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代中期、中世、近世に比定される遺構・遺物を検出した。出土した遺物は縄文時代晩期から近世の至る土器類、土製品、石器類で総数はコンテナ６箱におよぶ。

２)１～15区の調査

恩智遺跡の中心地と考えられる「天王の杜」の北側および東側の公道上で実施した調査区である。１～12区は、「天王の杜」北側の道路部分で実施した調査区で、西側に向かって傾斜しており、標



第２図　調査区設定図（Ｓ＝1/2500）

高は東端の12区でT. P. ＋20.35m、西端の１区でT. P. ＋16.10mを測る。13～15区は、「天王の杜」東側の道路部分で実施した調査区で、標高は北端の13区でT.P. ＋19.30m、南端の15区でT. P. ＋19.15mを測る。調査の結果、弥生時代中期の土坑７基（ＳＫ１～ＳＫ７）、溝１条（ＳＤ１）、古墳時代前期の河川１条（ＮＲ１）、中世の落ち込み１基（ＳＯ１）を検出した。

３）１～15区の基本層序

東西方向に設定した１～12区は、東西端の標高差が４m以上におよぶ道路部分にあたる。既往の道路整備や水道・ガス管敷設における掘削・削平の他、５～７区で見られた中世時期の落ち込み（ＳＯ１）による改変部分等があり、この部分の調査区では北壁と南壁の層位が著しく違うケースが認められた。南北方向に設定した13～15区においては、13～14区の中央部付近まで自然河川（ＮＲ１）の堆積層が認められた。ここでは、12層（０－１層～Ⅵ層）を抽出して基本層序とした。

０－１層：アスファルト。層厚0.15m前後。

０－２層：砕石。層厚0.15～0.3m。

０－３層：7.5Y8/1灰白色細粒砂。客土。層厚0.05～0.3m。１～３・10区で検出。

Ⅰ層：5Y6/1灰色～10YR6/2灰黄褐色砂質シルト～細礫混砂質シルト。層厚0.1～0.5m。３・４・８・13～15区で検出。他は削平を受けている。鎌倉時代の遺物を含む。

Ⅱ層：弥生時代中期を中心とする遺物包含層で、Ⅱ－１～Ⅱ－３層の３層に区別される。道路整備等による削平および改変によりⅡ－１層を欠く部分が認められた他、５～７区の北壁では、ＳＯ１による削平が顕著であったが、南壁の観察では約0.8mにおよぶⅡ層の存在が確認でき、「天王の杜」の北東部を中心に１m前後の層厚を持つ包含層の広がりが確認できた。

Ⅱ－１層：10YR6/3にぶい黄橙色～10YR4/1.7/1黒色砂質シルト～細礫多混砂質シルト。層厚0.1～0.55m。１・３・８・13～15区で検出。３・15区では上面が遺構構築面。

Ⅱ－２層：10YR4/1褐灰色～10YR2/1黒色砂質シルト～細礫多混砂質シルト。層厚0.25～0.6m。８・９・13・15区で検出。

Ⅱ－３層：N4/0灰色～10YR2/1黒色粗粒砂混砂質シルト～細礫混砂質シルト。層厚0.2～0.45m。８・９・13・14区で検出。

Ⅲ層：10YR5/3にぶい黄褐色～10YR3/1黒褐色砂質シルト～粗粒砂混砂質シルト。層厚0.3～0.55m。１～４区で検出。弥生時代中期の遺構構築面。１～４区・14・15区で検出。

Ⅳ層：2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂～中粒砂混砂質シルト。層厚0.15～0.5m。１～６区で検出。

Ⅴ層：2.5GY7/1明オリーブ灰色～10YR7/1灰白色極細粒砂～砂質シルト。層厚0.3m以上。縄文時代晩期の遺物を少量含む。１～10区で検出。

Ⅵ層：5Y4/1灰色～2.5Y6/3オリーブ黄色砂質シルト～中礫。層厚0.5～1.0m。扇状地地形を流れる河川に特有な網目状流路を成因とする亜礫ないしは角礫を含む淘汰不良の堆積層である。２・３・７・13・14・15区で検出。層位からみて弥生時代中期以前の堆積層である。

４）１～15区の検出遺構・出土遺物

調査の結果、弥生時代中期の土坑７基（ＳＫ１～ＳＫ７）、溝１条（ＳＤ１）、古墳時代前期の河川１条（ＮＲ１）、中世の落ち込み１基（ＳＯ１）を検出した。

弥生時代中期の遺構は、Ⅱ－１層ないしはⅢ層上面で検出している。ただ７区で検出したＳＫ６、ＳＰ３～ＳＰ８については、上部が中世のＳＯ１による0.8～1.0mにおよぶ削平を受けている関係から、比較的深く掘られた遺構の残存部分として理解される。古墳時代前期の遺構としては、９～14区で検出した河川１条（ＮＲ１）がある。中世時期の遺構としては、５～８区で検出した落ち込み１基（ＳＯ１）がある。以下、遺物が出土した遺構を中心に記述する。

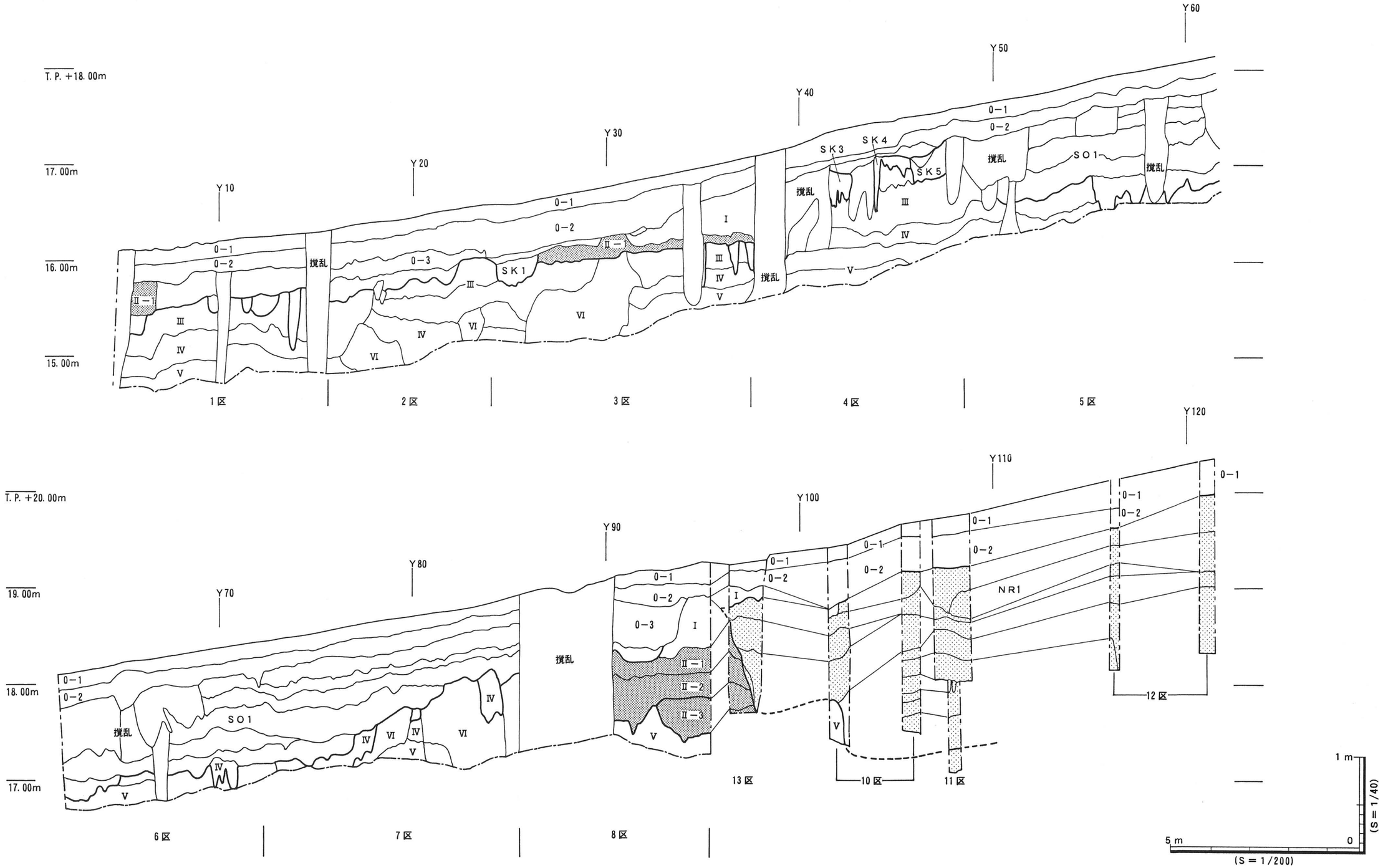
土坑（ＳＫ）

ＳＫ２

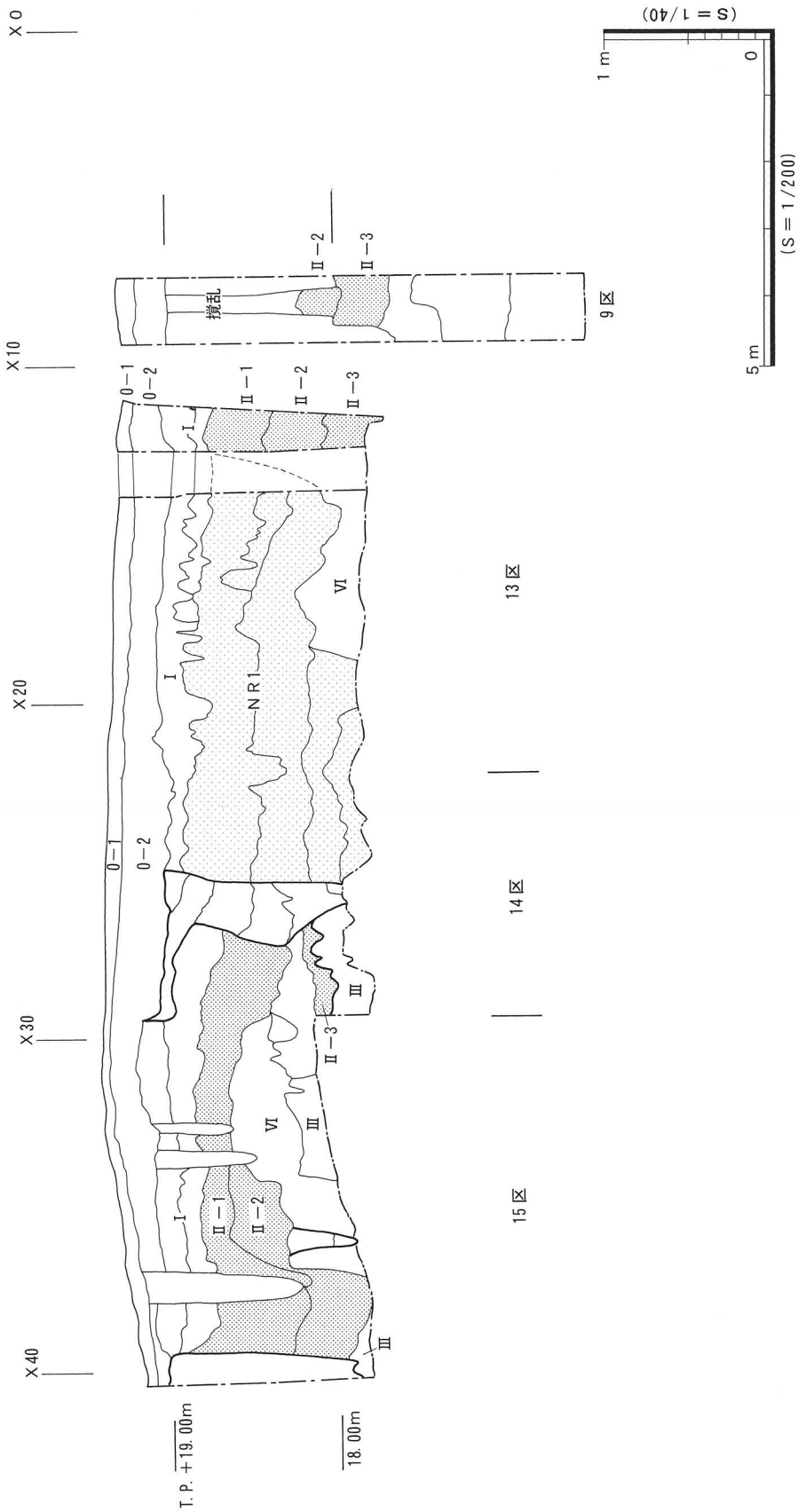
３区の２Ｃ地区で検出した。Ⅱ－１層上面を構築面としている。南北両端は調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分で東西幅1.9m、南北幅1.0m、深さ0.25mを測る。埋土は２層で、上層がN3/0暗灰色粗粒砂混砂質シルト、下層が5Y8/4淡黄色砂質シルトである。遺物は弥生時代中期後半を中心とする弥生土器片の他、サヌカイト・砂岩等の石材が少量出土している。弥生土器５点（１～５）を図化した。１は広口壷の口縁部片である。口縁端面に簾状文と刺突列点文が施文されている。２は口縁端部を外側に折り返す台付無頸鉢の口縁部片である。口縁端面に櫛描直線文、体部外面に簾状文の施文後、三本を一単位とするヘラミガキが施文されている。３・４は甕の口縁部片である。体部外面の調整は３が縦位のヘラミガキ、４がタテハケを施す。５は甕の底部である。５点共に生駒西麓産である。遺構の帰属時期は弥生時代中期後半（河内Ⅳ－３様式）に比定される。

ＳＫ３

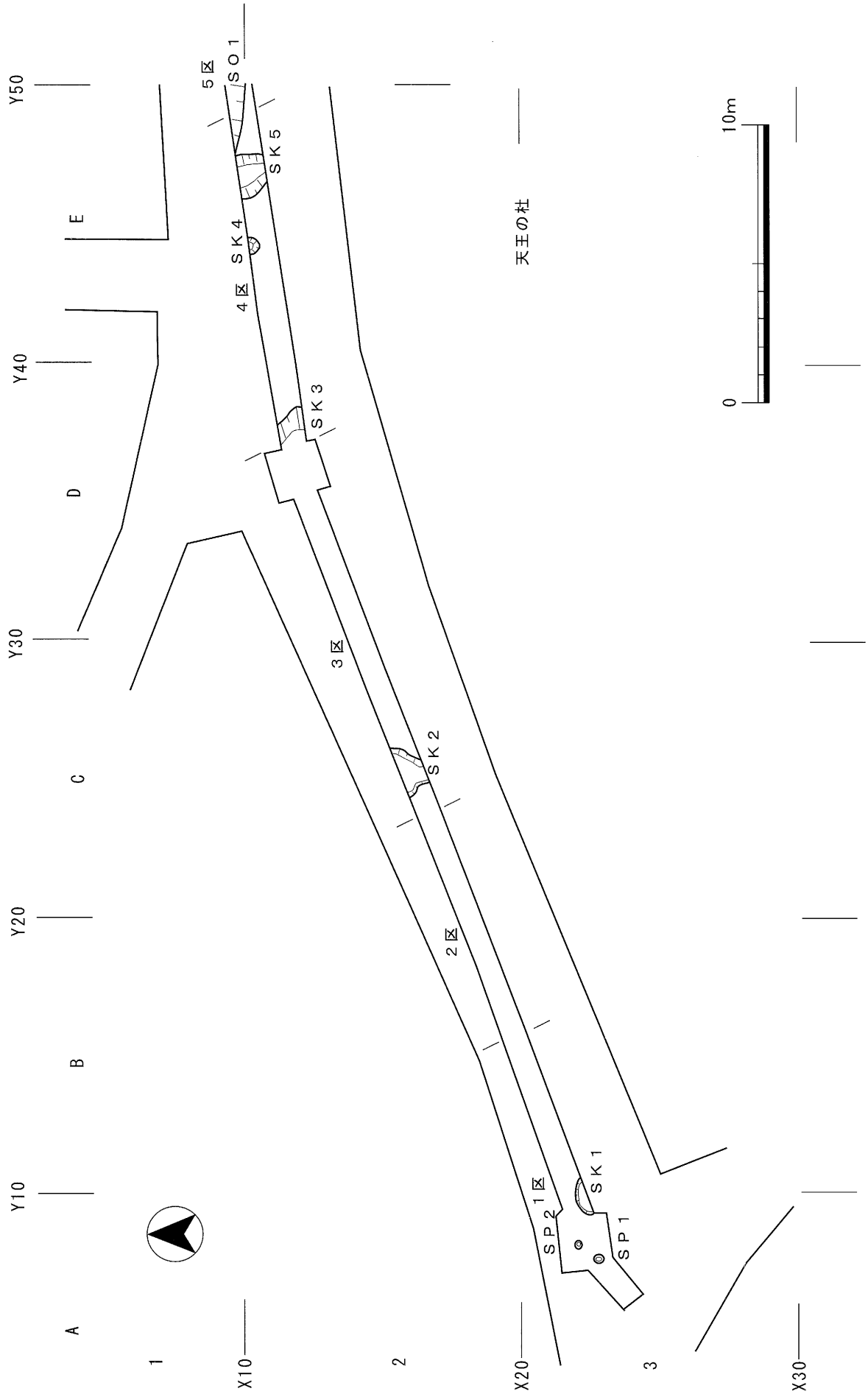
４区の２Ｄ地区で検出した。Ⅲ層上面を構築面としている。西部が撹乱、南北方向は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.3m、南北幅1.0m、深さ0.4mを測る。埋土は砂質シルトを主体とする３層から成る。遺物は弥生土器片およびサヌカイト片が少量出土している。４点（６～９）を図



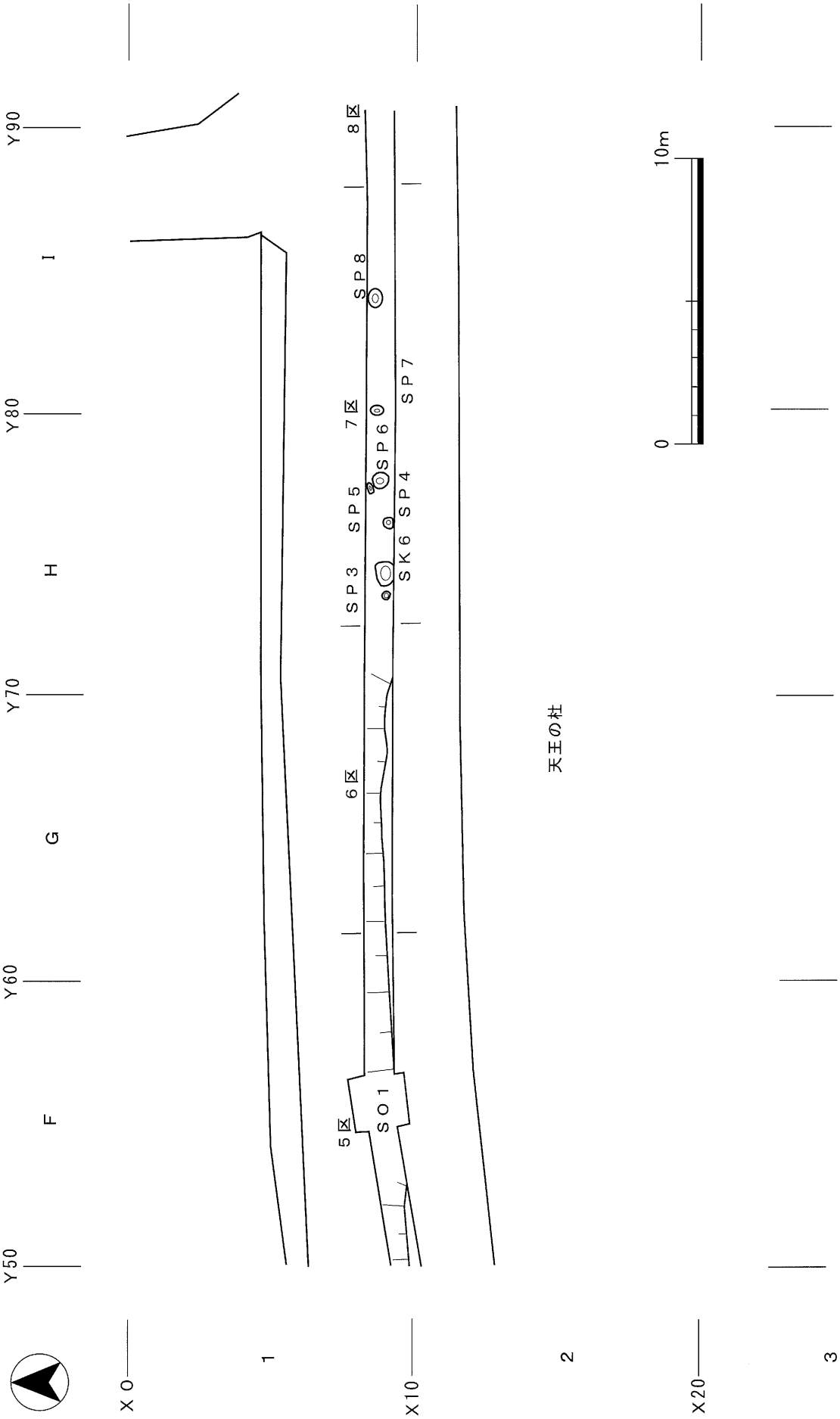
第3図　1～8区、10～13区断面図



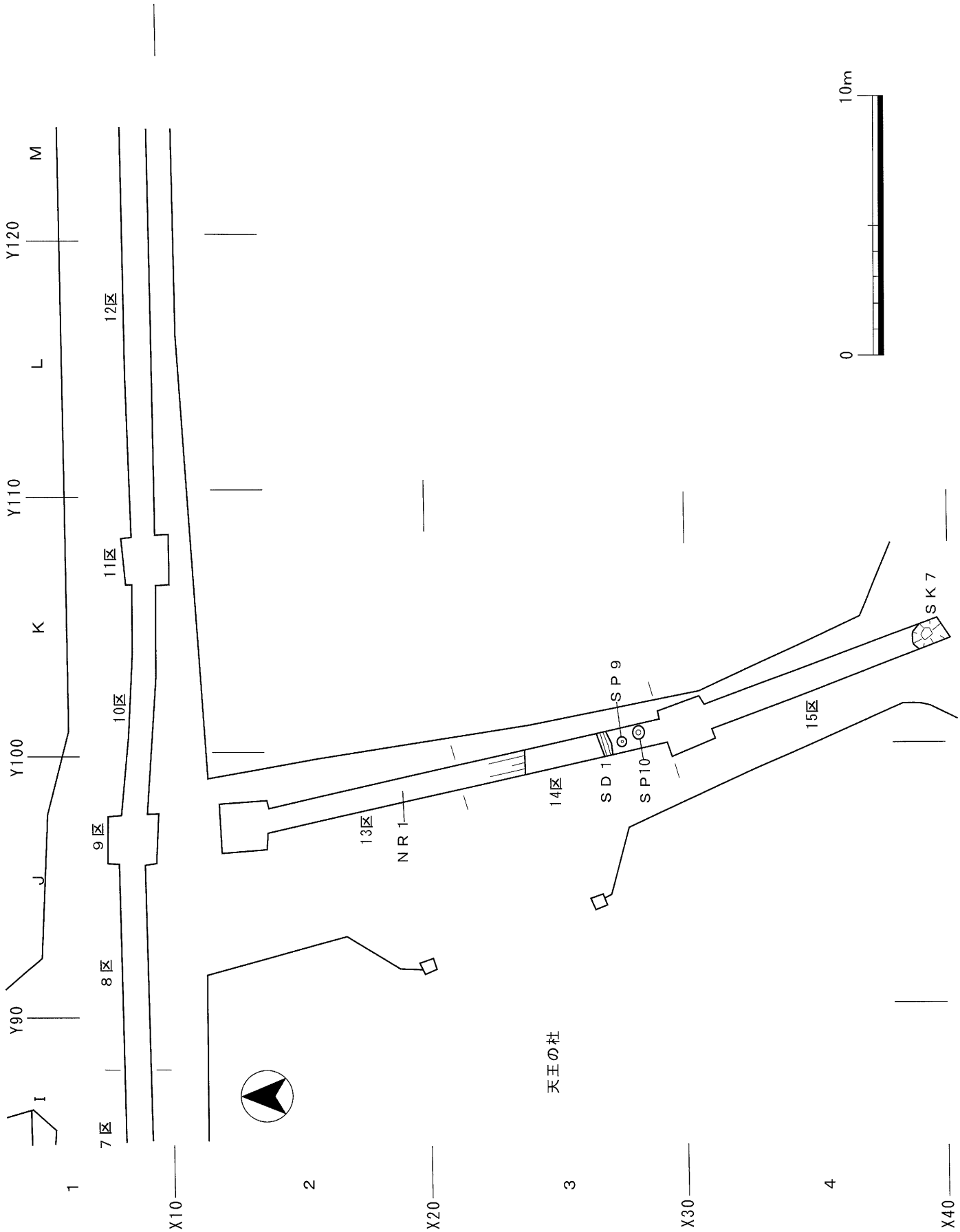
第４図　13～15区断面図



第5図　1～4区平面図(S＝1/200)



第６図　５～８区平面図（Ｓ＝1/200）



第７図　８～15平面図（Ｓ＝1/200）

化した。6は垂下口縁を持つ大形甕の口縁部片である。7は大形鉢の口縁部である。口縁端面に簾状文と刺突列点文、体部に簾状文が施文されている。8・9は底部で8が壷、9が甕である。4点共に生駒西麓産である。遺構の帰属時期は弥生時代中期後半（河内Ⅳ－3様式）に比定される。

ＳＫ5

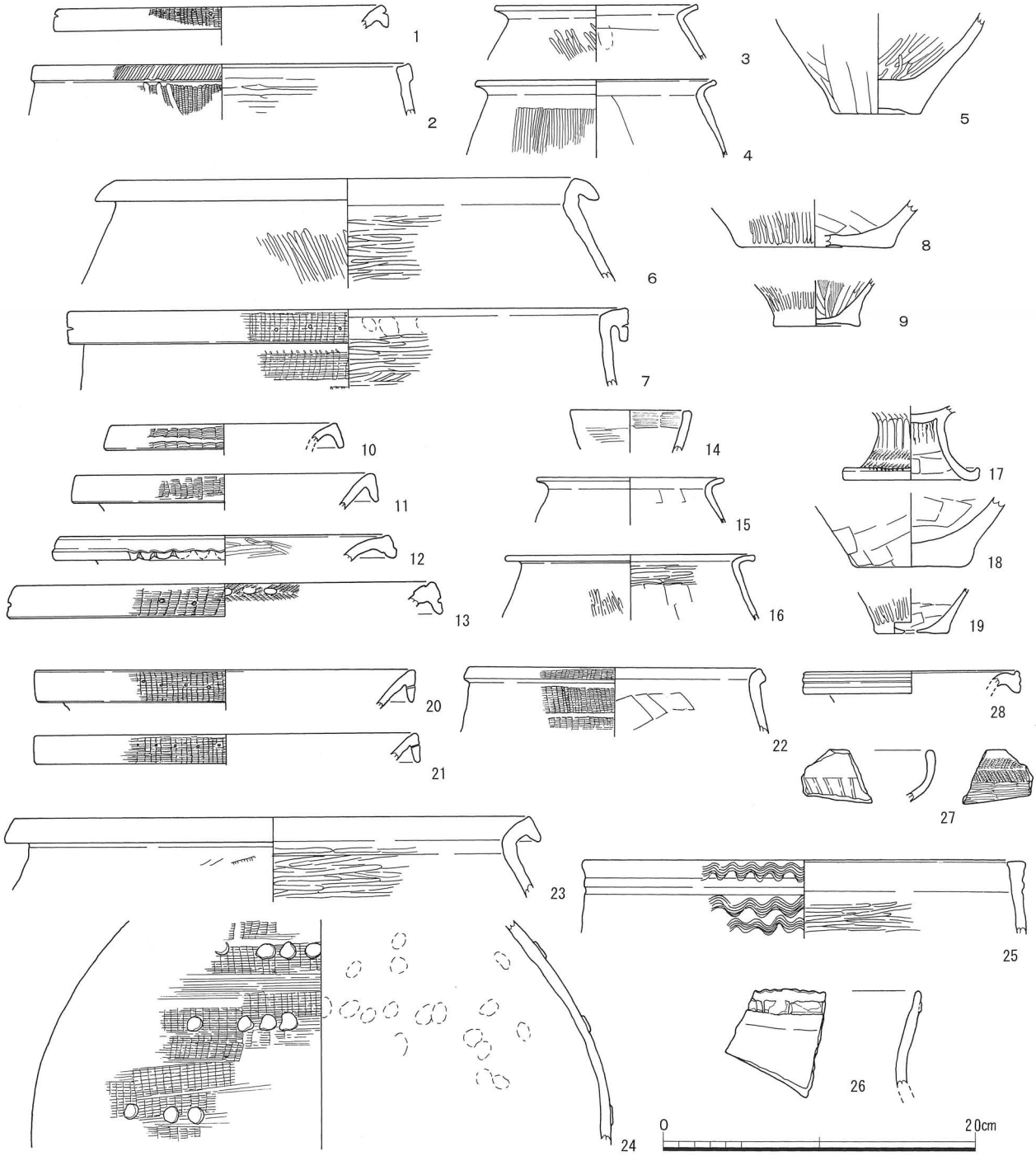
4区東部の2Ｅ地区で検出した。Ⅲ層上面を構築面としている。南北両端が調査区外に至るもので、検出部分で東西幅1.5m、南北幅1.0m、深さ0.55mを測る。埋土は10YR1.7/1黒色細礫混砂質シルトである。遺物は弥生土器の他、石庖丁・石剣等の石器類が少量出土しているが、土器類については細片化したものが大半を占めている。弥生土器10点（10～19）、石器4点（29～32）を図化した。壷類は5点（10～14）である。10～13は広口壷の口縁部片である。口縁端面に簾状文を持つ10・11、簾状文と刺突列点文の他、口縁部内面上位に綾杉文と円形浮文を持つ13がある。12は口縁端面下部に刻目が施されている。14は短頸壷の口縁部片である。頸部外面に櫛描直線文が施文されている。5点共に生駒西麓産。15・16は甕の口縁部片である。共に生駒西麓産。17は台付鉢の脚部である。脚部外面に櫛描刺突文が二段に施文されている。18は壷底部。19は甕で底部に穿孔を穿つ。孔径は8mmで焼成前の穿孔である。29・30は大形のサヌカイト製の打製尖頭器である。29は横長剥片を素材としている。部分的に調整剥離が加えられているが、先端部分に自然礫面を残すため未成品と推定される。全長9.8cm、最大幅3.7cmを測る。30は先端および基部を欠く。両側辺に調整剥離が行われている。31はサヌカイト製の石錘である。棒状を呈するもので、錐部の先端部分が潰れている。残存長5.9cm、最大幅1.2cmを測る。32はやや小振りの石庖丁で完形品である。長さ11.6cm、幅3.4cmを測る。内彎刃形態で刃部は片刃である。紐孔は中央部背寄りに位置し、2孔共に両面より直接穿孔されている。Ａ面の体部に敲打痕が認められる。石材は緑色片岩。遺構の帰属時期は弥生時代中期後半（河内Ⅳ－3様式）に比定される。

ＳＫ6

7区西部の1Ｈ地区で検出した。南端は調査区外に至る他、上部はＳＯ1により削平を受けている。検出部分で東西幅0.8m、南北幅0.6m、深さ0.25mを測る。埋土は10YR1.7/1黒色極粗粒砂混砂質シルトである。遺物は弥生土器の他、サヌカイト片が少量出土しているが、土器類については細片化したものが大半を占めている。3点（20～22）を図化した。20・21は広口壷の口縁部片である。共に、口縁端面には簾状文と刺突列点文が施文されている。22は無頸壷ないしは台付鉢と推定される。外面には簾状文が施文されている。3点共に生駒西麓産。遺構の帰属時期は弥生時代中期後半（河内Ⅳ－3様式）に比定される。

ＳＫ7

15区南端の4Ｋ地区で検出した。Ⅱ－1層上面を構築面としている。東西端および南端は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.0m、南北幅1.3m、深さ1.1mを測る。埋土は2層で上層が10YR4/2灰黄褐色砂質シルトに10YR7/6明黄褐色砂質シルトのブロック、下層が10YR3/1黒褐色砂質シルトに10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトのブロックである。遺物は下層から縄文時代晩期・弥生時代中期後半に比定される縄文土器、弥生土器、サヌカイト剥片等が多数出土したが、土器類は細片化したものが大半を占めた。4点（23～26）を図化した。26は縄文土器である。口唇部に刻目を持ち、口縁部のやや下部に貼り付け凸帯が廻る深鉢片である。縄文時代晩期後葉（滋賀里Ⅳ）。23は大形甕。24は広口壷の体部片である。簾状文と円形浮文で構成される文様帯を持つ。23・24・



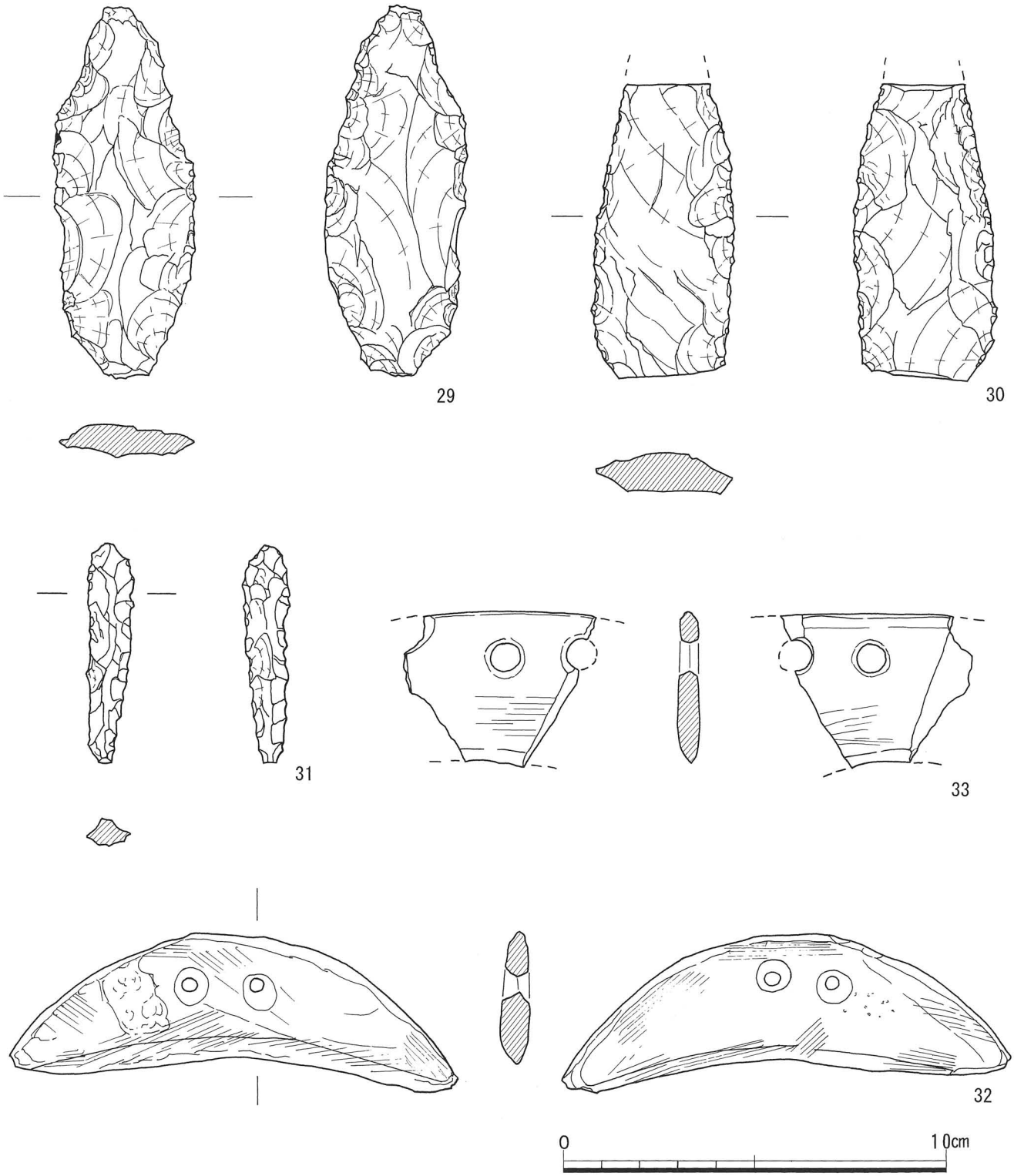
第８図　１～15区　ＳＫ２（１～５）、ＳＫ３（６～９）、ＳＫ５（10～19）、ＳＫ６（20～22）、ＳＫ７（23～26）、ＳＰ６（27）、ＳＰ７（28）出土遺物実測図

26は生駒西麓産。25は大形鉢の口縁部片である。外面に波状文が施文されている。色調は明橙色。非生駒西麓産である。26の混入品を除けば、弥生時代中期後半（河内Ⅳ－３様式）の遺物が中心である。

溝（ＳＤ）

ＳＤ１

14区南部の３Ｊ・Ｋ地区で検出した。東西方向に伸びるもので、検出部分で長さ1.0m、幅0.4m、深さ0.09mを測る。埋土はN4/0灰色極細粒砂混砂質シルト。弥生土器片および尖頭器、サヌカイ



第９図　１～15区　ＳＫ５(29～32)、ＳＰ７(33)出土石製品実測図

ト片が少量出土している。サヌカイト製の大形打製尖頭器１点(34)を図化した。先端部分を欠く。基部に自然礫面が残る。両側辺に調整剥離が加えられている。

小穴（ＳＰ）

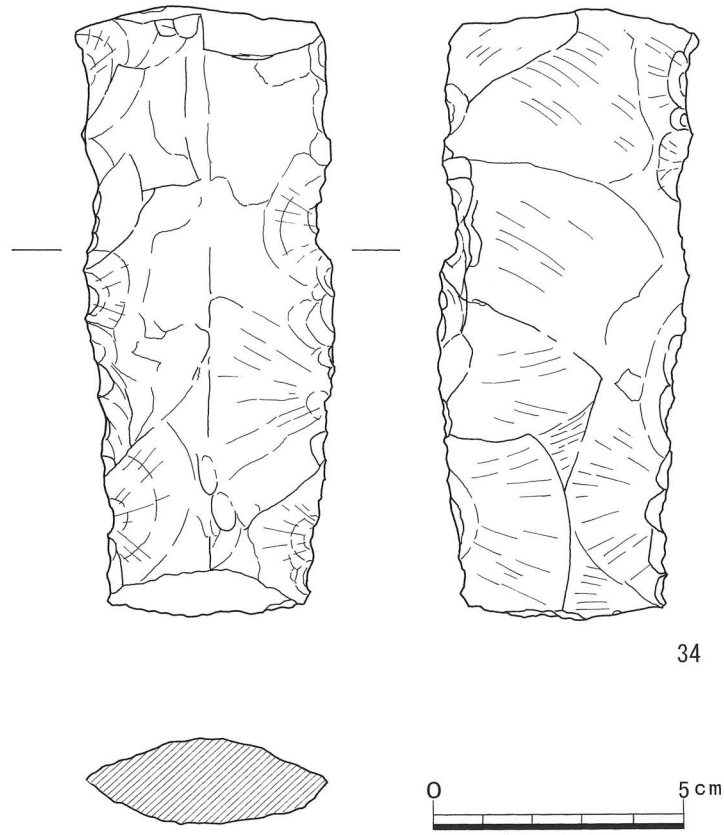
ＳＰ６

７区の１Ｈ地区で検出した。上部はＳＯ１により削平を受けている。円形を呈するもので、東

西径0.5m、南北径0.5m、深さ0.23mを測る。埋土は10YR1.7/1黒色極粗粒砂混砂質シルトである。弥生土器およびサヌカイト片が極少量出土している。高杯１点(27)を図化した。口縁部外面に櫛描列点文が施文されている。遺構の帰属時期は弥生時代中期後半(河内Ⅳ－３様式)に比定される。

ＳＰ７

ＳＰ６の東約2.0m地点で検出した。ＳＰ６と同様、上部はＳＯ１により削平を受けている。円形を呈するもので、東西径0.35m、南北径0.4m、深さ0.24mを測る。埋土は10YR1.7/1黒色極粗粒砂混砂質シルトである。弥生土器および石庖丁・サヌカイト片が少量出土している。２点(28・33)を図化した。28は小さく垂下する口縁部を有する広口壷の口縁部片である。生駒西麓産。33は石庖丁の小片である。刃部は両刃。石材は黒色片岩。

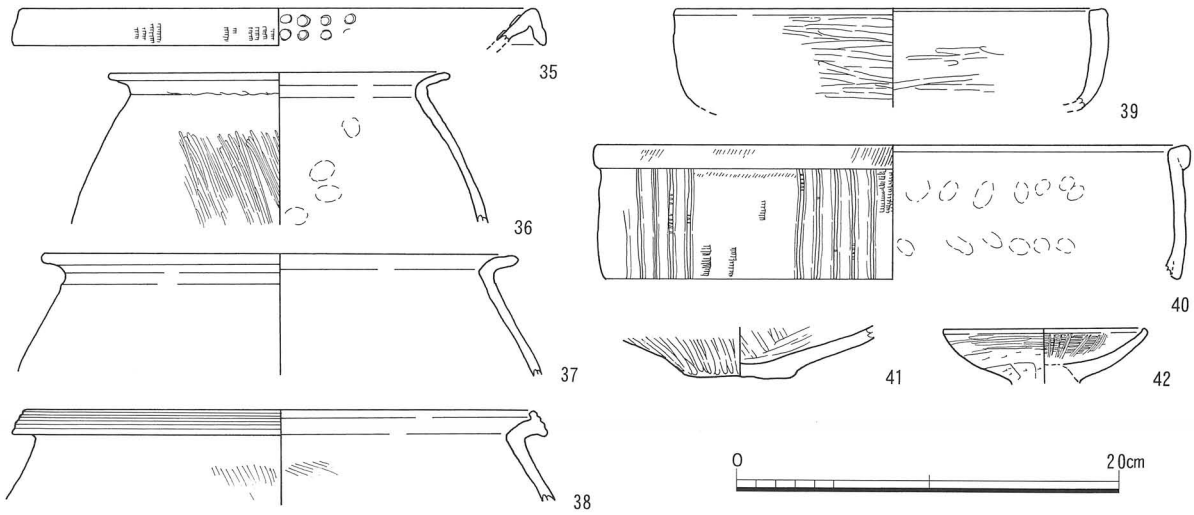


第10図　ＳＤ１出土遺物実測図

自然河川(ＮＲ)

ＮＲ１

９～14区の２・３Ｊ～Ｌ地区で検出した。９区の西端で河川西肩、14区で河川南肩を検出していることから、東部から流下してきた河川が14区付近で北に屈折し９区の西端を肩として北流していたことが推定される。扇状地地形を流下する河川に特有な蛇行河川であるため、幅等の数値は不確定な要素が含まれているが、９～12区の北壁約26mについては河川堆積層が確認できた。深さにつては、確認できたなかでは11区の1.9mが最も深い。埋土は淡黄色～灰黄色の色調で、層相は極細粒砂～中礫である。遺物は弥生時代中期の弥生土器、石器類の他、古墳時代前期の古式土師器が１点出土している。弥生土器７点(35～41)と古式土師器１点(42)を図化した。35は広口壷の口縁部片である。口縁端面に簾状文、内面に円形浮文が施されている。36～38は甕である。口縁部が強く屈曲する36・37と外傾して幅広の端面に３条の凹線文を施す38がある。39は高杯の杯部である。杯部外面には横位のヘラミガキが施されている。40は大形の台付鉢である。杯部外面に５本を１単位とする貼付棒状浮文を持つ。41は壷の底部である。35～41は生駒西麓産。35～41は弥生時代中期後半(河内Ⅳ－４様式)に比定される。42は小形器台の杯部片である。やや浅目の杯部で、内面は横位のヘラミガキの後、放射状ヘラミガキ、外面は上半が横位のヘラミガキ、中位以下には中心部から外方向に施される一次調整のヘラケズリ痕跡が残る。色調は明橙色。古墳時代前期前半(布留式古相)。遺構の帰属時期は、古墳時代前期前半(布留式古相)が考えられる。



第11図　ＮＲ１出土遺物実測図

落ち込み（ＳＯ）

ＳＯ１

５・６区の南端に沿って東西方向に伸びる。検出部分では南肩を約22m検出したが７・８区の北壁堆積層からみて８区のＹ90付近まで伸びていたことが推定される。南肩部分より北側に約0.9m程度が急角度を持ち下がっており、弥生時代中期の包含層であるⅡ層を削り、下部はⅤ層に達している。埋土は水平堆積で５層に分層が可能である。灰黄褐色系の色調で層相は細粒砂～中礫混砂質シルトである。遺物は鎌倉時代の屋瓦等が出土している。なお、東西方向に直線的に伸びる肩を境として北側に急激に下ることや、この部分から鎌倉時代の屋瓦が出土していることから、現在の「天王の杜」の北東部の範囲が北側に約３m程度広がっていたことを示すものと考えられる。

５）16～30区の調査

16～30区は、「天王の杜」の南東部に位置する南北方向に伸びる道路部分で実施した人孔部分（一辺0.75m）を対象とした調査である。調査地全体の地形は南側に向かって傾斜を持っており、北端の16区でT.P.＋21.20m、南端の30区でT.P.＋18.0mを測る。26区で弥生時代後期後半の溝１条（ＳＤ２）を断面で検出している。

６）16～30区の基本層序

人孔部分の調査のため調査対象地が幅0.6～1.5mに限定されており、さらに既設の管敷設時の撹乱が見られたことから、残存状況が比較的良好な面での地層観察を実施した。普遍的に存在した７層（０～Ⅴ層）を摘出して基本層序とした。

０層：客土。層厚0.1～0.9m。

Ⅰ層：10YR4/1褐灰色砂質シルト。層厚0.28～0.5m。17～19区検出。

Ⅱ層：10YR5/1褐灰色～2.5Y6/3にぶい黄色。層相は細砂質シルト～細礫混砂質シルト。層厚0.2～0.48m。16～20区で検出。

Ⅲ層：10YR4/1褐灰色～10YR4/2灰黄褐色。層相は砂質シルト～細礫混砂質シルト。層厚0.15～0.68m。16～21区、28・29区で検出。

第12図　16～30区断面図（S＝1/40）

Ⅳ－１層：10YR6/1褐灰色～10YR6/2灰黄褐色。層相は砂質シルト～中礫混砂質シルト。層厚0.18～0.55m。18・26区を除く各調査区で検出。奈良時代以降の遺物を極少量含む。

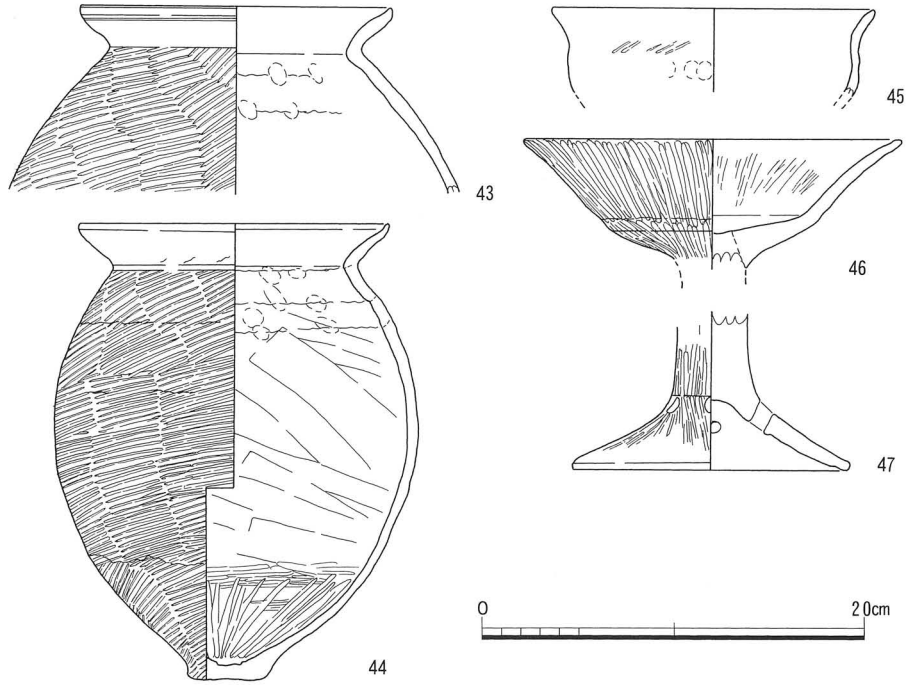
Ⅳ－２層：7.5YR6/1褐灰色～10YR4/2灰黄褐色。層相は砂質シルト～中礫混砂質シルト。層厚0.25～0.45m。25・27・28・30区で検出。古墳時代後期の遺物を少量含む。

Ⅴ層：10YR4/2灰黄褐色～2.5Y7/4浅黄色。層相は砂質シルト～巨礫混砂質シルト。層厚1.0m以上。16・18区を除く各調査区で検出。25区では巨礫を中心とする亜礫ないしは角礫を含む淘汰不良の堆積層が認められた。

７）16～30区の検出遺構・出土遺物

ＳＤ２

26区の東壁で検出したもので、東西方向に流下していたと推定されるが限定された部分での検出であるため詳細は不明である。検出部分で深さ1.05mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色砂質シルトである。遺物は弥生時代後期後半の土器類が出土している。５点（43～47）を図化した。43・44はＶ様式甕である。44はほぼ完形品である。体部は丈高で、三分割成形によるものである。口径16.3cm、器高24.3cm、底部径4.5cm、体部最大径19.0cm を測る。口縁部の形態は、共に小さく摘み上げられており小端面を形成している。体部外面のタタキ調整は43が太目（３本 /cm）、44がやや細目（４本 /cm）で四分割に行われている。44の底部は突出平底で裏面は僅かに窪む。43・44共に色調は赤褐色。生駒西麓産である。45は小形鉢の小片。46・47は有稜高杯である。46の杯部は緩やかに外反して伸びるもので、杯部内外面ともに縦位のヘラミガキが施されている。有稜高杯の口径・杯部の稜径・口縁長の法量から導かれた指数においては、口稜比53.0、口縁比25.3の数値を示す。有稜高杯の法量指数変化に基づいて、中・南河内地域の弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の有稜高杯の型式細分（原田2003）が試みられている。その分類による有稜高杯D_2にあたる。47は脚部である。スカシ孔は４方に穿たれている。中実で直線的に伸びる柱状部から屈折して開く裾部に至るもので、杯部を欠くがその特徴から、46と同様「北鳥池遺跡下層型有稜高杯」に代表される有稜高杯D_2に分類される。遺構の帰属時期は弥生時代後期後半（後期後半新相－様相３）に比定される。

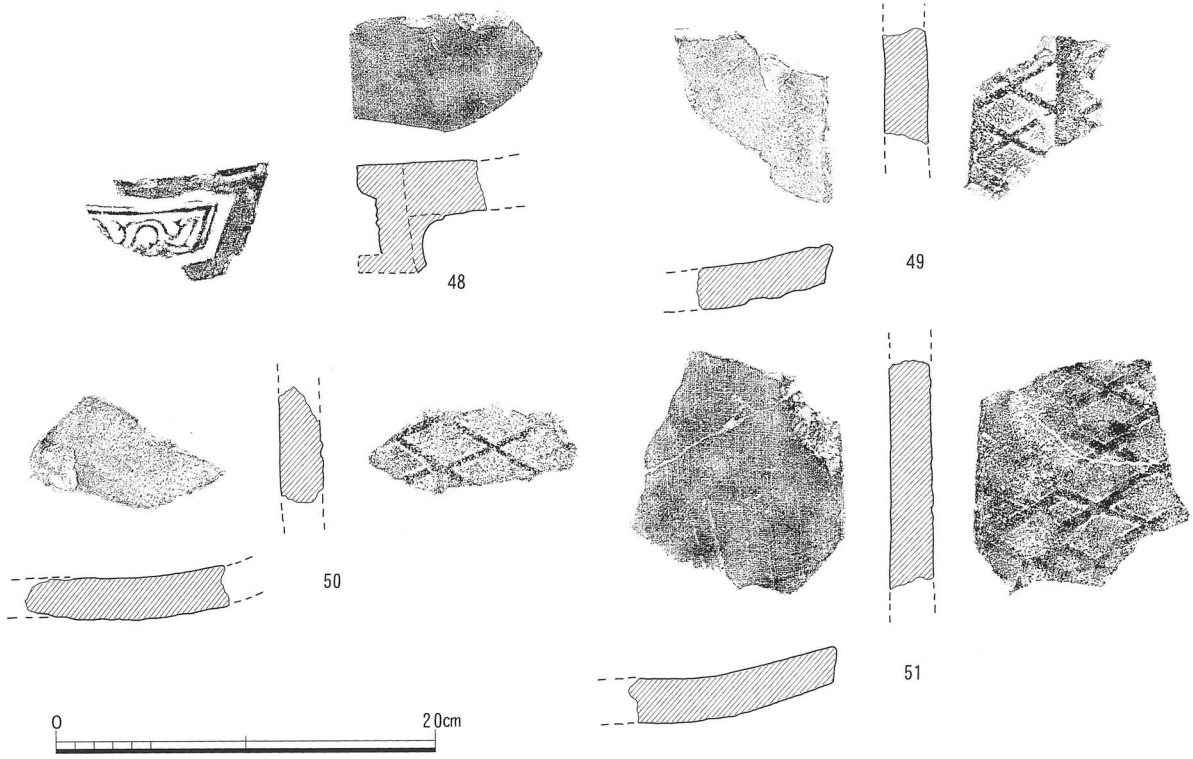


第13図　26区　ＳＤ２出土遺物実測図

8）遺構に伴わない出土遺物

・Ⅰ層出土遺物

屋瓦４点(48～51)を図化した。48は唐草文軒平瓦で、瓦当面の右端が残存する。界線間に繊細で隆起が小さい唐草文を配する。外縁は直立縁で高い。顎は段顎で深い。上面に細かい布目が残る。色調は淡灰色。焼成は良好。鎌倉時代に比定される。４区出土。49～51は平瓦片である。３点ともに凸面に隆線の斜格子叩きを縦位に施している。49・51の凸面には離れ砂が認められる。凹面には細かい布目痕が遺存する51とナデを施す49・50がある。３点ともに色調は淡橙色を呈する。50が３区、51が４区、49が５区出土。鎌倉時代に比定される。八尾市域においては、穴太廃寺(千眼寺)、小阪合遺跡から同様の平瓦が出土している。出土地点に隣接する「天王の杜」は、現在の恩智神社に移行する南北朝期以前の恩智神社の旧地にあたるため、これらの屋瓦は恩智神社ならびに恩智神社に付随した寺院建物に伴うものであった蓋然性が高い。

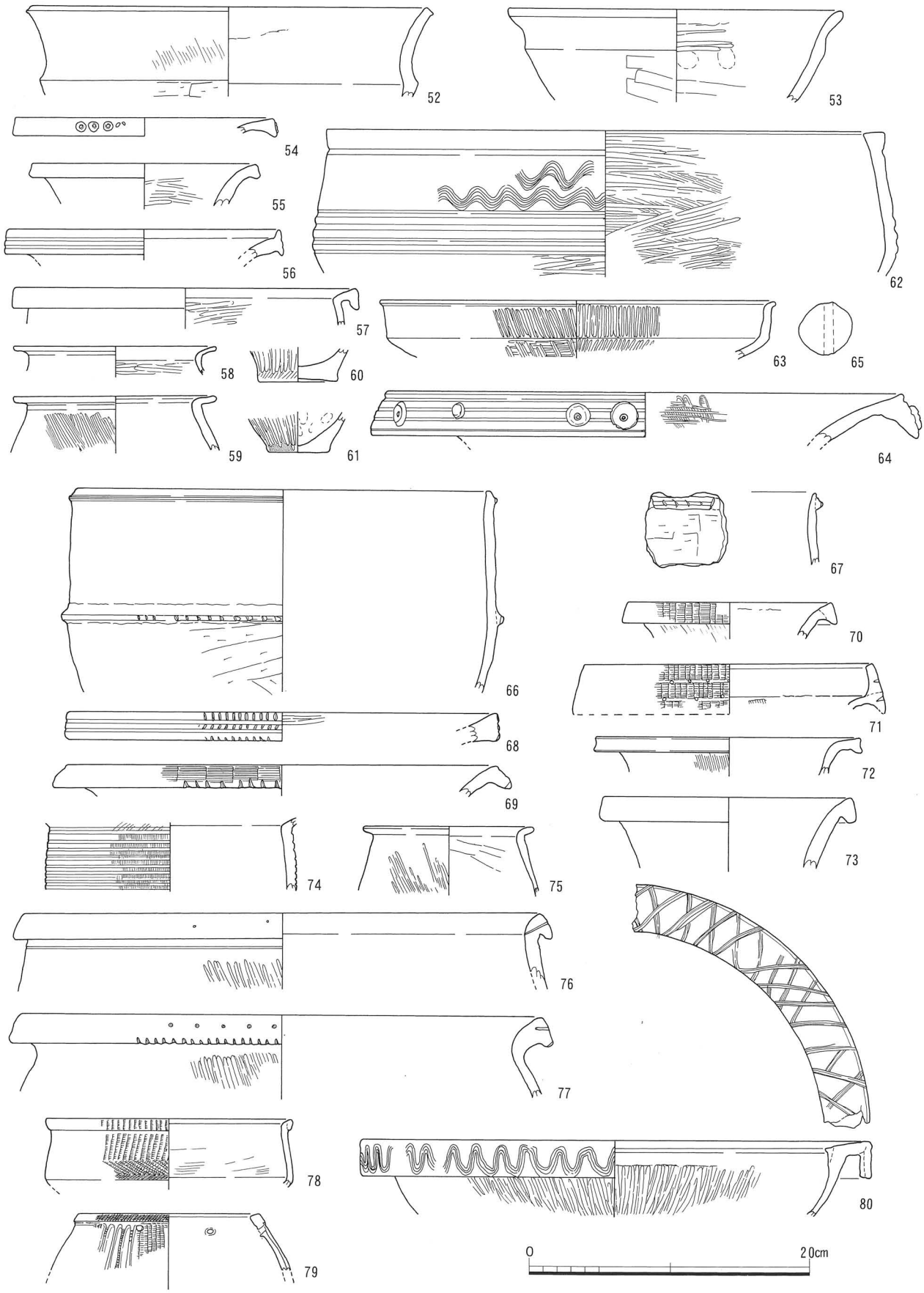


第14図　Ⅰ層出土遺物実測図

・Ⅱ層出土遺物

Ⅱ層からは、縄文時代晩期・弥生時代前期・中期後半・後期前半に比定される縄文土器、弥生土器、石器類がコンテナ３箱程度出土している。時期的には弥生時代中期後半のものが大半で、縄文時代晩期、弥生時代前期・後期のものは微量である。出土遺物のうち土器類については大半が細片化しており、量に比して図化可能なものは少ない。29点(52～80)を図化した。

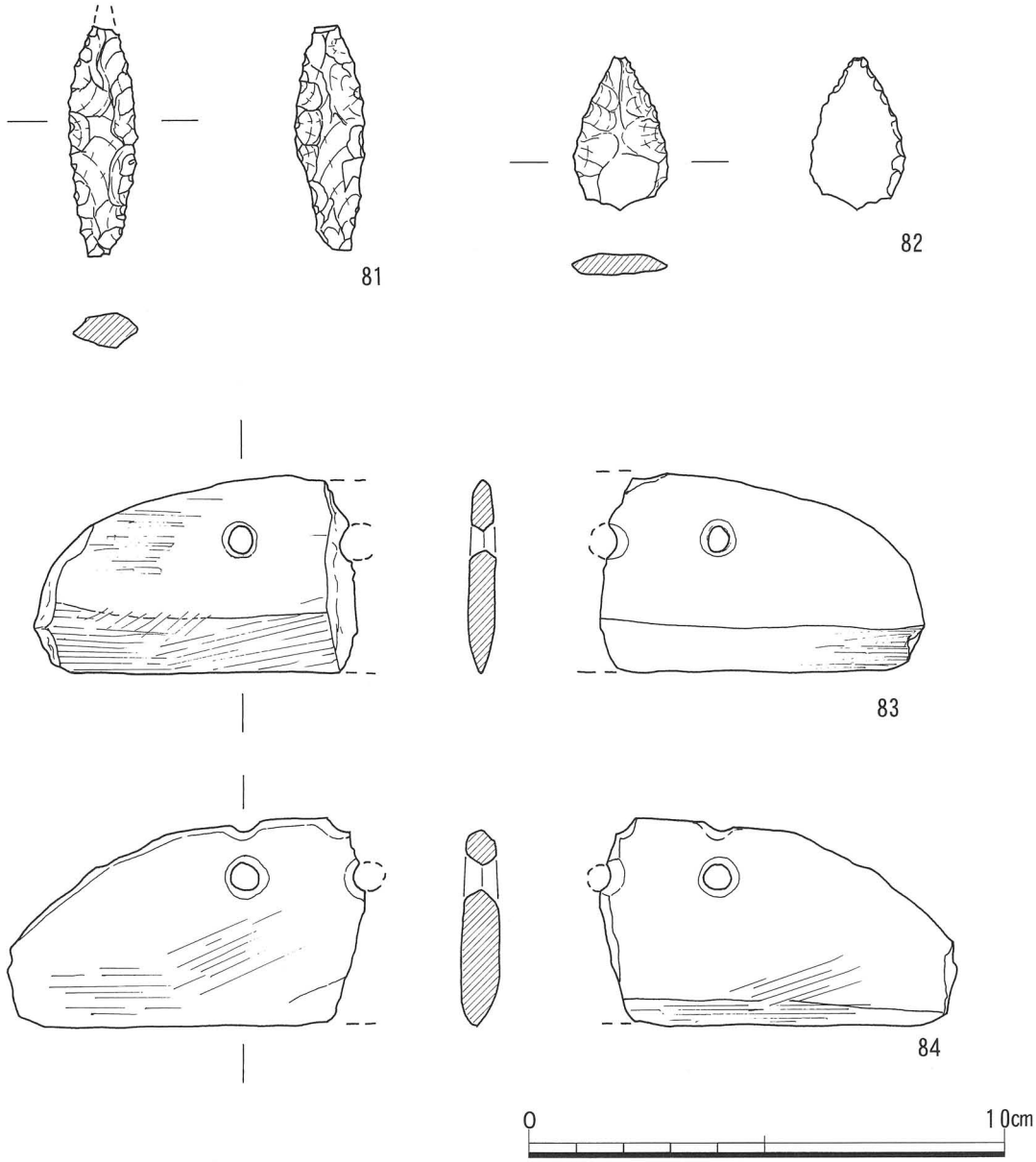
52～65の14点が「天王の杜」北側道路部分で行った３・６～８区からの出土遺物で、比較的残存が良好であった６・７区からの出土遺物が中心である。52・53は縄文土器片である。共に浅鉢で、縄文時代晩期(滋賀里３ｂ式)に比定される。54～56は広口壷の口縁部片である。54は口縁端面に４個を一単位とする竹管押圧円形浮文が貼り付けられている。非生駒西麓産。弥生時代後期。55は外傾する口縁端面を形成している。56は上下に拡張する幅広の端面に２条の凹面が廻る。弥生



第15図　Ⅰ層　3区(53)、6区(52・62)、7区(54～61、63・65)、8区(64)、13区(67)、14区(66・68・72・73・75～77・80)、15区(69～71、74・78・79)　出土遺物実測図

時代中期後半。57～61は甕である。57～59が甕口縁部片で、垂下口縁を持つ57と口縁部を折り返す58・59がある。60・61は甕底部である。57～61は弥生時代中期後半。62は大形鉢である。体部外面には上１条と下３条の凹線間に波状文が施文されている。弥生時代中期後半。63は高杯の杯部片である。弥生時代後期前半。64は大形器台と推定される。復元口径37cm を測る。口縁端部は大きく垂下し、外傾する幅広の端面を形成するもので、４条の沈線と２個一対となる竹管押圧円形浮文が貼り付けられている。65は手づくねによる土製玉である。扁球形でほぼ中央部に穿孔が穿たれている。

66～80の15点は「天王の杜」東側道路部分で行った13～15区の出土遺物である。66・67は縄文土器の深鉢である。68～70は広口壷の小片である。68は口縁端面に２条の沈線文間にヘラ描直線文と下端に刻み目を施す。69は口縁端面に簾状文と下半に刻み目を施す。70は口縁端面に簾状文を施す。71は付加状の口縁部を持つ大形品である。口縁端面に簾状文と刺突列点文が施文されている。



第16図　Ⅱ層　６区(81)、14区(84)、15区(82・83)石製品出土遺物実測図

72・73は口縁端部が垂下する無文の壷である。68～70は生駒西麓産。68が弥生時代前期前半、他は弥生時代中期後半。74～77は甕である。74は如意形口縁を持つ。体部上半に多条沈線を施す。前期後半から中期前半。75は屈折する口縁部を有する。76・77は共に口縁端部が大きく垂下する大形品。77には刺突列点文と下端に刻み目。75～77は弥生時代中期後半。78・79は無頸壷の小片である。78は簾状文と綾杉文。79には簾状文と上端に微細な刻み目を持つ４本を一単位とする棒状浮文が貼り付けられている。体部上半に２個一対の紐孔が穿たれている。弥生時代中期後半。80は水平口縁を持つ高杯で、端部は垂下し幅広の端面を形成している。口縁部上面にヘラ描斜格子文、端面に櫛描波状文が施文されている。弥生時代中期後半。81・82は石鏃。81は尖基無茎式。82は円基無茎式である。共にサヌカイト製。83・84は石庖丁。直線刃半月形態のもので、共に1/2が残存。刃は83が両刃、84が片刃である。紐孔は両面より穿孔しており、84には背部に２箇所の穿孔跡がある。石材は共に緑色片岩。

3. まとめ

調査を実施した恩智中町３丁目に位置する「天王の杜」一帯は、恩智遺跡の発見の契機となった地点で、恩智遺跡の中核を成す地点として認識されている。平成13年に「天王の杜」の南部および西部の道路部分で、当調査研究会が実施した公共下水道に伴う第11次調査においては、縄文時代晩期から弥生時代中期に至る遺構・遺物が検出されており、特に弥生時代中期の遺構面やそれに伴う大量の土器・石器類が出土する調査成果が得られている。

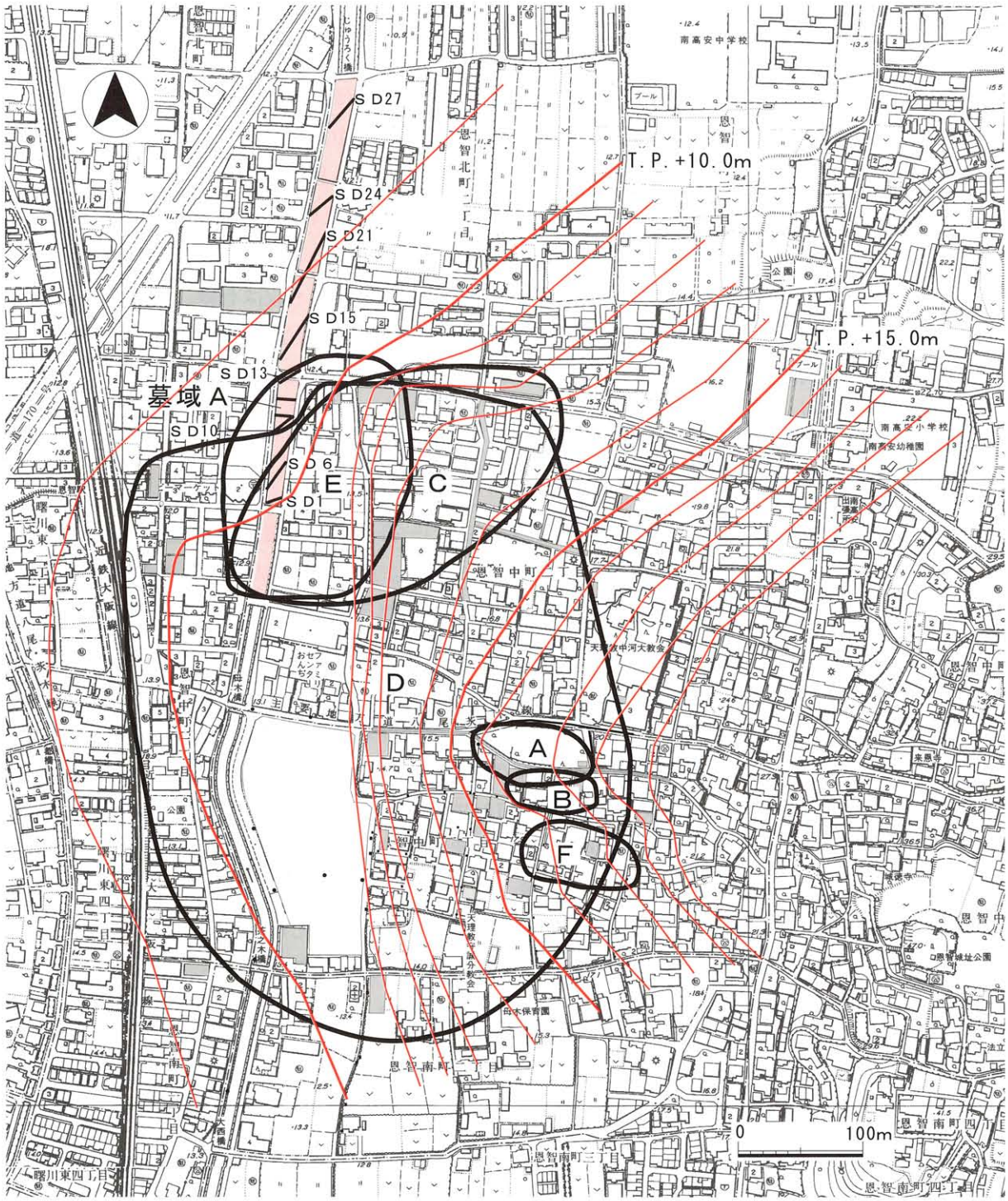
今回実施した第18次調査においても、第11次調査と同様の条件下で調査を実施したが、調査部分に沿って既設の地下埋設物による撹乱が随所で見受けられた。従って、検出した遺構の大半が上部を削平されており、遺構自体の残存状態は良好ではなかった。しかしながら、「天王の杜」の北東部付近（７・８区）では、弥生時代中期を中心とする遺物包含層の層厚が１ｍ前後におよぶ箇所が認められ、既往調査成果を含めて、調査地一帯が恩智遺跡の弥生時代中期における、遺跡の中核地を構成していた地点であったことを可視的に傍証し得る資料となった。

恩智遺跡は、大正６年（1917）の梅原末治・島田貞彦両氏の調査を嚆矢として、府下においても古くから遺跡として認識されてきた遺跡の一つである。しかしながら、遺跡全域が市街地化していることもあり、昭和50年（1975）の恩智川河川改修工事に伴う調査を除けば、個人住宅を対象とした小規模調査が大半を占めている。また遺跡全体の概要についても、米田敏幸氏（米田1997）による恩智遺跡の環濠域の推定を除けば、総合的な論証が行われたものはない。

ここでは、今回の調査成果を含めて、これまでの調査で蓄積された資料を基に、縄文時代晩期～弥生時代後期に至る遺跡内の時期別の推移を考えてみたい。

縄文時代晩期

縄文時代晩期の居住域としては、「天王の杜」の南部付近一帯で実施された、昭和49年調査地・昭和61年調査地・98－278調査・第11次調査で検出されている（居住域Ａ）。居住域の範囲としては、東西110ｍ、南北50ｍ程度が推定される。時期的には、縄文晩期中葉の滋賀里Ⅲ式に始まり、晩期後半の滋賀里Ⅳ式、晩期末の船橋・長原式と連続して集落が営まれている。



第17図　恩智遺跡における縄文時代晩期～弥生時代後期の集落域の変遷図（S＝1 /5000）
〔標高の数値は弥生時代中期段階の生活面を基準としている。〕

弥生時代前期後半～中期前半

弥生時代前期の居住域は２箇所（居住域Ｂ・Ｃ）で確認されている。共に前期新段階に成立し中期前半まで継続する居住域である。居住域Ｂは、前代の縄文時代晩期集落の成立をみたＡ地点の東部にあたる98－278調査を中心とする小範囲に展開している。居住域Ｃは、恩智川河川改修に伴うＮＥ６～９地区、ＮＷ３～６地区で検出したＳＤ06を中心に前期新段階に成立し、中期前半に

おいては、第６次調査（ＯＪ91－６）を含めた、東西約300m、南北約150mに広がる。ただ、居住域Ｂにおいては第Ⅰ様式と第Ⅱ様式の生活面の高低差が0.7mもあることから、出水時における土砂堆積を受けやすい扇状地下位面の不安定な環境下にあったようである。

弥生時代中期後半

恩智遺跡の集落域が最も拡大するのが中期後半（河内第Ⅳ様式）の段階である。居住域の範囲としては、北西部では恩智川河川改修工事に伴う調査で検出された方形周溝墓（墓域Ａ）の南に位置するＳＤ10が居住域と墓域を画する溝と推定される。西側の範囲は昭和59年調査地・98－54調査・98－395調査地付近、南側は63－361調査・96－408調査地付近、東側は本調査地の９地区付近が推定される。これらを包括して、南北方向にやや長い楕円形状の東西約400m、南北約550mの範囲に居住域（居住域Ｄ）が広がっている。さらに北西部では、恩智川河川改修工事に伴う調査で検出された当該期の溝群が、北からＳＤ27、ＳＤ24、ＳＤ21、ＳＤ15、ＳＤ10の５条が検出されており、これらの溝群を含めれば南北方向に約800mの範囲が集落範囲であったと考えられる。なお、居住域を囲繞する多条溝群の存在は、中河内地域の拠点集落の多くで検出されており、そのなかには、環濠集落を形成したものと推定されているものがある。恩智遺跡における多条溝群の性格については、第17図に示したように弥生時代中期後半段階においては、東西で10mに及ぶ高低差があることから、居住域を廻る環濠に成り得る可能性は低いと考えられる。したがって、居住域の西部から北部にかけて存在した多条溝群については、水田を主体とする生産域に関連したものであったと推定される。

弥生時代後期

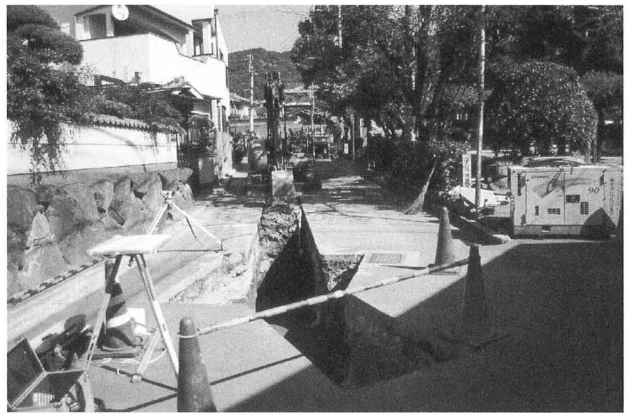
２箇所（居住域Ｅ・Ｆ）で居住域が検出されている。居住域Ｅは、恩智川河川改修工事に伴う調査で検出された、ＳＤ13・ＳＰ３を含む東西約110m、南北約150mに展開するもので、後期後半を中心とするものである。居住域Ｆは、第17次調査（ＯＪ2005－17）および本調査26地区の小範囲に展開するもので、後期末から古墳時代初頭（庄内式期）の居住域である。

以上が、現時点の資料から推定される、恩智遺跡の縄文時代晩期～弥生時代後期に至る集落の居住域の変遷である。今後、遺構・遺物の詳細な検討を行い、遺跡内における各時代の動向を推察する必要があろう。

参考文献

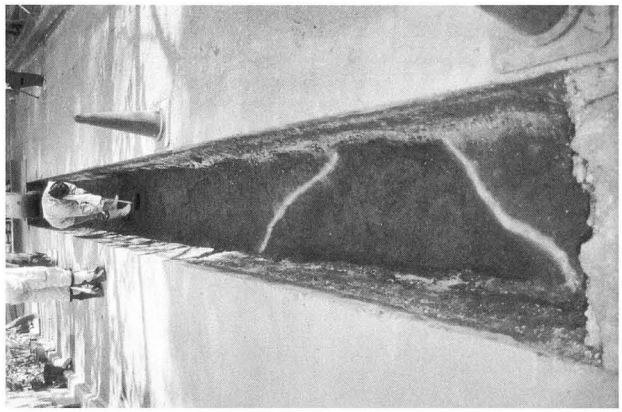
・梅原末治・島田貞彦　1923「河内国府石器時代遺跡発掘報告書」『京都大学文学部考古学研究報告』第２冊
・田代克己他　1980『恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ』瓜生堂遺跡調査会
・曽我恭子他　1981『恩智遺跡Ⅲ（資料編）』瓜生堂遺跡調査会
・米田敏幸　1997「中河内弥生集落遺跡群の変遷」『河内古文化研究論集』柏原古文化研究会
・山本昭・泉本知秀・福岡澄男　1976「八尾市恩智遺跡の出土遺物について」『大阪文化誌』第２巻１号
・嶋村友子他　1987「八尾市内昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ－恩智遺跡の調査－」『八尾市文化財調査報告14　昭和61年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・吉田野乃　1999.3「２－２.恩智遺跡（98－278）の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告40　平成10年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
・森本めぐみ　2003「Ⅵ恩智遺跡第11次調査（ＯＪ2001－11）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告75』（財）八尾

市文化財調査研究会報告
・原田昌則　1992 「Ⅴ恩智遺跡第６次調査(OJ91－６)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告34　(財)八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸　1985.3 『2.恩智遺跡の調査』『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11　昭和59年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
・藤井淳弘　1999.3 「２－1.恩智遺跡(98－54)の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告40　平成10年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
・消　斎　1999.3 「２－3.恩智遺跡(98－395)の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告40　平成10年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
・米田敏幸　1989.3 「21.恩智遺跡(63－361)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19　昭和63年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
・藤井淳弘　1997 「4.恩智遺跡(96－408)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36　平成８年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
・岡田清一　2006 「Ⅸ恩智遺跡第17次調査(OJ2004－17)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告86』(財)八尾市文化財調査研究会

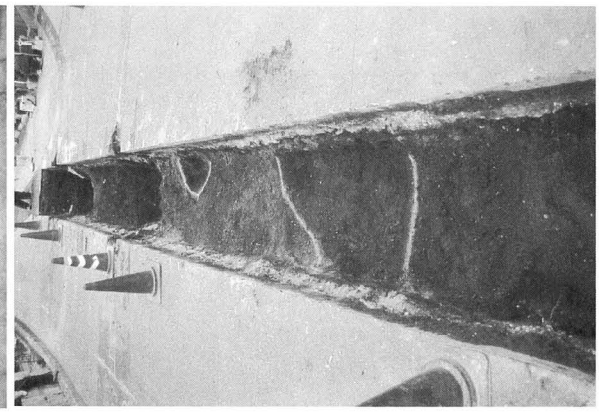


1区　全景(西から)

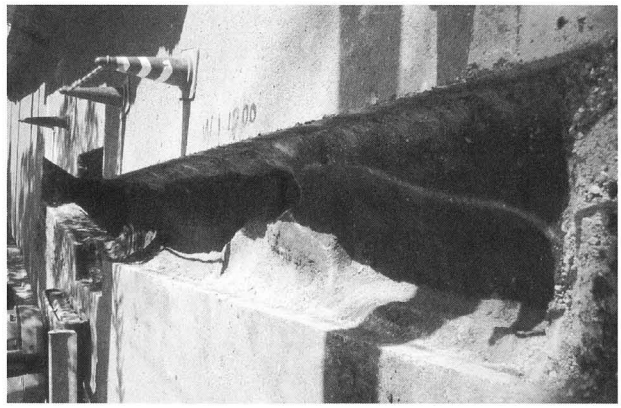
2区　全景(西から)



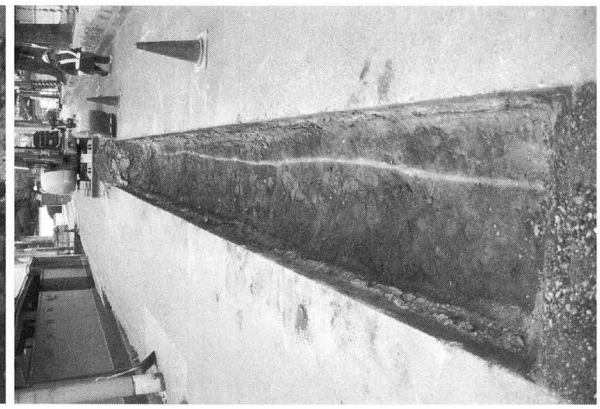
3区　全景(西から)



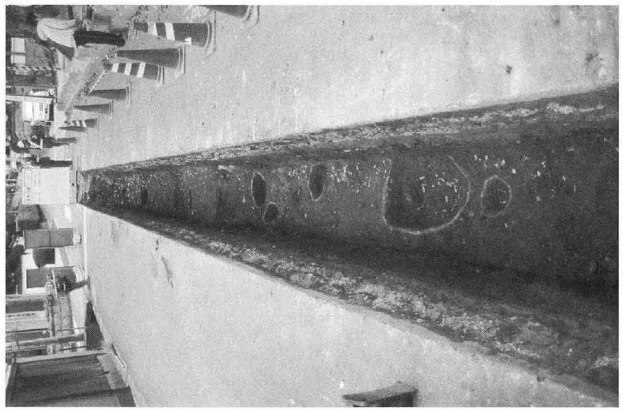
4区　全景(西から)



5区　全景(西から)



6区　全景(西から)

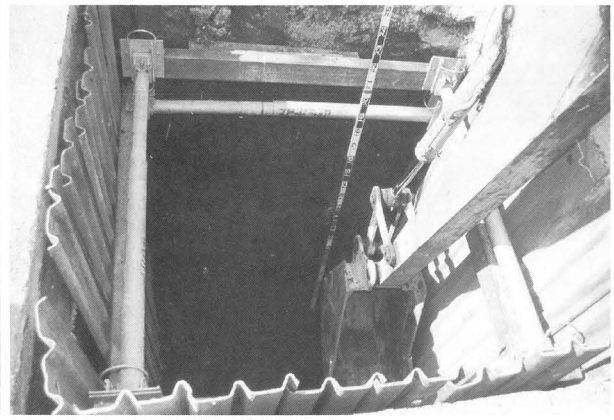


7区　全景(西から)

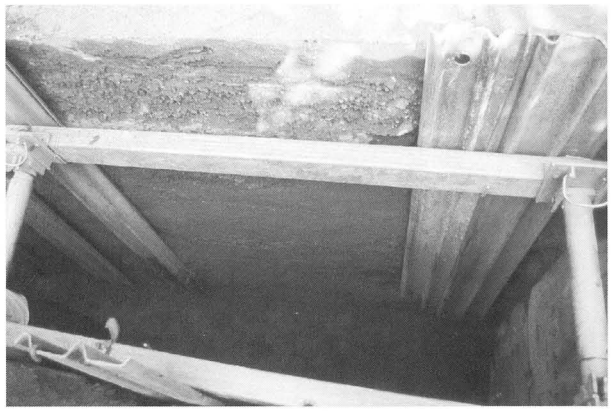
7区　遺構検出状況(北から)

図版二

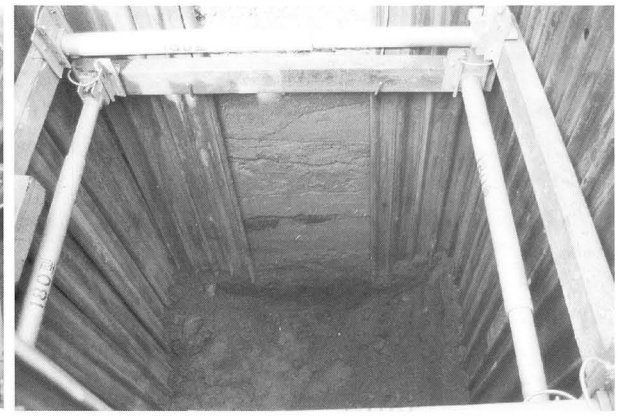
8区　全景(西から)



9区　全景(東から)



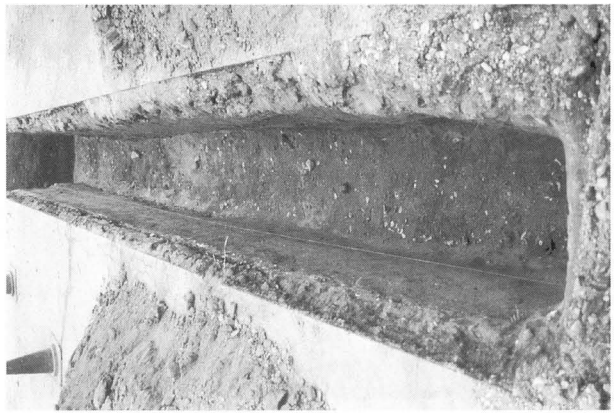
10区　全景(南から)



11区　全景(南から)

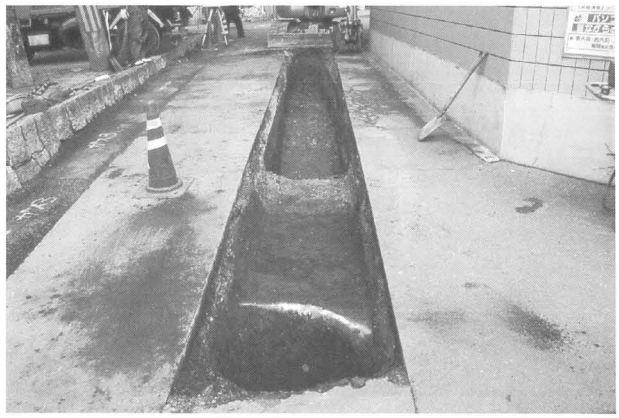
12区　西部(南から)

12区　東部(南から)



13区　全景(南から)

14区　全景(南から)



15区　全景(南から)

16区　全景(南から)

17区　全景(南から)

18区　全景(南から)

19区　全景(西から)

20区　全景(西から)

21区　全景(西から)

22区　全景(南から)

図版四

23区　全景(西から)

24区　全景(北から)

25区　全景(西から)

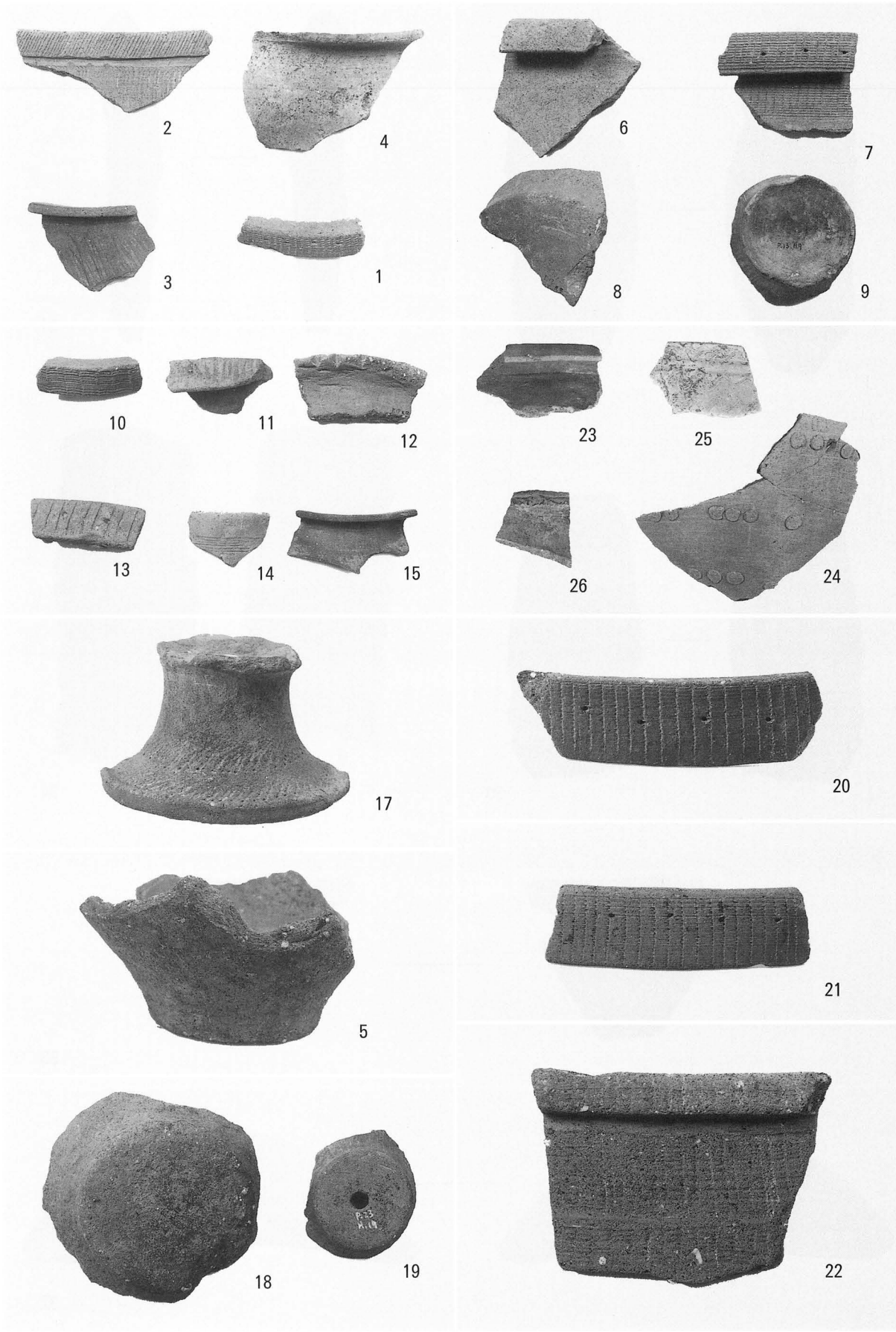
26区　全景(西から)

27区　全景(南から)

28区　全景(西から)

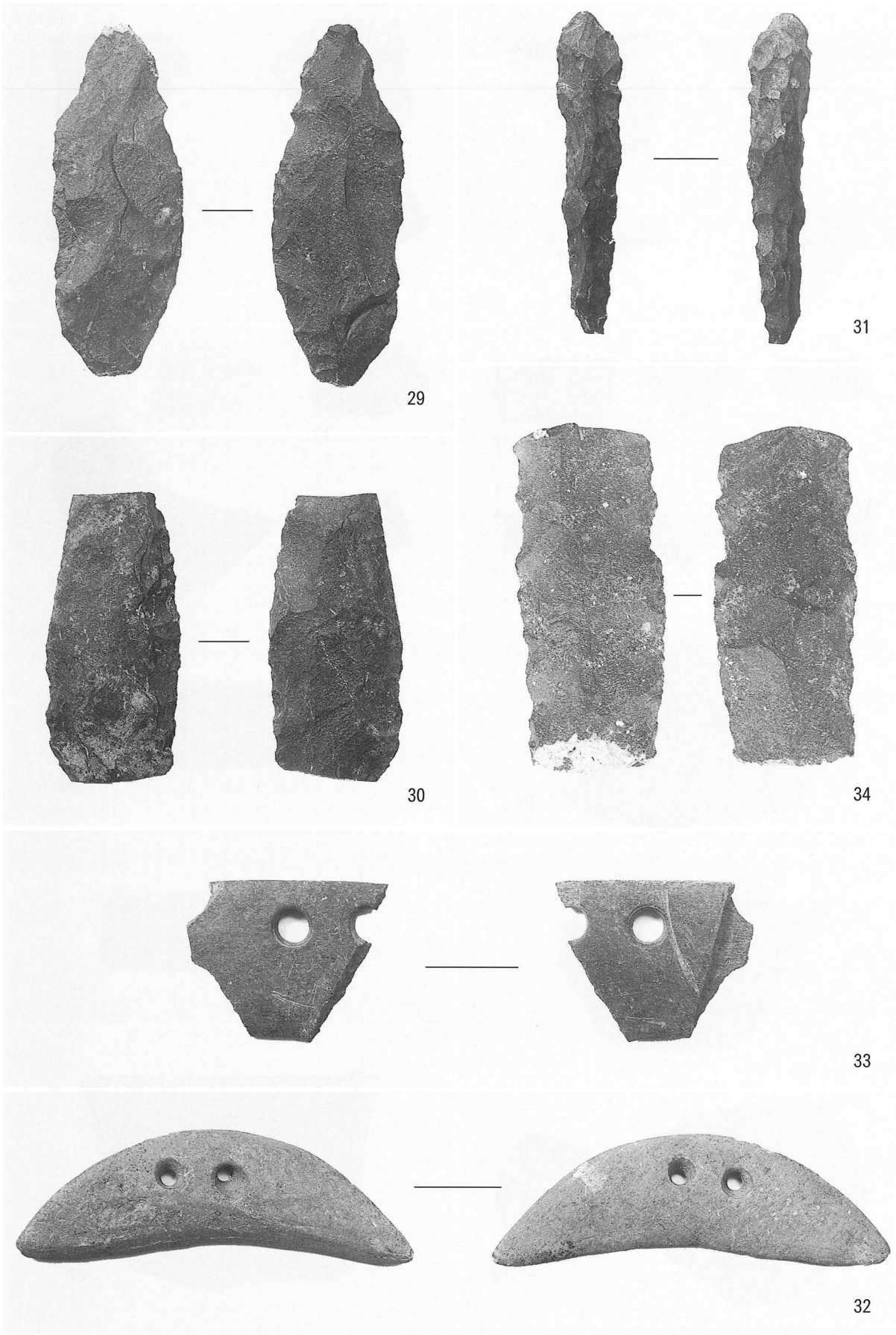
29区　全景(南から)

30区　全景(西から)

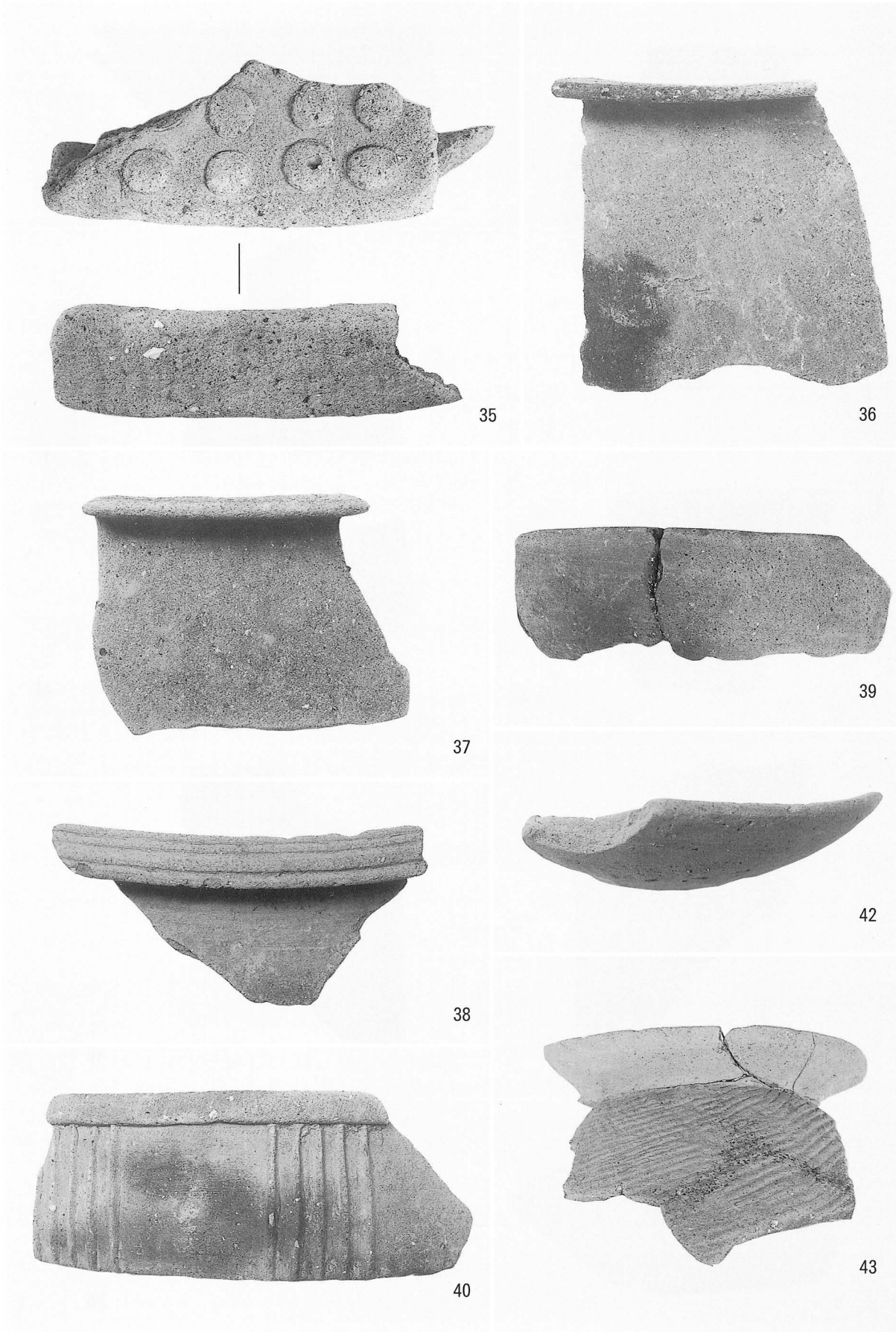


1～15区　ＳＫ２(１～５)、ＳＫ３(６～９)、ＳＫ５(10～15、17～19)、ＳＫ７(23～26)出土遺物

図版六

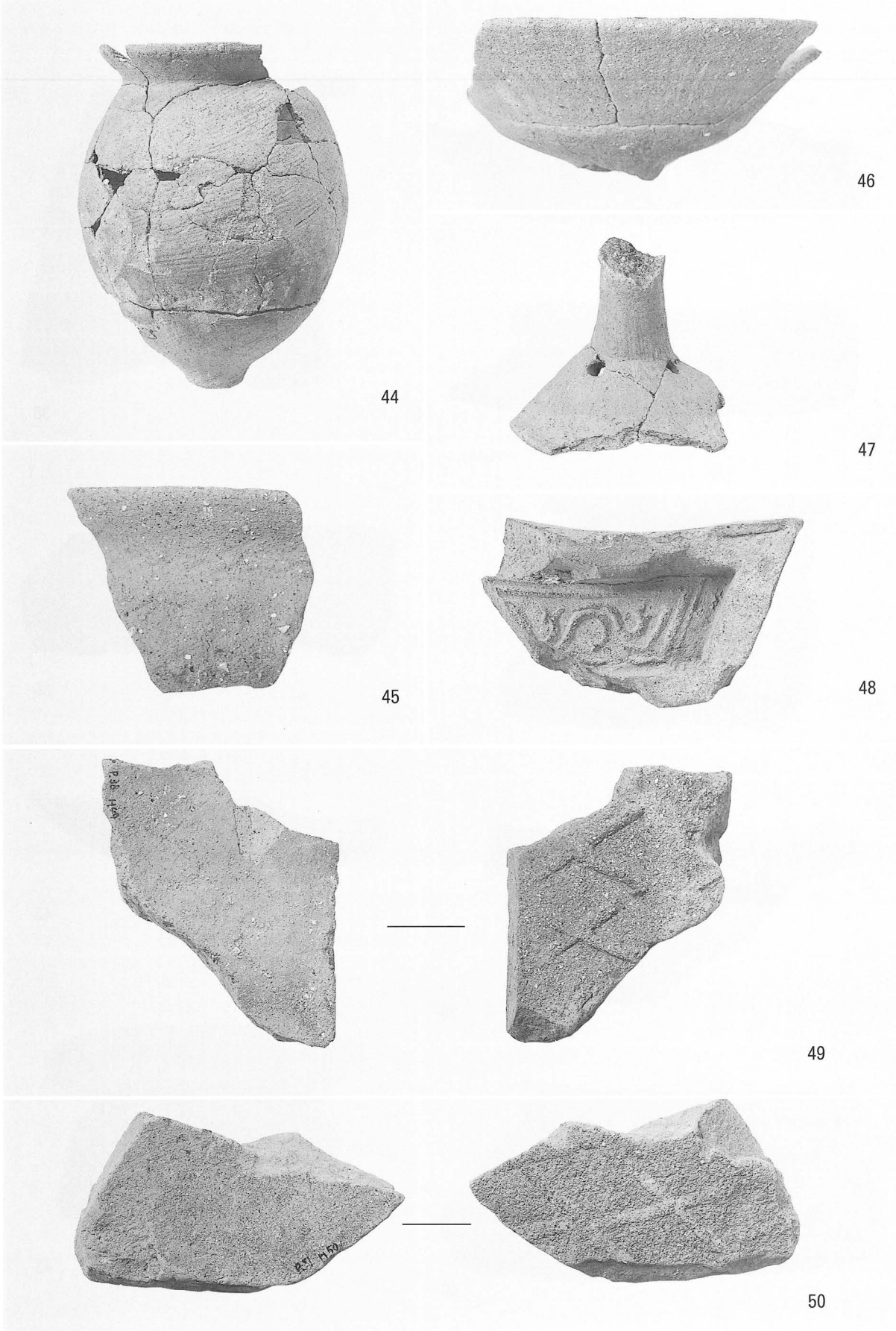


1～15区　ＳＫ５(29～32)、ＳＤ１(34)、ＳＰ７(33)出土遺物

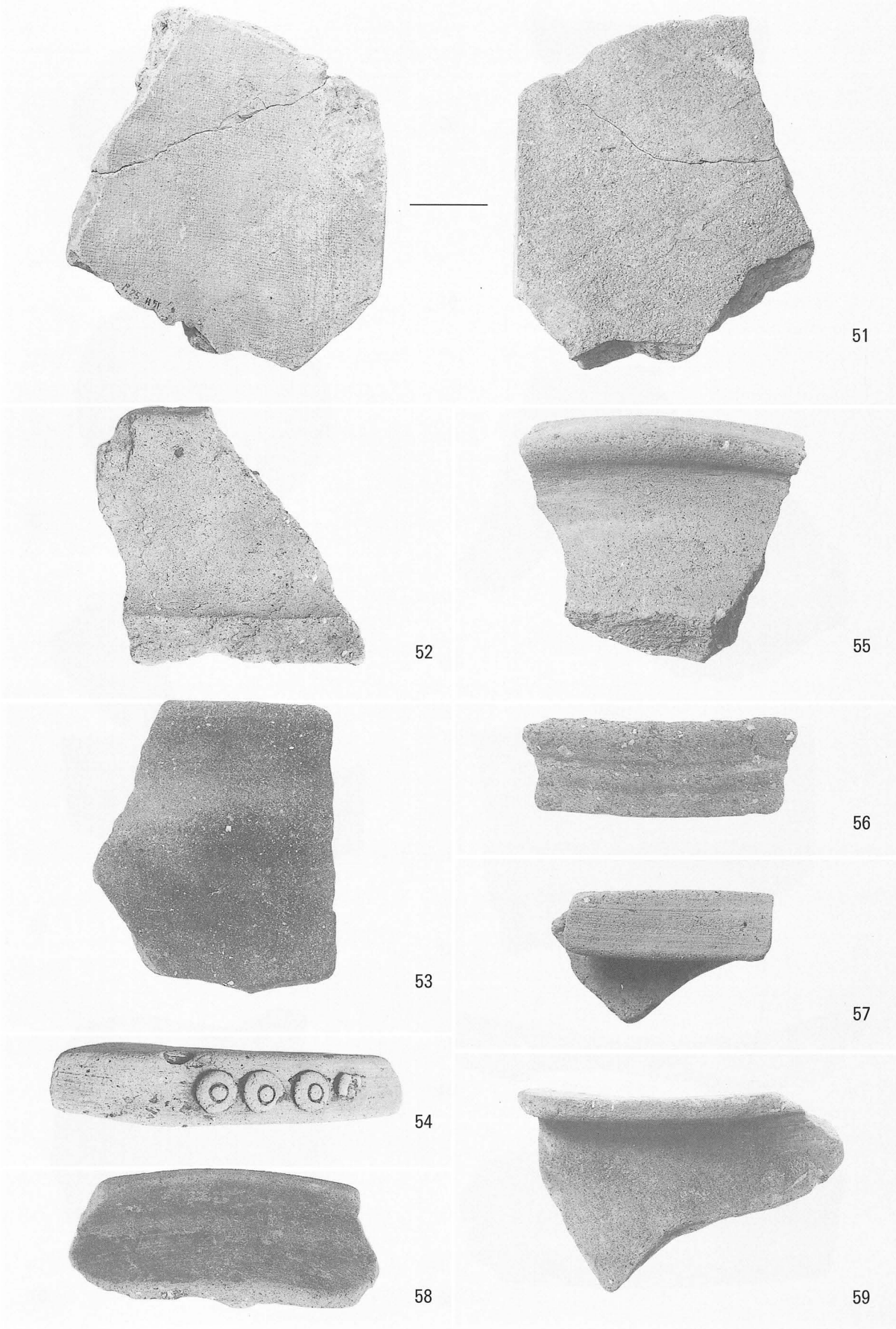


ＮＲ１(35～40・42)、ＳＤ２(43)出土遺物

図版八

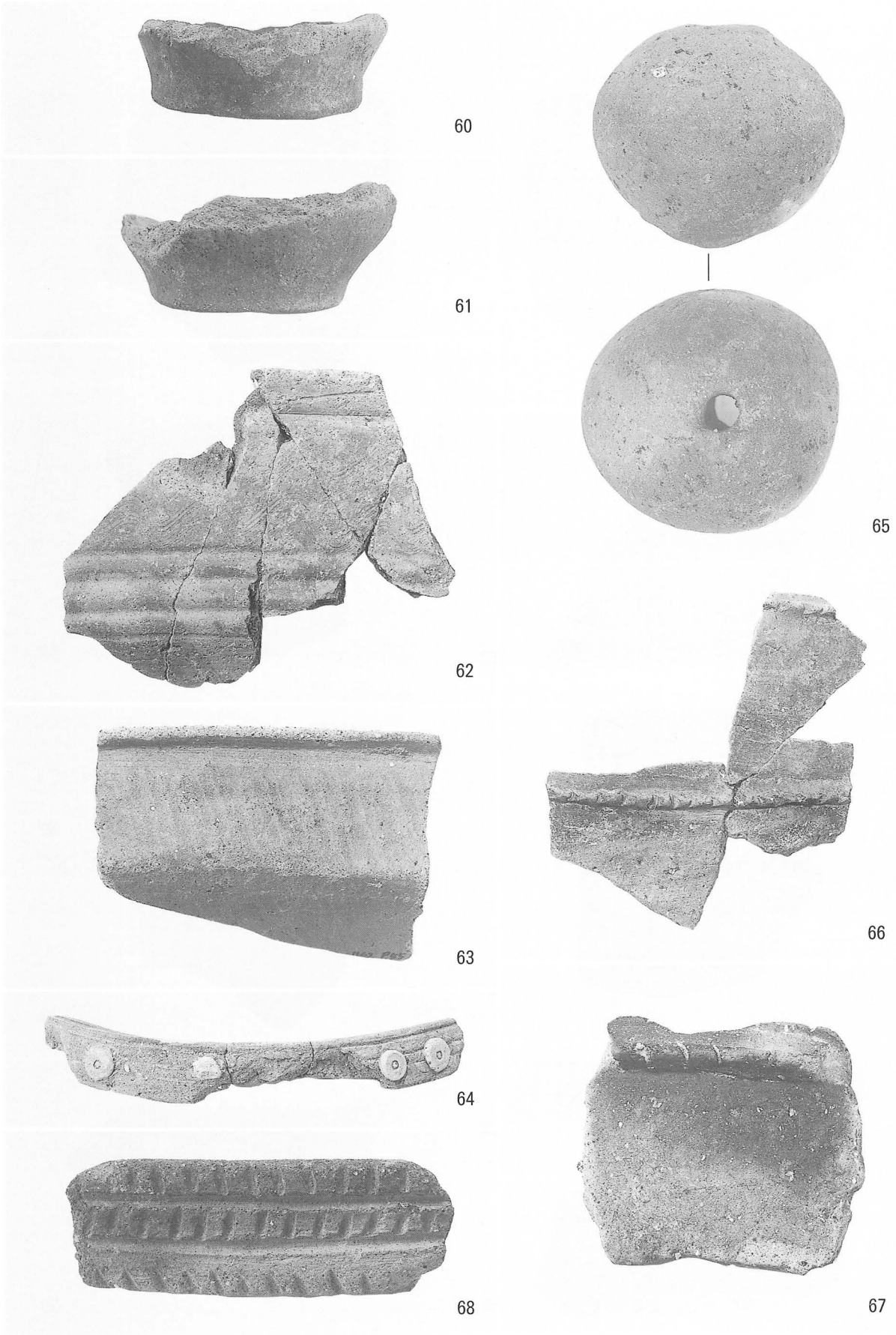


ＳＤ２(44～47)、Ｉ層(48～50)出土遺物

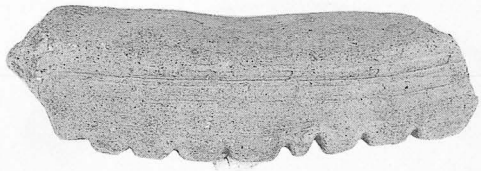


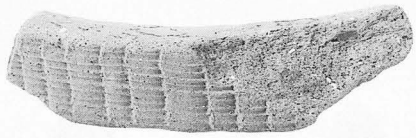
Ⅰ層(29～32)、Ⅱ層(52～59)出土遺物

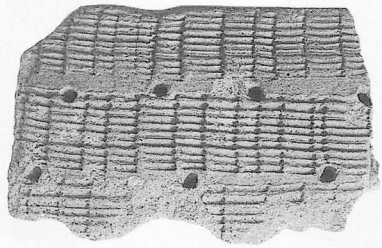
図版十



Ⅱ層(60～68)出土遺物


69


70

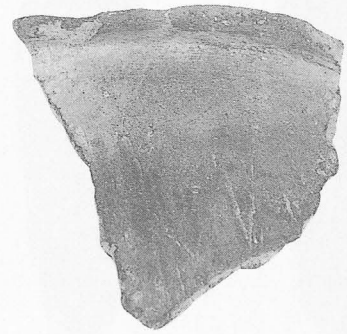

71

72

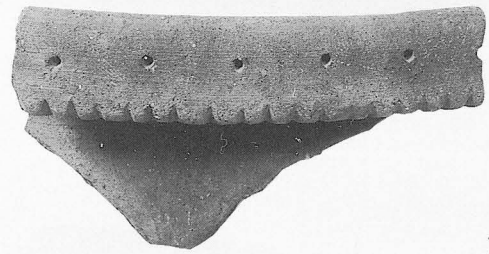
73

79

74


75

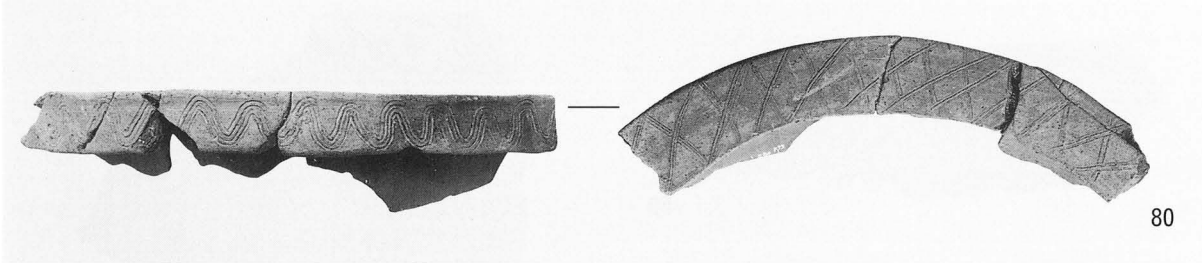
76

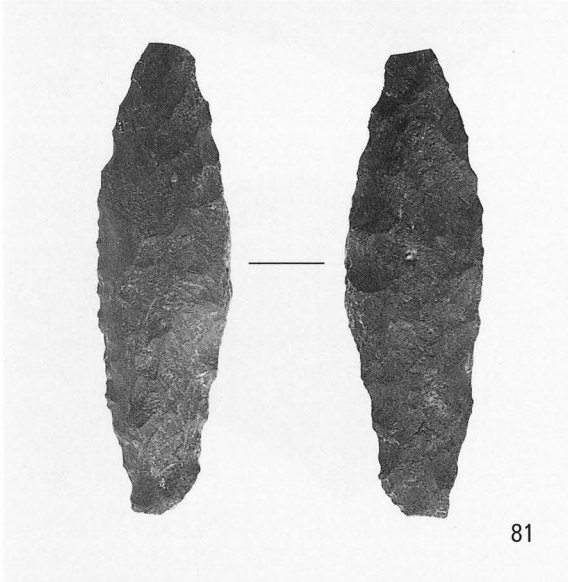

77

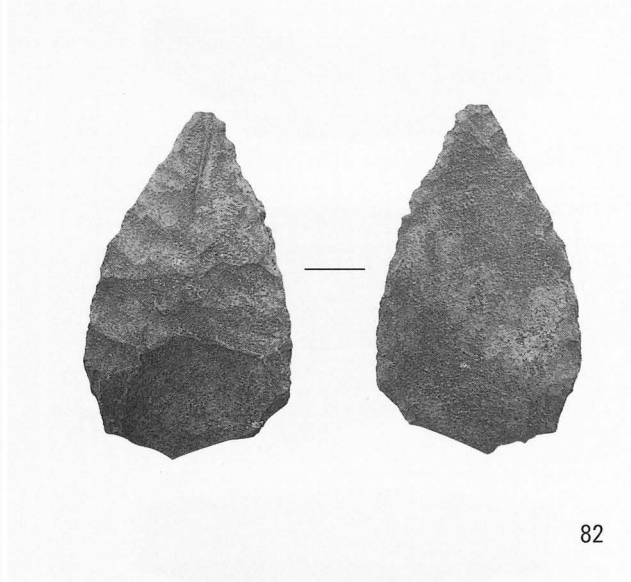
78

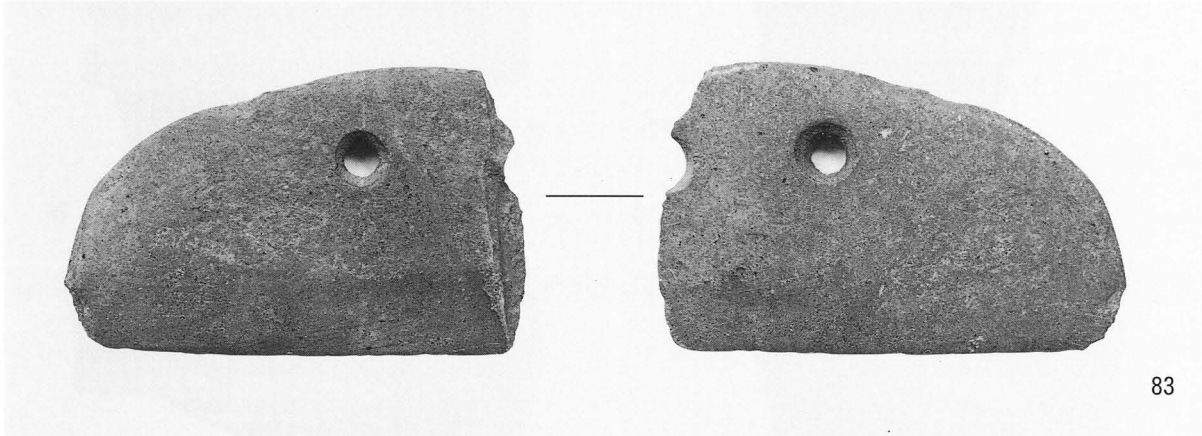
Ⅱ層(69～79)出土遺物

図版十二









Ⅱ層(80～84)出土遺物

Ⅴ　亀井遺跡第３次調査（MK90－３）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南亀井町３丁目８－１で行った、公共下水道工事(平成２年度－10工区)に伴う発掘調査の報告である。

1．本書で報告する亀井遺跡第３次調査(ＫＭ90－３)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成２年10月30日から11月22日にかけて、成海佳子を担当者として実施した。

1．調査面積は約78㎡を測る。

1．現地調査には岡田聖一・坂下　学・松下哲也が参加した。

1．整理作業は随時行い、平成18年10月に終了した。

1．本書作成に関わる業務は、土器実測－村井俊子・宮崎寛子、石器・土製品実測－成海、図面レイアウト－成海、図面トレース－山内千惠子、遺物写真撮影－尾崎良史、その他－岡田・北原清子・黒田幸代・坂下・徳谷尚子・藤原由理子・松下・村田知子が行った。

1．本書の執筆は成海・河村恵理、編集は河村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……57

2．調査概要……60

1）1区……60

①調査の方法と経過……60

②基本層序……60

③検出遺構と出土遺物……63

2）2区……66

①調査の方法と経過……66

②基本層序……67

③検出遺構と出土遺物……68

3．まとめ……84

V　亀井遺跡第３次調査（ＫＭ90－３）

1. はじめに

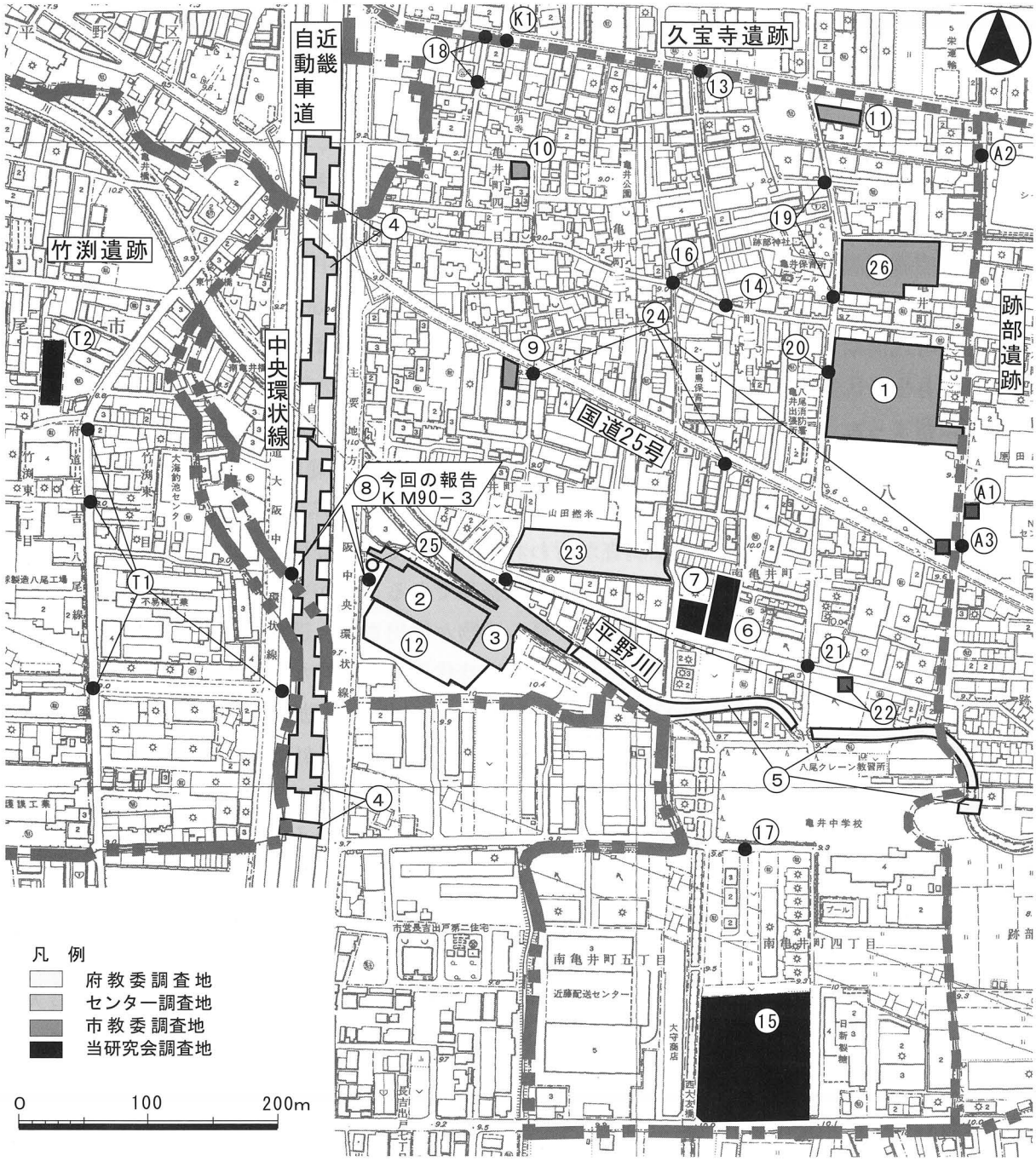
亀井遺跡は、八尾市南西部の亀井町１～４丁目、南亀井町１～５丁目一帯から大阪市東部にまたがる範囲に位置し、旧大和川の支流である長瀬川右岸の沖積地に立地する。当時の地形は、既往の調査で検出した遺構面の検出深度に差異が認められることから、小規模な河川等によって、微高地（自然堤防）が広く形成されていたことが想像できる。当遺跡は、弥生時代から近世に至る複合遺跡であり、特に弥生時代は、集落の拠点として最も繁栄した時期であった。また、周辺には東に跡部遺跡、西に竹渕遺跡、北に久宝寺遺跡・亀井北遺跡・加美遺跡（大阪市）があり、南には長原遺跡（大阪市）など、数多くの遺跡が立地する。

当遺跡は、昭和43（1968）年、平野川改修工事の際、多量の弥生土器が出土したことによって発見された遺跡である。発見と同時に工事と並行して発掘調査（石神1971）が行われ、多量の遺物を含む黒色粘土層が確認されたが、畿内第Ｉ～Ｖ様式の土器が混在し、直下の青灰色砂層中からもＶ様式の土器が出土したことから、旧大和川の氾濫による２次堆積の包含層と結論づけられた。その後、昭和44（1969）年～47（1972）年に、大阪府教育委員会（以下「府教委」）によって４回にわたる遺跡範囲確認調査が行われた。その結果、遺跡の範囲は、大阪中央環状線と平野川の交差する付近を西限とし、この地点から平野川に沿って南東約250m、南北50～100mと確定された。ただし、弥生時代前期・中期のピットを検出したほかには明確な遺構はなく、弥生時代後期以前・後期以降・弥生時代後期～古墳時代後期（６世紀中頃）までの３時期の遺物包含層の存在が明らかにされるに留まった（石神1971、田代・中井1972）。一方、昭和48（1973）年、近畿自動車道予定地内では、（財）大阪文化財センターによる試掘調査が行われ、遺跡の範囲は南北500mに拡大するに至ったが、遺跡の性格等は明確にできないままに終わった（中井1973）。昭和53（1978）年からは長吉ポンプ場築造工事に関連する発掘調査が行われ、それまで２次堆積と考えられてきた遺物包含層は、遺構の重複によって遺物の一部が混合した結果であることが判明した。特に弥生時代を通じては、複数の遺構面・多くの遺構・膨大な量の遺物が検出され、近接地域にまで拡がる大きな集落遺跡であることが明らかにされた。また、古墳時代以降も活発な活動が展開されていたことも明らかにされた（表１－②・③）。昭和55（1980）年からは近畿自動車道建設に伴う発掘調査が（財）大阪文化財センターによって行われている。その結果、当遺跡が東西・南北500m以上の範囲をもつ複合遺跡であり、弥生時代の拠点集落として位置付けられることとなった。以後、昭和63（1988）年の平野川改修工事、平成３（1991）年ポンプ場建設工事に伴う大規模な発掘調査が府教委によって行なわれ、多大な成果が挙げられている（⑤・⑫）。

次に、八尾市教育委員会（以下「市教委」）と当調査研究会が行った調査成果について概観したい。昭和53（1978）年、亀井町１丁目で市教委がおこなった発掘調査では、顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、調査地が、跡部・亀井両遺跡の中間地点に立地することから「農耕地として最大限の利用があったことと思われる」と報告されている（①）。平成元（1989）年以降、市教育委員会・当調査研究会では、小規模な発掘調査を続けて現在に至っている。国道25号以北では、古墳時代の遺物を含む埋没河川（旧大和川）を検出しており、⑧・⑨・⑬・⑲では河川埋没後に構築された室町時代以降の遺構を検出している。当調査研究会が調査を行った第１次・第２次調査地は、平野

川の北約100m地点に位置し、今回の調査地は近畿自動車道高架下(1区)および長吉ポンプ場の敷地内(2区)に位置する。第1次調査では、弥生時代後期の土坑・溝・落ち込み状遺構などと、弥生時代中期の土器棺墓(方形周溝墓)を検出しており、特に弥生時代後期の遺物の出土量が多かった。

一方、西に隣接する竹渕遺跡は、行政区画によって遺跡名を異にしているが、亀井遺跡とは一連のものと考えられるもので、遺跡東部で実施した第2次調査(TK89－2)(T1)では、深層部において弥生時代前期～中期の墓域が検出されている。第3次調査(TK92－3)(T2)では弥生時代前期の土坑、古墳時代後期の方墳、平安時代中期の土坑、近世の井戸なども検出されている。



第1図　調査地周辺の発掘調査位置図(S＝1/5000)

表１　周辺の発掘調査一覧表

番号	略号	調査期間	所在地	調査団	文　献	発行
①		197804	亀井町1	亀井小学校建設	山本昭編　1981「1. 亀井遺跡」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市文化財調査報告７	市教委
②		19780524～19800325	南亀井町3	長吉ポンプ場建設	寺川史郎・尾谷雅彦編　1980『亀井・城山』	センター
③		19800601～19811031	南亀井町3	長吉ポンプ場建設関連	中西靖人・宮崎泰史・西村尋文編　1982『亀井遺跡』	センター
					宮崎泰史編　1984『亀井遺跡Ⅱ』	
④				近畿自動車道建設	高島　徹・広瀬雅信・畑　暢子編　1983『亀井』	センター
		19820601～19830831	亀井町・南亀井町		広瀬和雄・石神幸子編　1986『亀井（その２）』	センター
		19850601～19860215	南亀井町		藤永正明・阿部幸一編　1987『亀井（その３）』	センター
⑤		198809～198903	亀井町１・跡部南の町１	平野川改修	森井貞雄　1989『1988年度亀井遺跡発掘調査概要－八尾市南亀井町・跡部南の町所在』	府教委
⑥	KM1988－１	19881107～1124	南亀井４	工場建設	近江俊秀他　1989『亀井遺跡－南亀井町4丁目41－１の調査－』（財）八尾市文化財調査研究会報告19	研究会
⑦	KM1989－２	19890612～0704	南亀井町1	倉庫建設	（財）八尾市文化財調査研究会　1990「亀井遺跡第２次調査」『平成元年度（財）八尾市文化財調査研究会年報』	研究会
⑧	KM1990－３	19901030～1122	南亀井町3	公共下水道	本誌所収	今回報告
⑨	88－586	19890526・27	南亀井町2	事務所建築	青木勘時　1990「6. 亀井遺跡（88－586）の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告20　国庫補助事業	市教委
⑩	89－041	19890918	亀井町4	共同住宅建築	岡田清一　1990「8. 亀井遺跡（89－041）の調査」同上	市教委
⑪	89－284	19890901	亀井町1	工場建設	岡田清一　1990「10. 亀井遺跡（89－284）の調査」同上	市教委
⑫		199205～199411	南亀井町3	長吉ポンプ場増設	森井貞雄編　1994『1992・1993年度亀井遺跡発掘調査概要－八尾市亀井町所在－』	府教委
⑬	KM1996－４	19970217～0221	亀井町1・2・跡部本町4	公共下水道	古川晴久　1997「Ⅴ　亀井遺跡（第４次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』	研究会
⑭	KM1997－５	19970512～0519	亀井町1・2・跡部本町4	公共下水道	古川晴久　2000「Ⅱ　亀井遺跡（第５次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』	研究会
⑮	KM1997－６	19971022～1030	南亀井町4	配送センター建築	高萩千秋　1999「Ⅳ　亀井遺跡（第６次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告62』	研究会
⑯	KM1998－７	19990212～0223	亀井町3	公共下水道	成海佳子　2000「Ⅵ　亀井遺跡（第７次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』	研究会
⑰	KM1998－８	19990323～0326	南亀井町4	公共下水道	岡田清一・樋口　薫　2000「Ⅶ　亀井遺跡（第８次調査）」同上	研究会
⑱	KM1999－９	19991206～1220	亀井町4	公共下水道	成海佳子　2001「Ⅴ　亀井遺跡（第９次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』	研究会
⑲	KM1999－10	20000306～0331	亀井町１・２	公共下水道	高萩千秋　2001「Ⅵ　亀井遺跡（第10次調査）」同上	研究会
⑳	KM2001－11	20010426～0428	亀井町１	公共下水道	成海佳子　2001「Ⅲ　亀井遺跡（第11次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告71』	研究会
㉑	KM2001－12	20010618～0630	南亀井町1・4	公共下水道	樋口　薫・金親満夫　2002「Ⅱ　亀井遺跡（第12次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告73』	研究会
㉒	KM2002－13	20020520～0706	南亀井町1・3	公共下水道	樋口　薫　2003「Ⅸ　亀井遺跡（第13次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』	研究会
㉓	2003－178	20031118～1210	南亀井町2	分譲住宅建築	岡田清一・西村公助　2004「15. 亀井遺跡（2003－178）の調査」『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49　国庫補助事業	市教委
㉔	KM2003－14	20030423～1203	亀井町1～4・跡部本町4・跡部南の町1	公共下水道	高萩千秋　2004「Ⅱ　亀井遺跡（第14次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告78』	研究会
㉕		20031022～1228	亀井町3	公共下水道	藤田道子　2004「若江北・亀井・長原（城山）遺跡」『大阪府埋蔵文化財調査報告2003－３』	府教委
㉖	2005－344	20051212	亀井町1	分譲住宅	西村公助　2006「6. 亀井遺跡（2005－344）の調査」『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53　国庫補助事業	市教委
Ⓣ1	TK1989－２	19890112～0311	竹渕東2	公共下水道	坪田真一　1992「Ⅲ　竹渕遺跡（第２次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告35』	研究会
Ⓣ2	TK1992－３	19920907～0926	竹渕東3	工場建設	原田昌則　1993「ⅩⅣ　竹渕遺跡（第３次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告39』	研究会
Ⓚ1	ＫＨ90－５	19900415～0422	北亀井町2	公共下水道	高萩千秋　1991「Ⅰ　久宝寺遺跡（ＫＨ90－５）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告32』	研究会
Ⓐ1	AT1992－８	19920820～0905	跡部本町4	鉄塔新設	岡田清一　1993「Ⅱ　跡部遺跡（第８次調査）」　同上	研究会
Ⓐ2	AT1998－28	19980629～0706	跡部本町4	公共下水道	森本めぐみ　2000「Ⅰ　跡部遺跡（第28次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』	研究会
Ⓐ3	AT1998－30	19990120～0127	跡部本町4	公共下水道	森本めぐみ　2000「Ⅲ　跡部遺跡（第30次調査）」同上	研究会

2. 調査概要

今回の調査は八尾市公共下水道工事(平成２年度－10工区)に伴うもので、当調査研究会が亀井遺跡内で実施した第３次調査(略号ＫＭ90－３)にあたる。

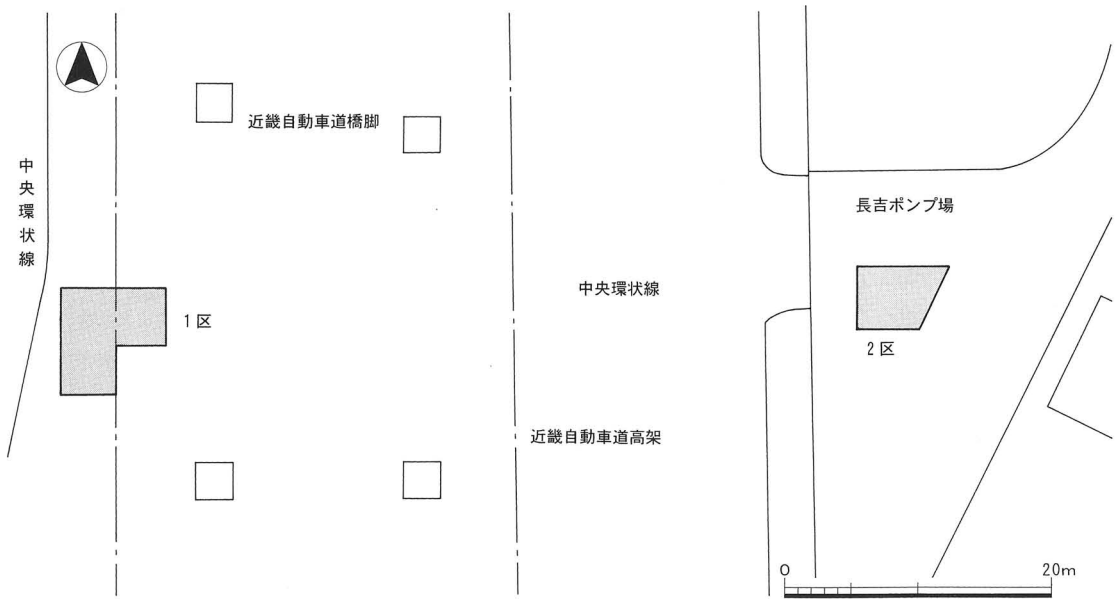
調査は２か所の立坑部分を対象とし、西側の調査区を「１区」、東側の調査区を「２区」と呼称した。１区は近畿自動車道の高架下で、遺跡範囲の西端に位置する。南方100m地点には竹渕遺跡第２次調査地(ＴＫ89－２)が位置する。２区は１区から西51m地点、長吉ポンプ場内に位置しており、ともに(財)大阪文化財センターの調査地と近接している(第１図参照)。

1)１区

①調査の方法と経過

１区は、東西7.6m×南北7.6mの範囲のＬ字形を呈する立坑で、周囲には鋼矢板が打接されている為、実際の調査面積は約44.2㎡である。掘削方法は、現地表面下約２mまでを機械掘削、以下の１m前後を人力掘削として調査を進め、平面的な調査終了後、下層確認のため部分的に深さ１m程度の機械掘削を行った。最終的に確認した深さは、現地表面下4.4m(T.P. ＋4.7m)までである。調査期間は平成２年10月30日から11月14日までの９日間である。なお、調査区は逆Ｌ字形を呈している為便宜上、立坑の形に合わせて３区分の地区割りを行った。地区名は、南北に伸びる長方形の地区を２分割し、南を「Ａ地区」、北を「Ｂ地区」と呼称した。また東に突出する地区を「Ｃ地区」と呼称した(第４図参照)。

今回の調査では、古墳時代中期以降に埋没した河川(旧平野川)の堆積物を全て除去したところ、下層部で３時期の遺構面を検出した。これらの遺構面を、上から順に「第１～３面」と呼称した。なお、微地形を反映してか、いずれの遺構面も南～西部が高く、北～東部が低い。



第２図　調査区設定図(Ｓ＝1/500)

②基本層序（第３図）

調査地周辺における現地表面はT.P. ＋9.1～9.2mで、盛土は約0.7m堆積する（第100層）。下層には、旧耕土である黒灰色礫混じりシルト（第101層）、床土である明黄色礫混じりシルト（第102層）が堆積する。旧耕土（第101層）上面はT.P. ＋8.4～8.5mを測る。

第102層直下には、埋没河川の堆積状況を示す粘土・シルト・粗砂などで構成された互層（第103～108層）が約１mの厚さで堆積している。これらの互層は、第105層を境に少なくとも、新旧２時期の河川（旧平野川）に分かれる。上層の第103・104層は中世期の流路、下層の第106～108層は古墳時代中期以降を上限とする流路の堆積物と推察できる。次いで、粘土・シルトなどの安定した土層（第109～112層）が続き、弥生時代中期までの遺構面を形成する。

弥生時代中期の遺構面より下層部には、再び埋没河川の堆積状況を示す粘土・シルト・砂の互層や粗砂など（第113～116層）が約0.7m堆積し、最下層に褐灰色粘土（第117層）が0.3m以上堆積していることを確認した。

これらのうち、埋没河川の堆積状況を示す第103・104層、第106～108層、第113～116層の含水量は、極めて多い。

以下、各層の特徴を記す。なお、第101～104層は機械掘削時に、第113層以下は下層確認の際に確認した土層である。

第100層：盛土。層厚約0.7m。

第101層：旧耕土。土質は黒灰色礫混じりシルトを呈する。層厚0.15～0.2m。当該層上面は、T.P. ＋8.4～8.5mを測る。

第102層：床土。土質は明黄色礫混じりシルトを呈する。層厚0.15～0.2m。

第103層：旧平野川流路（中世期）の流水堆積物層。土質は明黄色シルト～細砂を呈する。層厚0.3m前後。

第104層：旧平野川流路（中世期）の流水堆積物層。土質は黄褐色粗砂と微砂とシルトの互層である。層厚0.5～0.7m。

第105層：旧平野川流路（中世期）の流水堆積物層。土質は灰黄色粘土を呈する。層厚0.1～0.2m。当該層は調査地北側で厚く、南側へと次第に薄く堆積する。当該層上面はT.P. ＋7.0～7.15mを測る。

第106層：旧平野川流路（古墳時代中期以降）の流水堆積物層。土質は上部から順に黒褐色中砂層（第３図－106－①層）、褐灰色粗砂～礫混じり粘土層（106－②層）、褐色粗砂層（106－③層）である。層厚0.2～0.5m。当該層は調査地北西部で最も厚く堆積しており、最下部には暗青色シルトが薄く堆積する。

第107層：旧平野川流路（古墳時代中期以降）の流路堆積物層。土質は青黒色礫混じり粘土を呈し、有機物・炭などを多量に含む。古墳時代中期～弥生時代後期の遺物を少量包含する。層厚0.1～0.2m。当該層上面では直上層（第106層）に削平されている部分が目立つ。

第108層：旧平野川流路（古墳時代中期以降）の流水堆積物層。土質は上部から順に青黒色粘土とシルトと粗砂の互層（第３図－108－④）、灰色微砂と褐色礫とシルトと粘土の互層（108－⑤層）である。層厚0.35m以下。当該層は、Ｂ地区北東からＣ地区北半に見られ、地形が微高地状の高まりとなっているＡ地区では確認できなかった。

第109層：旧平野川の底部に該当する。土質は暗青色粘土を呈する。層中には弥生時代前期～後期の遺物を少量包含する。層厚0.1～0.3m。当該層上面はT.P. +6.3～6.8mを測る。0.5m以上の比高差があり、A地区およびB地区中央から西側が高く、北へ落ち込んでいる。当該層上面を「第1面」と呼称した。

第110層：土質は暗緑灰色シルトを呈する。層厚0.15～0.4m。当該層上面はT.P. +6.1～6.6mを測る。直上層(第109層)と同様に0.5m以上の比高差があり、南部のA地区が高く、北へ向かってなだらかに下がっている。当該層上面で東西方向に伸びる溝状遺構を確認した。当該層上面を「第2面」と呼称した。

第111層：土質は青灰色砂混じりシルト質粘土を呈する。層中には弥生時代前期～中期前半の遺物を少量包含する。層厚0.2m以下。第108層と同様に、北部のB地区及びC地区の落ち込み内に見られる土層である。

第112層：土質は青灰色シルトを呈する。層厚0.2～0.5m。当該層上面はT.P. +5.7～6.0mを測り、調査地南側が高くなる。当該層上面を「第3面」と呼称した。B地区北西部で弥生時代中期前半(河内Ⅱ様式)の土器や花崗岩からなる集積遺構を検出した。

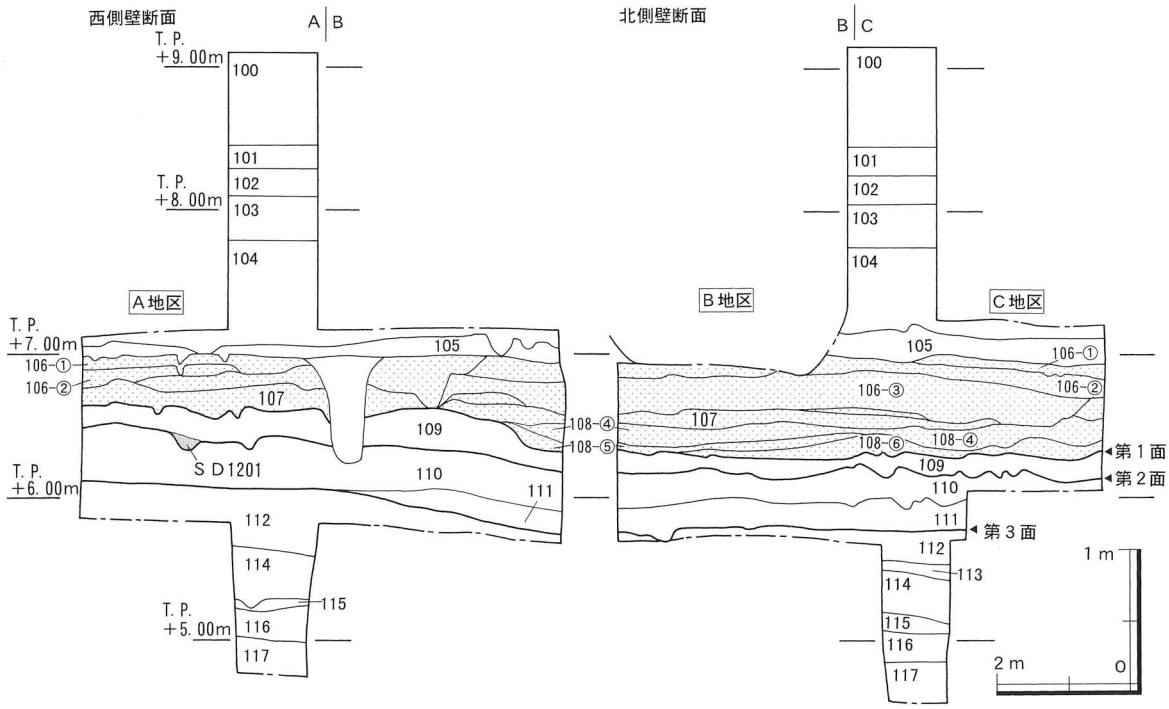
第113層：流水堆積物層。土質は青灰色シルトと暗青灰色粘土の互層である。層厚0.1m以下。

第114層：流水堆積物層。土質は青灰色シルトと明青灰色中砂と明緑灰色中砂の互層である。層厚0.3～0.4m。

第115層：流水堆積物層。土質は粗砂を呈する。層厚0.05～0.15m。

第116層：流水堆積物層。土質は褐灰色粘土と青灰色シルトと明青灰色微砂の互層である。層厚0.2m前後。

第117層：土質は褐灰粘土を呈する。層厚0.3m以上。



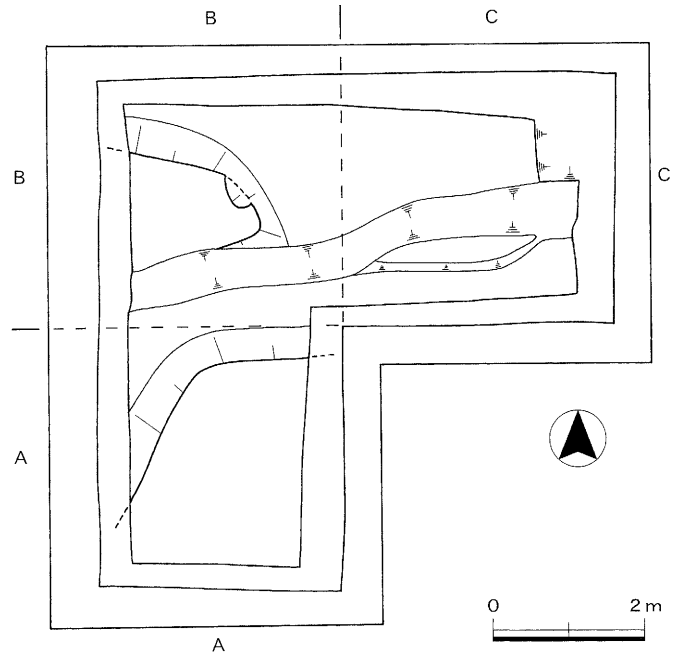
第3図　1区西・北壁断面図(S＝水平1/100・垂直1/50)

③検出遺構と出土遺物

・検出遺構

第１面（第４図、図版二）

流水堆積物層（第103～108層）を除去したところ、暗青色粘土層（第109層）上面で、河川（旧平野川）底を検出した。当該面は、現地表面下2.3～2.8m（T.P. ＋6.3～6.8m）を測り、調査区南部にあたるＡ地区（T.P. ＋6.8m）が最も高く、0.2m程度の段を有して北から北西へ落ち込む（T.P. ＋6.3m）地形となる。



第４図　１区第１面平面図（Ｓ＝1/100）

検出した河川底は調査地全域に広がり、河川底が落ち込んだ部分には、流水堆積物の最下層にあたる第108層が堆積する。今回の調査では、調査面積が狭域であった為、河川の肩部や流路方向は確認できなかった。ただし、Ｂ地区の北西側およびＣ地区の全域が最も標高値が低くなっていることから、河川は東西方向に流れをもち、北方向に更に川幅が拡大する河川であったことが推測できる。

流水堆積物層（第107層）から、古墳時代中期の須恵器杯身（１）、弥生時代後期の壷（２）などが出土した。旧平野川の埋没時期は古墳時代中期以降と推測できる。

第２面（第５図、図版三）

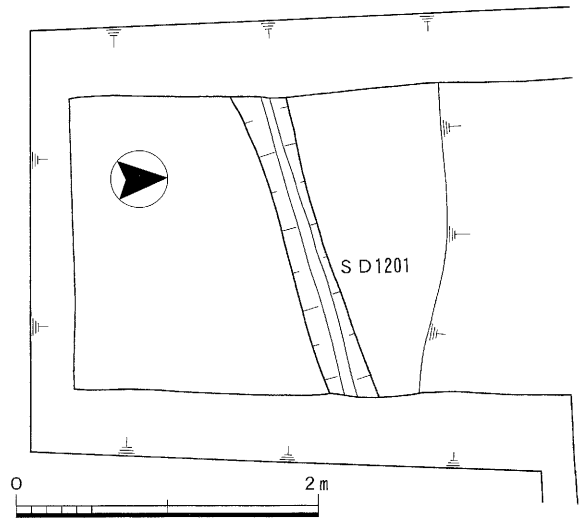
弥生時代前期～後期までの遺物を包含する暗青灰色粘土層（第109層）を除去したところ、暗緑灰色シルト層（第110層）上面で、東西方向に伸びる溝状遺構（ＳＤ1201）を検出した。当該面は、現地表面下2.5～3.1m（T.P. ＋6.1～6.6m）を測り、第１面と同様に、調査地南部（T.P. ＋6.5m）が高く、北部（T.P. ＋6.2m）へ下がる地形となる。南北の比高差は0.3m前後を呈する。

溝（ＳＤ）

ＳＤ1201

Ａ地区で検出した溝である。規模は、幅0.2～0.3m、深さ0.15mを測り、東から西方向に流れる。

埋土は暗青色礫混じり粘土で、弥生時代前期と中期（河内Ⅱ様式）の壷体部片が１点ずつ出土した。なお、これらの土器は小破片の為、図化はできなかった。



第５図　１区（Ａ地区）第２面平面図（Ｓ＝1/50）

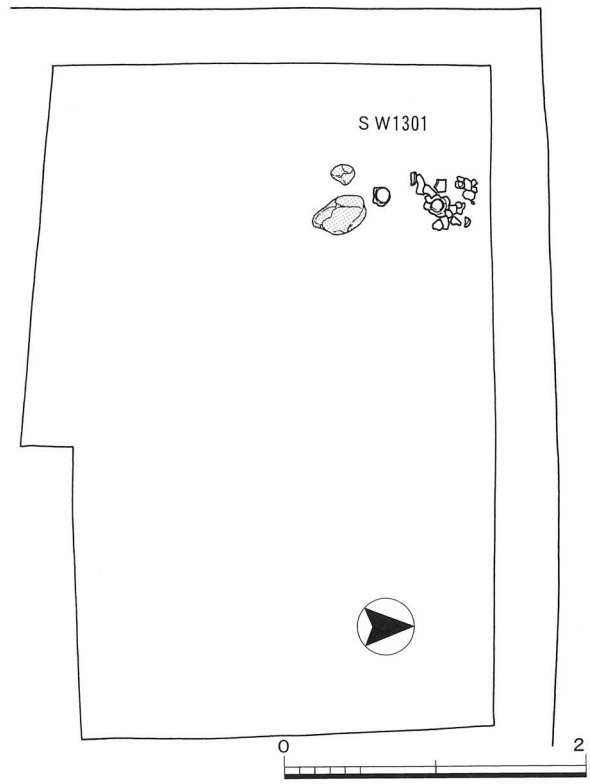
第３面(第６図、図版二)

暗緑灰色シルト層(第110層)及び青灰色砂混じりシルト質粘土層(第111層)を除去したところ、青灰色シルト(第112層)上面で、弥生時代中期(河内Ⅱ様式)の土器・石などからなる集積(**ＳＷ1301**)を検出した。当該面は、現地表面下3.2～3.5m(T.P. ＋5.7～6.0m)を測り、第１・２面と同様に、調査地南部(T.P. ＋6.0m)が高く、北部((T.P. ＋5.8m)へ下がる地形となる。南北の比高差は0.2m前後を呈する。

集積(ＳＷ)

ＳＷ1301

Ｂ地区北西隅で検出した集積である。地形が北西側へなだらかに下がっており、この斜面上で検出したものである。規模は約１ｍ四方の範囲に広口壷(21)、壷底部(24)、花崗岩２点がまとまっており、そこから約1.6m南～東側にかけて、甕用蓋(22)、壷底部(23)ほかの破片が、数片散乱していた。なお、掘方等の痕跡は認められなかった。



第６図　１区(Ｂ地区)第３面平面図(Ｓ＝1/50)

出土状況から元位置を復元すると、破片の状態で出土した広口壷(21)は、整理作業の結果、完形品に復元でき、大・小の大きさの異なる花崗岩の北側に正立して置かれていたことが推測できる。さらに、壷(21)と花崗岩の間には、壷底部(24)が正立していたことから、数点の土器が、花崗岩のそばに立てられていた可能性も考えられる。時期は弥生時代中期前半(河内Ⅱ様式)に比定できる。

・出土遺物

当該遺構面に伴なって出土した遺物は、あまり多くなく、第３面の集積(**ＳＷ1301**)に伴うもの以外は、遺存状態が悪く小破片であった。各層出土遺物のうちで時代を特定できるものは、第107層出土の古墳時代の須恵器杯身(１)、第109層出土の弥生時代後期の広口壷(３)、第111層出土の弥生時代前期～中期の土器(８～19)・サヌカイト剥片(20)である。以下、これらの出土遺物について概要を述べたい。

第107層出土遺物(第７図－１・２、図版四)

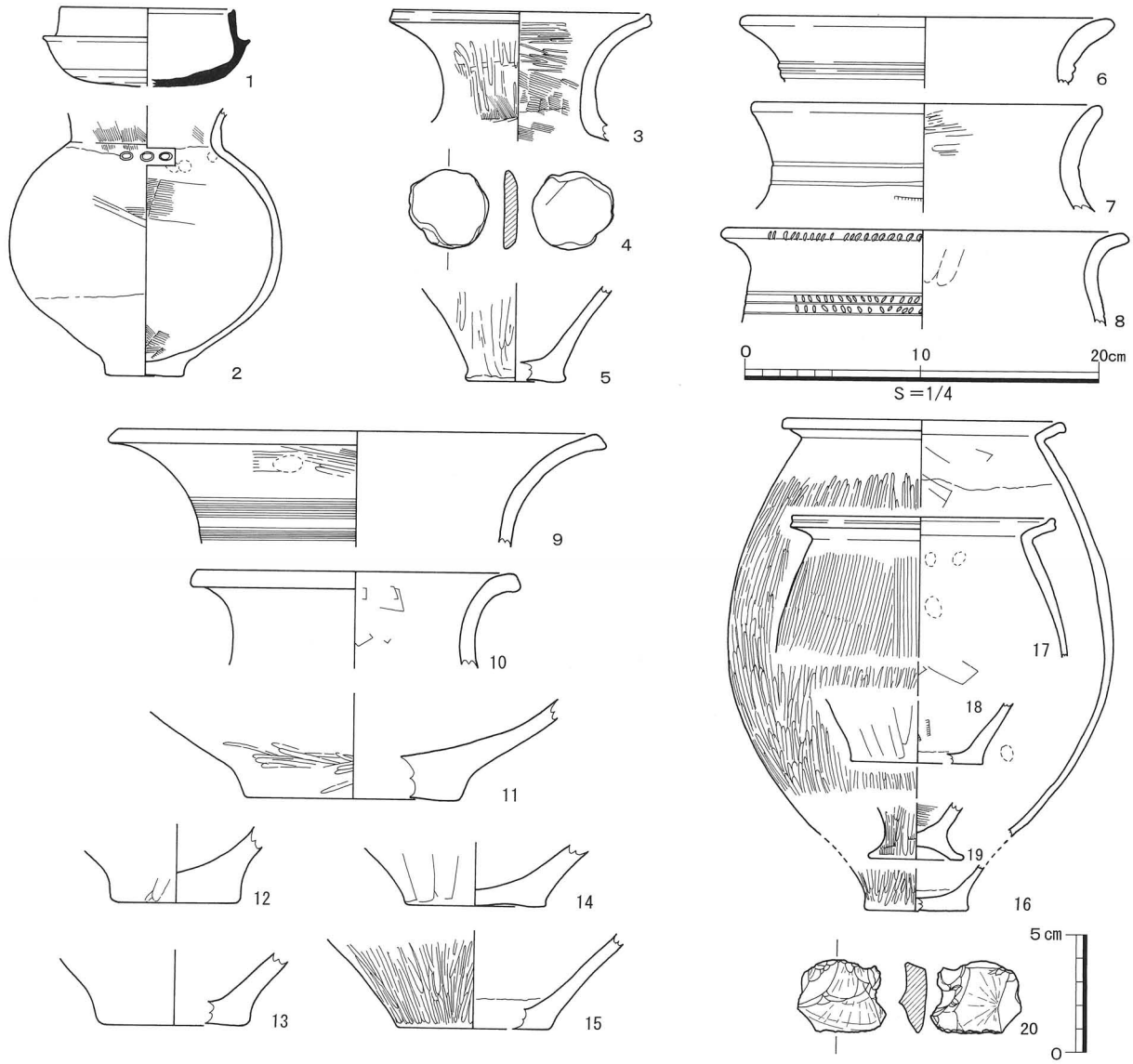
当該層は、旧平野川の下層部に堆積する土層である。層中から、須恵器杯身(１)、弥生時代後期の長頸壷(２)などが出土した。１は、約半分が遺存する杯身で、５世紀後半に比定できる。２は、肩部に３個１組の円形押圧文が施される長頸壷で、口縁部は欠損する。体部下半・上半・頸部に分割成形時の接合痕が顕著に見られる。

第109層出土遺物（第７図－３～７）

当該層は、第１面の遺構基盤層であり、第２面に対応する遺物包含層にも相当する。層中からは、弥生時代後期の広口壷（３）、弥生時代中期の土製円板（４）・甕（５）、弥生時代前期の壷（６・７）が出土した。３は口縁部のみが遺存するが、球形の体部を持つものと考えられる。４は周囲を粗く削り取ったままの土製円板の未成品である。厚さは0.8cmで、大形の土器片を転用したものである。５は粗いヘラケズリを施す薄手の甕底部で、弥生時代中期前半（河内Ⅱ様式）に比定できる。６は削り出し突帯、７は２条の沈線が施される壷で、弥生時代前期（河内Ⅰ－２・３様式）に比定できる。

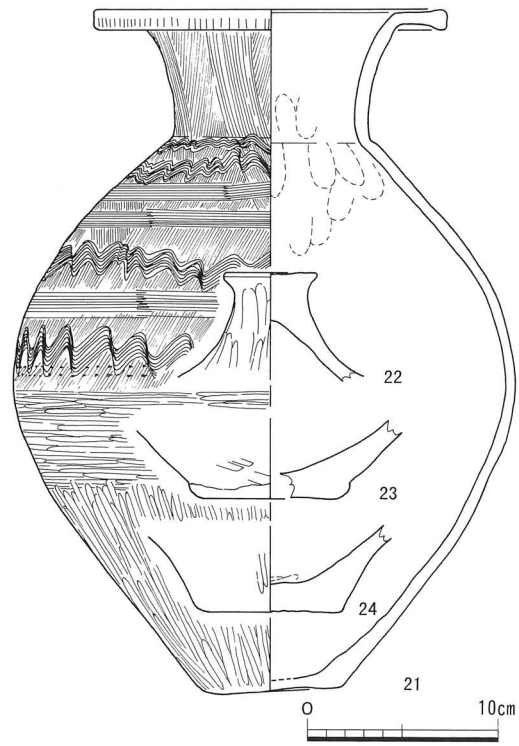
第111層出土遺物（第７図－８～20、図版四）

当該層は、第３面に対応する遺物包含層である。層中から、弥生時代前期の甕（８）や、弥生時代中期の広口壷（９・10）、壷底部（11～15）、甕（16・17）、甕底部（18・19）、サヌカイト剥片（20）



第７図　第107・109・111層出土遺物実測図（Ｓ＝土器類1/4・石製品1/3）

が出土した。8は口縁端部に刻み目、体部の3条の沈線文間に方向違いの刻み目を配する甕で、時期は弥生時代前期(河内Ⅰ－3様式)に比定できる。9は直線文をもつ大形の広口壷、10は無文の広口壷で、頸部は短い。11は大形壷の底部で、12・13は突出する厚い底部をもつ。一方、14・15は突出しない薄手の底部をもつ。16は図上でほぼ完形に復元できた甕で、外面ヘラミガキの典型的な弥生時代中期の河内型の甕である。一方、17は外面縦ハケの特徴をもつ大和型の甕である。18はやや大形の甕底部、19は鉢または甕の脚台状の底部で、手づくねによって脚台部を成形している。20はサヌカイト剥片で、上端は礫面を残し、下端には細かい剥離がわずかに認められる。



第8図　SW1301出土遺物実測図(S＝1/4)

SW1301出土遺物(第8図－21～24、図版四)

SW1301は、大形の広口壷(21)・甕用蓋(22)・壷底部(23・24)と花崗岩2点からなる。

21は外面体部下半に、1次成形時に施されたヘラケズリが見られる。2次調整は体部上半に縦方向のハケ目、下半にヘラミガキ調整を施す。内面は指ナデの痕跡が見られる。口縁下端部には線状の細い刻み目が密に施され、肩部～下半部までに波状文2帯、直線文2帯、波状文1帯、直線文1帯、波状文1帯、最下部にヘラ状工具によって施された列点文が2段見られる。底面中央は欠損しているが、故意に打ち欠いた可能性もある。時期は弥生時代中期前半(河内Ⅱ－2様式)に比定できる。22は甕用蓋である。23・24は厚手の壷底部である。

2)2区

①調査の方法と経過

2区は、南北5m×南側の東西4.6m・北側の東西7mの台形を呈する立坑で、東側は長吉ポンプ場地下構造物のコンクリート擁壁に取り付き、他の3方には鋼矢板が打接されている為、実際の調査面積は約25.5㎡である。掘削方法は、事前に1区よりも盛土の厚いことが分かっていたので、現地表面下3mまでを機械掘削、以下約2mを人力掘削として調査を進めた。最終的に確認した深さは、現地表面下5.3m(T.P.＋4.8m)までである。調査期間は平成2年11月3日から11月22日までの8日間である。なお、調査区は狭小であった為、特に地区割は行わなかった。

今回の調査では、機械掘削終了時点の現地表面下3.0m(T.P.＋6.8m)以下から複数の流路が交錯してあらわれ、最終面(T.P.＋5.3～5.4m)までの1.5m前後が複数の流路が重複する可能性が高い。調査区も狭く、水量も多かったため、平面的に明らかにできたのは、最終面(第4面)のみであり、ほかに少なくとも3時期の遺構面の存在が推測できる。これらの遺構面を、上から順に「第1～4面」と呼称した。

②基本層序

現地表面はT.P. ＋10.1m前後を測り、１区よりも１m程度高い。盛土は２m以上あり、調査区東側の大部分は、ポンプ場建設の際に約３mの深さ（第206層上面）まで破壊されている（第200層）。旧耕土は認められず、盛土直下に、１m前後にわたって粘土やシルト質粘土などが堆積する（第201～206層）。さらに掘削すると、数条の溝あるいは旧平野川流路の流水堆積物と推察できる湧水の多い礫～微砂混粘土・シルト・粗砂など（第207層～211層）が、調査区全体に見られ、調査区全体が溝あるいは旧河川内であったことが推定できる。なお、これらの堆積物層上面からは、少なくとも３時期の溝状遺構（ＳＤ2101～ＳＤ2301）を検出することができた。

以上の溝あるいは旧河川堆積物層を除去すると、厚さ0.2～0.4mを測る微砂混じり粘土層が、調査区全体でみられた。この層は、弥生時代中期後半（河内第Ⅳ様式）までの遺物を多量に含む（第212層）。

さらに下層部にいくと、再び河川流路（ＳＤ2401）堆積物と推察できる層（層厚約１m）を確認し、最終基盤層の青灰色シルト～微砂（第213層）に至る。直下には、灰色細砂～中砂層（第214層）が0.2m、調査最下部に褐灰色粘土層（第215層）が0.3m以上堆積することを確認した。

１区との対応は、黒灰色微砂混粘土層（第211層）が暗青灰色粘土層（第109層）に、青灰～緑灰色微砂混じり粘土層（第212層）が暗緑灰色シルト層（第110層）に、青灰～緑灰色シルト～微砂層（第213層）が青灰色シルト層（第112層）上面にそれぞれ相当する。下層については、灰色細砂～中砂層（第214層）が粗砂層（第115層）に、褐灰色粘土層（第215層）が褐灰粘土層（第117層）に対応する。土質は総合的に１区に比べて、砂粒の径が大きく、含水量が多い。

以下、各層の特徴を記す。なお、第214・215層は下層確認の際に確認した土層である。

第200層：盛土。層厚約1.0m。

第201層：土質は黄茶色礫混じり粘土を呈する。層厚0.4m前後。当該層上面はT.P. ＋7.7～7.8mを測る。

第202層：土質は灰茶色微砂混じりシルト質粘土を呈する。層厚0.15m前後。

第203層：土質は茶灰色シルト質粘土を呈する。層厚0.05～0.1m。

第204層：土質は灰黄色微砂混じりシルト質粘土を呈する。層厚0.1m前後。

第205層：土質は暗黄茶色シルト質粘土を呈する。層厚0.15～0.2m。第201層からこの層までは、南が高く北が低い。また、第204層以外でマンガン斑が顕著にみられる。

第206層：土質は灰色礫混じり粘土を呈する。層厚0.1～0.3m。東側の2/3は、ポンプ場建設時の撹乱の影響をうけ、青灰色を呈する（第206b層）。

第207層：溝あるいは旧平野川流路の流水堆積物層。土質は青灰色微砂を呈する。層厚0.05～0.2m。当該層上面で溝状遺構（ＳＤ2101）が切り込む為、上面を「第１面」と呼称した。T.P. ＋6.7m前後を測る。

第208層：溝あるいは旧平野川流路の流水堆積物層。土質は青灰色微砂～シルトを呈する。層厚0.2m前後。当該層上面より溝状遺構（ＳＤ2201）が切り込む為、上面を「第２面」と呼称した。T.P. ＋6.6m前後を測る。

第209層：溝あるいは旧平野川流路の流水堆積物層。土質は白灰～青灰色細砂～中砂を呈する。層厚0.1m前後。当該層上面より溝状遺構（ＳＤ2301）が切り込む為、上面を「第３面」

と呼称した。T.P. ＋6.4m前後を測る。第207～209層までは含水量が多く、これらもまた溝内堆積土の可能性がある。

第210層：土質は暗青灰色微砂混じり粘土を呈する。層厚0.1～0.2m前後。直上層の影響を受けた為か、グライ化する。

第211層：土質は黒灰色微砂混じり粘土を呈する。層厚0.05～0.15m。粘性が強く、炭を少量含む。

第212層：土質は青灰～緑灰色微砂混じり粘土を呈する。層厚0.15～0.4m。分銅形土製品(第10図－27)の他、弥生時代中期(河内Ⅳ様式)までの遺物(第13図－28～48)を比較的多量に含む。

第213層：土質は青灰～緑灰色シルト～微砂を呈する。層厚0.1m前後。当該層上面で溝状遺構(ＳＤ2401)を検出した為、上面を「第４面」と呼称した。T.P. ＋5.4mを測る。調査区北半分がＳＤ2401肩部の斜面となっており、0.6～1.0m前後の層厚をもつ溝内埋土(⑭～⑲層)が確認できた。

第214層：土質は灰色細砂～中砂を呈する。層厚0.2m。

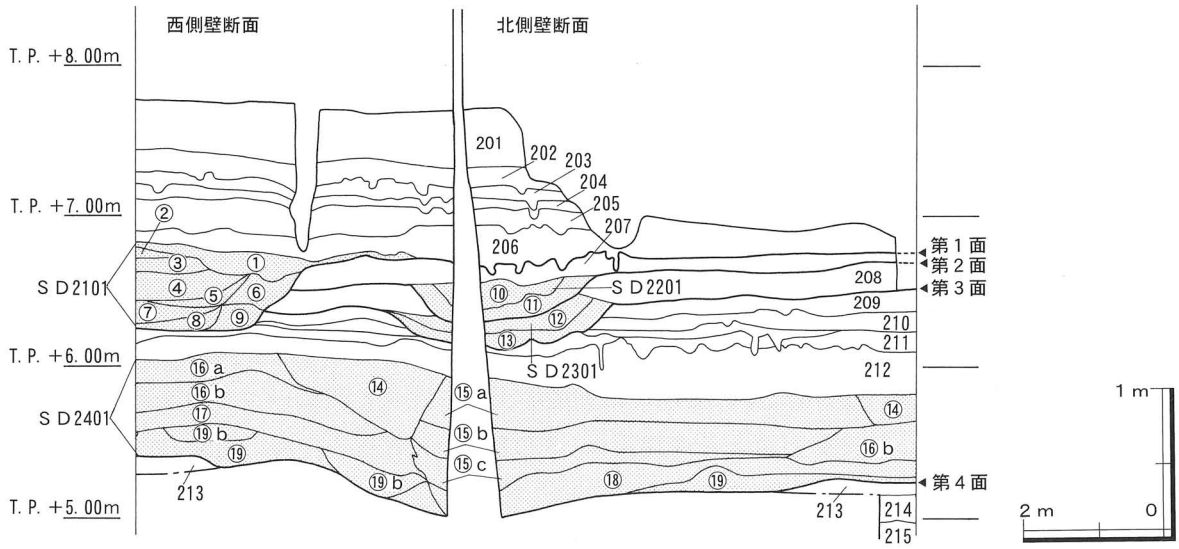
第215層：土質は褐色粘土を呈する。層厚0.3m以上。

③検出遺構と出土遺物

・検出遺構

第１面

灰色礫混じり粘土層(第206層)を除去したところ、青灰色微砂層(第207層)上面で、北東－南西に伸びる溝状遺構１条(ＳＤ2101)を検出した。当該面は、現地表面下3.3～3.4m(T.P. ＋6.7m)を測る。



第９図　２区西・北壁断面図(Ｓ＝水平1/100・垂直1/50)

溝（ＳＤ）

ＳＤ2101

調査区南東部で検出した溝状遺構である。南西－北東方向に伸びる溝で、北側の肩部を検出した。壁面の堆積状況から、南側の肩は調査区のすぐ外側にあるものと推察でき、幅４ｍ程度が想定できる。肩部は２段に掘り込まれており、溝底部は平坦である。深さは0.5ｍを呈する。

埋土は上から順に、黒褐色礫混じり微砂・粗砂の互層（第９図－①層）、黄白色微砂～粗砂層（②層）、灰色微砂混じり粘土層（③層）、灰色微砂・シルト・粘土の互層（④層）、灰黒色粗砂混じり粘土層（⑤層）、青灰色微砂～礫混じり粘土層（⑥層）、灰黒色粘土・微砂・礫の互層（⑦層）、黒灰色シルト混じり粘土層（⑧層）、青灰色微砂混じりシルト質粘土層（⑨層）である。①層は、溝肩部から外側へ幅１ｍ×層厚５ cm 前後オーバーフローする。⑥層は北側肩部上段に、⑨層は北側肩部下段に堆積する。また、⑧層からは楔形石器（第11図－25・26）が出土した。

第２面

第１面基盤層である青灰色微砂層（第207層）を除去したところ、青灰色微砂～シルト層（第208層）上面で、北西－南東方向に伸びる溝状遺構１条（ＳＤ2201）を検出した。当該面は、T.P. ＋6.6ｍ前後を測る。

溝（ＳＤ）

ＳＤ2201

調査区北西部で検出した溝状遺構である。南東－北西に伸びる溝で、ＳＤ2101に直交している。調査区北西隅でごく一部を検出した程度で、そのほとんどがＳＤ2101に切られており、規模等の詳細は不明である。

埋土は上から順に、灰色シルト質粘土と黄白色粗砂の互層（第９図－⑩層）、青灰色シルト～微砂と黄白色粗砂の互層（⑪層）である。

第３面

第２面基盤層である青灰色微砂～シルト層（第208層）を除去したところ、白灰～青灰色細砂～中砂層（第209層）上面で、北西－南東方向に伸びる溝状遺構１条（ＳＤ2301）を検出した。当該面は、T.P. ＋6.4～6.5ｍを測る。

溝（ＳＤ）

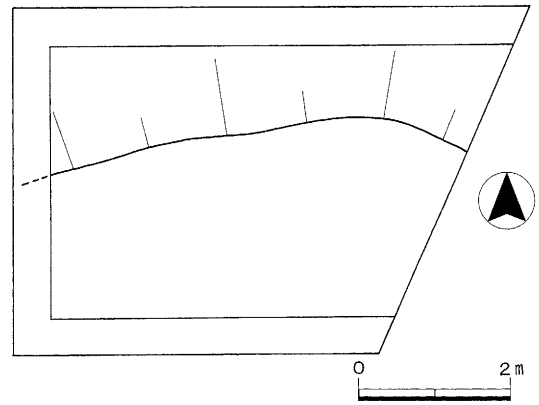
ＳＤ2301

調査区北西部で検出した溝状遺構である。南東－北西方向に伸びる溝で、ＳＤ2201の下に重複する。当該溝は、後世に派生したＳＤ2201と同規模・同方向のものであり、ＳＤ2101に直交するため、そのほとんどが破壊され、詳細は不明である。

埋土は上から順に、青灰～灰白色粘土・シルト・微砂の互層（第９図－⑫層）、暗青灰色粗砂・礫混じり微砂～粘土層（⑬層）である。肩部には青灰色粘土～粗砂の互層や、暗灰色粘土～粗砂の互層が堆積する。

第４面(第10図、図版三)

弥生時代中期までの遺物を包含する青灰～緑灰色微砂混じり粘土層(第212層)を除去したところ、青灰～緑灰色シルト～微砂層(第213層)上面で、東－西方向に伸びる溝状遺構１条(ＳＤ2401)を検出した。当該面は、現地表面下4.7m(T.P. ＋5.4m前後)を測る。



第10図　２区第４面平面図(Ｓ＝1/100)

溝(ＳＤ)

ＳＤ2401

調査区北部で検出した溝状遺構である。東西方向の溝で、南側斜面にあたる部分を検出した。このような検出状況から、溝肩部は調査区より南方、流路の中心は調査区より北方に位置することが推定できる。調査では他にも数本の流路が確認できたが、最終的な検出面は当該溝が構築された第213層上面であった。規模は検出深度が、北部0.6m、南部0.9～1.1mを測る。

埋土の堆積状況は、調査区北部(流路の中心側)と南部(流路の岸側)で大きく異なる。調査区北部では、上から順に、黒灰色粘土層(第９図－⑭層)、青灰色微砂混じりシルト質粘土～灰色粗砂層(⑮ａ～⑮ｃ層)、青黒色シルトと粗砂の互層(⑱層)が堆積する。南部では、上から順に、暗青灰～緑灰色微砂混粘土～シルト質粘土層(⑯ａ・⑯ｂ層)、暗青灰色微砂混シルト質粘土と緑灰色シルトの互層(⑰層)が堆積する。南北ともに最下層には、緑灰色シルトと黒色粘土の互層(⑲層)が堆積し、その上面の窪み部分に黒色粘土がブロック状に堆積する(⑲ｂ層)。

埋土の堆積順序は、⑲層を切って⑱層が堆積し、⑱層の上に⑰層が堆積する。調査区北部では、さらに⑰層を切って⑮層が堆積する。南部では、⑰層の上に⑯層が堆積する。最終的には、ほぼ水平に堆積した⑮・⑯層上面に、⑭層が堆積する。

⑭層は最上部に堆積する土層で、きわめて粘性が強く、有機物や炭などが多量に含まれている。層中には、炭とともに弥生時代中期(河内Ⅳ様式)に比定できる土器・石器などが多量に含まれ、弥生時代前期の遺物も少量認められる(第14図－49～72、第15図－73～83)。

⑮層は、⑭層に切られ、溝北側の肩部を構成する。⑮層はさらに、上から順に青灰色微砂混じりシルト質粘土層(⑮ａ層)、青灰色微砂混じりシルト質粘土と灰色中砂の互層(⑮ｂ層)、灰色中砂層(⑮ｃ層)の３枚の層に細分できる。下層ほど砂粒は粗く、含水量も多くなる傾向がある。最下層の⑮ｃ層からは、弥生時代中期(河内Ⅲ様式)の水差し形土器(84)が１点出土した。

⑯層は、⑭層に切られ、溝南側の肩部を構成する。⑯層はさらに、上部の暗青灰～緑灰色微砂混じり粘土層(⑯ａ層)、下部の暗青灰色微砂混じりシルト質粘土層(⑯ｂ層)に細分できる。上下２枚の類似する土層は、下方にいくほど色調は青みが強くなり、砂粒は粗く、含水量が多くなる。⑯ａ層は弥生中期後半(河内Ⅲ～Ⅳ様式)の土器類(85～92)、⑯ｂ層は弥生中期前半(河内Ⅱ～Ⅲ様式)の土器類(93～98)のほか、サヌカイト剥片(99)、砥石または叩き石(100)、赤色顔料の付着する砂岩の小礫(101)などを包含する。

調査区南部で確認できた⑰層から、弥生時代前期の土器類(102～116)がまとまって出土した。

調査区北部で確認できた⑱層は、直下に堆積する⑲層を攪拌した土層であり、含水量が多い。

⑲ｂ層は、⑲層上面の窪み内に部分的に堆積したもので、壁面北西隅の窪みからは、弥生時代前期の大形鉢(117)が１点出土した。

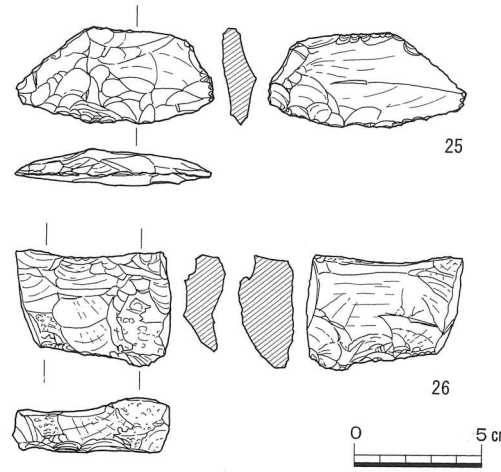
・出土遺物

上層部ではＳＤ2101から楔形石器が２点出土しただけであるが、下層部の遺物の出土量はきわめて多く、特にＳＤ2401埋土⑭・⑰層からの出土が目立つ。第212層からは、分銅形土製品をはじめとして、弥生時代中期(河内Ⅱ～Ⅳ様式)の土器類・叩き石などの石器類が出土する。ＳＤ2401埋土⑭層からは、弥生時代前期(河内Ⅰ様式)～弥生時代中期(河内Ⅱ～Ⅳ様式)の土器類のほか、石包丁、砥石、叩き石、サヌカイト剥片、小礫などが出土する。一方、埋土⑰層からは、弥生時代前期(河内Ⅰ様式)の土器類がまとまって出土した。

出土した石器類のなかには、赤色顔料が付着するものや、火を受けたと推察できるものが数点見られる。

ＳＤ2101出土遺物(第11図－25・26)

ＳＤ2101の最下層部に堆積する黒灰色シルト混じり粘土層(⑧層)から、上下両側縁に敲打痕がみられる楔形石器(25・26)が出土した。25は横長の剥片を用いた楔形石器で、幅7.8cm、長さ3.9cm、厚さ1.3cm、重さ31.0ｇを測る。26はＡ面に礫面を残す楔形石器で、幅6.0cm、長さ4.6cm、厚さ2.2cm、重さ73.4ｇを測る。



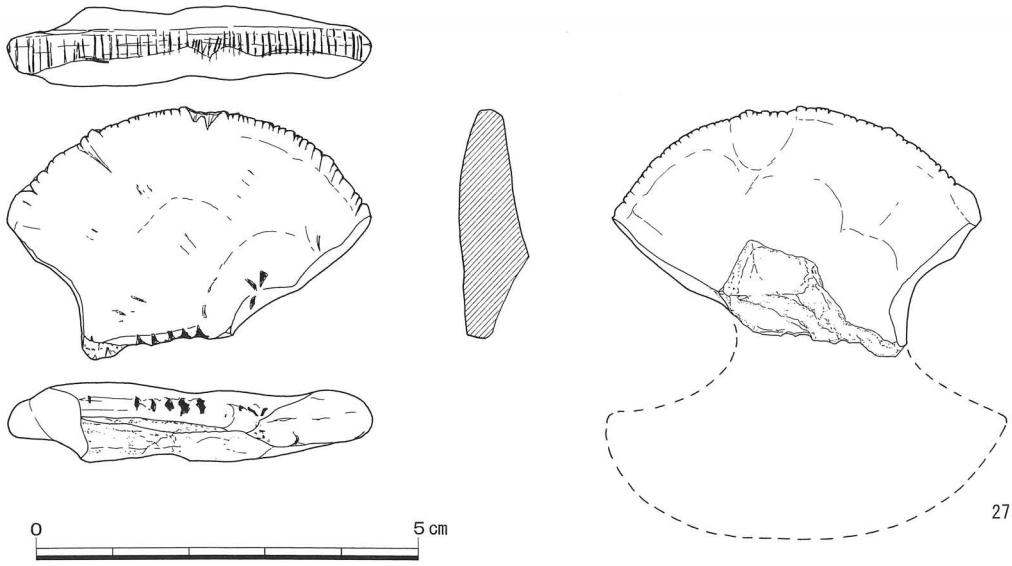
第11図　ＳＤ2101出土遺物実測図(Ｓ＝1/3)

第212層出土遺物(第12図－26、第13図－27～48、図版六)

当該層は、第４面で検出したＳＤ2401直上層に堆積する遺物包含層で、弥生時代中期後半に比定できる土器のほか、分銅形土製品、叩き石・砥石などの石器類を比較的多量に含む。

ここで特に注目すべき出土遺物として、分銅形土製品(27)が挙げられる。上半部にあたる約1/2が遺存し、最大幅4.8cm、残存長3.1cm、厚さ0.4～0.9cm、中央部幅約0.3cmを測る。手づくねで成形され、ヘラ状工具によってくりこみ部を成形する。表面はほぼ平坦で、くびれ部に見られる段が辛うじて遺存する。文様は上縁部に刻み目(９本前後/cm)、くりこみ部に刺突文(５本/cm)を施す。裏面はくりこみ部周辺に厚みをもつ。裏表共に摩滅が著しい為、顔などが描かれていたかどうかは不明である。色調は淡黄灰色を呈する。焼成は良好。なお、角南氏は「表面にヘラ状工具によって目を表現していると思われる痕跡が２個あり」(角南1993)と評価している。

28は壷用蓋であるが、内面口縁部に煤が厚く付着しているため、煮沸用具(甕の蓋)として利用されたものと推察できる。29～33は広口壷で、淡橙色系の色調を呈する。29は口縁部内面に列点文、口縁端面に円形浮文を貼り付ける。30は口縁部内面に扇形文、口縁端面に列点文を施す。31・32は無文である。33は図上で復元したもので、頸部から体部上半にかけて、１単位が幅広で密な



第12図　分銅形土製品実測図（S＝1/1）

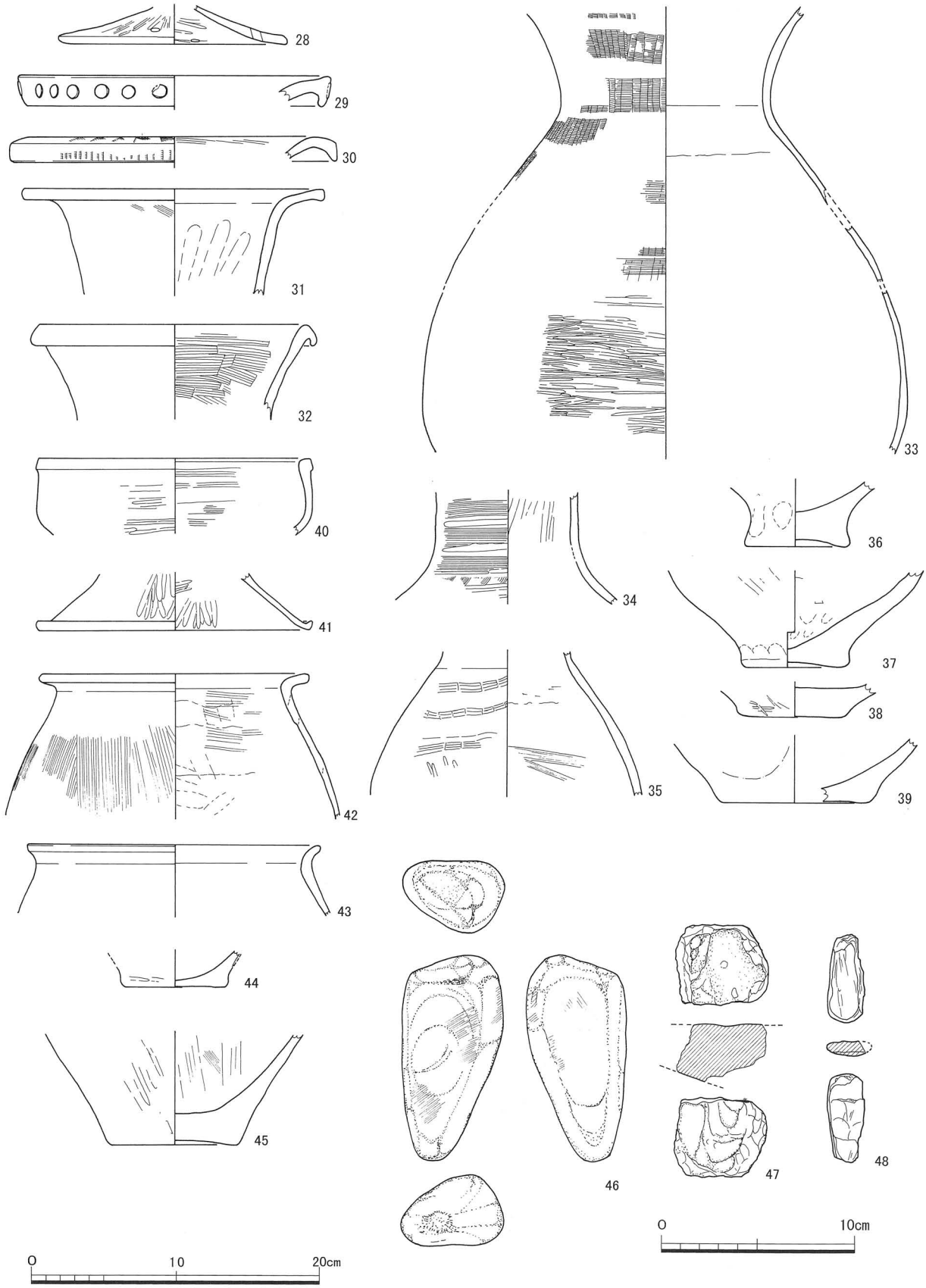
簾状文を7帯施す。34・35は壷で、褐色系の色調を呈する。34は頸部に直線文3帯と、この直下部に扇形文を施す。35は体部上半に粗い簾状文を3帯施す。36～39は壷底部である。このうち、38の底部裏面には赤色顔料が付着する。40は段状口縁をもつ鉢または台付鉢で、形態からみれば櫛描文や棒状浮文などで飾るものが一般的であるが、無文である。ただし、風化のためか器表面の剥離が進んでいることから、本来は文様があった可能性もある。41はやや丈高の、高杯または台付鉢の脚裾部である。42～44は弥生時代中期に比定できる甕である。45は厚手大形の底部で、弥生時代前期の甕底部の特徴をもつ。46～48は石器である。46はやや偏平な円筒形の砂岩を用いた敲石で、上下に敲打痕がみられる。また、側面には擦痕もあることから、磨石・砥石としても利用されたものと推察できる。47は砂岩製の砥石で、4側面は欠損、上下に平坦面をもつ。上面中央には沈線状の窪みがあり、それに斜交する使用痕がある。48は偏平な長円形を呈する片岩で、全体に赤色顔料が付着する。

ＳＤ2401出土遺物

・ＳＤ2401⑭層出土遺物（第14・15図－49～83）

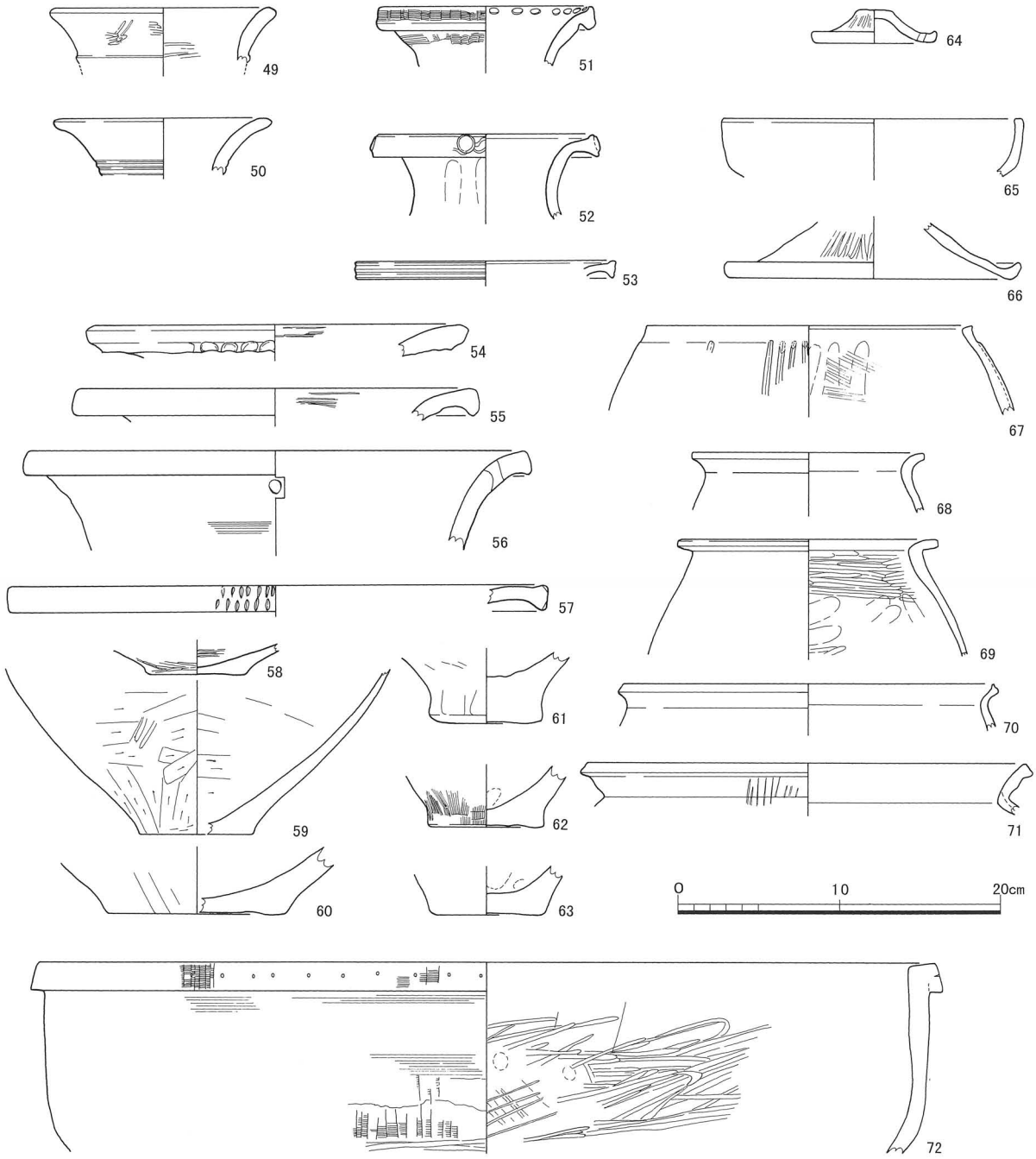
当該層から、弥生時代前期～中期後半（河内Ⅰ～Ⅳ様式）に比定できる土器や石器が多量に出土した。

49・50は弥生時代前期（河内Ⅰ－2・3様式）の小形壷で、49は削り出し突帯と沈線文、50は3条の沈線文を施す。51は簾状文と円形浮文で飾る弥生時代中期（河内Ⅲ様式）の小形壷である。52・53は凹線文・列点文・波状文・円形浮文などで飾る中期後半（河内Ⅳ様式）の壷で、ともに色調は橙色系を呈す。53は煤が付着する。54～57は大形の広口壷で、54・57は刻み目、56は直線文を施す。中期前半（河内Ⅱ様式）にまで遡るものと推察できる。56には紐孔が1孔残存しており、煤が付着する。58～63はすべて壷の底部で、59はヘラケズリの痕跡が顕著である。64はミニチュアの壷用蓋で、完存する資料である。きわめて丁寧に作られ、紐孔も2孔1組1対が穿たれている。65・66はⅣ様式の高杯である。67はやや大形の鉢または無頸壷で、棒状浮文のみで飾られ、他の

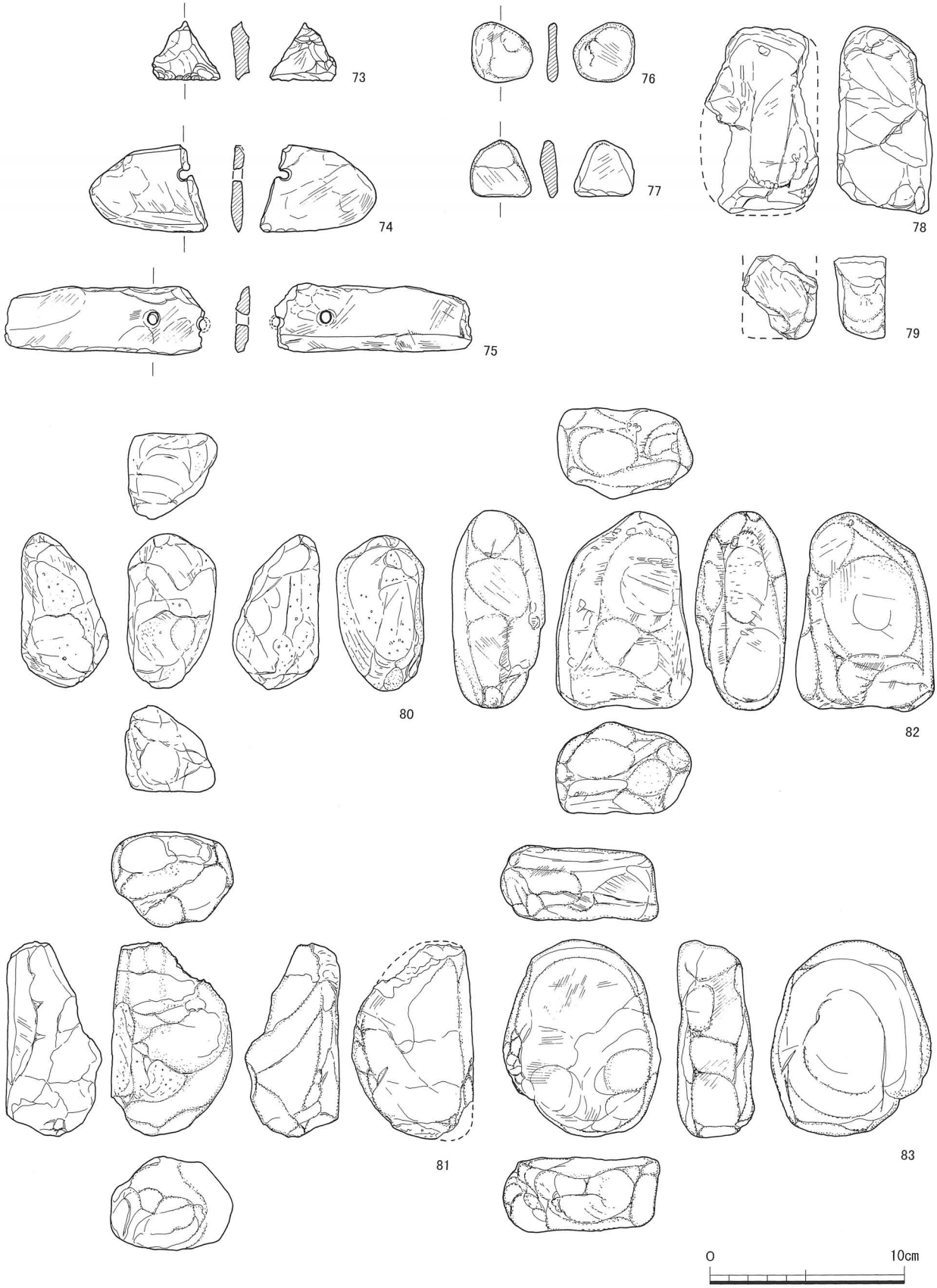


第13図　第212層出土遺物実測図（Ｓ＝土器1/4・石製品1/3）

文様は見られないが、前述した第212層出土の鉢(第12図－40)同様、無文化が進んだ段階のものと考えられる。68・69は弥生時代中期に比定できる甕である。一方、70・71は大形の甕で、口縁部上下に拡張され、端面が凹面となるもので、調整にも縦方向のハケ目が用いられる。橙色系の色調を呈しており、他地方のものか、新しい段階のものであろう。72は口径50cm を超える大形の鉢で、口縁部は段状口縁をなし、端面に簾状文・刺突文、体部に直線文２帯・簾状文１帯を施す。73は平面三角形を呈する。サヌカイト剥片で、一側縁に剥離がみられる。 74は半分近くが遺存する石包丁で、刃縁は丸みを帯び、刃の形態は片刃、やや外灣気味である。75は半分以上遺存する石包丁で、刃縁は直線的、刃の形態は片刃、直線刃である。紐孔は両面から螺旋状に穿孔されて

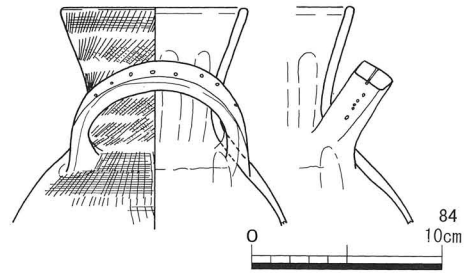


第14図　ＳＤ2401⑭層出土遺物実測図－１（Ｓ＝1/4）



第15図　ＳＤ2401⑭層出土遺物実測図－２（Ｓ＝1/3）

いる。背面中央部・紐孔周囲には使用痕がみられる。76は平面円形を呈する偏平な砂岩で、中央部はわずかに窪む。両面に細かい擦痕がある。77は平面三角形を呈する花崗岩で、A面は一辺が面取りされ、そこに擦痕がみられる。B面には全体に擦痕がみられる。78・79は角柱を呈する砂岩製の砥石である。使用痕は78が上面と側面端部の2ヵ所、79は上面の1ヵ所にある。80・81はいずれも平坦面1面を有する砂岩の円礫で、鶏卵大～拳大の大きさである。ともに上下端に敲打痕がみられ、他の面には擦痕があることから、敲石・砥石として使用されたものと考えられる。火をうけたためか、表面の損傷は著しい。このうち、81には赤色顔料が多量に付着する。82・83はやや偏平な楕円形を呈する砂岩である。82は上下2面と側面の3方に擦痕があり、そのうち側面の1面には敲打痕も認められ、下面中央部は窪んでいることから、砥石・敲石・磨石として使用されたものと思われる。83には敲打痕はみられず、上面と側面の3方に擦痕があり、下面中央部は窪んでいることから、砥石・磨石に使用したものと考えられる。



第16図　SD2401⑮c層出土遺物実測図(S＝1/4)

・SD2401⑮c層出土遺物(第16図－84、図版七)

当該層から、弥生時代中期(河内Ⅲ様式)の水差し形土器(84)が1点出土した。84は、体部に櫛描き簾状文や列点文などを施す。把手の断面形態は長方形で、把手上面に不揃いな刺突文を施す。

・SD2401⑯層出土遺物(第17図－85～101、図版七)

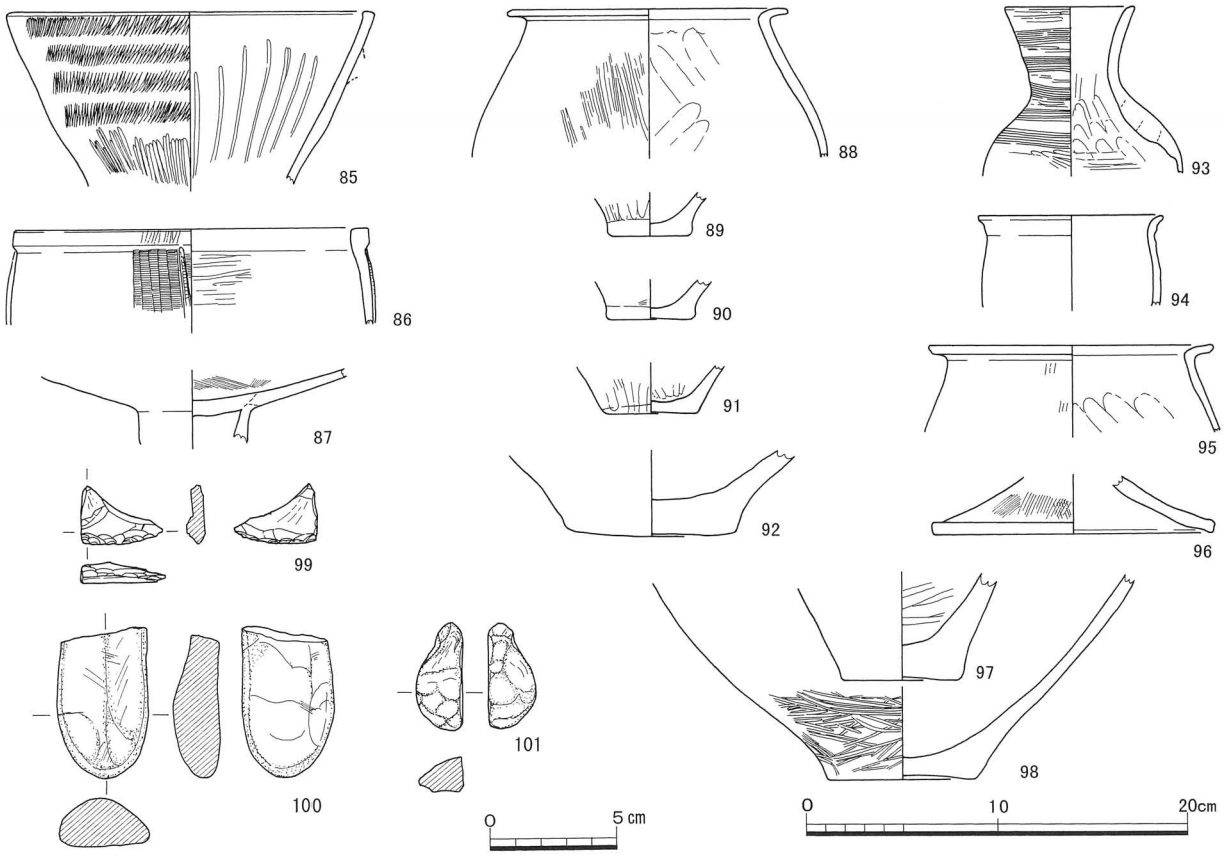
⑯a層から、弥生時代中期(河内Ⅱ－3～Ⅲ様式)に比定できる遺物(85～92)が出土した。⑯b層からは、弥生時代中期前半(河内Ⅱ－1・2様式)に比定できる遺物(93～101)が出土した。以下、a～b層の順に概要を述べたい。

⑯a層から出土した85は、把手付鉢で、形態・調整や文様の施し方などは弥生時代中期に一般的に見られるものであるが、文様は櫛描き列点文ではなく、単位の長い刻み目を列点文風に配し、さらにその上からヘラミガキを施す。体部内外面に施すヘラミガキは極めて丁寧で、底部内面に放射状のヘラミガキを施す。把手は接合部から欠損する。86は段状口縁に列点文、体部に棒状浮文と簾状文で飾る弥生時代中期後半(河内第Ⅳ様式)の典型的な鉢または台付鉢である。87は太い脚柱状部をもつ大形の高杯である。88は弥生時代中期に比定できる甕で、89～91はその底部である。92は厚手の壷底部である。93は小形の細頸壷で、口頸部から肩部まで粗雑な直線文を6帯施している。全体にひずんでいるため、水差し形土器を表現している可能性が高い。

⑯b層から出土した94は小形、95は大形の甕で、弥生時代中期に比定できる。96は小形の高杯脚部で、裾部外面にヘラミガキを施す。97はやや厚手の底部で、弥生時代前期の甕である可能性が高い。98は薄手で大きく開く体部～底部をもつ壷である。100は長円形を呈すると推察できる砂岩の礫で、一端は欠損している。1面は丸く、1面は平らである。両面に細かい擦痕がみられ、砥石または磨石と考えられる。101は平面半円形を呈する砂岩の小礫で、先端に赤色顔料が付着している。

・SD2401⑰層出土遺物(第18図－102～116、図版七)

当該層から、弥生時代前期(河内Ⅰ様式)に比定できる遺物が出土した。

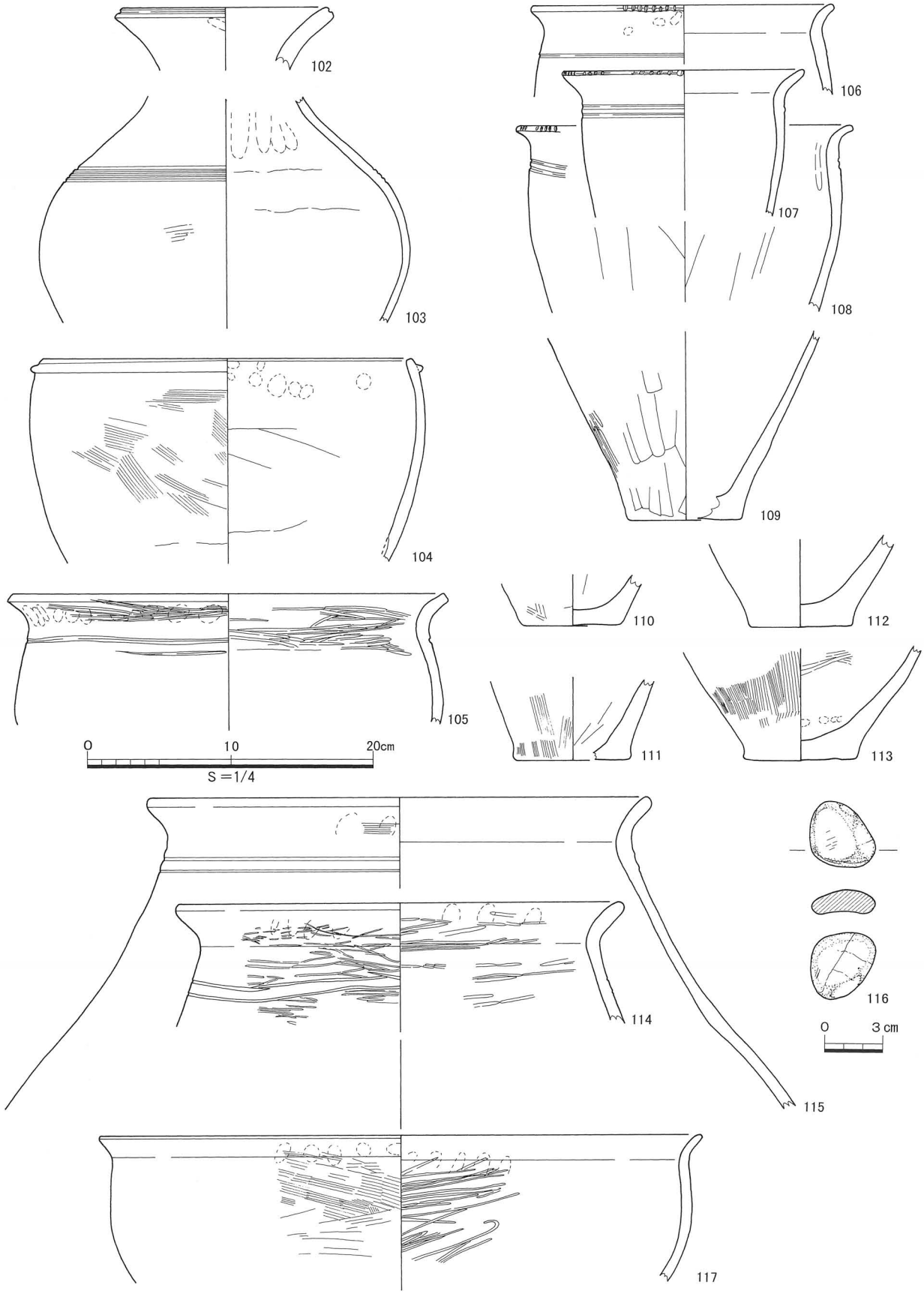


第17図　ＳＤ2401⑯ａ層（85～92）・ｂ層（93～101）出土遺物実測図（Ｓ＝土器1/4・石製品1/3）

102・103は、弥生時代前期（河内Ｉ－３・４様式）に比定できる壷である。102は壷の口縁部で口縁端部に沈線を施す。103は壷の体部で体部上半部に沈線を３条施す。104は鉢で、口縁部には、ヘラ状工具による刻み目を施す突帯を貼り付ける。105は鉢または大形の甕で、屈曲部に沈線を２条施す。このうち１条は全周するが、１条は途切れる粗雑なものである。106～113はいずれも甕である。106は口縁端部に刻み目、屈曲部に１条の沈線をめぐらせるもので、体部の張りは強く、新しい要素をもつものと考えられる。107・108はともに屈曲部に２条の沈線を有し、口縁端部の刻み目は、数個まとめたものを一定間隔に施す。ただし、107は口径16.0cm、108は口径23.0cm と大きさが異なる。109～113は底部であり、いずれも火を受けたためか器壁表面は剥離している。109は108の底部の可能性が高い。114・115は大形の壷で、ともに肩部の屈曲部に２条の沈線を施す。形態、色調、胎土等が類似する。115の肩部に施す下方の沈線は全周せず、鉢（105）の施文法に類似する。116は平面三角形を呈する偏平な砂岩の小礫である。両面に細かい擦痕がわずかにみられ、磨石の可能性も考えられる。片面に赤色顔料が付着する。

・ＳＤ2401⑲ｂ層出土遺物（第18図－117）

当該層から、弥生時代前期（河内Ｉ様式）に比定できる鉢（117）が１点出土した。117は無文で、口径40cm を超える大形の鉢である。体部形態は浅い半球形を呈するものであり、新しい要素をもつものと考えられる。



第18図　ＳＤ2401⑰層(102～116)・⑲ｂ層(117)出土遺物実測図　(Ｓ＝土器1/4・石器1/3)

表２　出土遺物観察表(1)

番号	出土地点	器種	法量　(cm)	色調(内面)〔断面〕	胎土	焼成	調整・形態等の特徴	残存率等
1	第107層	須恵器杯身	口　径　9.8 受部径　11.8 器　高　4.4	暗灰色～青灰色	密	良好	・回転ケズリ後回転ナデ。	・1/2 ・灰かぶり ・(ＴＫ47)
2	第107層	弥生後期短頸壷	最大径　15.4 底　径　4.4	灰褐色～にぶい褐色	やや粗	良好	・外面体部タタキ後ナデ、頸部縦ハケ。内面ハケ後ナデ。分割成形時の接合痕顕著に見られる。 ・肩に竹管押圧文3個1組	・2/3
3	第109層	後期広口壷	口　径　16.4	淡褐色～にぶい褐色	やや粗	良好	・ハケ後ヘラミガキ。 ・口縁外端面は強いヨコナデにより凹面となる。	・1/2(図上で復元)
4	第109層	中期土製円板	最大径　4.6 厚　さ　0.8	淡赤褐色(淡褐色)	粗	良好	・未成品、周囲を粗く割り取る。 ・元の調整は不明	・完存 ・器表面剥離
5	第109層	中期甕	底　径　5.2	暗褐色～茶褐色	粗	良好	・外面体部ヘラケズリ後縦ヘラミガキ。内面、底部裏面ナデ。	・1/4
6	第109層	前期壷	口　径　20.5	淡灰褐色(灰色)	粗	良好	・ナデ、ヨコナデ。 ・頸部に削り出し突帯(沈線2条以上)。	・1/10
7	第109層	前期壷	口　径　19.5	淡赤褐色～にぶい褐色	粗	良好	・ヘラミガキ、ナデ。 ・頸部に沈線2条。	・1/10
8	第111層	前期甕	口　径　22.2	淡赤黄褐色(灰色)	やや粗	良好	・ナデ、ヨコナデ。 ・口縁端部に刻み目、腹部に沈線と刻目で綾杉文状の文様を施す。	・1/6
9	第111層	中期広口壷	口　径　27.0	茶褐色	粗	良好	・外面ハケ、内面調整不明。 ・頸部に櫛描き直線文(8本 /1.2cm)2帯以上。	・1/4 ・内面器表面剥離
10	第111層	中期広口壷	口　径　18.2	茶褐色	粗	良好	・ナデ、ヨコナデ。	・1/4
11	第111層	中期壷	底　径　11.8	茶褐色	粗	良好	・外面体部横ヘラミガキ、底部裏面・内面ナデ。	・1/2
12	第111層	中期壷	底　径　6.7	淡灰褐色	やや粗	良好	・ナデ？不明瞭。	・全周 ・黒斑あり ・器表面剥離
13	第111層	中期壷	底　径　7.2	茶褐色	粗	良好	・ナデ、ヨコナデ。	・1/2
14	第111層	中期甕	底　径　7.8	淡灰褐色	粗	良好	・外面体部ヘラナデ、内面体部・底部裏面ナデ。	・1/2 ・黒斑あり
15	第111層	中期甕	底　径　10.4	淡茶褐色(黒灰色)	粗	良好	・体部縦ヘラミガキ、内面体部・底部裏面ナデ。	・1/4
16	第111層	中期甕	口　径　15.5 底　径　5.4	茶褐色～黒灰色	やや粗	良好	・外面体部縦ヘラミガキ。内面体部・底部裏面ナデ、口縁部ヨコナデ。	・1/2(図上で復元)
17	第111層	中期甕	口　径　14.4	淡赤褐色	密～やや粗	良好	・外面体部縦ハケ、内面体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	・1/4 ・外面に煤付着
18	第111層	中期甕	底　径　7.4	淡赤褐色	密～やや粗	良好	・外面体部ヘラナデ、内面体部・底部裏面ナデ。	・1/4
19	第111層	中期甕	底　径　5.2	茶褐色～淡灰色　(灰色)	密	良好	・外面体部ハケ後縦ヘラミガキ、底の窪みをナデ。内面横ハケ。	・全周
20	第111層	剥片	最大幅　3.8 最大長　3.1 最大厚　1.2				・上端に自然の礫面を残す。上端には粗く、下端には細かい剥離が見られる。	
21	SW1301	中期広口壷	口　径　17.9 底　径　7.3 器　高　36.3	淡黄褐色(灰黒色)	密	良好	・体部ヘラケズリ後外面下半ヘラミガキ、上半縦ハケ。内面指押さえ後ナデ、口縁部ヨコナデ。 ・口縁端部刻み目、体部上半に波状文・直線文・列点文。	・ほぼ完存 ・黒斑あり
22	SW1301	中期甕用蓋	つまみ径　4.7	淡灰褐色	やや粗	良好	・体部ヘラミガキ、天井部ナデ。	・全周 ・黒斑あり
23	SW1301	中期壷	底　径　7.0	淡赤褐色(灰色)	やや粗	良好	・ヘラナデ後底部裏面までナデ。	・1/4
24	SW1301	中期壷	底　径　6.8	淡赤褐色	粗	良好	・ヘラナデ後底部裏面までナデ。	・全周

表 2　出土遺物観察表(2)

番号	出土地点	器種	法量　(cm)	色調(内面)〔断面〕	胎土	焼成	調整・形態等の特徴	残存率等
25	SD2101 ⑧層	楔形石器	最大幅 7.8 最大長 3.9 最大厚 1.3				・横長の剥片を利用、周囲は粗く調整。 ・ａｂ両面の上下端に打撃による階段状剥離。	
26	SD2101 ⑧層	楔形石器	最大幅 6.0 最大長 4.6 最大厚 2.2				・ａ面と上端面に自然の礫面を残す剥片を利用、左右両側縁は未調整。 ・ａｂ両面の上下端に打撃による階段状剥離が顕著である。	
27	第212層	分銅形土製品	最大幅 4.8 最大長 3.1 最大厚 0.9	淡褐色	やや粗	良好	・手づくね成形。 ・外縁(9本前後 /1cm)とくびれ部ａ面側(5本 /1cm)に刻み目。	
28	第212層	弥生中期壷用蓋	口　径 14.8	淡褐色	やや粗	良好	・外面体部放射状ヘラミガキ、口縁端部ヨコナデ、内面体部ナデ、口縁部ハケ。 ・紐穴2孔1対2組。	・1/2 ・内面口縁部に煤付着
29	第212層	中期広口壷	口　径 21.5	淡橙色		良好	・ヨコナデ。 ・口縁部上面に列点文、側面に円形浮文。	・1/5
30	第212層	中期広口壷	口　径 22.4	淡灰褐色［灰色］	やや粗	良	・外面ナデ、ヨコナデ。内面横ハケ。 ・口縁部上面に扇形文、側面に列点文。	・1/6
31	第212層	中期広口壷	口　径 20.5	淡橙褐色(赤灰褐色)	やや粗	良	・外面ナデ、ヨコナデ。内面指押さえナデ後ハケ、ナデ。	・1/4
32	第212層	中期広口壷	口　径 18.3	明橙色～淡橙色	密	良好	・外面ナデ、ヨコナデ、内面横ハケ。	・1/3
33	第212層	中期広口壷	最大径 33.4	明橙色～灰褐色	密	良好	・外面横ヘラミガキ、内面ナデ。 ・頸部～体部上半簾状文(7帯)。	・1/4(図上で復元) ・黒斑あり
34	第212層	中期壷		にぶい褐色	やや粗	良好	・外面横ヘラミガキ、直線文間にヘラミガキ。内面シボリ目後ヘラミガキ。 ・頸部に直線文(3帯以上)+ 扇形文。	・1/6
35	第212層	中期壷	最大径 18.5	にぶい灰褐色～茶褐色	密	良好	・外面肩部ヨコナデ、腹部ヘラミガキ。内面粘土帯接合部指押さえ後ケズリ、下半横方向ハケ。 ・肩部に粗雑な簾状文。	・1/10
36	第212層	中期壷	底　径 6.8	淡褐色	密～やや粗	良好	・底部側面指おさえ後ナデ。	・全周 ・煤付着
37	第212層	中期壷	底　径 6.8	灰茶褐色(灰黒色)	粗	良好	・ヘラミガキ、底部裏面ナデ内面指おさえ、ナデ。	・1/2
38	第212層	中期壷	底　径 6.9	淡褐色	粗	良好	・底部側面ヘラミガキ、底部裏面・内面ナデ。	・底部裏面に赤色顔料？付着
39	第212層	中期壷	底　径 10.0	淡橙褐色(黒灰色)	やや粗～粗	良好	・ヘラミガキ、底面指ナデ。内面ナデ。	・1/4 ・器表面摩耗する
40	第212層	中期無頸壷	口　径 18.7	にぶい褐色	やや粗	良好	・横ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	・1/10
41	第212層	中期高杯	裾　径 18.6	淡橙色(黒色)	やや粗	良好	・ヘラミガキ、裾端部ヨコナデ。	・1/8
42	第212層	中期甕	口　径 18.0	淡茶褐色	やや粗	良	・粘土帯接合部を指押さえ後外面体部縦ヘラミガキ、口頸部ヨコナデ。内面横ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	・2/3 ・外面に煤、内面下部に炭化物付着
43	第212層	中期甕	口　径 20.0	淡橙褐色	やや粗	良	・ヨコナデ。	・1/10
44	第212層	中期甕	底　径 6.9	暗褐色(灰褐色)	密	良好	・ヘラミガキ、底面・内面ナデ。	・1/3 ・煤付着
45	第212層	前期～中期甕	底　径 8.6	淡褐色	やや粗	良好	・外面縦ヘラミガキ、底裏面ナデ。内面ハケ(細→粗)。	・1/2 ・黒斑あり
46	第212層	敲石	最大幅 5.3 最大長 10.7 最大厚 3.8				・長卵形の自然礫を利用。 ・上面・下面に敲打痕、他の4面に擦痕あり。	
47	第212層	砥石	最大幅 4.8 最大長 4.4 最大厚 3.2				・周囲の4側面は欠損。 ・ａ面中央部溝状に浅く窪む。窪みに斜交する擦痕あり。	
48	第212層	小礫	最大幅 1.9 最大長 4.7 最大厚 0.8				・片理から板状に剥離。	・赤色顔料？付着

表２　出土遺物観察表(3)

番号	出土地点	器種	法量　(cm)	色調(内面)〔断面〕	胎土	焼成	調整・形態等の特徴	残存率等
49	SD2401 ⑭層	弥生前期壷	口　径　13.2	明橙色［黒灰色］	やや粗	良好	・横ヘラミガキ後ヨコナデ。 ・頸部に削り出し突帯。	・1/6 ・黒斑あり
50	SD2401 ⑭層	前期壷	口　径　11.5	明橙色～淡褐色（黒灰色）	粗	良	・ナデ。 ・頸部に沈線3条以上。	・1/6
51	SD2401 ⑭層	中期壷	口　径　13.0	にぶい褐色	粗	良	・ナデ・ヨコナデ。 ・口縁部上面に円形浮文、側面・頸部に簾状文。	・1/5
52	SD2401 ⑭層	中期壷	口　径　13.2	明橙色（灰白色）	密	良	・ナデ・ヨコナデ。 ・口縁部上面に列点文、側面に波状文＋円形浮文(1個残存)。	・1/6 ・口縁下部に煤付着
53	SD2401 ⑭層	中期壷	口　径　15.8	淡橙色	密	良	・ヨコナデ。 ・口縁端部に凹線文2条。	・1/10 ・全体に煤付着
54	SD2401 ⑭層	中期広口壷	口　径　22.6	茶褐色	密～やや粗	良好	・ヨコナデ。 ・口縁部下端に粗雑な刻み目。	・1/10 ・二次焼成のため損傷激しい
55	SD2401 ⑭層	中期広口壷	口　径　24.2	茶褐色	やや粗	良好	・外面ハケ後ヨコナデ。内面横ヘラミガキ。	・1/7
56	SD2401 ⑭層	中期広口壷	口　径　30.6	にぶい灰褐色	密～やや粗	良	・調整不明。 ・頸部に直線文1帯以上、口縁部に紐孔(1孔残存)。	・1/12 ・二次焼成のため損傷激しい
57	SD2401 ⑭層	中期広口壷	口　径　31.0	にぶい褐色	やや粗	良好	・外面ナデ、ヨコナデ。内面横ヘラミガキ、ヨコナデ。 ・口縁部側面に刻み目(2段に施す)。	
58	SD2401 ⑭層	中期壷	底　径　5.8	灰茶褐色	密～やや粗	良好	・ヘラミガキ。	・外面に煤付着
59	SD2401 ⑭層	中期壷	底　径　6.8	淡灰褐色～明橙色	やや粗～粗	良好	・外面ヘラケズリ(左→右)の後ナデ。内面ヘラケズリ(下→上)の後体部ヘラミガキ、底面ナデ。	・1/3 ・黒斑あり
60	SD2401 ⑭層	中期壷	底　径　11.0	淡褐色（灰褐色）	やや粗	良	・外面縦ヘラナデ。	・内面に多量の炭化物付着
61	SD2401 ⑭層	中期壷	底　径　7.1	淡橙色	やや粗	良	・外面ヘラナデ・ヘラミガキの痕跡。内面指ナデ。	
62	SD2401 ⑭層	中期壷	底　径　7.2	淡赤褐色（淡黄褐色）	やや粗	良好	・底部側面～裏面縦ハケ。内面指ナデ。	黒斑あり
63	SD2401 ⑭層	中期壷	底　径　6.3	淡灰褐色	粗	良好	・外面ナデ。内面指おさえ後ナデ。	
64	SD2401 ⑭層	中期壷用蓋（ミニチュア）	口　径　7.1 つまみ　2.1 径器高　2.1	明黄褐色	やや粗	良好	・放射状ヘラミガキ、口縁端部ヨコナデ。 ・紐穴2孔1対2組。	・完存 ・黒斑あり
65	SD2401 ⑭層	中期高杯	口　径　18.2	灰褐色	やや粗	良好	・ヨコナデ。	・1/10
66	SD2401 ⑭層	中期高杯	裾　径　17.0	茶褐色	やや粗	良好	・外面放射状ヘラミガキ、裾端部ヨコナデ。内面ナデ。	・1/8
67	SD2401 ⑭層	中期無頸壷	口　径　19.9	淡灰褐色～淡橙色（淡橙褐色）	やや粗	良	・外面体部縦ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。内面指押さえナデ後横ハケ。 ・体部に棒状浮文4本以上1組を6～8組(2組残存)。	・1/8 ・器表面剥離
68	SD2401 ⑭層	中期甕	口　径　14.2	淡灰褐色	密～やや粗	良好	・体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	・1/6
69	SD2401 ⑭層	中期甕	口　径　15.4	淡灰褐色	やや粗	良好	・粘土帯接合部を指押さえ後外面体部縦ヘラミガキ、口頸部ヨコナデ。内面横ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	・1/4 ・外面に煤、内面下部に炭化物付着
70	SD2401 ⑭層	中期甕	口　径　22.6	淡橙色	密～やや粗	良好	・外面体部縦ハケ後ヨコナデ。	
71	SD2401 ⑭層	中期甕	口　径　33.0	淡橙色	密～やや粗	良	・外面体部縦ハケ後ヨコナデ。	
72	SD2401 ⑭層	中期大形鉢	口　径　55.4	にぶい褐色（茶褐色）［灰黒色］	やや粗	良	・体部横ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。 ・口縁部側面に簾状文＋刺突文、体部に直線文、簾状文。	・1/6 ・器表面剥離

表 2　出土遺物観察表(4)

番号	出土地点	器種	法量　(cm)	色調(内面)〔断面〕	胎土	焼成	調整・形態等の特徴	残存率等
73	SD2401 ⑭層	剥片	最大幅 3.4 最大長 3.1 最大厚 0.9				・左側縁の上端に自然面を残す。 ・ａ面の下端に粗い剥離。	
74	SD2401 ⑭層	石包丁	最大幅 5.6 最大長 4.6 最大厚 0.5				・刃部の形態は片刃の直刃、刃縁はやや丸みをおびる。	
75	SD2401 ⑭層	石包丁	最大幅 10.2 最大長 3.5 最大厚 0.7				・刃部の形態は片刃の内湾刃、刃縁は直線的、紐孔は両面から螺旋状にあけられる。 ・紐孔周囲に擦痕、背面中央に敲打痕状の損傷がある。	
76	SD2401 ⑭層	小礫(砂岩)	最大幅 3.2 最大長 3.2 最大厚 0.6				・円形を呈する扁平な小礫。 ・ａｂ両面に細かい擦痕	
77	SD2401 ⑭層	小礫(花崗岩)	最大幅 3.1 最大長 3.0 最大厚 0.8				・三角形を呈する扁平な小礫。 ・下端に面取り状の粗い剥離。	
78	SD2401 ⑭層	砥石	最大幅 5.3 最大長 9.8 最大厚 4.9				・角柱を呈し、上端部は丸みをおび下端部は折損する。 ・ａ面・上端面・右側面の3面に擦痕あり。	
79	SD2401 ⑭層	砥石	最大幅 3.9 最大長 4.1 最大厚 2.6				・角柱を呈するが、上端部は欠損、他の3側面をわずかに残す。 ・ａ面・右側面の2面に擦痕あり。	
80	SD2401 ⑭層	敲石(磨石・砥石)	最大幅 4.6 最大長 8.2 最大厚 4.5				・１面が平坦な鶏卵形の自然礫を利用。 ・上下両端面に敲打痕、ａ面と左右の２側面に擦痕あり。	・火をうける?表面の損傷甚だしい
81	SD2401 ⑭層	敲石(磨石・砥石)	最大幅 6.4 最大長 10.3 最大厚 4.9				・１面が平坦な鶏卵形の自然礫を利用。 ・上下両端面に敲打痕、６面すべてに擦痕あり。	・赤色顔料?付着 ・火をうける?表面の損傷甚だしい
82	SD2401 ⑭層	敲石(磨石・砥石)	最大幅 7.1 最大長 10.5 最大厚 4.8				・扁平な楕円形の自然礫を利用。 ・上下両端面に敲打痕、６面すべてに擦痕、ｂ面中央は窪む。	
83	SD2401 ⑭層	砥石(敲石・磨石)	最大幅 8.3 最大長 10.4 最大厚 4.0				・扁平な楕円形の自然礫を利用。 ・ａ面・上下両端面・右側面の4面に擦痕、下端面に敲打痕？　ｂ面中央は窪む。	
84	SD2401 ⑮層	弥生中期水差し	口　径 9.4	にぶい褐色	密～やや粗	良好	・ナデ、ヨコナデ。内面頸部に指押さえナデ、シボリ目。・口頸部に列点文4帯・肩部に簾状文2帯以上 ・把手上面に刺突文。	・黒斑あり
85	SD2401 ⑯層	中期把手付鉢	口　径 18.4	黒褐色	やや粗	良好	・外面縦ヘラミガキ。内面ナデ・ヨコナデ後放射状ヘラミガキ。把手は接合部から欠損。 ・口縁部以下にヘラによる刻み目4帯＋文様上にヘラミガキ。	・1/4
86	SD2401 ⑯層	中期無頸壷	口　径 18.4	淡褐色 [黒灰色]	やや粗	良好	・内面体部横方向ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。 ・口縁部外面に列点文、体部に簾状文＋棒状浮文(刻み目付き)1個残存。	
87	SD2401 ⑯層	中期高杯	基部径 6.0	暗赤褐色	やや粗	良好	・ヘラミガキ。杯部の取り付けは円盤充填による。	・全周
88	SD2401 ⑯層	中期甕	口　径 14.2	淡赤褐色(黒茶色)	密～やや粗	良	・粘土帯接合部を指押さえ後外面体部縦ヘラミガキ、口頸部ヨコナデ。内面横ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	・1/6 ・外面に煤、内面下部に炭化物付着
89	SD2401 ⑯層	中期甕	底　径 4.0	茶褐色	密～やや粗	良好	・縦ヘラミガキ、底側面～底面。内面ナデ。	・1/2
90	SD2401 ⑯層	中期甕	底　径 4.3	明灰褐色	密～やや粗	良好	・ヘラミガキ、底面ヘラケズリ、底側面ナデ。内面ヘラケズリ、ナデ。	・器表面摩耗
91	SD2401 ⑯層	中期甕	底　径 4.6	暗茶褐色	密	良好	・縦ヘラミガキ、内面・底側面～底面ナデ。	・器表面摩耗
92	SD2401 ⑯層	中期壷	底　径 8.9	にぶい灰褐色	やや粗	良	・ナデ、底側面ケズリ？	・全周
93	SD2401 ⑯層	中期小形壷	口　径 6.7	淡灰褐色	密～やや粗	良好	・外面ヘラミガキ。内面指押さえナデ、シボリ目、口頸部ヨコナデ。 ・口縁部～肩部に粗雑な直線文5帯。	・全周
94	SD2401 ⑯層	中期小形甕	口　径 9.6	黒茶色	密	良	・外面体部調整不明。内面体部ナデ、内外口縁部ヨコナデ。	・1/6 ・器表面摩耗
95	SD2401 ⑯層	中期甕	口　径 14.8	にぶい灰褐色	やや粗	良	・粘土帯接合部を指押さえ後外面体部縦ヘラミガキ、口頸部ヨコナデ。内面横ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	・1/8 ・外面に煤、内面下部に炭化物付着

表２　出土遺物観察表(5)

番号	出土地点	器種	法量　(cm)	色調(内面)〔断面〕	胎土	焼成	調整・形態等の特徴	残存率等
96	SD2401 ⑯層	中期 高杯	裾　径　14.6	淡橙色 (白橙色)	やや粗		・放射状ハケ、裾端部ヨコナデ。	・1/8
97	SD2401 ⑯ｂ層	弥生 前期～ 中期 甕	底　径　6.3	淡赤褐色 (明 橙 色)	密～ やや粗	良	・底部側面～裏面ナデ。	・全周 ・黒斑あり
98	SD2401 ⑯ｂ層	中期 壷	底　径　7.4	明褐色 (暗茶褐色)	やや粗	良	・外面ヘラミガキ。内面ナデ	
99	SD2401 ⑯ｂ層	剥片	最大幅　3.2 最大長　2.4 最大厚　0.7				・平面三角形を呈する ・下端にａｂ両面からの押圧剥離、使用痕か？ややつぶれる。	
100	SD2401 ⑯ｂ層	砥石 (磨石)	最大幅　3.7 最大長　5.9 最大厚　2.0				・ｂ面が平坦な長円形の自然礫を利用、上端は欠損。 ・ａｂ両面に細かい擦痕あり。	
101	SD2401 ⑯ｂ層	小礫 (砂岩)	最大幅　1.9 最大長　4.3 最大厚　1.4				・円礫の半截か。	・赤色顔料？付着、火をうける
102	SD2401 ⑰層	前期 壷	口　径　14.0	にぶい褐色 (淡黄褐色)	やや粗	良好	・ナデ、口縁部に指おさえの圧痕あり。 ・口縁端部に沈線1条。	・1/8 ・黒斑あり
103	SD2401 ⑰層	前期 壷	最大径　25.7	淡橙灰色 (灰 色)	やや粗	良好	・外面ヘラミガキ、内面粘土帯接合部指押さえナデ後体部ナデ。 ・体部上半に沈線2条。	・1/4
104	SD2401 ⑰層	前期 鉢	口　径　25.8		粗	良好	・外面体部ナデ後ハケ、口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ、口縁部指おさえ後ヨコナデ。 ・口縁外面に刻み目付貼付け突帯1条。	
105	SD2401 ⑰層	前期 鉢	口　径　30.2	淡灰黄色 (暗灰黄色)	密～ やや粗	良好	・外面頸部指おさえ後口縁部ヘラミガキ、体部ナデ。内面屈曲部～口縁部横ヘラミガキ、体部ナデ。 ・頸部に沈線1条(一部２条)。	・1/3 ・外面に煤付着
106	SD2401 ⑰層	前期 甕	口　径　20.8	淡黄褐色	粗	良好	・外面体部縦ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラナデ、頸部指押さえ後口縁部ヨコナデ。 ・口縁端部に刻み目、頸部に沈線1条。	・外面に煤付着
107	SD2401 ⑰層	前期 甕	口　径　16.0	赤褐色～灰褐色	粗	良好	・外面体部縦ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラナデ、頸部指押さえ後口縁部ヨコナデ。 ・口縁端部に刻み目、頸部に沈線2条。	・全周 ・外面に煤付着、内面下部に炭化物
108	SD2401 ⑰層	前期 甕	口　径　23.0	明橙色～淡橙色	粗	良好	・外面体部縦ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラナデ、頸部指押さえ後口縁部ヨコナデ。 ・口縁端部に刻み目、頸部に沈線2条。	・1/4 ・外面に煤付着
109	SD2401 ⑰層	前期 甕	底　径　8.0	明橙色 (黒褐色)	密～ やや粗	良好	・縦ヘラナデ。	・全周 ・煤付着
110	SD2401 ⑰層	前期 甕	底　径　6.8	黒茶色 (淡橙色)	密～ やや粗	良好	・外面ハケ状工具によるナデ。内面ナデ。	・1/4
111	SD2401 ⑰層	前期 甕	底　径　8.2	明橙色 (淡褐色)	密～ やや粗	良好	・外面縦ハケ。内面ナデ。	
112	SD2401 ⑰層	前期 甕	底　径　9.2	灰褐橙色 (灰褐色)	やや粗	良好	・ナデ。	
113	SD2401 ⑰層	前期 甕	底　径　7.9	黄褐色 (黒色)	密～ やや粗	良好	・外面縦ハケ。内面底面指おさえ後横方向のヘラミガキ。	・全周
114	SD2401 ⑰層	前期 壷	口　径　30.8	にぶい淡褐色［灰色］	やや粗	良好	・体部ヘラミガキ(粗)、頸部に指おさえの圧痕、口縁部ヨコナデ。 ・肩部に沈線2条(乱れる)。	・1/6 ・黒斑あり
115	SD2401 ⑰層	前期 壷	口　径　34.4	淡黄褐色	密～ やや粗	良好	・外面口縁部指おさえ後横ハケ。内面ナデ。 ・肩部に沈線2条、腹部に沈線1条(途切れる)。	・1/6
116	SD2401 ⑰層	小礫 (砂岩)	最大幅　3.4 最大長　3.4 最大厚　1.3				・丸みのある三角形を呈する。 ・ａ面に擦痕、ｂ面はわずかに窪む。	・赤色顔料？付着
117	SD2401 ⑲ｂ層	前期 鉢	口　径　41.8	にぶい褐色	密～ やや粗	良好	・頸部指おさえ、体部上半ハケ、下半粗いヘラミガキ。内面頸部指おさえ、体部ヘラミガキ。	・1/12 ・外面に煤付着

3. まとめ

亀井遺跡は、旧平野川が形成する微高地(自然堤防)上に立地する、弥生時代から近世に至る複合遺跡である。その中でも弥生時代は、集落の拠点として最も繁栄したとされる時期である。

今回の調査では、この最も繁栄したとされる弥生時代を中心とした時期の遺構・遺物を確認することができた。以下、今回の調査成果より、時期ごとに変化する地理的環境と、これに付随して変化する遺跡の性格を述べたい。

亀井遺跡周辺で人々の生活が始まったのは、縄文時代晩期～弥生時代前期頃に遡る。水稲耕作のはじまりと共に、それまで生活拠点としていた生駒西麓山地の麓から、耕作に適した平地へと、その拠点を移したからである。当遺跡周辺では、中河内地域の中では比較的早くから集落の立地条件が良好で、河内潟に注ぐ河川の１つである旧平野川が運ぶ土砂等によって形成された微高地(自然堤防)上に、弥生時代前期頃から集落が営まれた。隣接する遺跡としては、北に久宝寺遺跡、南に長原遺跡があり、特に長原遺跡では、縄文時代晩期の遺跡として早くから知られており、円形の竪穴住居跡が発見されている。今回の調査では、弥生時代中期前半以降の流水堆積物層が、調査掘削深度の限界まで堆積していた為、当時期の堆積層は確認できなかった。

弥生時代中期になると、中河内地域では大集落が形成され始める。当遺跡内にも大集落が形成され、弥生時代後期初めまで存続することとなる。昭和53(1978)年以降に長吉ポンプ場築造工事(表１－②・③・⑫)や、近畿自動車道(以下、「近畿道」と省略)建設工事 (表１－④)等に伴って行った発掘調査の結果、当遺跡は、北方に弥生時代の居住域、南西方に方形周溝墓などの墓域、東方に生産域が広がっていたことが明らかとなった。調査区周辺を見ると、１区の南に位置する近畿道11区(表１－④)とＴＫ89－２第４区(表１－⑪)では弥生時代中期の方形周溝墓、北に位置する近畿道13区(表１－④)では古墳時代中期の方墳(亀井１号墳)が検出されており、１区が弥生時代～古墳時代を通じて墓域に属していたことが推察できる。今回の調査では、旧地形を反映したと考えられる調査区南側の高まりが確認でき、この高まりが古墳や方形周溝墓の墳丘の痕跡とも考えられる。さらに、第３面で検出した弥生時代中期の壷が、方形周溝墓の供献土器である可能性も否定できない。２区では、交錯する複数の流路が確認され、ポンプ場調査地で検出された弥生時代中期に比定できるＳＤ3023(表１－②)の延長とも考えられる。

弥生時代後期～古墳時代前期になると、自然環境が不安定となり、既往の発掘調査でも洪水堆積層が顕著に見られる。このため、弥生時代中期に最盛期を迎えた大集落は衰退し、新たに小規模な集落が点在するようになる。当遺跡周辺でも、久宝寺遺跡・加美遺跡・竹渕遺跡・木の本遺跡・八尾南遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡で小規模単位の集落跡が確認でき、集落数の増加が顕著に見られる。これらの集落は古墳時代後期には衰退傾向にある。今回の調査では、１区において弥生時代中期以降の流水堆積物層(旧平野川)が厚く堆積することから、この時期には当調査区周辺は廃絶期を迎えていたと推察できる。

最後に、今回の調査で出土した遺物について若干の考察を加えたい。まず、調査区２区で、遺物包含層(第212層)から出土した分銅形土製品について述べたい。分銅形土製品は、大阪府下の遺跡では出土例が少ない遺物である。当遺跡における出土例は、ポンプ場調査地で検出した弥生時代後期のＳＤ3041(表１－②)、近畿道24区の弥生時代遺物包含層(表１－④)、弥生時代中期後半～後期の遺物包含層(角南1993)と、今回の調査区から出土した土製品の４点である。さらに府下

では、枚方市鷹塚山遺跡、高槻市天神山遺跡、古曽部・芝谷遺跡（宮崎1996）と、当該遺跡の４遺跡７点である[註1]。分銅形土製品は、瀬戸内地方を中心に西日本一帯に分布するものであり、当時における西方地域との活発な交流がうかがえる。

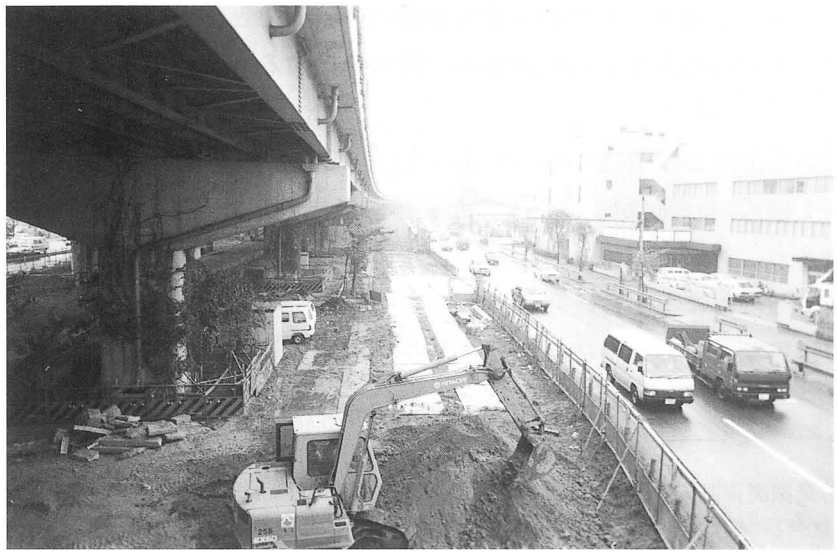
次に、調査区２区のＳＤ2401から出土した遺物について述べたい。ＳＤ2401の下層部埋土（⑰・⑲ｂ）から、弥生時代前期（河内Ｉ様式）の遺物が、まとまった個体数で出土した。図化できたものだけでも、壷２点、鉢１点、甕８点、鉢又は大甕１点の合計12点ある。既往の調査では、これまで散発的に認められていただけであったことから、今回のようにまとまりのある出土例は珍しく、弥生時代前期の様相を知る上で貴重な資料の１つになると考えられる。

参考文献

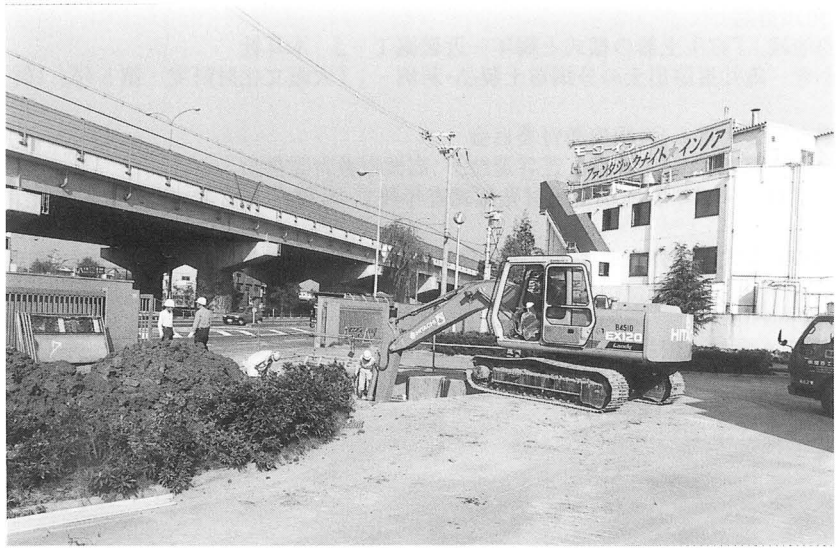
・石神　怡　1971『八尾市亀井遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
・梅木謙一　2006「分銅形土器からみた基盤交通圏－出土の意義と地域間交流について－」『日本考古学協会2006年度愛媛県大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛県大会実行委員会
・田代克巳・中井貞夫　1972『亀井遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
・田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ｉ』平安学園考古学クラブ
　　1981『須恵器大成』角川書店
・寺沢　薫・森井貞雄　1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年－近畿編Ｉ－』木耳社
・角南聡一郎　1993「祭祀土製品小考－亀井遺跡出土の分銅形土製品・新例－」『大阪文化財研究　第５号』（財）大阪文化財センター
・中井貞夫　1973『亀井遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会
・宮崎康雄　1996「第２章第２節　古曽部地区」『古曽部・芝谷遺跡』高槻市教育委員会
・山本　昭　1981「1. 亀井遺跡」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市文化財調査報告７八尾市教育委員会
・若林邦彦・三好孝一・岡田清一　2000『大阪の弥生遺跡Ⅲ－遺跡検討会の記録－』大阪の弥生遺跡検討会

註１　ここでは、豊中市新免遺跡出土の人面付土製品は含まない。

図版一



1 区機械掘削状況（北から）



2 区機械掘削状況（南西から）

2 区北西壁断面（南東から）

図版二

１区（Ａ地区）
第１面遺構検出状況（南から）

１区（Ｃ地区）
第１面遺構検出状況（東から）

１区（Ａ地区）
第２面遺構検出状況（南から）

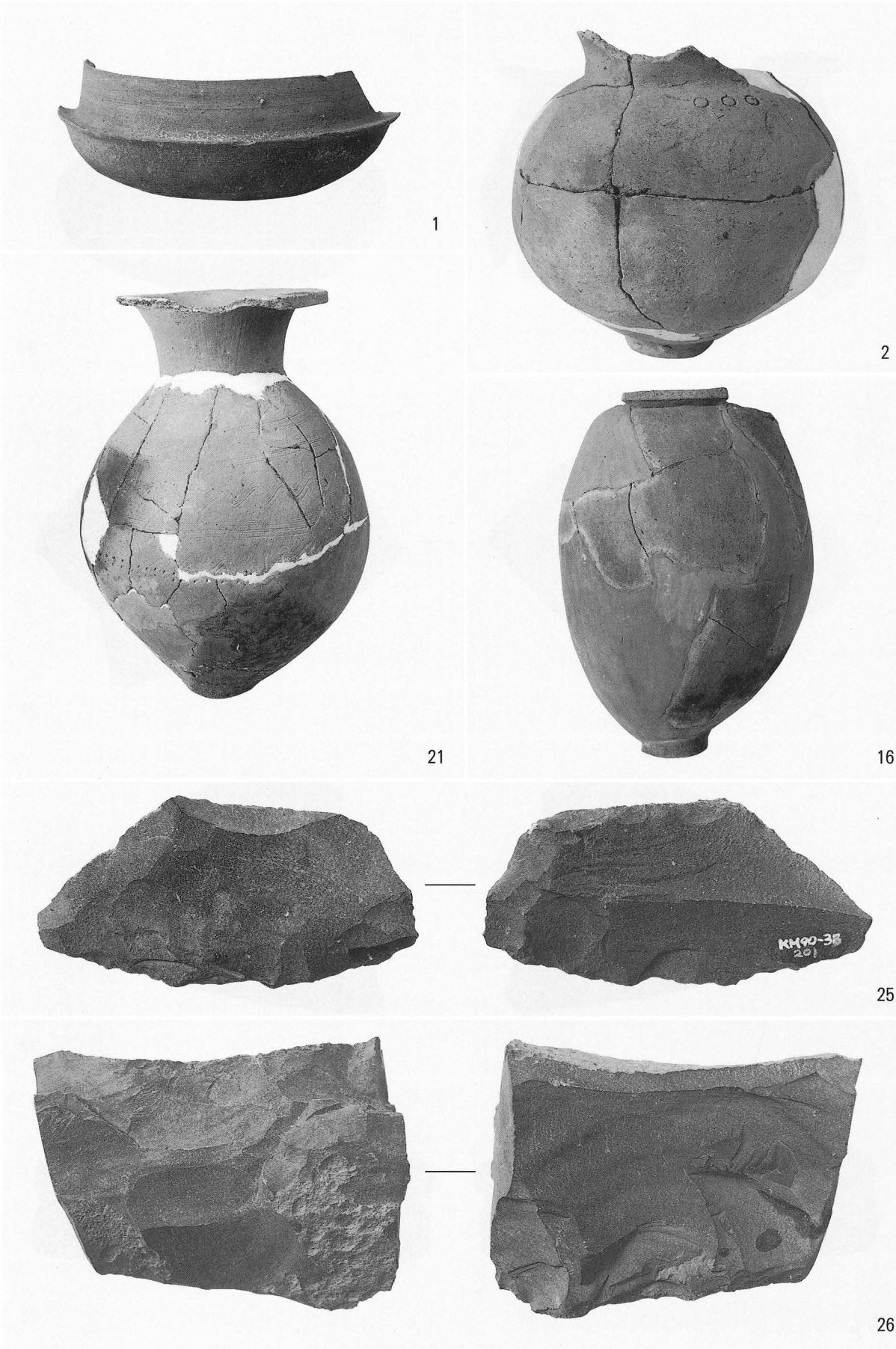
図版三

1区（B地区）
第3面遺構検出状況（西から）

SW1301検出状況（東から）

2区
第4面遺構検出状況（南から）

図版四

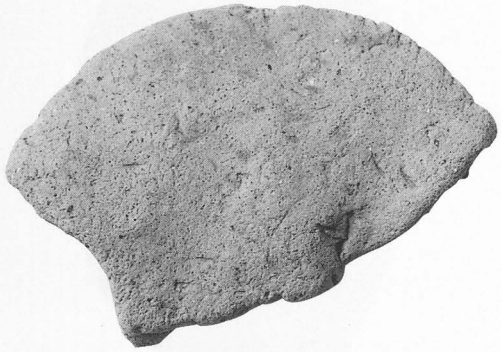


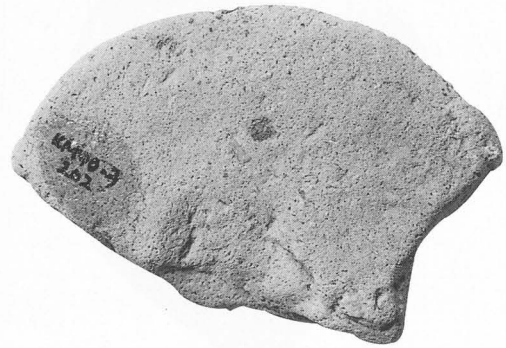
１区第107層（１・２）、第111層（16）、ＳＷ1301（21・25・26）出土遺物

図版五

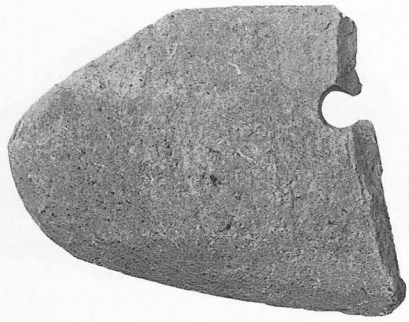
42

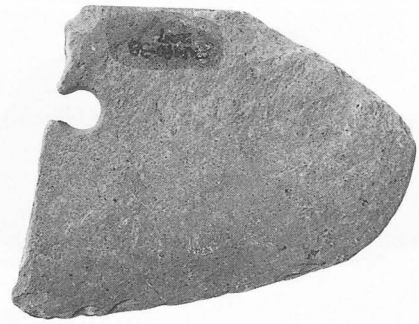
64



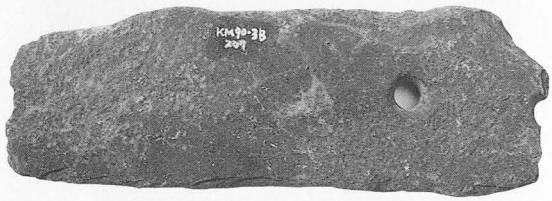


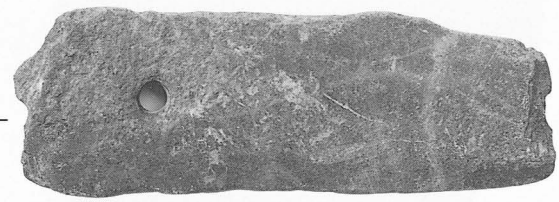
27





74





75

2区第212層(27・42)、ＳＤ2401(64・74・75)出土遺物

図版六

84

104

85

107

93

108

105

２区ＳＤ2401⑮ｃ（84）、⑯ａ（85）、⑰（104・105・107・108）出土遺物

Ⅵ　中田遺跡第51次調査（NT2005－51）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市刑部３・４地内で実施した公共下水道工事(17－18工区)に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する中田遺跡第51次調査(ＮＴ2005－51)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成17年度－平成18年１月10日～３月24日(外実働２日)の期間で、高萩千秋・荒川和哉を担当者として実施した。調査面積は約８㎡、平成18年度－平成19年１月12日～１月24日(外実働２日)の期間で、高萩が担当者として実施した。調査面積は約16㎡である。

1．現地調査においては平成17年度－市森千恵子・若林久美子、平成18年度－垣内洋平・青山洋が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後随時実施し、平成19年２月に終了した。

1．本書作成に関わる業務は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……93

2．調査概要……94

　1)調査の方法と経過……94

　2)基本層序……94

3．まとめ……94

Ⅵ　中田遺跡第51次調査（ＮＴ2005－51）

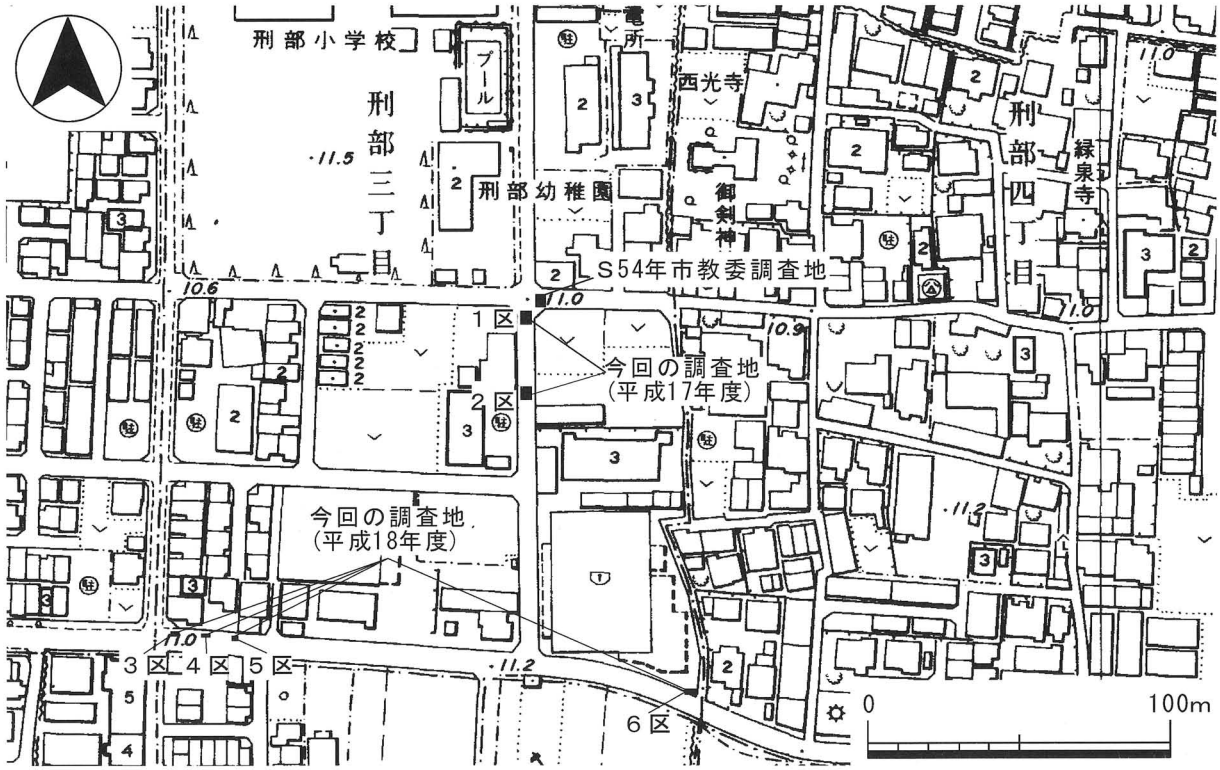
１．はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田１～５丁目、刑部１～４丁目、八尾木北１～６丁目の東西1.0㎞、南北0.9㎞がその範囲とされている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉櫛川に挟まれた低位沖積地に位置している。

遺跡周辺では、北に小阪合遺跡、西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡が隣接しており、低位沖積地である地理的条件に即応して弥生時代前期ならびに中期以降に成立する遺跡が多く、考古学的な資料の蓄積も多い。

当遺跡は昭和45年度に実施された区画整理事業の際発見された遺跡で、昭和47年以降は中田遺跡調査会・中田遺跡センター・八尾市教育委員会（以下、「市教委」という。）・大阪府教育委員会・当調査研究会により発掘調査が継続して実施されており、弥生時代前期～近世に至る複合遺跡であることが確認されている。なお遺跡範囲のほぼ中央部を縦断して現楠根川が北流している。この楠根川の流路については、少なくとも弥生時代後期段階には成立していたことが想定でき、現流路より西側一帯に古楠根川の流域を求めることが可能である。中田遺跡では特に、古墳時代初頭（庄内式期）から前期（布留式期）において、古楠根川の両岸を中心に数多くの集落が成立しており、古楠根川が北流する小阪合遺跡内においても同様の集落展開が認められている。

今回の発掘調査は、公共下水道工事（17－18工区）に伴うもので、調査地点の北部では昭和54年度に市教委により実施され、古墳時代初頭前半（庄内式古相）の吉備系の古式土師器が大量に出土した「刑部土坑」を検出した調査地に隣接している。



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/2500）

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事(17－18工区)に伴うもので、当調査研究会が本遺跡内で実施した第51次調査にあたる。調査対象は人孔6箇所で、平成17年度に2箇所、調査面積約8㎡、平成18年度に4箇所、調査面積約16㎡、総面積約24㎡を測る。調査区は平成17年度は北から1・2区、平成18年度は西から3～6区と呼称した。調査においては、現地表(T.P. ＋11.0m前後)下1.2～1.7mまでを機械掘削、以下0.4m前後を人力・機械掘削を併用して行った。1区は、調査対象範囲内が全て撹乱されており、層位等は不明。2区は、現地表下約2mまでの調査を実施したが、遺構・遺物は検出されていない。3～5区は、約1m前後まで既設管等の埋設物により、削平されている。

2）基本層序

1・2区は、刑部小学校の南東交差点に位置する。1区は、既設の埋設物工事によりすでに工事掘削深度まで削平を受けていた。層位が確認できた2区については、現調査下1.1mまでが盛土層(第1層)である。2層が旧耕土で、昭和40年代に整備された区画整理事業前まで耕作されていたものである。3層が細砂粒を含む褐灰色粘土。4層が灰褐色細砂層。5層が灰色粘土。6層が灰橙色微砂。7層が淡灰茶色砂礫混細砂で、洪水層と思われる。

3～5区は府道柏村南本町線に位置し、刑部小学校の南西側にあたる。1層は3～5区ともに既設の埋設物により1～1.5mまでは埋め土である。5区では、客土層が見られるが3・4区で2～4層まで削平されている。5層の砂層からである。6層は、土師器の小片がごく微量に含まれる粘土層である。時期は土師器片から判断すると平安～鎌倉時代に比定できる。7・8層は粘着性の強い粘土で、3区では見られない。9層は、河川の堆積層と思われる粗砂であろう。この層から地下水が見られる。

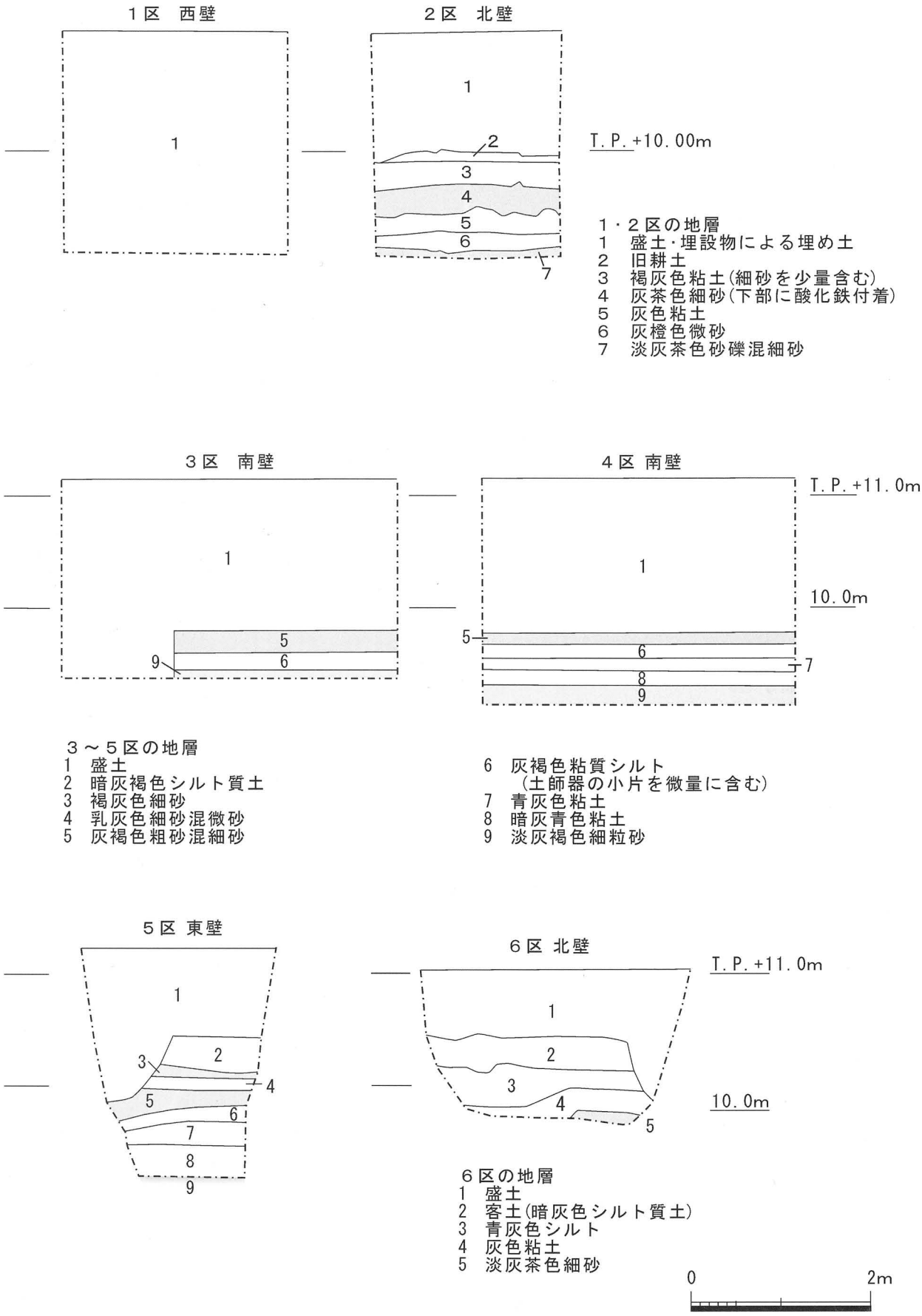
6区は、5区より東へ50mにあたる府道柏村南本町線の道路北側で、刑部の旧村の南西側にあたる。1層は0.5～1mまで埋設物による埋め土である。2層は客土、3層は青灰色シルト、4層は灰色粘土である。5層は、砂層で3～5区の5層に対応する層と考えられる。

3．まとめ

今回の調査地は、古墳時代初頭前半(庄内式古相)の吉備系の古式土師器が大量に出土した「刑部土坑」の地点から南部へ数十m付近にあたるが、その時期に対応する地層は今回の調査で確認できなかった。

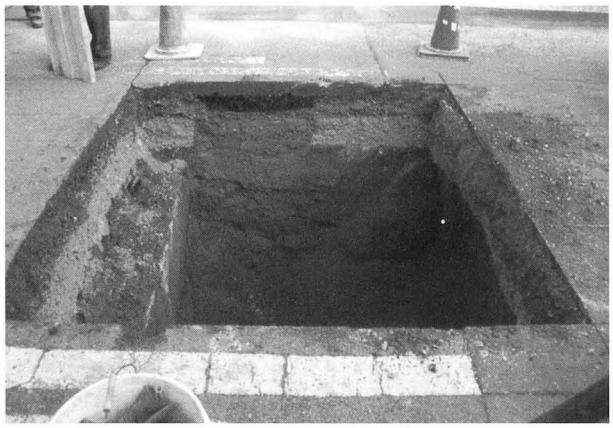
また、府道柏村南本町線沿いの調査区では、大半が既設の埋設物による埋め土で削平を受けており、詳細な堆積状況は確認できなかったが、近接で行われている発掘調査成果を総合的にみると平安～鎌倉時代の前後で洪水に見舞われていた様子が砂層の堆積状況で確認できる。

参考文献
・成海佳子　1994「Ⅲ　中田遺跡第18次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』（財）八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1994「Ⅴ　中田遺跡第21次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』（財）八尾市文化財調査研究会
・西村公助　1994「Ⅵ　中田遺跡第22次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』（財）八尾市文化財調査研究会
・岡田清一　2004「26. 中田遺跡第50次調査(ＮＴ2003－50)」『平成15年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会


１区　西壁
２区　北壁
T.P.+10.00m
１・２区の地層
1　盛土・埋設物による埋め土
2　旧耕土
3　褐灰色粘土（細砂を少量含む）
4　灰茶色細砂（下部に酸化鉄付着）
5　灰色粘土
6　灰橙色微砂
7　淡灰茶色砂礫混細砂
３区　南壁
４区 南壁
T.P.+11.0m
10.0m
３～５区の地層
1　盛土
2　暗灰褐色シルト質土
3　褐灰色細砂
4　乳灰色細砂混微砂
5　灰褐色粗砂混細砂
6　灰褐色粘質シルト
（土師器の小片を微量に含む）
7　青灰色粘土
8　暗灰青色粘土
9　淡灰褐色細粒砂
５区 東壁
６区 北壁
T.P.+11.0m
10.0m
６区の地層
1　盛土
2　客土（暗灰色シルト質土）
3　青灰色シルト
4　灰色粘土
5　淡灰茶色細砂
0
2m

第２図　断面図（Ｓ＝1/50）

図版一



第１区全景(南から)

第２区 全景(南から)

第３区全景(北から)

第４区 全景(北から)

第５区全景(南から)

第５区 全景(東から)

第６区全景(南から)

第６区 調査状況(東から)

Ⅶ　東弓削遺跡第10次調査（HY98－10）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市八尾木４丁目地内地内で実施した公共下水道工事（９-103工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する弓削遺跡第10次調査（ＨＹ98－10）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成10年４月22日～４月30日（実働７日）にかけて西村公助を担当者として実施した。面積約52㎡を測る。

　現地調査においては、市森千恵子・中西明美・松尾　実が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成18年12月に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－徳谷尚子・山内千恵子、図面トレース－山内が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに ……97

2．調査概要 ……97

　1）調査方法と経過 ……97

　2）基本層序 ……97

　3）検出遺構・出土遺物 ……101

　4）遺構に伴わない遺物 ……103

3．まとめ ……104

Ⅶ　東弓削遺跡第10次調査(ＨＹ98－10)

１．はじめに

東弓削遺跡は、八尾市南東部に位置し、現在の行政区画では八尾市の八尾木、八尾木１～５丁目、八尾木東１～３丁目、東弓削、東弓削２・３丁目、都塚、都塚１～４丁目、刑部の東西約1.3km、南北1.2kmがその範囲とされている。当遺跡は、河内平野内を北または北西方向に流下していた旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川が分岐する「二俣」地区の北側に広がる沖積地上に位置している。二大河川間に形成されたこの沖積地は、南東から北西方向に向かって広がりを持つもので、本遺跡を基点として、北に中田遺跡・矢作遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡・萱振遺跡・佐堂遺跡・美園遺跡・山賀遺跡等の遺跡群が連鎖・密集する形で展開している。一方、玉串川を挟んで東には恩智遺跡・神宮寺遺跡、長瀬川を挟んで南には弓削遺跡、西には志紀遺跡・田井中遺跡・老原遺跡が位置している。

当遺跡一帯は、『続日本紀』の神護景雲三年(769)の十月三十日の条に「詔以二由義宮一、為二西京一。河内国為二河内職一。…」と記されている「由義宮」「西京」の京域推定地内を含むもので、遺跡範囲の南部にはその中核を成したと考えられる弓削寺跡が存在している。

遺跡としては、昭和42年(1967)に行われた国道170号線(大阪外環状線)敷設工事の際、緑釉陶器を含む土器類の他、瓦類が出土したことを嚆矢としている。考古学的な調査としては、昭和50年(1975)に八尾市教育委員会により実施された送水管敷設工事に伴う調査以降、数多くの調査が実施されており、弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが判明している。

今回報告するのは、平成10年に実施した八尾木４丁目地内で実施した公共下水道工事(９－103工区)に伴う発掘調査で、当遺跡内で実施した第10次調査(ＨＹ98－10)にあたる。調査地付近一帯は、天文二十二年(1553)３月10日の三条西公条の『吉野詣記』にある、「信貴山から八尾木の金剛蓮華寺に詣で、その時、村人から八尾木の鶯の伝説を聞く」と記された金剛蓮華寺跡推定地に近接している。

２．調査概要

１)調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事(９－103工区)に伴う発掘調査である。管路部分と人孔1箇所の調査を行った。掘削範囲は南北約60m、東西約0.9mで、南北方向に長い調査地であるため、１区～７区に分割し北から調査を行った。掘削に際しては、現地表下約0.8～1.0m前後までを機械掘削した後、以下0.2～0.4mについては人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。

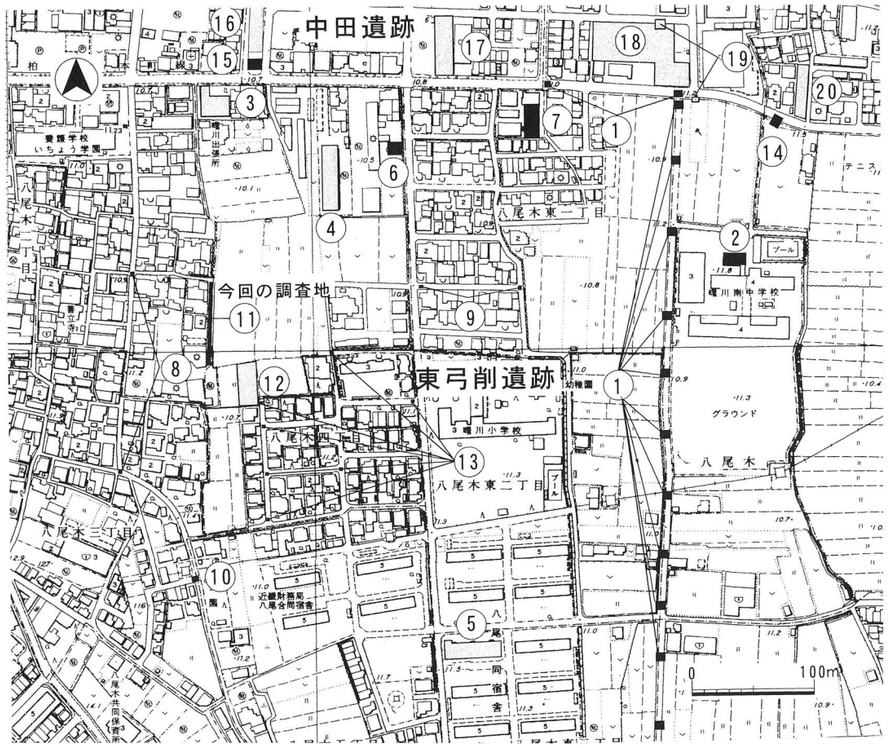
調査の結果、現地表下1.2m前後(T.P.＋10.00～10.2m)に存在する第４層上面で奈良時代後期・鎌倉時代末期・室町時代後期の遺構を検出した。出土遺物は遺構および第３層から奈良時代後期から室町時代後期に比定される土師器、須恵器、屋瓦等が出土しており、総量はコンテナ１箱程度である。

２)基本層序

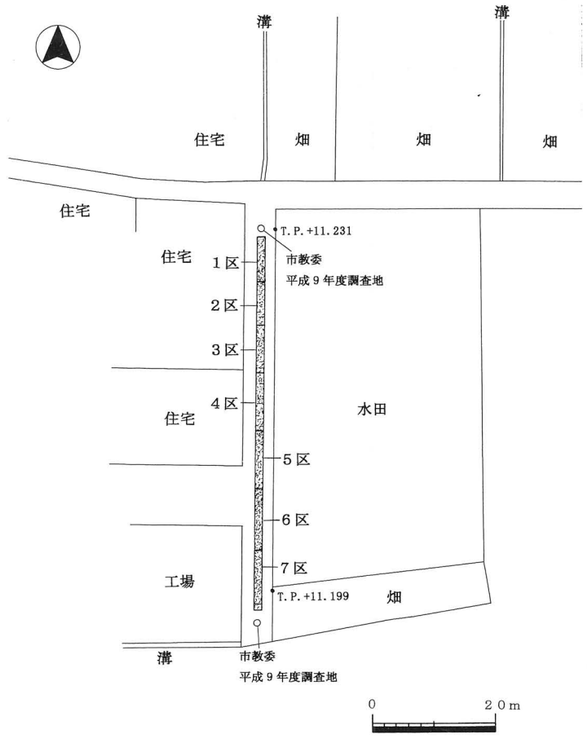
第０層：盛土。上面の標高はT.P.＋11.2m前後。

第１表　周辺の調査地一覧表　①～⑬東弓削遺跡、⑭～⑲中田遺跡　但し③④は調査時点では中田遺跡に帰属

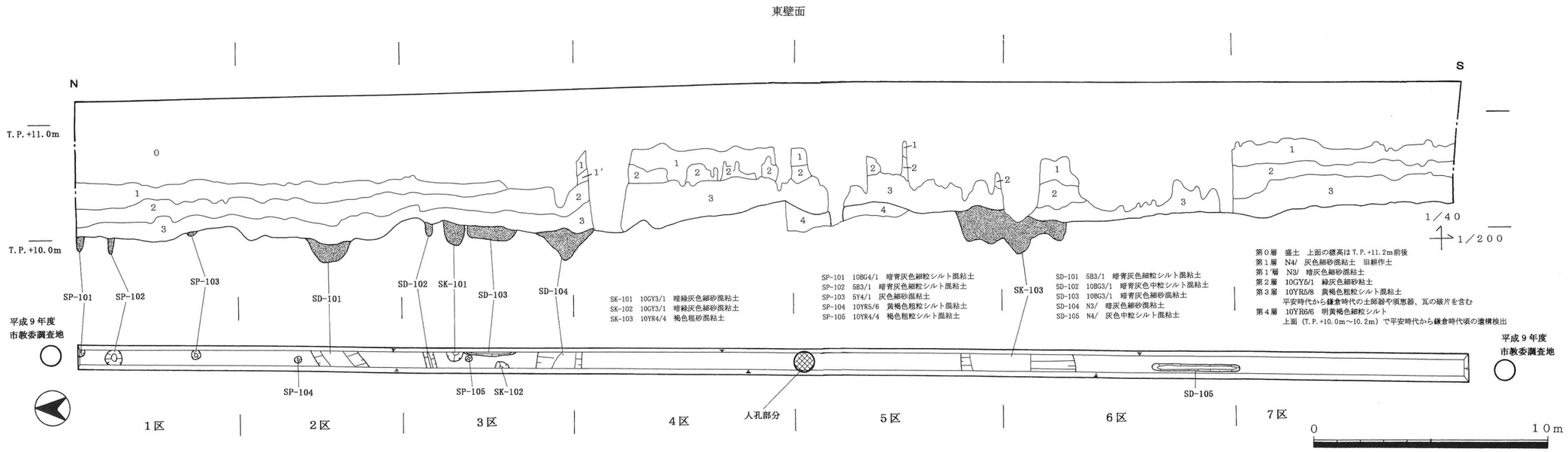
番号	調査名（略号）	調査地	調査期間	面積（m2）	調査原因	主な遺構・出土遺物	文献名
①	東弓削	八尾木～東弓削	S50/12/8～51/3/31	4000	送水管	弥生中期～鎌倉 弥生土器（中期～後期） 土師器・須恵器・埴輪	1976『東弓削遺跡』八尾市教育委員会
②	第１次（HY82-01）	八尾木167	S57/10/1～10/18	65	校舎増築	遺物包含層（古墳前期） 水田（平安末～鎌倉）	1983『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査』（財）八尾市文化財調査研究会
③	東弓削	八尾木４丁目	S59/2/2～2/19	220	公共施設建設	弥生土器（中期～後期） 庄内式土器（古墳初頭）	984「昭和58年度事業概要報告」（財）八尾市文化財調査研究会
④	東弓削	八尾木４丁目５	S61/9/24～9/30	144	共同住宅	壷棺（弥生中期） 庄内式土器（古墳初頭）	1987『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』
⑤	第３次（HY88-03）	八尾木東３丁目	S63/1/6～2/20	594	宿舎建設	落ち込み・小穴（弥生後期～古墳前期）、水田（平安～鎌倉） 遺物包含層（古墳初頭）	1988「八尾市文化財調査研究会年報昭和62年度」『（財）八尾市文化財調査研究会報告16』
⑥	第４次（HY88-04）	八尾木東１丁目	S64/1/6～H1/1/23	72	公共下水道	土坑（弥生中期） 溝（古墳初頭）	1993「Ⅰ東弓削遺跡第４次調査（ＨＹ88－４）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告37』
⑦	第５次（HY90-5）	八尾木東１丁目	H2/11/19～12/6	177	共同住宅建設	土坑・溝・小穴（古墳前～中）	1991「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」『（財）八尾市文化財調査研究会報告32』
⑧	第６次（HY92-6）	八尾木2・3丁目地内	H5/2/19～5/12	37	公共下水道	河川（弥生～古墳後期） 井戸（平安末）、遺物包含層（鎌倉～室町）	1993「ⅩⅧ東弓削遺跡（第６次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告39』
⑨	第７次（HY94-7）	八尾木東１丁目	H6/4/20～5/18	48	公共下水道	河川（弥生後期） 溝（古墳前期）	1998「Ⅴ東弓削遺跡第７次調査（ＨＹ94-７）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告61』
⑩	第８次（HY94-8）	八尾木3丁目	H6/10/3～10/20	40	公共下水道	河川（古墳以前）	1996「・東弓削遺跡（第８次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告50』
⑪	第10次（HY98-10）	八尾木4丁目	H10/4/22～4/30	52	公共下水道	土坑（奈良） 溝（鎌倉・室町）	本書掲載
⑫	東弓削94－484	八尾木４丁目	H6/12/2	20．25	共同住宅	遺物包含層（平安中期）	1995「17．東弓削遺跡（94－484）の調査」『八尾市内遺跡平成６年度発掘調査報告書Ⅰ』
⑬	東弓削97－188	八尾木４丁目	H9/6/19・25他、	28	公共下水道	遺物包含層（布留式期・平安前期）	1998「8．東弓削遺跡（97－188）の調査」『八尾市内遺跡平成９年度発掘調査報告書Ⅱ』
⑭	第13次（HY03-13）	刑部3丁目・柏村3丁目	H15/12/2～12/19	43．5	公共下水道	河川（弥生後期～古墳前）、河川（奈良） 弥生土器・古式土師器・土師器・国産陶磁器	2005「Ⅱ東弓削遺跡第13次調査（ＨＹ2003－13）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告84』
⑮	中田	八尾木北５丁目	S60/8	－	公共下水道	不明遺構（古墳初頭）	1986「中田遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会
⑯	第19次（NT93-19）	八尾木北６丁目	H5/10/12～12/1	390	河川改修	土坑・溝・古墳（古墳前期）	1994「35．中田遺跡第19次調査（ＮＴ93－19）」『平成５年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
⑰	中田（82－532）	八尾木北６丁目166	S62/8/19～9/5	68	共同住宅	溝（古墳初頭～前期） 遺物包含層（庄内式新相～布留式古相）	1988「昭和62年度国庫補助事業」『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』
⑱	中田	刑部３丁目	H2/10/23	11．25	倉庫建設	遺物包含層（古墳～奈良）	1991「八尾市内遺跡平成２年度発掘調査報告書22」『八尾市文化財調査報告22』
⑲	中田（NT03－50）	刑部３丁目	H15/4/1～5/2	61	公共下水道	河川（弥生中期～古墳前期）	2005「Ⅰ中田遺跡第50調査（ＮＴ2003－50）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告84』
⑳	中田	刑部４丁目	H2/9/21	12	住宅建設	遺物包含層（奈良末～平安初頭）	1991「八尾市内遺跡平成２年度発掘調査報告書Ⅰ」『八尾市文化財調査報告22』



第１図　調査地周辺図（S＝1/5000）



第２図　調査区設定図



第３図　平断面図

第１層：N4/0灰色細砂混粘土。水田に関連した作土。

第２層：10GY5/1緑灰色細砂粘土。

第３層：10YR5/8黄褐色粗粒シルト混粘土。奈良時代後期から鎌倉時代末期の土師器、須恵器、屋瓦の破片を含む。

第４層：10YR6/6明黄褐色細粒シルト。上面(T.P. ＋10.0m～10.2m)で奈良時代後期・鎌倉時代末期・室町時代後期の遺構を検出した。

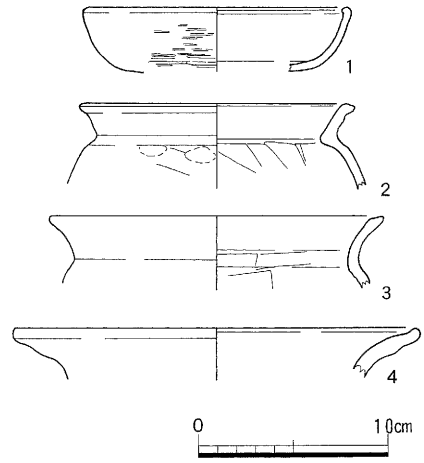
３)検出遺構・出土遺物

第４層の上面で調査を行った結果、奈良時代後期・鎌倉時代末期・室町時代後期に比定される土坑３基(ＳＫ101～ＳＫ103)、小穴５個(ＳＰ101～ＳＰ105)、溝５条(ＳＤ101～ＳＤ105)を検出した。

土坑(ＳＫ)

ＳＫ101

３区で検出した。東側が調査区外に至る。検出部分で東西幅0.3m、南北幅0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は10GY3/1暗緑灰色細砂混粘土である。遺物は奈良時代後期に比定される土師器片が極少量出土している。土師器甕片１点(４)を図化した。４は甕の口縁部片で端部が小さく上方に摘み上げられている。色調は淡橙色。奈良時代後期に比定される。



第４図　ＳＫ101(４)、ＳＫ103(１～３)出土遺物実測図

ＳＫ102

３区で検出した。西側が調査区外に至る。検出部分で東西幅0.3m、南北幅0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は10GY3/1暗緑灰色細砂混粘土である。遺物は鎌倉時代末期の瓦器椀片が１点のみ出土しているが細片のため図化はしていない。

ＳＫ103

５～６区で検出した。東西端が調査区外に至る。検出部分で東西幅0.7m、南北幅4.8m、深さ0.4mを測る。埋土は10YR4/4褐色粗砂混粘土である。内部からは奈良時代後期に比定される土師器、須恵器、平瓦等の細片が少量出土している。土師器３点(１～３)を図化した。１は杯の小片である。復元口径13.6cm を測る。体部外面の器面調整は横位のヘラミガキ。色調は赤褐色。２・３は甕の口縁部片である。口縁部の形状は、屈曲部に面を形成した後に斜上方に伸びる２と外反して伸びる３がある。口縁端部は外折して幅広の端面を形成する２と内傾する小端面を形成する３がある。色調は共に褐灰色。奈良時代後期に比定される。

小穴(ＳＰ)

ＳＰ101

１区で検出した。北部および東部が調査区外に至る。検出部分で東西幅0.3m、南北幅0.34m、深さ0.15mを測る。埋土は10BG4/1暗青灰色細粒シルト混粘土である。遺物は土師器片が１点のみ出土したが細片のため帰属時期は明確でない。

ＳＰ102

１区で検出した。東西端が調査区外に至るがほぼ円形を呈するものと推定される。径0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は5B3/1暗青灰色細粒シルト混粘土。遺物は奈良時代後期に比定される土師器甕片が出土しているが細片のため図化していない。

ＳＰ103

１区で検出した。円形を呈するもので長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1m を測る。埋土は5Y4/1灰色細砂混粘土である。遺物は奈良時代後期に比定される土師器、須恵器片の他、長さ12cm、幅８cm を測る角材が底部に接して出土している。

ＳＰ104

２区で検出した。円形を呈するもので径0.3m、深さ0.1m を測る。埋土は10YR5/6黄褐色粗粒シルト混粘土である。遺物は鎌倉時代末期の瓦器椀片が１点出土しているが、細片のため図化していない。

ＳＰ105

３区で検出した。円形を呈するもので径0.3m、深さ0.1m を測る。埋土は10YR4/4褐色粗粒シルト混粘土である。遺物は出土していない。

溝（ＳＤ）

ＳＤ101

２区で検出した。南西から北東方向に伸びる。幅1.8m、深さ1.0m を測る。埋土は5B3/1暗青灰色細粒シルト混粘土である。遺物は土師器、瓦器椀の破片が極少量出土している。瓦器椀１点（５）を図化した。５は和泉型瓦器椀で約1/3が残存している。復元口径12.4cm、器高3.0cm、復元高台径3.1cm を測る。体部は浅い椀型で形骸化した高台が貼り付けられている。体部内面には渦巻き状ヘラミガキが施されている。尾上実氏編年（尾上1983）のⅣ－２期にあたり、実年代は森島康雄氏編年（森島1992）による13世後半が推定される。

ＳＤ102

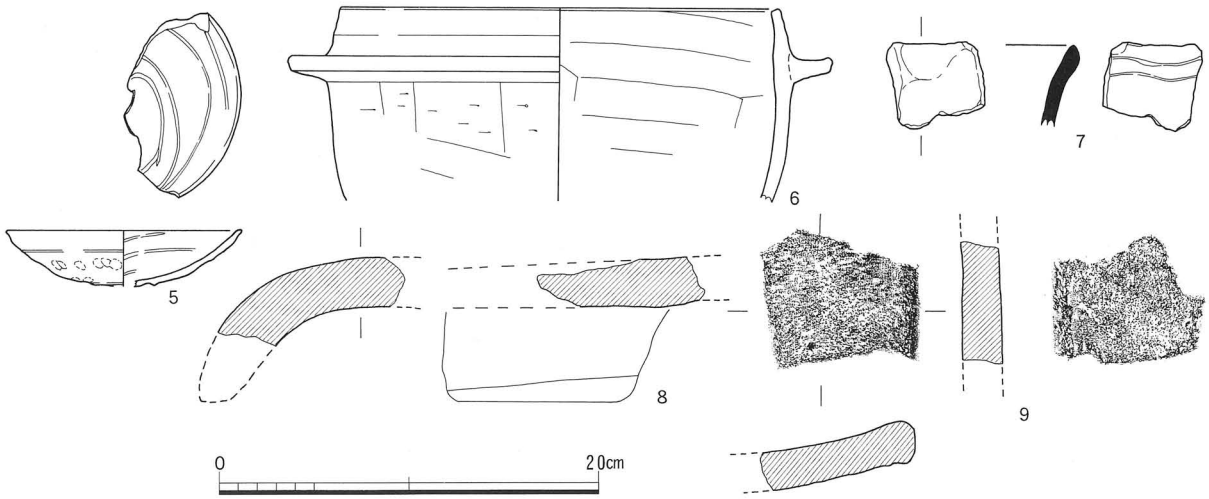
３区で検出した。東西方向に伸びる。幅0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は10BG3/1暗青灰色中粒シルト混粘土である。遺物は瓦器椀の破片が少量出土している。

ＳＤ103

３区で検出した。南北方向に伸びる。幅0.2m 以上、深さ0.1mを測る。埋土は10BG3/1　暗青灰色細砂混粘土である。遺物は土師器、瓦器椀、瓦質足釜等の破片が少量出土している。

ＳＤ104

３区で検出した。東西方向に伸びる。幅2.0m、深さ0.3m を測る。埋土は N3/0暗灰色細砂混粘土である。遺物は土師器、須恵器、屋瓦等の破片が少量出土している。４点（６～９）を図化した。６は土師器羽釜で、口縁部の約1/4が残存している。復元口径23.2cm、鍔径28.7cm を測る。口頸部外面は二段に成形されているが、やや雑な成形のため稜線は明瞭でない。鍔は水平に貼り付けられており、端面は内傾する小端面を作る。鍔部端面以下は煤が付着している。室町時代後期前半（16世紀前半）に比定される。７は東播系須恵器鉢の流し口部分小片である。鎌倉時代前半のものか。８は丸瓦片である。胴部凸面は縦位方向のナデ、胴部凹面は細かい布目痕を一部に残すがやや不鮮明である。９は平瓦片である。凸面はナデ、凹面は細かい布目痕が残る。出土遺物には



第５図　ＳＤ101(５)、ＳＤ104(６～９)出土遺物実測図

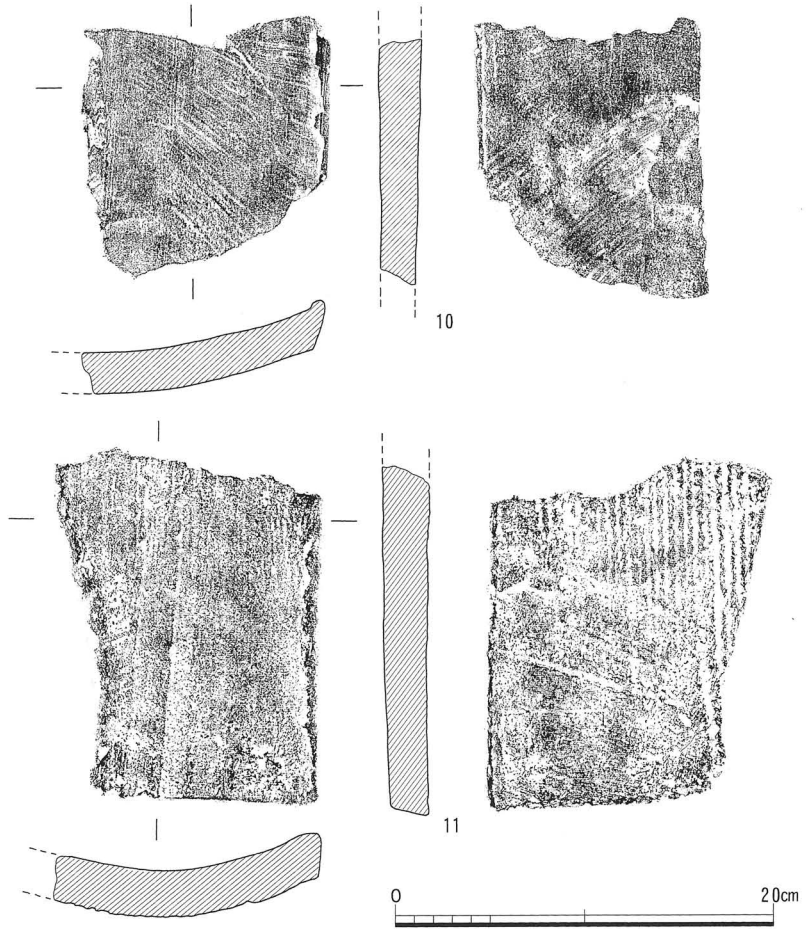
時期幅が認められるが、６の土師器羽釜からみて、遺構の帰属時期は室町時代後期前半(16世紀前半)が比定される。

ＳＤ105

６区で検出した。南北方向に伸びる。全長3.8m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色中粒シルト混粘土である。遺物は土師器の破片が少量出土している。

４)遺構に伴わない遺物

３層を中心として奈良時代後期から鎌倉時代末期に比定される土師器、須恵器、屋瓦等が少量出土しているが、細片化したものが大半で図化可能なものは少ない。平瓦２点(10・11)を図化した。10は凹凸面共に斜め方向の糸切り痕が認められる。凹面には細密な布目痕を全面に残すが、側縁から４cm幅についてはナデにより消されている。凸面はナデによる調整が行われているがやや雑で、糸切り痕や指頭による窪みが散見される。色調は淡灰色。焼成は良好。鎌倉時代に比定される。11の凹面には模骨痕と細密な布目痕。凸面には糸切り痕、縄叩き痕、離れ砂が認められる。



第６図　３層出土遺物実測図

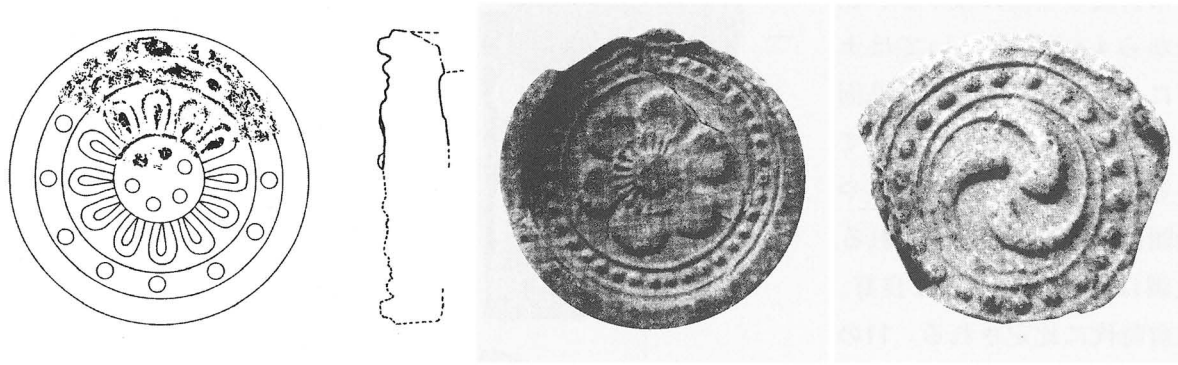
色調は灰色。焼成は良好。平安時代後期から鎌倉時代初頭に比定されよう。

参考文献
・尾上　実　1983「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古希記念論集　古文化論集』
・森島康雄　1992「近畿産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古近世研究会

3. まとめ

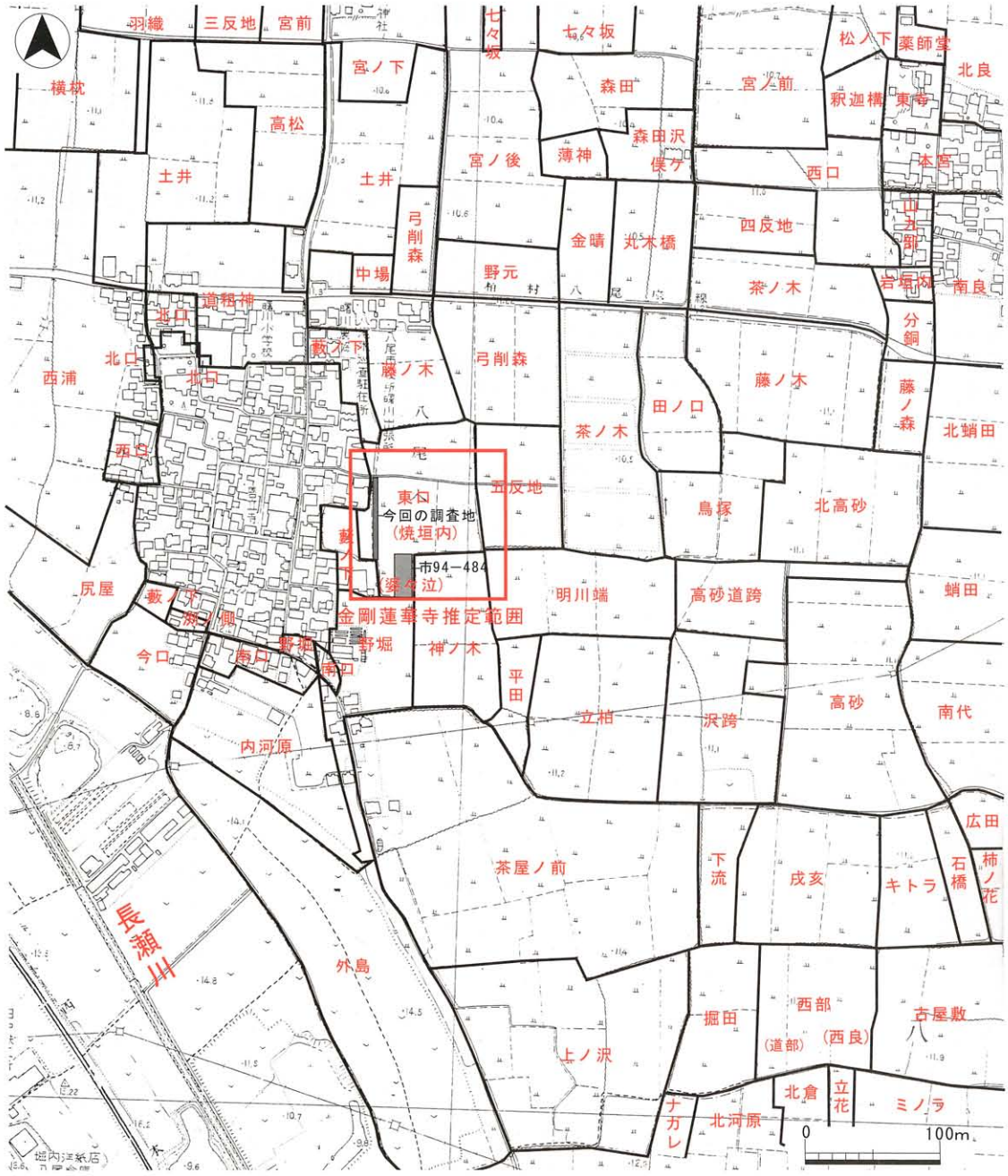
今回の調査は、小規模で線的な調査ではあったが奈良時代後期・鎌倉時代末期・室町時代後期の遺構を検出し、長期間に亘る集落の存在が確認された。また調査地の南東約40mに近接する位置では、平成6年度に市教委による調査(第1図⑫)が行われており、奈良時代後半および平安時代前期末(10世紀前後)を中心とする遺物が検出されている。なかでも平安時代前期の細弁十二弁軒丸瓦(①) が出土しており、近隣に存在したと推定される金剛蓮華寺との関係が推定されている。

金剛蓮華寺については、戦国期の公卿であった三条西公条(さんじょうにしきんえだ)の『吉野詣記』天文二十二年(1553) 3月10・11日の条にある、「信貴山から八尾木の金剛蓮華寺に詣で、その時、村人から八尾木の鶯の伝説を聞く」と記されており、室町時代後期にはその存在が推定される。一方、考古遺物においては、八尾木地区の中央部にある善立寺境内および周辺からや屋瓦の出土が報ぜられており、『八尾市史』『八尾市史文化財編』に平安時代後期の2点の軒丸瓦(②単弁六弁蓮華文・③三巴文)が紹介されている。そのほか、地域の古伝によれば、八尾木集落の南東部あたる小字「東口」の南部が(焼垣内)、「野堀」の東部が(婆々泣)と呼ばれていたようで、江戸時代の中頃に(焼垣内)から鎌倉時代のもの推定される金銅の十一面観音像が出土している。これらから、奥田尚氏は『河内西之京周辺史』の中で、小字「東口」を中心とする寺域が推定されている。今回の調査地および平成6年度調査地は、氏が推定された寺域範囲に含まれており、寺院建物が想定される屋瓦の出土をみており、周辺に金剛蓮華寺が存在した蓋然性が高くなった。既報告の屋瓦類を金剛蓮華寺のものとして寺院の沿革を推定すれば、平成6年度の市教委の調査で出土した平安時代前期に比定される①軒丸瓦が最も古くに位置付けられる。この①軒丸瓦は、菊花状の細弁を持つ十二弁軒丸瓦で外区に12個の連珠文が配されている。平城宮出土軒丸瓦の6133型式の系譜を引くもので、大阪府吹田市の吉志部瓦窯および京都市北区の西賀茂瓦窯で類似した意匠のものが認められている。市内では東郷廃寺の他、羽曳野市野中寺から同意匠のものが出土している。『八尾市史』『八尾市史文化財編』



①　②　③

第7図　①市教委平成6年調査出土瓦　②『八尾市史』掲載瓦　③『八尾市史』『八尾市史文化財編』掲載瓦



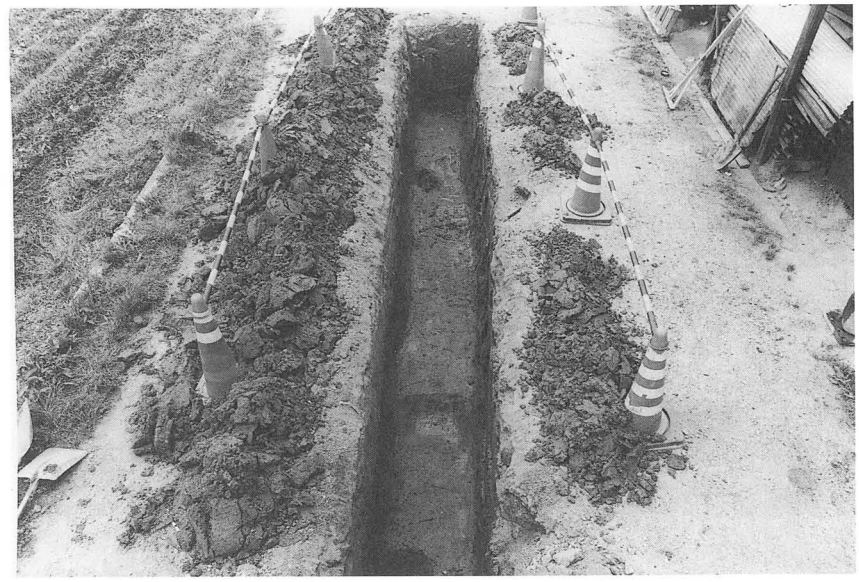
第８図　八尾木地区小字名（Ｓ＝1/5000）　（昭和36年度発行地図を使用）

掲載されている２点の軒丸瓦のうち②単弁六弁蓮華文軒丸瓦については、１＋４に配された蓮子の周りに蕊帯が廻るもので、堺市向泉寺、和泉国分寺、和泉市池田寺から同意匠のものが出土している。山崎信二氏編年(山崎2000)の和泉系瓦で中世Ⅰ期(1180～1210年)に比定される。もう１点の③三巴文軒丸瓦は、内区に左巻きの巴文、外区内縁には２本の圏線間に22個の連珠文が配されている。時期的には②と同時期が推定される。以上の屋瓦類から勘案して、平安時代前期には創建されており、平安時代後期末～鎌倉時代初頭の建て替えを経て、文献に記された室町時代後期段階においては法灯を燈す寺院として存在していたことが推定される。第８図で金剛蓮華寺周辺の八尾木村小字名を昭和36年発行の地図で示した。第１図の現在の周辺地図との比較でも明らかなように、近年の爆発的な住宅開発により現地形図での小字位置の対応が困難であることが理

解されよう。金剛蓮華寺が位置する若江郡の南部一帯は、『続日本紀』の神護景雲三年(769)の十月三十日の条に「詔以二由義宮一、為二西京一。河内国為二河内職一。・・・」と記されている「由義宮」「西京」や弓削寺跡が存在しており、これらの旧跡を含めて早急な遺跡範囲の確定が急務である。

参考文献
・吉田野乃　1995 「17. 東弓削遺跡(94－484)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅰ』 八尾市文化財調査報告31　平成6年度国庫補助事業
・1996 『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』 奈良国立文化財研究所
・高橋真希・藤原　学　1994 『平成6年度　特別展　瓦－平安の都へ－』 吹田市立博物館
・奥田　尚　1982 『西ノ京周辺史』
・沢井浩三他　1958 『八尾市史』 大阪府八尾市役所
・辻合喜代太郎他　1975 『八尾市史　文化財編』 八尾市役所
・渚　斎　1995 「東郷廃寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要7』 八尾市教育委員会文化財課
・2001 『第4回摂河泉古代寺院フォーラム　中世寺院の幕開け－11・12世紀の寺院の考古学的研究－』 摂河泉古代寺院研究会・大阪府立弥生文化博物館
・山崎信二　2000 「中世瓦の研究」『奈良国立文化財研究所学報第59冊』 奈良国立文化財研究所

図版一

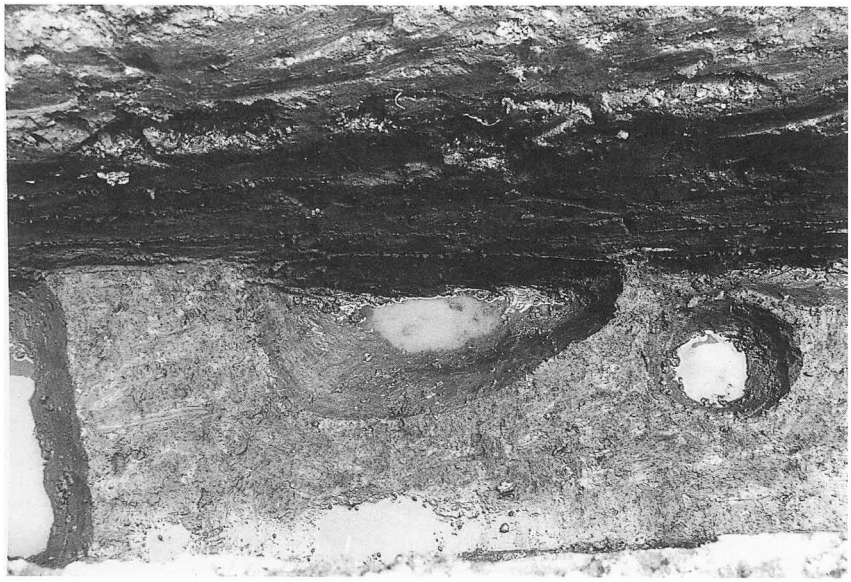


1区　全景（北から）

2区　全景（北から）

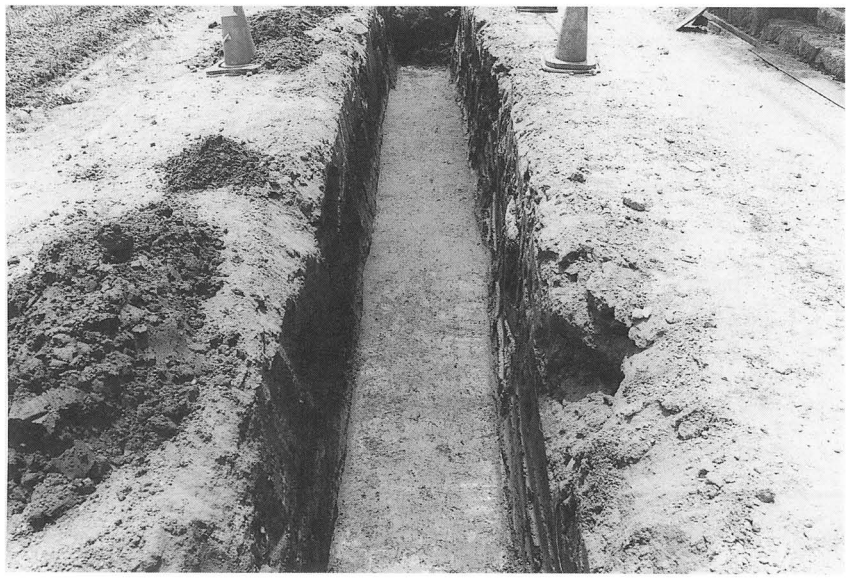
3区　全景（北から）

図版二



3区　遺構検出状況（西から）

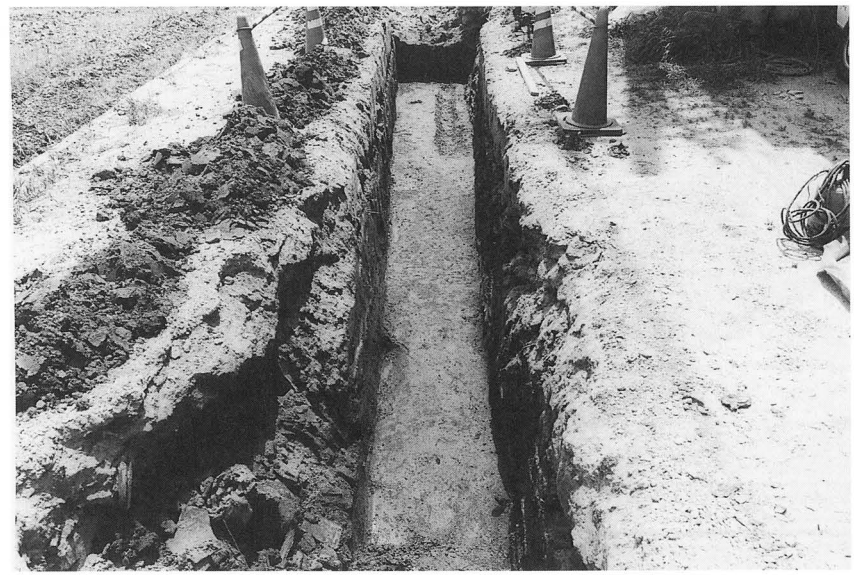
4区　全景（北から）



5区　全景（北から）

図版三

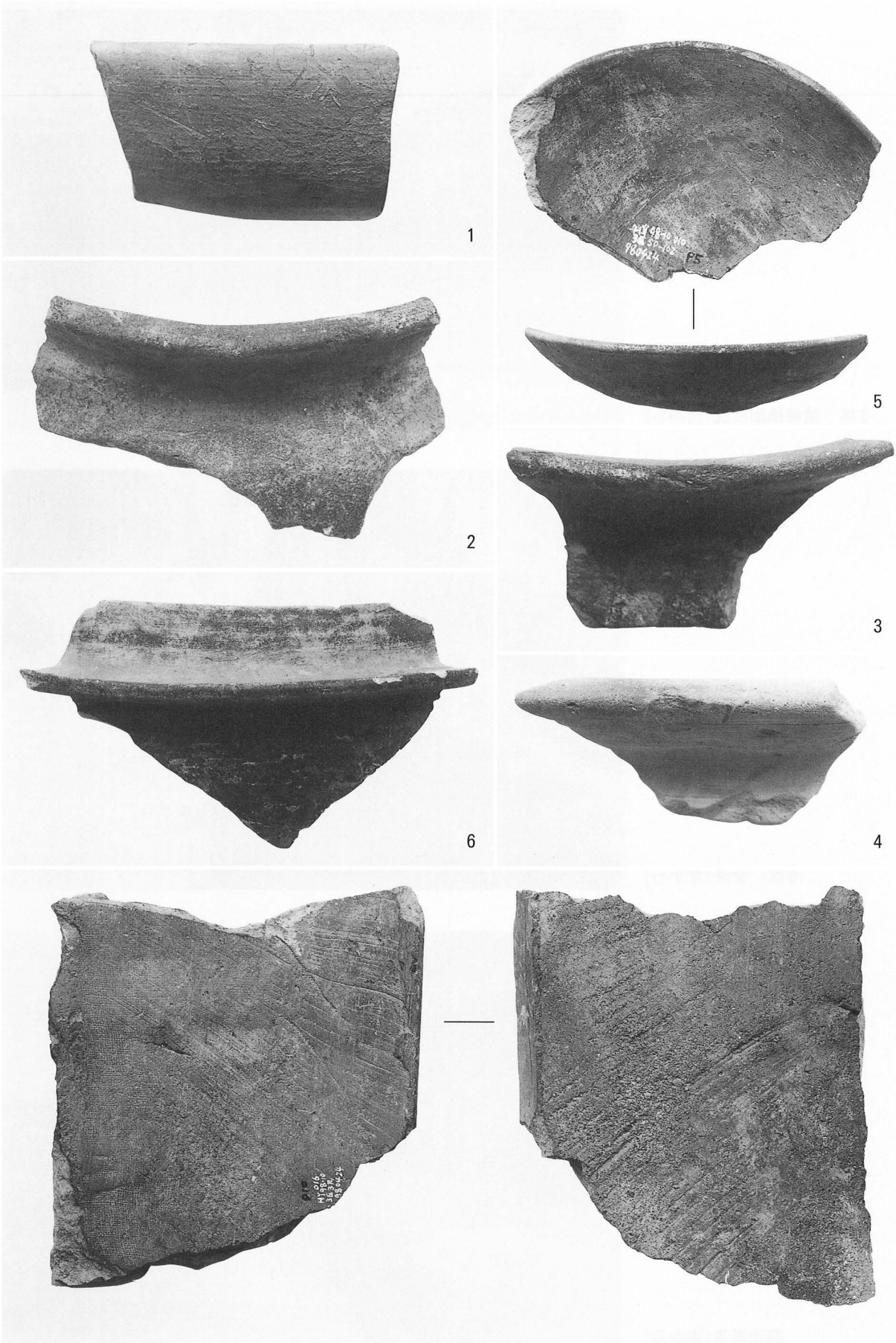
5区　遺構検出状況(西から)



6区　全景(北から)

調査風景(南から)

図版四



SK101(4)、SK103(1～3)、SD101(5)、SD104(6)、3層(10)出土遺物

Ⅷ　山賀遺跡第12次調査（YMG2006－12）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市山賀町３丁目地内で実施した公共下水道工事(平成17年度新家排水区第37工区)に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する山賀遺跡第12次(ＹＭＧ2006－12)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成18年４月10日～６月30日(実働６日間)にかけて、島田裕弘を調査担当者として実施した。調査面積は約37.4㎡である。

1．現地調査にあたっては、青山洋、田島宣子、細谷利美、村井厚三の参加を得た。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成18年６月30日に完了した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－細谷、図面トレース－青山、島田、写真撮影－山名康子、本書の執筆・及び編集－島田が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに ……111

2．調査概要 ……113

　1)調査の方法と経過 ……113

　2)基本層序 ……113

　3)検出遺構・出土遺物 ……116

3．まとめ ……116

Ⅷ　山賀遺跡第12次調査（ＹＭＧ2006－12）

１．はじめに

山賀遺跡は八尾市の北西部から東大阪市の南東部にまたがって位置している。現在の行政区画では八尾市の新家町１～８丁目・山賀町１～６丁目および東大阪市の若江西新町５丁目・若江南町４～５丁目にあたり、東西0.85km、南北1.0kmがその範囲とされている。

地理的には旧大和川及びその支流河川による活発な沖積作用によって形成された河内平野のほぼ中央、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。また、当遺跡の周辺には、北に若江北遺跡、東に西郡廃寺・西郡遺跡、南東に萱振遺跡、南に友井東遺跡・美園遺跡、西に小若江北遺跡、北西には上小阪遺跡など数多くの遺跡が存在している。

当遺跡は、昭和46年に東大阪市域で行われた楠根川改修工事の掘削残土から多量の弥生土器や石器が発見されたことによりその存在が明らかになった。その後、大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター(現(財)大阪府文化財センター)、東大阪市教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会によって多次にわたる調査が行われており、縄文時代晩期～近世に至る複合遺跡と認識されている。なかでも、昭和58年～60年にかけての大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道建設に伴う調査では、弥生時代前期中葉に成立する集落が確認され、河内平野における稲作導入期の様相を知る上での貴重な成果をあげている。

第１図　調査地周辺図

第１表　調査地一覧表（第１図に対応）

調査名	調査機関	調査面積（m²）	種別	主な時代	文　献
友井東（その1）	府教委（財）大文セ	－	生産域　墓域　集落	縄文時代晩期～近世	亀島重則　他　S.59『友井東（その１）　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
友井東（その２）	府教委（財）大文セ	－	生産域	縄文時代晩期～近世	生田維道　他　S.58『友井東（その２）　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
山賀（その３）	府教委（財）大文セ	3614.975	墓域　集落	縄文時代晩期～近世	西口陽一　他　S.59『山賀（その３）　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
山賀（その４）	府教委（財）大文セ	－	生産域	縄文時代晩期～近世	生田維道　他　S.58『山賀（その４）　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
山賀（その５・６）	府教委（財）大文セ	－	生産域　墓域	縄文時代後期～近世	田中和弘　他　1986『山賀（その５・６）　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
山賀遺跡（63-044）	市教委	9	－	－	近江俊秀　1989「9. 山賀遺跡（63-044）」『八尾市文化財調査報告19　八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』
山賀第２次（YMG93-2）	（財）八文研	66.12	生産域	縄文時代晩期～中世	成海佳子　1994「Ⅹ. 山賀遺跡第２次調査（YMG93-２）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告40』
山賀第５次（YMG96-5）	（財）八文研	43.2	集落	近世	森本めぐみ　1998「XX. 山賀遺跡第５次調査（YMG96-５）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告60』
山賀第７次（YMG97-7）	（財）八文研	40	集落	縄文時代晩期～近世	古川晴久　1999「XV. 山賀遺跡第７次調査（YMG97-７）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告62』
山賀第９次（YMG98-9）	（財）八文研	90	集落	縄文時代晩期　弥生時代中期～後期	森本めぐみ　2000「XVII. 山賀遺跡第９次調査（YMG97-９）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告65』
山賀第12次（YMG2006-12）	（財）八文研	37.4	生産域	弥生時代	本書掲載

※調査機関　府教委：大阪府教育委員会　（財）大文セ：（財）大阪文化財センター
市教委：八尾市教育委員会　（財）八文研：（財）八尾市文化財調査研究会

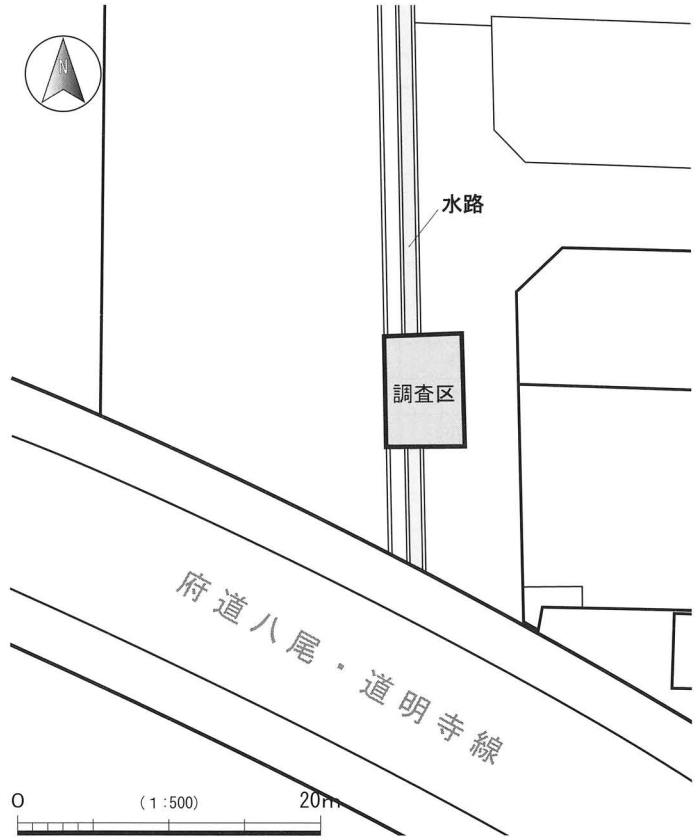
当遺跡でヒトの痕跡が確認されるようになるのは縄文時代晩期以降からである。この地域は、旧石器時代～縄文時代中期には瀬戸内海と連なる内湾となっており、この頃はまだ海水下に没している。縄文時代後期～晩期になり海退期に入ると、海岸線の後退と共に河川による沖積作用も進んで河内潟が形成される。離水と水没を繰り返しながら形成された湿地には遺物と共に鹿やヒトの足跡が残されており、付近一帯が縄文人の水場や猟場となっていた様子が窺える。弥生時代になり稲作が導入されると、これらの低湿な地域は生産の場となり水田やそれに伴う集落が営まれるようになる。当遺跡では弥生時代を通して生産関連遺構の他に河川や溝が数多く検出されているのが特徴である。特に中期～後期にかけては、厚く堆積した氾濫堆積物とみられる土砂が遺構面を幾度となく廃絶させており、これに伴って集落関連の遺構は希薄となっていく。一方で、水田は引き続き営まれ続け、土地の不安定さのためか大溝やしがらみ等の治水遺構が目立つようになる。古墳時代以降は、弥生時代に比べると氾濫堆積物があまりみられなくなり土地の安定が窺える。しかし、耕作関連以外の遺構は希薄であり、建物や墓が点的に確認されているだけである。その後、条里制の施行により土地の区画が大規模に改変されても耕作地であることに変わりはなく、現代に至るまでその地割を残しながら生産域としての土地利用が続けられる。宝永元年（1704）に行なわれた大和川の付け替え工事は、大規模な新田開発を進めることになる。それまで耕作不能地として放置されていた湿地は水田化し、旧大和川の影響の強い砂地には畠が造成される。畠では綿の栽培が盛んになり、これにより近代に至るまでの重要な産業となる“河内木綿”が成立する。

２．調査概要

１）調査方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が山賀遺跡内で実施した第12次調査にあたる。調査は八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、公共下水道工事の進捗状況を考慮しながら実施した。

今回の調査における調査区は１箇所である。平面規模約7.5×5.0m、面積約37.4㎡の立坑部分を対象とするもので、現地表（T.P. ＋6.0m）下6.7m前後までを調査した。調査は断面観察に重点をおいて行った。掘削については機械と人力を併用して行い、遺構、遺物の検出に努めた。調査期間は平成18年４月10日～６月30日（実働６日）である。



第２図　調査区周辺図

２）基本層序

地表面下1.7～2.5mは現代の盛土及び既設水路施設時の攪乱であった。調査区東側は比較的地層の残りが良好であったが、既設水路にあたる西側は施設工事に伴うとみられる攪乱が深くまで達していた。土層については、T.P. ＋4.3～－0.7mまでに確認した計32層の単層を15種に分類し基本層序とした。基本層序名は「第」＋「通し番号」＋「層」として現代に近いものから順に番号を付した。本文中では層序名は「第○層」、分層単位である単層は「○層」と表記している。また、断面記録は調査区北壁と南壁において実施した。以下に各層序の概要を述べる。

第１層から第５層までは撹拌層が連続で各層が水平で安定していること、鉄分・マンガンの沈着が顕著なことから耕作土と考えられる。盛土直下の第１層は旧耕作土である。土師器細片がわずかに含まれる第５層の時期は、周辺の成果から古墳時代と推察される。

第６層はやや暗色がかった土壌化層で下方にかけて層の淘汰が悪くなる。下位の第７層の上部が土壌化したものとみられ、湿地の地表面の可能性が考えられる。また、層中に含まれる鉄分は耕作土である上位層からの溶脱による沈着である。

第７層は微粒砂が主体の砂層で、水平方向のラミナが顕著に認められる。滞水状況下での堆積層と考えられる。

第８層は粗粒砂が主体の砂層で、ラミナが認められる。流木や細かな植物遺体が多く含まれ、湧水が認められることから流路内の堆積層と考えられる。断面上での層理の様相から南東から北西にかけての流れであったと推測される。涌水は西側から特に激しく、流芯は調査区のさらに西

第２表　地層名一覧表

順序	番号	色相	色名	土質	特徴	構造	備考
第１層	1	10Y4/1	灰	極粗粒砂～中粒砂混じり細粒砂～シルト	細粒砂～シルト優勢	攪拌土	
第２層	2	7.5GY5/1	緑灰	極粗粒砂～中粒砂混じり細粒砂～シルト	細粒砂～シルト優勢　Fe・Mn 含む	攪拌土	
第３層	3	7.5Y5/1～6/1	灰	粗粒砂～中粒砂混じり細粒砂～微粒砂	Mn 含む　層の淘汰がやや悪い	攪拌土	
第４層	4	5Y5/2～6/2	灰オリーブ	粗粒砂～中粒砂混じり細粒砂～微粒砂	Fe•Mn 少し含む	攪拌土	
第５層	5	2.5Y6/2	黄灰	極粗粒砂～細粒砂混じり微粒砂～シルト	Fe・Mn 含む	攪拌土	土師器細片わずかに含む
第６層	6	2.5Y4/1	黄灰	粗粒砂～シルト	層下方は淘汰が悪い　Fe 含む	土壌層	
第７層	7	5Y6/2～6/2	灰～灰オリーブ	細粒砂～微粒砂	水平方向のラミナあり	ラミナ	
	8	2.5Y6/2～7/2	灰黄	細粒砂～粘土	水平方向のラミナあり　Fe・Mn 含む	ラミナ	
	9	2.5Y5/1～5/2	黄灰～暗灰黄	細粒砂～粘土	微粒砂～粘土優勢　炭化物がラミナ状に入る	ラミナ	
第８層	10	2.5GY6/1	オリーブ灰	細粒砂～微粒砂	層の締まりが悪い　上部からアシ•ヨシの根の痕跡	ラミナ	
	11	7.5Y6/1～8/1	灰～灰白	細粒砂～微粒砂	細粒砂優勢　上方粗粒化　細礫わずかに含む	ラミナ	
	12	5Y7/1～6/2	灰白～灰オリーブ	粗粒砂～微粒砂	中粒砂～細粒砂優勢	自然堆積層	
	13	7.5Y5/1～7/1	灰～灰白	細礫～微粒砂	粗粒砂～中粒砂優勢　層下部にラミナあり上方粗粒化	ラミナ	
	14	7.5Y4/1～7/1	灰～灰白	粗粒砂～粘土	中粒砂優勢　砂と粘土の互層　流木•植物遺体含む	ラミナ	ヤス状木製品、流木出土
	15	2.5GY4/1～6/1	暗オリーブ灰～オリーブ灰	細粒砂～シルト	微粒砂優勢　砂とシルトの互層	ラミナ	
	16	10Y7/1～8/1	灰白	極粗粒砂～中粒砂	細礫含む	自然堆積層	
第９層	17	10Y4/1	灰	中粒砂～細粒砂混じり微粒砂～粘土	シルト優勢　層の淘汰悪い　炭化物含む	土壌層？	
第10層	18	2.5GY6/1	オリーブ灰	微粒砂～粘土	シルト優勢　細粒砂少し含む　層下部に炭化物がラミナ状に入る	自然堆積層	
	19	2.5GY3/1	暗オリーブ灰	微粒砂～粘土	シルト優勢　炭化物がラミナ状に入る	自然堆積層	
第11層	20	5Y5/1～6/1	暗オリーブ～オリーブ灰	細粒砂混じり微粒砂～粘土	シルト優勢　層下部に炭化物を少し含む	攪拌土	
	21	5Y5/1～6/1	暗オリーブ～オリーブ灰	中粒砂～細粒砂混じり微粒砂～粘土	微粒砂～シルト優勢　粗粒砂少し含む	攪拌土	
	22	5Y5/1～6/1	暗オリーブ～オリーブ灰	細粒砂混じり微粒砂～粘土	シルト～粘土優勢　炭化物わずかに含む	攪拌土	
第12層	23	7.5Y6/1～7/1	灰～灰白	シルト～粘土	層下部に炭化物がラミナ状に入る	自然堆積層	
	24	7.5Y4/1	灰	シルト～粘土	層上部に炭化物含む	自然堆積層	
第13層	25	7.5Y3/1～4/1	オリーブ黒～灰	シルト～粘土	上方暗色化　炭化物少し含む	土壌層	第１黒色粘土層
第14層	26	7.5Y4/1～5/1	灰	微粒砂～粘土	上方暗色化　炭化物少し含む	自然堆積層	
第15層	27	5GY6/1	オリーブ灰	細粒砂～微粒砂	微粒砂やや優勢	自然堆積層	
	28	2.5GY6/1～10Y7/1	オリーブ灰～灰白	極粗粒砂～微粒砂	下方粗粒化　ラミナあり　植物遺体含む	自然堆積層	
	29	7.5Y4/1～5/1	灰	中粒砂～シルト	部分的にラミナあり	自然堆積層	
	30	10Y6/1～8/1	灰～灰白	中粒砂～細粒砂	粗粒砂含む　ラミナ健著　植物遺体含む	自然堆積層	
	31	10Y6/1～7/1	灰～灰白	細礫～粗粒砂	上方細粒化　径15mm までの礫を含む	自然堆積層	
	32	10Y7/1～8/1	灰白	細礫～中粒砂	細礫優勢　径15mm までの礫を含む	自然堆積層	

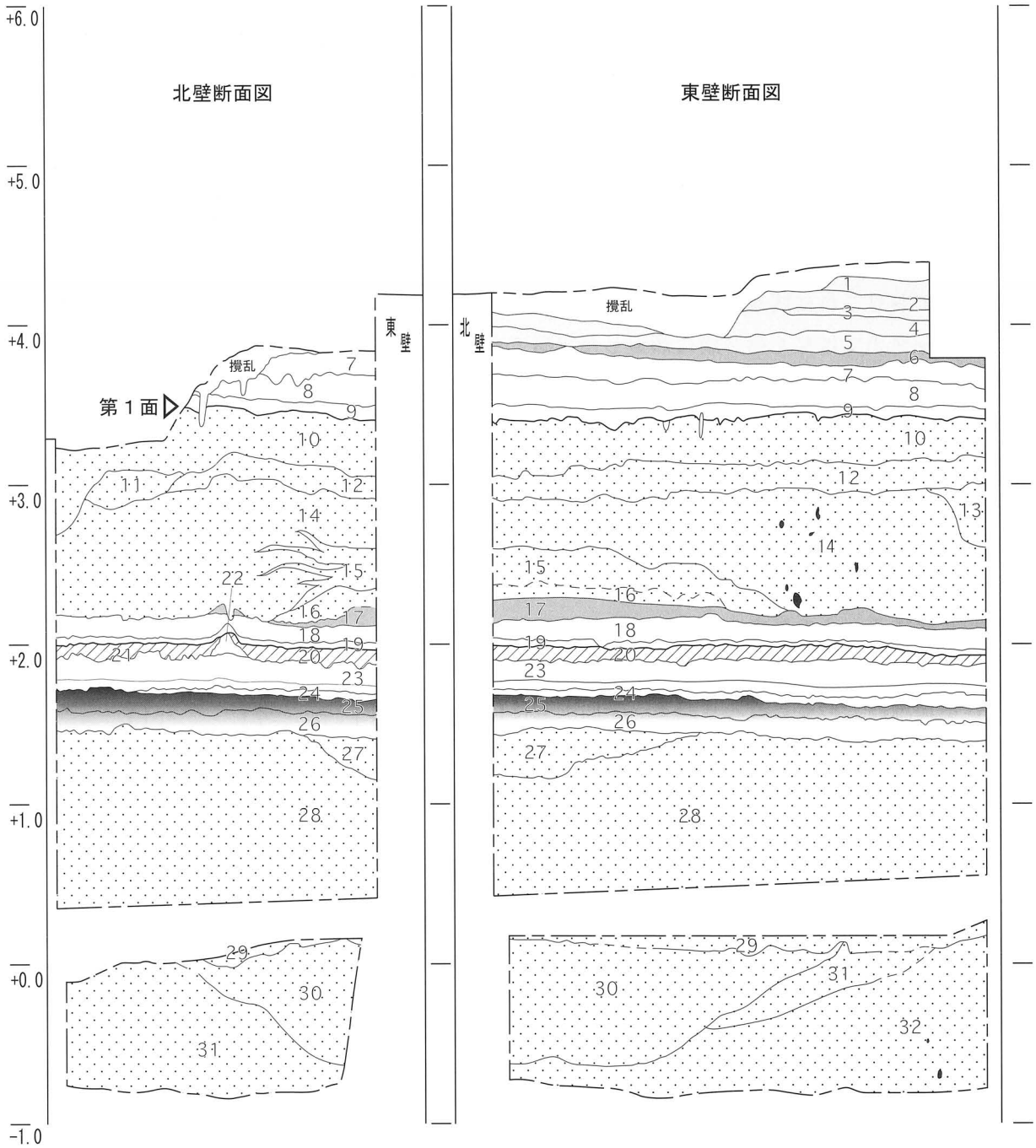
になるものと推測される。

第９層はやや暗色化するシルト優勢の土壌層である。部分的に砂粒が含まれており湿地の地表面もしくは攪拌土とも考えられるが遺構・遺物共に皆無なためその性格は判断できない。

第10層は炭化物がラミナ状に認められる堆積層である。滞水状況下での堆積と考えられる。

第11層は暗オリーブ灰色の土壌層である。シルトが主体であるが、砂粒が普遍的に含まれ全体的に淘汰が進んでいることから攪拌層と考えられる。北壁断面上において畦畔状の高まりが検出され、水田作土である可能性が高い。

第12層はシルト主体の堆積層である。第10層と同じく炭化物がラミナ状に認められ滞水状況下での堆積と考えられる。



第３図　調査区断面図（垂直1/40　水平1/80）

第13層はオリーブ黒色の粘土～シルト層で強い暗色を呈する土壌化層である。（財）大阪文化財センター調査の『山賀（その５・６）』における第１黒色粘土層と対応する土壌層とみられる。

第14層は灰色の粘質土である。全体的に構造が不明瞭で上方がやや暗色がかっているのは第13層の土壌化の影響が本層まで及んでいるためと考えられる。

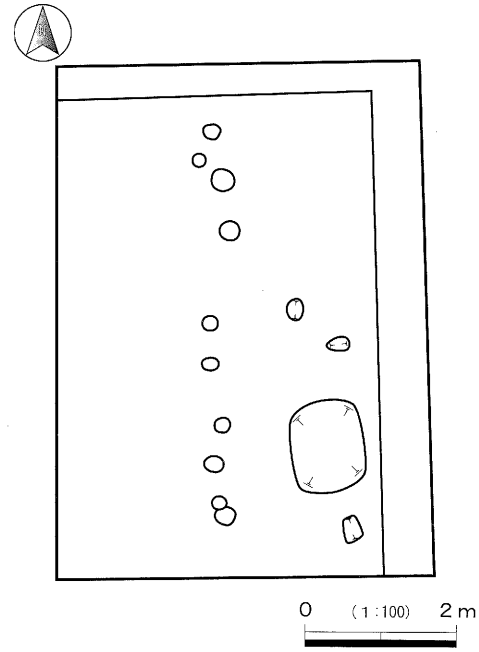
第15層は粗粒砂が主体の堆積層で下方にかけて粗粒化しラミナが顕著になる傾向がみられる。32層では細かな植物遺体の他に流木が多く含まれていた。土壌層を挟まないことから一連の流路堆積と考えられ、粒度やラミナの方向の違いなどから数単位の流れが認められる。

3）検出遺構と出土遺物

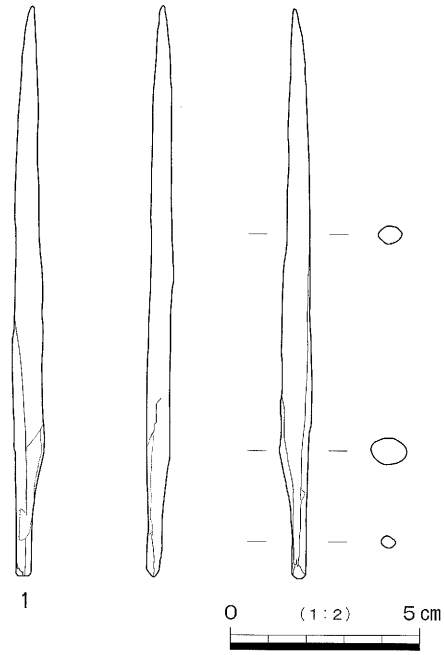
遺構面として平面調査を行ったのは１面のみである。遺構検出は第７層下面において行った。検出遺構は土坑と杭跡である。土坑埋土は第２～８層のブロック土で構成されており、現代の陶器片が含まれていたため攪乱と判断した。計10基検出された杭跡は。南北軸を持ち、杭列を構成するものと思われる。杭列は水路の東肩と軸を同じくしておりこれに関連する遺構と考えられるが、埋土がブロック土ではなく第２層に類似した単層であることから、その帰属時期はより古いものと考える。遺物は出土しておらず時期は不明である。

北壁断面上では第11層上面帰属の水田畦畔とみられる高まりが確認された。やや淘汰の悪い畦畔芯(22層)の両側から撹拌層(20・21層)がすりついている。21層は20層に比べてわずかに砂質が強くなり畦畔を挟んで耕作土の様相が変化する。この高まりの上面は自然堆積層に覆われており上面は廃絶時の様相を表す。以上のことから高まりは水田畦畔であると考えられる。平面調査は行なっていないため遺構の広がりは不明である。

本調査での出土遺物は14層から出土した木製品１点のみである。ラミナが顕著な砂質優勢の自然堆積層である14層は流路内の堆積層と考えられる。遺物は細かな植物遺体や流木に混じって出土した。１は完形のヤス状木製品である。加工痕跡は磨耗のため確認できない。長さ15.05cm、最大径0.95cmを測る。(財)大阪文化財センターによる山賀遺跡の調査において、同様の木製品が10点以上出土しており類例として挙げられる。遺物の帰属時期は弥生時代前期から中期と報告されている。



第４図　第１面平面図



第５図　出土遺物実測図

３．まとめ

今回の調査区は、水路施設時の攪乱のために古墳時代以降と考えられる層の残存が非常に悪く、遺物・遺構共に希薄であった。第１面では既設水路以前にも同位置に古い水路が通っていたことを示唆する杭列が検出されたのみである。

断面確認のみにおわった畦畔及び水田は明確な時期を与えることはできなかった。しかし、水田上面を覆っている一連の自然堆積層からはヤス状木製品が出土しており、これを判断基準とするならば水田の時期は少なくとも弥生時代中期以前と推察される。既往調査においても当該期の生産遺構は広範囲で検出されている。

強い暗色を呈する第13層は、(財)大阪文化財センター調査の『山賀(その５・６)』における第１黒色粘土層と対応する土壌層とみられ、その形成時期は縄文時代晩期に比定される。今回の調査における最終掘削深度はT.P.－0.8mまで達したが、より下層の鍵層である第２黒色粘土層(T.P.＋0.2～1.0m)と第３黒色粘土層(T.P.0～－0.5m)は存在しなかった。対応する標高に存在する第15層はラミナが顕著な粗粒砂～細礫主体の堆積層であることを考えると。調査区の全範囲が、第２黒色粘土層上面帰属の流路内である可能性が高いと考えられる。最後に周辺における既往調査成果から比定した層序の時期対応一覧表を記載する。

第３表　層序一覧表

層序名	標　高 (m)	時　代	性　格	備　　考
攪　乱	+6.0～4.3	現代		
第１層	+4.3～4.2	現代	耕作土	旧耕土
第２層～第５層	+4.2～3.8	古墳時代以降	耕作土	撹拌土が連続するが時期決定困難
第６層～第７層	+3.8～3.4	弥生時代後期？	湿地？	上部は暗色化する
第８層	+3.4～2.3	弥生時代前期～中期	流路	砂質強くラミナが顕著 ヤス状木製品出土
第９層～第10層	+2.3～2.0	弥生時代前期～中期	湿地	上部は暗色化する
第11層	+2.0～1.9	弥生時代前期～中期	水田作土	砂粒を均質に含む撹拌土　畦畔確認
第12層	+1.9～1.6	弥生時代前期～中期	湿地	
第13層～第14層	+1.6～1.4	縄文時代晩期	湿地	上部は強く暗色化する 第１黒色粘土層
第15層	+1.4～-0.8以下	縄文時代晩期	流路	砂質強くラミナが顕著　下部では細礫の比率が高くなる

参考文献

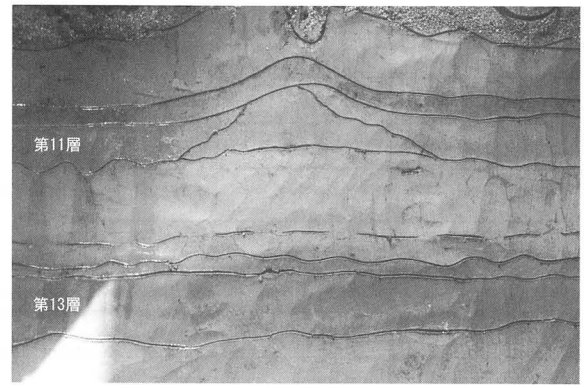
・(財)大阪文化財センター　1981『考古展　河内平野を掘る　近畿自動車道関連遺跡の発掘成果を中心として』
・生田維道　他　1983『山賀(その４)近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』(財)大阪文化財センター
・亀島重則　他　1984『友井東(その１)近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』(財)大阪文化財センター
・田中和弘　他　1986『山賀(その５・６)近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』(財)大阪文化財センター
・成海佳子　1994「Ｘ．山賀遺跡第２次調査(YMG93-２)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告40』(財)八尾市文化財調査研究会
・森本めぐみ　1998「XX．山賀遺跡第５次調査(YMG96-５)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
・森本めぐみ　2000「XVⅦ．山賀遺跡第９次調査(YMG97-９)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　2004「Ⅰ．山賀遺跡第３次調査(YMG93-３)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告81』(財)八尾市文化財調査研究会

図版1

東壁断面　第１～６層（西から）

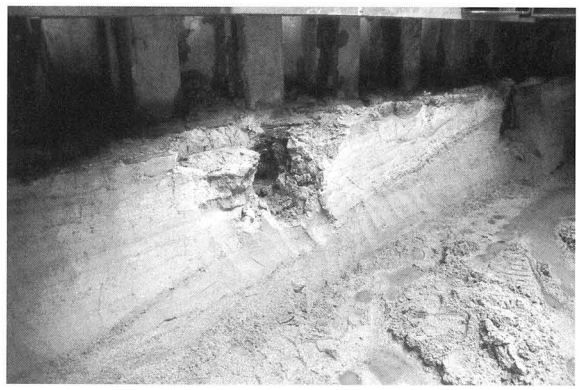
第１面　検出状況（西から）

東壁断面　第６～８層（南東から）



第11層　畦畔（南から）

東壁断面　第９～15層（南東から）



東壁断面　第15層（南東から）

第８層出土　ヤス状木製品

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく98
書名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告98
副書名	Ⅰ跡部遺跡(第40次調査)　Ⅱ池島・福万寺遺跡(第6次調査)　Ⅲ老原遺跡(第12次調査)　Ⅳ恩智遺跡(第18次調査)　Ⅴ亀井遺跡(第3次調査)　Ⅵ中田遺跡(第51次調査)　Ⅶ東弓削遺跡(第10次調査)　Ⅷ山賀遺跡(第12次調査)
巻次	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告98
シリーズ番号	98
編著者名	Ⅰ・Ⅳ・Ⅶ原田昌則　Ⅱ菊井佳弥　Ⅲ坪田真一　Ⅴ成海佳子・河村恵理　Ⅵ高萩千秋　Ⅷ島田裕弘
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58－2　TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 原因
あとべいせき 跡部遺跡 (第40次調査)	おおさかふやおしあとべきたのまち2・3ちょうめちない 大阪府八尾市跡部北の町2・3丁目地内	27212	64	34度36分58秒	135度35分12秒	20050801～20060223	約24	公共下水道
いけじま・ふくまんじいせき 池島・福万寺遺跡 (第6次調査)	おおさかふやおしかみのしまきた3ちょうめちない 大阪府八尾市上之島北3丁目地内	27212	72	34度38分02秒	135度37分28秒	20060420～20060714	約44	公共下水道
おいはらいせき 老原遺跡 (第12次調査)	おおさかふやおしおいはら1ちょうめちない 大阪府八尾市老原1丁目地内	27212	38	34度36分14秒	135度36分21秒	20060823～20060831	約48.6	公共下水道
おんじいせき 恩智遺跡 (第18次調査)	おおさかふやおしおんじなかまち3ちょうめちない 大阪府八尾市恩智中町3丁目地内	27212	30	34度36分17秒	135度37分60秒	20050902～20051212	約46.5	公共下水道
かめいいせき 亀井遺跡 (第3次調査)	おおさかふやおしみなみかめいちょう3ちょうめちない 大阪府八尾市南亀井町3丁目地内	27212	26	34度36分42秒	135度34分38秒	20001030～20001122	約78	公共下水道
なかたいせき 中田遺跡 (第51次調査)	おおさかふやおしおさかべ3・4ちょうめちない 大阪府八尾市刑部3・4丁目地内	27212	28	34度36分34秒	135度37分18秒	20060110～20060324	約8	公共下水道
ひがしゆげいせき 東弓削遺跡 (第10次調査)	おおさかふやおしよおぎ4ちょうめちない 大阪府八尾市八尾木4丁目地内	27212	31	34度35分58秒	135度37分21秒	19980422～19980430	約52	公共下水道
やまがいせき 山賀遺跡 (第12次調査)	おおさかふやおしやまがちょう3ちょうめちない 大阪府八尾市山賀町3丁目地内	27212	32	34度38分30秒	135度36分03秒	200604101～20060630	約37.4	公共下水道

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
跡部遺跡（第40次調査）	集落	古墳時代中期以降	地層	－	古墳時代中期初頭の河川に伴う堆積層を確認
池島・福万寺遺跡（第６次調査）	田畑	弥生時代前期	水田	－	
	集落	鎌倉時代末期	溝２	土師器・瓦器・瓦質土器・国産陶器・中国産磁器・木製品	
老原遺跡（第12次調査）	集落	平安時代末期	ピット１	－	
	集落	近世	土坑１	陶器・瓦器	
恩智遺跡（第18次調査）	集落	縄文時代晩期	包含層	縄文土器・石器	
	集落	弥生時代中期	土坑７・溝１	弥生土器・石器・土製品	
	集落	弥生時代後期	溝１	弥生土器	
	集落	古墳時代前期	河川１	古式土師器	
	集落	鎌倉時代末期	落ち込み１	屋瓦	
亀井遺跡（第３次調査）	集落	弥生時代前期～中期	溝６	弥生土器・石器・土製品	分銅形土製品１点出土
	集落	古墳時代中期	河川１	須恵器	
中田遺跡（第51次調査）	集落	中世	中世の地層	－	
東弓削遺跡（第10次調査）	集落	奈良時代後期	土坑２、小穴２	土師器	
	集落	鎌倉時代末期	土坑１、溝３、小穴１	土師器・瓦器	金剛蓮華寺に関わる屋瓦を検出
		室町時代後期	溝１	土師器・瓦器・東播系須恵器・屋瓦	
山賀遺跡（第12次調査）		縄文時代晩期～現代	地層	－	
		弥生時代中期以前	水田畦畔	木製品（ヤス）	
		弥生時代後期？	土坑・杭列	－	

要　　約	跡部遺跡第40次調査では、古墳時代中期以降の地層を観察した。池島・福万寺遺跡第６次調査では、鎌倉時代末期の集落が検出されており、溝で区画された屋敷地を検出した第１次調査の居住域と有機的な関係が推定される。老原遺跡第12次調査では、平安時代末期の遺構が検出されている。恩智遺跡18次では、遺跡の中核とされる「天王の杜」の北部ならび東部にかけて縄文時代晩期から弥生時代中期の遺構・遺物が検出された。なかでも、中期後半においては包含層の層厚が１ｍに及ぶ箇所が認められた。また、鎌倉時代の屋瓦が出土しており、「天王の杜」に南北朝期以前に存在した恩智神社に関わるものとして注目される。亀井遺跡第３次調査では、弥生時代前期から中期の遺構・遺物が出土している。特に、２区の遺物包含層（第212層）から出土した分銅形土製品は、大阪府下では４遺跡から７点が出土している大変貴重な資料である。東弓削遺跡10次調査では、奈良時代後期・鎌倉時代末期・室町時代後期の遺構・遺物を検出した。また、調査地点は金剛蓮華寺跡推定地内であり、調査においても屋瓦の出土がみられており、付近一帯に金剛蓮華寺が存在した蓋然性が高い。山賀遺跡第12次調査では、縄文時代晩期から現代にいたる堆積地層が確認された。また、弥生時代中期以前と推定される地層からはヤス状木製品が出土している。

財団法人八尾市文化財調査研究会報告98

Ⅰ　跡部遺跡　（第40次調査）
Ⅱ　池島・福万寺遺跡（第６次調査）
Ⅲ　老原遺跡　（第12次調査）
Ⅳ　恩智遺跡　（第18次調査）
Ⅴ　亀井遺跡　（第３次調査）
Ⅵ　中田遺跡　（第51次調査）
Ⅶ　東弓削遺跡　（第10次調査）
Ⅷ　山賀遺跡　（第12次調査）

発　行　平成19年３月
編　集　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町４丁目58番地の２
TEL・FAX 072（994）－4700
印　刷　服部印刷株式会社
〒578－0903　東大阪市今米１－16－１
TEL 0729（61）－1634
表紙　レザック66　〈260kg〉
本文　ニューエイジ　〈 70kg〉
図版　ニューエイジ　〈 70kg〉